

# 林原遺跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

2007年11月

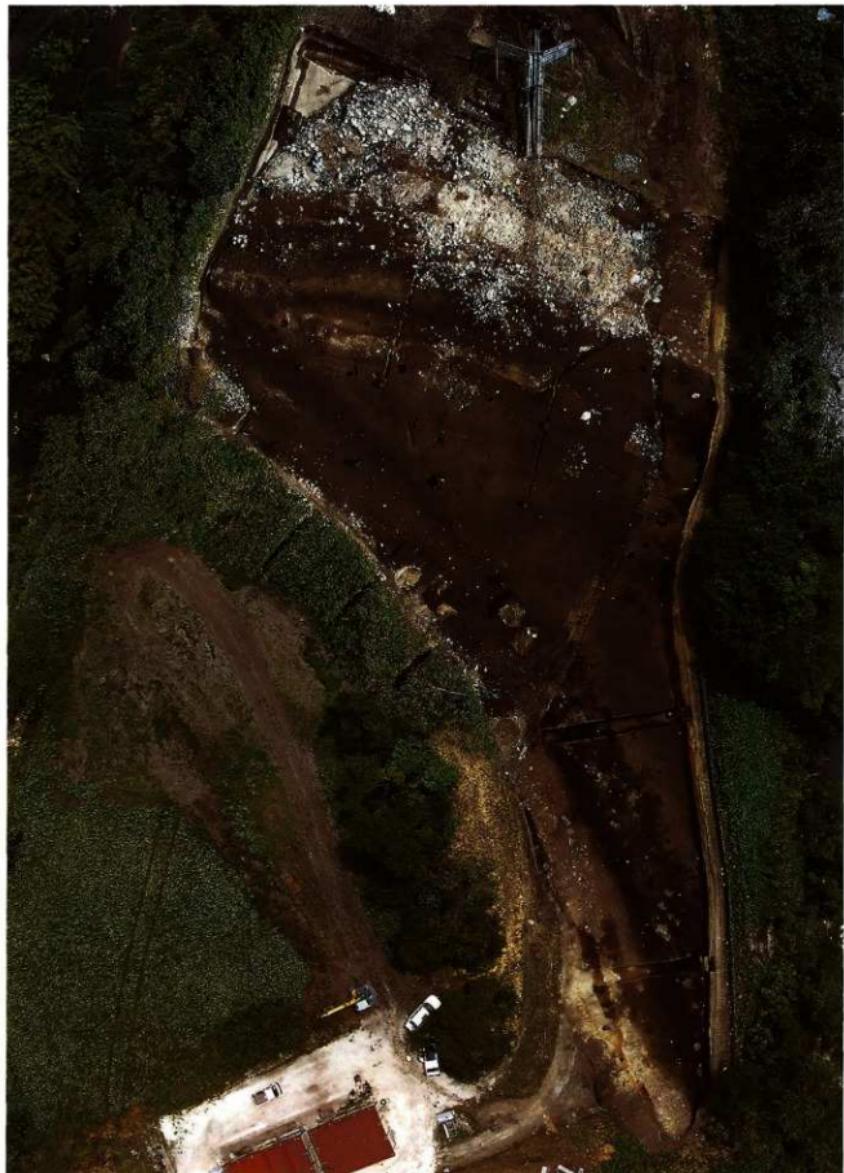
国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会

# 林 原 遺 跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

2007年11月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会



林原遺跡全景（調査後）



林原遺跡出土縄文土器



林原遺跡出土土師器・須恵器



林原遺跡  
出土土器の色調

## 序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として、斐伊川の上流において尾原ダムの建設事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分に留意すべく必要な調査の実施、記録の保存につとめるものとし、鳥根県教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、平成11年度から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成17～8年度に実施した「林原遺跡」の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育等のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめにあたり、ご指導ご協力いただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成19年11月

国土交通省中国地方整備局  
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 八尋 裕

## 序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しております。本書は、このうち平成17～18年度に発掘調査を実施しました奥出雲町林原遺跡の調査成果をまとめたものです。

尾原ダムが建設される斐伊川は中国山地に源を発し日本海に向け北流することから、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を担っていました。流域には、埋蔵文化財も含めて数多くの歴史的文化遺産が残されています。

本書に掲載した林原遺跡では、縄文時代から古墳時代に至る数多くの遺構遺物などから人々の営みの痕跡を明らかにすることができました。これらの調査成果は、この地域の歴史を解明していくうえで貴重な資料となるものと考えられます。本書が地域の歴史と文化に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査及び本書の作成につきまして、地元の皆様をはじめ国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、奥出雲町教育委員会など関係の皆様より御指導、御協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

平成19年11月

島根県教育委員会

教育長 藤原義光

# 例　　言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が平成17~18年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県仁多郡奥出雲町三沢1757-1番地他　　林原遺跡　　6,000m<sup>2</sup>

3. 調査組織は以下の通りである。

（平成17年度）現地調査

調査主体　島根県教育委員会

事務局　ト部吉博（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

永島静司（総務グループ課長）宮沢明久（調査第2グループ課長）

調査員　熱田貴保（調査第2グループ主幹）

久保田一郎（同文化財保護主任）

福間尚実（同（兼）文化財保護主任）稻田陽介（同調査補助員）

調査指導　中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム財团学芸員）

山田康弘（島根大学法文学部助教授）

（平成18年度）現地調査、報告書作成

調査主体　島根県教育委員会

事務局　ト部吉博（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

坂本憲一（総務グループ課長）宮沢明久（調査第2グループ課長）

調査員　熱田貴保（調査第2グループ主幹）

久保田一郎（同文化財保護主任）

永遇功（同（兼）主任）稻田陽介（同調査補助員）

調査指導　千葉　豊（京都大学埋蔵文化財調査研究センター助手）

中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム財团学芸員）

4. 描図中の北は測量法による平面直角第Ⅲ座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。

5. 第3図は、国土地理院発行の1/50,000図「湯村」「横田」を使用した。また、第7図は株式会社ワールドが作成した1/500図を使用した。

6. 航空写真は株式会社ワールドが撮影した。土壤洗浄は第一合成株式会社が行なった。自然科学分析は下記に委託し、その結果については付録に掲載した。

黒曜石、安山岩の原材产地分析 ((有)遺物材料研究所)、放射性炭素年代測定 (AGG)、赤色顔料 (島根県埋蔵文化財調査センター 柴崎晶子)

7. 本書に掲載した実測図は、担当調査員、調査補助員が作成し、写真は熱田、久保田が撮影した。

8. 本書の執筆、編集は久保田、稻田が行なった。

9. 本書に掲載した遺跡の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

## 凡　　例

1. 造構の略号は、下記のとおりである。

S I : 聚穴建物 S K : 土坑 D T : 土器溜まり S R : 旧河道

2. 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

3. 遺物観察表の色調は「標準土色帖」を参考にした。

4. 遺物観察表の括弧内の数字は以下のとおりである。

石器観察表の( )内数字は復元値である。

表中の石器の略号 R F : 二次加工のある剥片 U F : 使用痕のある剥片

5. 本報告書で用いた土器の分類および編年観は基本的に下記の各論文、報告書を参考にした。

### (1) 縄文土器

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」「鳥根考古学会誌」第17集

柳浦俊一2001「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」「鳥根考古学会誌」第18集

柳浦俊一2001「隱岐郡西郷町宮尾遺跡出土の前期縄文土器について－山陰地方中部の北白川  
ド層式を中心－」「鳥根考古学会誌」第18集

柳浦俊一2003「山陰地方中部域における縄文時代後期土器の地域性 とくに「中津式」の小  
地域性について－」「立命館大学考古学論集」Ⅲ-1

山崎真治2003「縁帯文土器の編年の研究」「東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古  
学研究室研究紀要」18号

千葉 勝1989「縁帯文系土器群の成立と展開」「史林」72-6

千葉 勝2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義」「沖丈遺跡」島根県邑智町教育委  
員会

千葉 勝2005「西日本縄文後期土器編年研究の現状と課題」「縄文時代」16号

濱山竜彦2005「山陰地方における縄文時代晚期土器について」「第16回中四国縄文研究会  
縄文時代晚期の山陰地方」

### (2) 弥生土器

松本岩雄1992「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社

### (3) 須恵器

大谷光一1994「山陰地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根考古学会誌」第11集

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過（久保田一郎）	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘・整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境（久保田一郎）	3
第3章 調査の概要（久保田一郎）	11
第1節 調査区の層位・試掘調査の成果	11
第2節 調査方法	16
第3節 遺跡の概要、遺構配置	17
第4章 1a層の遺構と遺物（久保田一郎）	19
第1節 1a層の遺構	19
第2節 1a層の遺物	31
第5章 1b層の遺構と遺物（久保田一郎）	33
第1節 1b層の遺構	33
第2節 1b層の遺物	51
第6章 1c層の遺構と遺物（久保田一郎）	52
第1節 1c層の遺構	52
第2節 1c層の遺物	58
第7章 1層の遺構と遺物（久保田一郎）	59
第1節 1層の遺構	59
第2節 1層の遺物	115
第8章 総括	122
第1節 林原遺跡出土縄文土器群の編年的位置付け（稻山陽介）	122
第2節 林原遺跡出土剥片石器群の石器製作技術構造（稻山陽介）	140
第3節 林原遺跡から見た山陰地方縄文後期集落の・様相（稻山陽介）	145
第4節 まとめ（久保田一郎）	155
付編 自然科学分析	
第1節 北原本郷遺跡、林原遺跡出土の黒曜石、安山岩製遺物の原材产地分析（遺物材料研究所）	157
第2節 放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）林原遺跡（加速器分析研究所）	165
第3節 林原遺跡から出土した遺物に付着した赤色顔料について（柴崎晶子）	170

# 挿 図 目 次

第1図	道路の位置図	3	第57図	S K14及び出土遺物実測図	60
第2図	林塀遺跡と周辺の地形図	4	第58図	S I01出土土器実測図	62
第3図	林塀遺跡と周辺の遺跡位置図	5	第59図	S I01出土土器実測図	63
第4図	調査前地形、調査区・トレーン配置 及びグリッド設定図	12	第60図	S I01出土土器実測図	64
第5図	調査区の下層及び調査区周辺の地質	13	第61図	S I01-S K1及び出土遺物実測図	65
第6図	調査区全体の上層図	14	第62図	S I01-S K2実測図	66
第7図	調査後地形測量、遺構配置 及び土器層まり接合状況図	18	第63図	S I01周辺の遺構（焼土05、配石遺構04） 及び出土遺物実測図	67
第8図	1a層出土遺物配置図	20	第64図	S K15及び出土遺物実測図	68
第9図	上器層まり1-1遺物出土状況図	21	第65図	S K16及び出土遺物実測図	68
第10図	土器層まり1-1周辺の遺構（焼土01-03） 及び出土遺物実測図	22	第66図	S K17及び出土遺物実測図	68
第11図	上器層まり1-1出土土器実測図(1)	23	第67図	S K18実測図	70
第12図	上器層まり1-1出土土器実測図(2)	24	第68図	S K18出土土器実測図	70
第13図	上器層まり1-1出土土器実測図	25	第69図	配石遺構05及び出土遺物実測図	71
第14図	土器組設置構1実測図	26	第70図	配石遺構06及び出土遺物実測図	71
第15図	測定土器1実測図	26	第71図	上器層まり3遺物出土状況 及び南北セクション実測図	72
第16図	炭灰窯実測図	27	第72図	上器層まり3直下の遺構（石圓炉状遺構1） 実測図	73
第17図	炭窯付近土塁・灰集巾部実測図	28	第73図	上器層まり3川下土器実測図(1)	74
第18図	炭窯まり01-03、S K01-05。	28	第74図	上器層まり3出土土器炭窯図(2)	75
第19図	1a層出土土器実測図	30	第75図	上器層まり3出土土器炭窯図	76
第20図	1a層出土土器実測図	31	第76図	上器層まり4遺物出土状況図	77
第21図	1b層出土土器実測図	32	第77図	上器層まり4広辺の遺構（SK20）実測図	78
第22図	S K06実測図	35	第78図	上器層まり4出土土器実測図(1)	79
第23図	上器層まり1-2有文土器出土状況図	36	第79図	上器層まり4出土土器実測図(2)	80
第24図	土器層まり1-2無文土器・石器出土状況図	37	第80図	上器層まり4出土土器実測図	80
第25図	上器層まり1-2出土土器実測図(1)	38	第81図	上器層まり5遺物出土状況図	81
第26図	上器層まり1-2川下土器実測図(2)	39	第82図	上器層まり5直下の遺構（配石遺構07） 実測図	82
第27図	上器層まり1-2出土土器実測図(3)	40	第83図	上器層まり5周辺の遺構（石錐溜まり2） 実測図	82
第28図	上器層まり1-2出土土器実測図(4)	41	第84図	上器層まり5出土土器実測図(1)	83
第29図	上器層まり1-2川下土器実測図(5)	42	第85図	上器層まり5出土土器実測図(2)	84
第30図	上器層まり1-2出土土器実測図(6)	43	第86図	上器層まり5出土土器実測図(3)	85
第31図	上器層まり1-2出土土器実測図(7)	44	第87図	上器層まり5出土土器実測図	86
第32図	上器層まり1-2出土土器実測図(8)	45	第88図	上器層まり6萬物出土状況図	87
第33図	上器層まり1-2川下土器実測図(9)	46	第89図	上器層まり6出土土器実測図(1)	88
第34図	上器層まり1-2出土土器実測図(10)	47	第90図	上器層まり6出土土器実測図(2)	89
第35図	上器層まり1-2山下土器実測図	48	第91図	上器層まり6出土土器実測図	90
第36図	上器層まり2遺物出土状況図	49	第92図	上器層まり7遺物出土状況図	91
第37図	上器層まり2周辺の遺構（焼土4、S K07） 及び出土遺物測定図	49	第93図	上器層まり7直下の遺構（社上面、 延長化2~4、焼土8~10、配石遺構08） 及び出土遺物実測図	92
第38図	土器層まり2高辺の遺構（石錐溜まり1） 及び出土遺物実測図	50	第94図	上器層まり7直下の遺構（石圓炉状遺構2、 石錐溜まり3）及び出土遺物実測図	93
第39図	上器層まり2出土土器実測図	50	第95図	上器層まり7直下~周辺の遺構（焼土11~13、 SK21、配石遺構08）実測図	95
第40図	上器層まり2川下土器実測図	51	第96図	上器層まり7周辺の遺構（配石遺構09） 及び出土遺物実測図	95
第41図	1b層出土土器実測図	51	第97図	上器層まり7川下土器実測図(1)	96
第42図	1b層出土土器実測図	51	第98図	上器層まり7川下土器実測図(2)	97
第43図	1c層出土遺構配置図	51	第99図	上器層まり7出土土器実測図(3)	98
第44図	S K09及び出土遺物実測図	51	第100図	上器層まり7遺物出土状況図	99
第45図	S K09実測図	54	第101図	上器層まり8出土遺物実測図(1)	101
第46図	S K10-11及びS K10出土遺物実測図	54	第102図	上器層まり8出土遺物実測図(2)	103
第47図	S K12実測図	54	第103図	上器層まり8出土遺物実測図	104
第48図	配石遺構03実測図	54	第104図	石器集中部1遺物出土状況図	105
第49図	P 226出土土器実測図	54	第105図	石器集中部2-3遺物出土状況図	106
第50図	上器層まり1-3遺物出土状況図	55	第106図	石器集中部1-3出土土器実測図	106
第51図	上器層まり1-3周辺の遺構（S K13） 実測図	56	第107図	土器埋設構造2~4実測図	107
第52図	上器層まり1-3出土土器実測図	56	第108図	埋設土器2-3実測図	108
第53図	上器層まり1-3出土土器実測図	56	第109図	埋設土器4実測図	109
第54図	1c層出土土器実測図	57			
第55図	1c層出土土器実測図	57			
第56図	1c層出土土器実測図	57			

第110回 配石遺構10及び出土遺物実測図	109	編年図（2）	128・129
第111回 S R01～03及び出土遺物実測図	110	山陰中部の春秋晉文土器類から経帶文成立期 の土器	133
第112回 S T02及び出土遺物実測図	111	御領田遺跡出土土器	134
第113回 硬化土5・6、焼上16及び炭素測定4 実測図	111	崎ヶ鼻1式と清雲A式	136
第114回 S K22～30実測図	112	山陰東部の縄文带文成立期から肥厚型縄文带 土器群の土器	138
第115回 配石遺構11～17実測図	115	山陰西端の縄文带文成立期から肥厚型縄文带 土器の土器	138
第116回 1層出土土器実測図（1）	116	十器期の土器	138
第117回 1層出土土器実測図（2）	117	山陰東方の縄文後期中期の編年式	139
第118回 1層出土土器実測図（3）	118	林原Ⅲ～V期の石材利用	140
第119回 1層出土土器実測図（4）	119	林原Ⅰ～V期の石材利用	140
第120回 1層出土土器実測図	120	林原遺跡出土土石器実測図	143
第121回 布面形有文深鉢の分類	123	D T窯下及び窯跡の遺構・遺物一覧	145
第122回 D T別出土上側（1）	125	林原遺跡全体像	147
第123回 D T別出土偏向（2）	125	山陰中部の住居跡・窓	148
第124回 D T別出土偏向（3）	125	神原Ⅱ段跡の遺物出土状況	148
第125回 林原遺跡出土縄文後期土器群の 編年図（1）	126	山陰地方中部における肥厚型縄文带 土器期の系譜	149
第126回 林原遺跡出土縄文後期土器群の	127		

## 表 目 次

第1表 周辺の道路一覧表	6	第5表 林原遺跡出土石鍛錬窓表	201
第2表 林原遺跡出土遺構調査表	173	第6表 林原遺跡出土土器集計表	204
第3表 林原遺跡出土上器・土製品調査表	174	第7表 林原遺跡出土石器集計表	210
第4表 林原遺跡出土土器調査表	193		

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡遺景（航空写真）	写真図版13 S T01遺物出土状況大（西より）
写真図版2 利用区東西セクション西側（北西より）	S I01完掘状況（北より）
写真図版3 調査区東西セクション中央（北西より）	S I01東セクション（南より）
写真図版4 土器埋没1・2検出状況（南より）	S I01北セクション（西より）
写真図版5 燃土1セクション（東より）	S I01・燃土1検出状況（南より）
写真図版6 土器埋没2・3検出状況（南より）	S I01・燃土1セクション（北より）
写真図版7 燃土・炭化中粒状山状況（南より）	S I01-S K1セクション（北より）
写真図版8 炭化土02検出状況（東より）	S I01-S K1完掘状況（北より）
写真図版9 燃土02検出状況（西より）	S I01-S K2セクション（西より）
写真図版10 燃土03検出状況（東より）	S I01-S K2完掘状況（西より）
写真図版11 燃土04検出状況（東より）	焼土05セクション（南東より）
写真図版12 燃土05検出状況（東より）	配石遺構01セクション（北東より）
写真図版13 燃土06検出状況（東より）	配石遺構04山・遺物出土状況（北東より）
写真図版14 燃土07検出状況（東より）	SK15セクション（北西より）
写真図版15 燃土08検出状況（東より）	SK16遺物出土状況（東より）
写真図版16 燃土09検出状況（東より）	SK18セクション（東より）
写真図版17 燃土10検出状況（東より）	SK18遺物出土状況（東より）
写真図版18 燃土11検出状況（東より）	配石遺構05石出土状況（北東より）
写真図版19 燃土12検出状況（東より）	石鍛錬窓1完掘状況（西より）
写真図版20 燃土13検出状況（東より）	土器埋没1・3南北セクション（北西より）
写真図版21 燃土14検出状況（東より）	上器埋没1・5遺物出土状況（東より）
写真図版22 燃土15検出状況（東より）	配石遺構07検出状況（北東より）
写真図版23 燃土16検出状況（東より）	石鍛錬窓1・2検出状況（北東より）
写真図版24 燃土17検出状況（東より）	土器埋没1・6遺物出土状況（西より）
写真図版25 燃土18検出状況（東より）	上器埋没1・7遺物出土状況（南西より）
写真図版26 燃土19検出状況（東より）	燒土08検出状況（南より）
写真図版27 燃土20検出状況（東より）	燒土09検出状況（南より）

	上器底まり 7 直下の直構（粘土面・硬化面3）	石錐窓まり 1 出土石器
写真図版22	上器底まり 7 斧下の直構（粘土面・硬化面3・ 粘土ピット）セクション（南より）	土器底まり 2 出土土器
	上器底まり 7 斧下の直構（硬化面4・焼土10・ 石鍛炉状遺構2）検出状況（南より）	上器底まり 8 出土石器
写真図版23	上器底まり 7 直下の直構（硬化面4・石鍛炉状 遺構2）検出状況（北より）	1 b 層出土土器
	石鍛炉状遺構2 検出状況（北より）	1 b 層出土石器
	石鍛炉状遺構2 検出状況（北より）	S K08・10・P 226出土土器
写真図版24	石鍛炉状遺構2 検出状況（西より）	写真図版52 上器底まり 1 - 3 出土土器
	焼土11セクション（南より）	土器底まり 1 - 3 出土石器
	焼土12セクション（東より）	i c 層出土土器
	配石遺構08検出状況（西より）	i c 層出土石器
	S K21セクション（東より）	S K14出土土器
写真図版25	焼土13・配石遺構09検出状況（北東より）	S K14出土石器
	配石遺構09セクション（北東より）	S 101出土土器
	配石遺構09石鍛炉状遺構（北東より）	S 101出土石器
写真図版26	上器底まり 8 道物出土状況（東より）	写真図版55 S 101出土土器
	上器底まり 8 道物出土状況（北東より）	S 101-S K 1出土土器（1）・石器
写真図版27	上器底まり 8 東セクション（東より）	S 101-S K 1出土土器（2）
	上器底まり 8 西セクション（南より）	配石遺構04出土土器（1）
	上器底まり 8 南セクション（西より）	写真図版57 配石遺構04出土土器（2）・石器
	上器底まり 8 北及び焼土14・15セクション（西 より）	S K15・17出土土器
	焼土14・15完掘状況（西より）	S K16出土土器
写真図版28	土器埋設遺構2 倒壠（南より）	S K18出土土器
	上器埋設遺構4 セクション（北より）	写真図版58 配石遺構06出土土器・石器
	配石遺構10石・道物出土状況（北東より）	配石遺構05出土土器
写真図版29	S 102検出状況（北より）	上器底まり 3 出土土器（1）
	S 102西南セクション（南西より）	上器底まり 3 出土土器（2）
	S 102北東セクション（北東より）	写真図版60 土器底まり 3 出土土器
写真図版30	S 102完掘状況（北より）	上器底まり 4 出土土器（1）
	焼土16・硬化面5・6 検出状況（東より）	上器底まり 4 出土土器（2）
	焼土16セクション（北より）	土器底まり 4 出土土器
写真図版31	配石遺構11セクション（東より）	石鍛炉状まり 2 出土石器
	配石遺構12石鍛炉状遺構（東より）	上器底まり 5 出土土器（1）
	配石遺構13石鍛炉状遺構（東より）	写真図版62 土器底まり 5 出土土器（2）
	配石遺構14石鍛炉状遺構（南より）	土器底まり 5 出土土器（3）
写真図版32	配石遺構15検出状況（南東より）	写真図版64 土器底まり 5 出土土器（4）
	配石遺構16検出状況（北東より）	上器底まり 5 出土土器（1）
	配石遺構17検出状況（南西より）	土器底まり 5 出土土器（2）
写真図版33	林原踏跡出土上倒壠	土器底まり 6 出土土器（1）
	焼土1・03II出土物	配石遺構09出土土器（1）
写真図版34	上器底まり 1 - 1 出土土器（1）	燒土08出土土器
写真図版35	上器底まり 1 - 1 出土土器（2）	石鍛炉状まり 3 出土石器
写真図版36	上器底まり 1 - 1 出土土器（1）	写真図版70 土器底まり 7 出土土器（1）
	埋設土器1	写真図版71 上器底まり 7 出土土器（2）
	1 a 層出土土器（1）	写真図版72 上器底まり 7 出土土器（3）
写真図版37	1 a 层出土土器（2）	写真図版73 上器底まり 7 出土土器（4）
	1 a 層出土石器（1）	写真図版74 上器底まり 7 出土土器（5）
写真図版38	1 a 层出土石器（2）	土器底まり 7 出土石器
	上器底まり 1 - 2 出土土器（1）	写真図版75 土器底まり 8 出土土器（1）
	土器底まり 1 - 2 出土土器（2）	写真図版76 土器底まり 8 出土土器（2）・石器
	上器底まり 1 - 1 出土土器（1）	石器集中部 1 ~ 3 出土石器
	埋設土器1	埋設土器2
	1 a 層出土土器（1）	写真図版77 配石遺構10出土土器
	1 a 层出土土器（2）	埋設土器3
	1 a 层出土石器（1）	埋設土器4
	1 a 层出土石器（2）	S R03出土土器
写真図版39	上器底まり 1 - 2 出土土器（2）	S 102出土土器
写真図版40	上器底まり 1 - 2 出土土器（3）	写真図版78 1 层出土土器（1）
写真図版41	上器底まり 1 - 2 出土土器（4）	写真図版79 1 层出土土器（2）
写真図版42	上器底まり 1 - 2 出土土器（5）	写真図版80 1 层出土土器（3）
写真図版43	上器底まり 1 - 2 出土土器（6）	写真図版81 1 层出土土器（4）
写真図版44	上器底まり 1 - 2 出土土器（7）	写真図版82 1 层出土土器（5）
写真図版45	上器底まり 1 - 2 出土土器（8）	1 层出土石器
写真図版46	上器底まり 1 - 2 出土土器（9）	
写真図版47	上器底まり 1 - 2 出土土器（10）	
写真図版48	上器底まり 1 - 2 出土土器（11）	
写真図版49	上器底まり 1 - 2 出土石器（1）	
	上器底まり 1 - 2 出土石器（2）	
	S K07出土土器	

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

斐伊川の治水事業は大正11年より国の事業として行なわれたが、斐伊川中・下流域の住民は昭和18年・20年の洪水をはじめ、昭和39年・40年・47年と相次ぐ洪水の来襲に悩まされてきた。とりわけ昭和47年7月の洪水では、斐伊川・神戸川とも破堤寸前の危険な状態におかれ、宍道湖の増水により松江市など約70km<sup>2</sup>が一週間にわたって浸水した。このため川沿いの住民や自治体から斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策が要望され、昭和51年7月に工事実施基本計画の改定を行ない、いわゆる「治水3点セット」①斐伊川・神戸川上流におけるダムの建設、②中流の斐伊川放水路建設と斐伊川の改修、③下流の火橋川改修と中海・宍道湖湖岸の整備を基本とした治水対策が具体化した。尾原ダムはこの計画に基づき、斐伊川上流の大原郡木次町（現雲南市木次町）・仁多郡仁多町（現仁多郡奥出雲町）に計画された多目的ダムである。

平成3年6月、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所）から島根県に対し、埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受けて島根県教育委員会では平成5年3月と平成6年3月の2回にわたり分布調査を行なった。木次町教育委員会と仁多町教育委員会の協力を得て行なわれたこの調査で、合計81箇所の遺跡及び要確認調査地を設定した。

平成10年12月、遺跡の範囲確認調査を平成11年度から実施することが決定した。また、島根県教育委員会、木次町教育委員会、仁多町教育委員会での三者協議を行ない、①確認のため再度分布調査を行なうこと、②基本的な分担として、ダム本体部分を県が調査し、残土処理場や付け替え道路などの付帯設備部分は両町が対応すること、③今後の調査分担は調査状況や各機関の調査体制に応じて整備すること、の3点を確認した。平成11年3月に行なわれた2度日の分布調査では、新たに32箇所の遺跡及び要確認調査地が認められ、遺跡及び要確認調査地は合計113箇所となった。

平成11年度、島根県教育委員会は29箇所の範囲確認調査を実施し、本報告書収録の林原遺跡を含む11箇所について全面発掘調査が必要と判断した。平成12年には20箇所で範囲確認調査を行なった。平成13年3月に分布調査を改めて実施し、2箇所の要確認調査地を追加した。平成14年度には1箇所の範囲確認調査を行なった。

本調査は、12年度に木次町垣ノ内遺跡と川平I遺跡、平成13年度には木次町垣ノ内遺跡と家の後I遺跡、尾白I遺跡、尾白II遺跡、楨ヶ岬遺跡と仁多町家ノ脇II遺跡、平成14年度には木次町北原本郷遺跡、家の後II遺跡、仁多町原田遺跡、前山遺跡、15年度には木次町北原本郷遺跡、家の後II遺跡、下布施氏館跡、仁多町原田遺跡、16年度には木次町北原本郷遺跡、仁多町原田遺跡、17年度には奥出雲町原山遺跡、林原遺跡、18年度には奥出雲町原山遺跡で実施し、これまでに垣ノ内遺跡、川平I遺跡、家の後I遺跡、尾白I遺跡、尾白II遺跡、楨ヶ岬遺跡、家ノ脇II遺跡、前山遺跡、下布施氏館跡については報告書が刊行されている。また、家の後II遺跡、原田遺跡、北原本郷遺跡については一部が報告書を刊行済み、一部は報告書を作成中である。

本報告書は平成16・17年度に調査した林原遺跡の報告書である。

## 第2節 発掘・整理作業の経過

林原遺跡は、平成11年度に試掘調査を行なった結果、18,100m<sup>2</sup>を遺跡の範囲として確認した。平成17年3月に国土交通省と協議の結果、洪水時に水没する標高205m以下の6,000m<sup>2</sup>について本調査を実施することとした。林原遺跡の西隣には、周知の遺跡である林原古墳が存在するが、標高205mより上に位置し、現状のまま残るため、調査の対象とはしなかった。平成17年度本調査対象地のうち、水田の進入路より北側4,500m<sup>2</sup>（I区）を調査した。4月8日から14日にかけて、包含層である黒色土層の上に堆積していた黄色砂層（無遺物層）を重機によって取り除き、その後17日から人力掘削を開始した。まず、土層堆積状況の確認と、試掘調査で既に包含層と判明している黒色土よりも下位の層が、無遺物層であるか否かを確認するため、5月中旬までI区の南辺・東辺に沿ってトレンチを掘った。土層観察によれば、黒色土の下には黒色砂と洪水で運ばれた黄色砂が交互に堆積していた。遺物は数点出土したが、洪水時に上流から運ばれてきた土器片と考えられることから、全面調査をする必要性がないと判断した。このトレンチ調査の結果を受け、調査の目標を①黒色土層から出土する遺物の記録、②黒色土層下の砂層上面での遺構検出と定めた。このうち調査区の西側では、黒色土中に火山灰が降りて帯状に分布していたので、火山灰を目印に黒色土を3層に区分した（1a、1b、1c層）。6月には地質学的立場から、9月には考古学的立場からの専門的な指導を受けた。10月2日には原田遺跡と合わせて現地説明会を開催した。包含層をほぼ除去した10月27日に空中撮影を行なった。その後は残った遺構の掘削、観測、図化、撮影等の作業を順次行なったが、12月上旬より大雪が続き、I区の遺構の一部については作業を次年度へと繰り越した。

平成18年度は水田への進入路の南側（II区）を中心に調査し、併せてI区の残った遺構を調査した。II区は比較的広範囲に火山灰が確認できたので、まず火山灰の上面まで掘り下げた。火山灰より下の1b層や1c層については、前年度の調査の結果I区の南側は遺構・遺物の分布が希薄になる傾向が確認されており、斐伊川の攻撃面に近いII区ではさらに希薄になると予想された。このため、平成11年度のトレンチを延長して火山灰より下位を掘削したところ、1b層、1c層に遺物・遺構が含まれないことが確認された。これを受けて、II区については1a層を除去し、1b層上面で遺構を精査して調査を終了することとした。6月7日、II区の空中撮影を行なって現地調査を終了した。

整理作業は、平成18年I区の現地調査終了と同時に開始した。1月から6月までは洗浄、接合、復原作業を中心とした。4月・5月は現地調査と並行して進め、接合が終了した遺物を調査補助員1名が隨時分類して収納する作業を繰り返した。接合した遺物のうち、位置を特定できる遺物については接合状況を全て図示し、7月から遺物の実調、拓本等の作業を開始した。7月に、遺物整理の方針の見通しを得るために、専門的立場からの調査指導を受けた。9月から遺構図の作成を開始した。1月に遺物撮影を行なった後に、収蔵作業に着手した。

平成19年度は、残った整理作業、及び本報告書の印刷を行なった。

遺構の整理を行ない、報告書に登場する順に従って遺構番号をふり直したため、報告書に掲載された遺構名・出土遺物と、収蔵している図面・写真・遺物の注記との間に食い違いが生じた。そのため、旧番号と新番号の対照表をそれぞれの保管場所に付した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

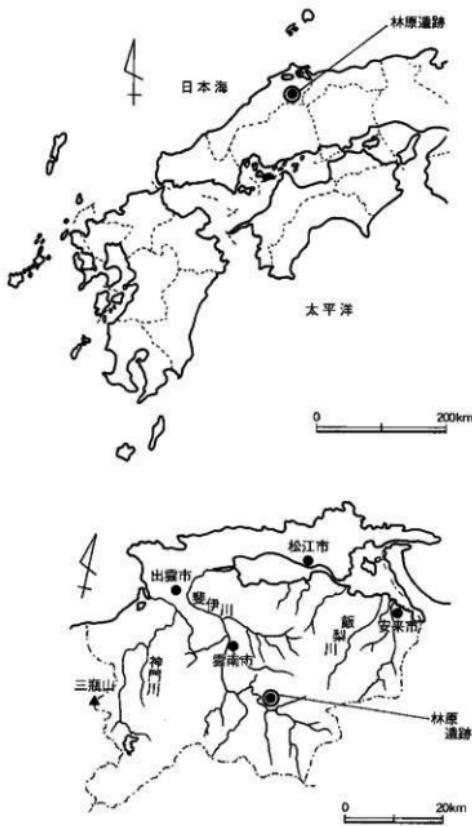
林原遺跡は、奥出雲町鶴倉の山地から東へ長く延びる丘陵の先端部に位置する。この丘陵の裾を斐伊川が蛇行して流れている。周辺地域は、斐伊川が屈曲を繰り返しながら西へ流れ下り、両岸には険しい山が屹立する。川の屈曲部では、斐伊川の勢いが攻撃面を削りながら前進する一方、攻撃面と反対側には堆積作用で平坦面や緩斜面を形成する。このような場所が格好の生活場所となった。

八代川、亀嵩川、都川など斐伊川の支流沿いには、本流沿いよりもむしろ広い平野が形成され、居住条件において本流沿いに劣ってはいない。

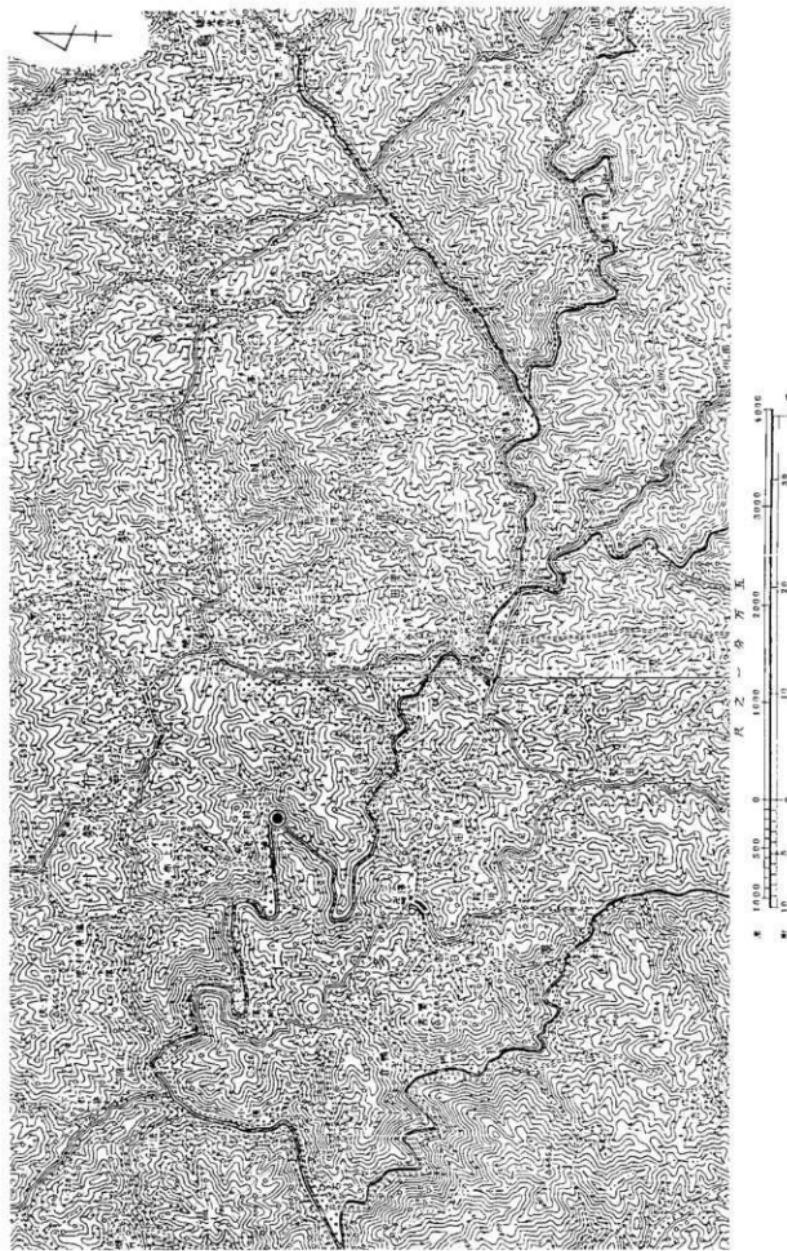
**旧石器時代** 林原遺跡と並行して調査が行なわれた原田遺跡8区では、A T（始良丹沢火山灰）下位、A T～三瓶浮布火山灰間、浮布火山灰上位の各層から疊群・石器ブロックなど、後期旧石器時代の遺構が確認された<sup>(1)</sup>。移動生活の時代にあって、原田遺跡は幾度か石器製作や調理の場に選ばれている。

**縄文時代** 奥出雲地方で、原田遺跡に次いで古いのは、縄文早期にさかのほる川平I遺跡<sup>(2)</sup>と家の後II遺跡<sup>(3)</sup>である。川平I遺跡では早期の土器片の他、集石土坑・落とし穴など前期から後期の各時期にわたる遺構が確認されており、繰り返しこの地が使われてたことがわかる。また、家の後II遺跡でも縄文時代早期にさかのほる遺物が確認されている。

縄文時代前期には、斐伊川の堆積作用で家の後II遺跡の段丘先端まで居住可能な平坦地が拡大し、北原本郷遺跡<sup>(4)</sup>でも遺物が確認されるようになる。このように、人間の生活領域は川から最も離れた場所にはじまり、徐々に屈曲部の先端へと拡大していく傾向がある。



第1図 遺跡の位置図



第2図 林原遺跡と周辺の地形図 ( $S = 1/50,000$ ) (●は林原遺跡の位置)  
※旧大日本帝国陸地測量部明治32年測図



第3図 林原遺跡と周辺の遺跡位置図 ( $S = 1 / 50,000$ ) (◎は林原遺跡の位置)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	林原遺跡	41	須坂古墳	81	寺畠遺跡	121	トヤゲ丸城跡
2	上分中山根穴墓群	42	石原城跡	82	寺宇根遺跡	122	家の上遺跡
3	上分原野跡	43	善勝寺跡	83	延慶遺跡	123	龜山岩
4	大トシ谷遺跡	44	里田遺跡	84	御崎遺跡	124	石壺遺跡
5	梅木原跡	45	矢谷古城山古跡	85	幕地遺跡	125	上垣内たら跡
6	梅木原古墳	46	三成殿治懸小路遺跡	86	武者山遺跡	126	平田遺跡
7	亀嵩後反谷遺跡	47	都壓敷古墳	87	吉ケ追製鉄跡	127	機屋Ⅱ遺跡
8	椿木谷本谷跡	48	穴觀音古墳	88	吉ケ追遺跡	128	機屋古墳群
9	高田・山神広製鉄跡	49	三出平古墳	89	芦原跡	129	機屋跡
10	玄蔵坊横穴墓	50	金子松原跡	90	丸子山古墳群	130	機屋Ⅰ遺跡
11	宮の前遺跡	51	伊賀武神社境内横穴墓	91	正覚古墳群	131	下布施横穴墓群
12	琴枕岩屋古墳	52	佐白・原跡	92	家の上古墳群	132	北原Ⅰ遺跡
13	常楽寺古墳	53	長福寺古墳	93	八頭塚横穴墓群	133	家ノ前跡
14	鶴木遺跡	54	長福寺遺跡	94	阿弥陀ヶ峰遺跡	134	寺田Ⅰ遺跡
15	芝原遺跡	55	金原跡	95	尾白横穴墓群	135	寺田Ⅱ遺跡
16	常楽寺古墳	56	長福寺古墓	96	尾白Ⅰ遺跡	136	寺田Ⅲ遺跡
17	岩屋古墳	57	堂ノ前古墳	97	尾白Ⅱ遺跡	137	谷口遺跡
18	日ヤケ跡	58	すげた横穴墓	98	横ヶ峰遺跡	138	ゴマボリ跡
19	高田廻寺跡	59	中山遺跡	99	穴觀1号墳	139	茶屋の頭遺跡
20	カネツキ免跡	60	玉雲寺古墳群	100	才の原遺跡	140	枯木ヶ谷跡
21	カネツキ免遺跡	62	六方遺跡	101	穴銀2号墳	141	大蟲跡
22	仁多都街跡比定地	62	佐白城跡	102	菅田古墳群		
23	金床横穴	63	上布施遺跡	103	為石古墓		
24	大原山古墳	64	上布施横穴墓群	104	比久尼原横穴墓群		
25	コフケ横穴	65	上布施一畠古墳群	105	どげや古墳		
26	伝和泉式部墓	66	鬼ヶ谷遺跡	106	布広城跡		
27	大内原土居館跡	67	水手山城跡	107	光善寺古墳		
28	加食焼跡和田跡	68	殿ヶ追横穴墓群	108	下鶴倉遺跡		
29	種地北跡	69	円満寺遺跡	109	三沢城跡		
30	雨川軒床跡	70	シベ石遺跡	110	大吉跡		
31	鉄穴跡	71	時仏遺跡	111	下沢田北山遺跡		
32	奥山田遺跡	72	時仏山横穴墓群	112	宮サコ遺跡	凡例	
33	須我赤山城跡	73	家ノ脇遺跡	113	宮ノ脇遺跡	◎	林原遺跡
34	閻善寺跡	74	林原古墳	114	下布施氏館跡	●	集落・散布地
35	石原遺跡	75	家ノ庭Ⅱ遺跡	115	北原本郷遺跡	△	古墳・横穴墓・古墓
36	善勝寺跡	76	西尾社遺跡	116	家の後Ⅱ遺跡	▲	城・館跡
37	村尾正吉宅向横穴	77	原田古墳	117	家の後Ⅰ遺跡	□	跡跡・鉄門遺跡
38	堂の前古墳	78	原田遺跡	118	川平Ⅰ遺跡	▽	寺院・神社跡
39	門屋遺跡	79	前田遺跡	119	堀ノ内遺跡		
40	下鴨倉大崎跡	80	小道上遺跡	120	案久寺		

绳文時代後期にはいると、林原遺跡や家の後II遺跡で竪穴住居跡が確認される。ただし、前者が柱穴をもたない簡易な構造であるのに対し、後者は深い掘り込みをもち、4~6本の主柱穴をもつ<sup>(5)</sup>等の違いが見られる。このほか、櫛屋遺跡<sup>(6)</sup>、暮地遺跡<sup>(7)</sup>、下鳴倉遺跡<sup>(8)</sup>、北原本郷遺跡、家の後II遺跡、宮ノ前遺跡（高田）などの绳文時代後期遺跡が確認される。これら後期の遺跡では、土器埋設構の検出が相次いでいる。2個体の土器が逆位で埋設されていた暮地遺跡例や、平田遺跡例<sup>(9)</sup>、浅鉢を使用した北原本郷遺跡例などが知られている。土器も暮地遺跡、北原本郷遺跡、原出遺跡および林原遺跡と、奥出雲地方の斐伊川沿いに多くの出土例を見る<sup>(10)</sup>。当地方には上記のような呪術関係の遺構・遺物が濃密な分布を示しており、「呪術関係の道具立てや装置がほとんど発達しなかった」<sup>(11)</sup>とされる中国地方では際立った地域として注目される。

绳文時代晚期には、家の後II遺跡や北原本郷遺跡の対岸（斐伊川の攻撃面側に当たる）にも、宮ノ脇遺跡<sup>(12)</sup>や宮サコ遺跡<sup>(13)</sup>など、晚期を主体とする遺跡が現れる。原田遺跡では、川の屈曲部先端へ寄った原田I区で、土器埋設構（正位埋設）を含む晩期の遺構・遺物が確認される<sup>(14)</sup>。斐伊川の前述につれて、生活域が変動していく様子が窺われる。

**弥生時代** 前期の遺物の確認例は少数にとどまるが、中期には遺跡数が増加する。とくに、構築材が腐朽して確認が難しい建物の上屋構造が、弥生中期の焼失住居という形で集中的に発見されているのは注目に値する。垣ノ内遺跡では、ビットに立ったままのコウヤマキの柱材などの炭化材が残り<sup>(15)</sup>、暮地遺跡2号住居（III-2~IV-1様式）も、壁を覆っていたカヤ材や、カヤを固定していた杭などが遺存していた。川平I遺跡では、焼失住居ではないが、堅穴住居（III様式）外側の周堤部で検出された小ビット列から、垂木の差し込み角度が判明している。また、北原本郷遺跡などで弥生時代後期の集落跡が確認されている。

**古墳時代** 前期の遺跡数は少ないが、川平I遺跡の建物跡、平田遺跡で前期の堅穴住居と鍛冶工房が確認された。素材を火で熱して鋸で切断する程度の原始鍛冶が行なわれていた。奥出雲と鉄の関わりは、現在確認された限りこの平田遺跡に始まっている<sup>(16)</sup>。

古墳時代中期の建物跡は川平I遺跡の掘立柱建物が見られる程度で、依然として遺跡数が少ない。一方、古墳では中期後半（須恵器の出雲編年1期）に比定される丸子山古墳<sup>(17)</sup>があり、時期の判明する古墳としては最古である。周溝内で土器を供獻し、須恵器壺を破碎し、赤彩した被覆土で主体内の木棺（推定）を覆うなど、当時の首長墓における多様な葬送儀礼が知られる。

古墳時代後期に入って、尾原ダム周辺の遺跡数は一気に増加する。前田遺跡<sup>(18)</sup>、家の脇II遺跡<sup>(19)</sup>、円満寺遺跡<sup>(20)</sup>、宮サコ遺跡<sup>(21)</sup>、宮ノ脇遺跡<sup>(22)</sup>、垣ノ内遺跡<sup>(23)</sup>、家の上遺跡<sup>(24)</sup>など、斐伊川沿いに集中的に発見されており、多くが奈良時代へ継続する。ただし、この時期の生産、生業に関わる遺跡はまだ確認できおらず、この時期の人々がどうやって生計を立てていたかは明らかになっていない。

集落の増加に対応するように、斐伊川沿いには後期古墳や横穴墓が多い。尾原ダム建設地周辺でも原田古墳<sup>(25)</sup>、林原古墳、時仏山横穴墓<sup>(26)</sup>、殿ヶ迫横穴墓<sup>(27)</sup>、下布施横穴墓<sup>(28)</sup>などが確認されている。斐伊川から離れた場所でも、後期古墳は多数確認されている。斐伊川本流沿いだけでなく、亀嵩川、郡川、八代川など斐伊川支流に沿って開けた小盆地を見下ろす場所にも古墳が多数造られている。その背景には、小規模河川を利用した小規模な水田開発、共同体や首長の存在が窺われる。

横穴墓は人骨が良好な状態で残っているケースが多く、後期の埋葬法に関する多くの情報が得ら

れている。一つの横穴に複数の死者を追葬していくに際し、追葬が予定される場所をあらかじめ空けて初葬者を埋葬する（上分中山横穴墓）<sup>(21)</sup>、身長に合わせて壁を削り室長を長くする（コフケ横穴）<sup>(22)</sup>など、横穴内で場所を確保するための工夫も見られた。多くの人骨残存例があおむけでの伸展葬であったが、うつぶせに埋葬する（時仏山横穴墓）、白骨化した後集骨して埋葬する（比丘尼原横穴墓<sup>(23)</sup>、玄蔵坊横穴墓<sup>(24)</sup>）、後者では集骨した遺骨を絹布で覆う（または包む）などの例もあって、一様でない。追葬の場合、地域によって頭位の規制が異なっていたり、二体抱き合わせて埋葬された例もあるなど（上分中山横穴墓）、横穴墓の埋葬法は多様であったことが知られる。副葬品は、とくに正類が豊富に残っていることが多い。ガラス小玉が伊賀武神社境内横穴墓<sup>(25)</sup>で63個、林原遺跡対岸の時仏山横穴墓で46個出土している。これにメノウ玉と水晶の切子玉を加えたのが横穴墓被葬者の装束であったようである。中期末の丸子山古墳ではこれに水晶製垂飾が加わる。同古墳から出土した238個のガラス玉は県内最多で、被葬者の勢力の大きさを物語っている。原山古墳からは特異な装飾刀が出土している。斐伊川沿いから離れた地域でも、郡川沿いの高田では形象埴輪が出土した常楽寺古墳のような際立った首長墓が築かれる<sup>(26)</sup>。

**奈良時代** この首長の勢力は奈良時代にも保たれたらしく、郡衙推定地や高田廢寺、官衙関連遺物が多量に出土したカネツキ免遺跡<sup>(27)</sup>が高田の地に集中している。尾原ダム地内では、斐伊川や下布施川沿いに奈良時代の遺跡が多数確認された（守田I遺跡<sup>(28)</sup>、宮サコ遺跡、宮ノ脇遺跡、原田遺跡1区、前田遺跡、家ノ脇遺跡4区など）。「出雲国風土記」の「川に便（よ）りて住めり」<sup>(29)</sup>の記事を想起させる状況である。出土する遺物の組成は煮炊き具である土師器の壺や土製支脚、赤彩された土師器の壺、製塙土器（「焼き塙壺」とも言われる）、須恵器の壺（身）というケースが多い。井泉祭祀が行なわれた家ノ上遺跡や円満寺遺跡では土馬、手づくね土器、瓶が加わり、須恵器の壺には蓋が作っている。斐伊川沿いに住む奈良時代人を支えた産業としては、「材木を組んで筏にして川下へ流した」<sup>(30)</sup>、あるいは「三處・布勢・三澤・横田の各郷でとれる砂鉄が鉄製品を作るのに適している」<sup>(31)</sup>という「風土記」の記事から、林業や鉄関連の手工業が予想される。実際に、守田I遺跡、宮サコ遺跡、原田遺跡では精錬滓が出土しており、鉄器製造が当地域の古代人の生活を支えていたことが裏付けられる。精錬鍛冶滓に加えて、原田遺跡では鍛冶炉跡をもつ掘立柱建物跡や鍛鍊鐵治滓が確認されており<sup>(32)</sup>、精錬から鍛錬・製品化までの工程は同じ遺跡内で行なわれている。また、守田I遺跡でも鉄の精錬鍛冶だけでなく、銅の鋳造が併せて行なわれている。

尾原ダム予定地の外では、高田の芝原遺跡でも精錬鍛冶が行なわれ、その工房と火床が確認されている。転用硯、墨青土器、鉄鉢型土器、土馬などの共伴遺物と、仁多郡衙推定地に近いという立地から、郡衙附属の官営工房と推定されている<sup>(33)</sup>。これらの遺跡からは、製錬に関わる遺物は出土していない。他の場所で製錬された素材が搬入された可能性が考えられる。

当地域で最古級の鉄製錬跡は、10世紀前葉の楨ヶ坪遺跡である。出土遺物のはほとんどが製錬にかかるものに限定される。鍛造品や鋳造品も皆無ではないが、この遺跡で製造された証拠はない<sup>(34)</sup>。平安後期になってもこの状況に変わりはなかったようである。12世紀の上垣内鉱跡<sup>(35)</sup>や家ノ前鉱跡<sup>(36)</sup>も、製錬に特化した小規模な製錬遺跡である。

**中世** 製鉄技術史上の画期となったのは12~13世紀であった。中国山地の鉄の主産地は備北から山陰へ移った。製鉄炉が大型化し、大量の鍛鉄を生産するようになったが、炭素や不純物の含有量にばらつきがある品質だったため、精錬工程も必要に迫られて改良された<sup>(37)</sup>。北原本郷遺跡では、

ちょうどこの変わり目に当たる時期の精錬鍛冶の様子が明らかになっている。出土した鉄関連遺物は、「板屋型」とも呼ばれる改良を経た精錬炉の炉壁や羽口である。他に鍛錬鍛冶を裏付ける遺物も出土した<sup>(4)</sup>。精錬から製品化までを同じ場所で一貫して行う操業形態は、奈良時代の精錬鍛冶遺跡と共通する。14世紀末から15世紀に下る原田遺跡1区でも、流動淬（製錬、精錬のいずれで生じたかは不明）、精錬淬、鍛錬淬、鍛造品、鋳造品が揃って出土しており<sup>(5)</sup>、精錬から製品化までを同じ場所で操業する傾向は中世後期も続いている。

14世紀～15世紀頃の貿易陶磁が出土する遺跡が斐伊川に沿って点在するが（家ノ脇Ⅱ遺跡、円満寺遺跡、原田遺跡1区、前山遺跡4区、北原本郷遺跡）、それらを入手した住人の経済力を支えたのがこれらの鉄関連産業であった。奥出雲の鉄製品が斐伊川を下って売られて行き、反対に斐伊川を上ってくる陶磁器を、鉄関連産業の支配者が購入したと想像される。

物流の幹線だった斐伊川をおさえるため、下布施氏館跡、トヤケ丸砦、亀山城など多数の城塞が斐伊川沿いに造られた。林原遺跡の北岸にも「下居平」などの地名や水の手城跡、斐伊川に面する麓にも「本屋敷」などの地名が残るほか、水の手城にまつわる伝承が豊富に残されている<sup>(6)</sup>。

江戸時代後半には、下布施川沿いに、現代に續く垣ノ内の集落等の遺跡が見られるようになる<sup>(7)</sup>。近世後半の谷口遺跡では、鉄の精錬に加えて鍛錬鍛冶、銅の鋳造を行なっていた。確定的ではないが鉄製品の鋳造の可能性も指摘されている<sup>(8), (9)</sup>。精錬から製品化までを一貫して操業する傾向は中世後期までの当地域の精錬遺跡と共通する。また、鉄精錬と銅製品鋳造の組み合わせは、谷口遺跡の川下に位置する守田Ⅰ遺跡（8世紀）とも共通する。下布施川沿いにこれらの集落や生産遺跡が成立してきたのは、「阿井街道」が主要な交通路・物流ルートになってきたからかもしれない<sup>(10)</sup>。

近世後期には、三沢・亀嵩・三成の牛馬市などの促進要因も手伝って、牧牛・牧馬が奥出雲の主要産業に加わった<sup>(11)</sup>。牛馬の守護神である綱久利神社や大仙権現の信仰が広まり、林原遺跡の対岸にも前布施村住民が大仙権現の祠を建立した（シベ行遺跡）。林原遺跡でも、鉄穴流しの砂の上に牛舎が建てられており、奥出雲の主要産業の推移と連動した地形変容の経過をたどった。

## 註

- (1) 島根県教育委員会2006『オロチのいぶき』特別号（4）及び島根県教育委員会『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報15』
- (2) 島根県教育委員会2003『尾山Ⅰ遺跡・尾山Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡』
- (3) 島根県教育委員会2005『宮ノ脇遺跡・家の後Ⅱ遺跡1』
- (4) 島根県教育委員会2005『北原本郷道路 1』
- (5) 島根県教育委員会2007『家の後Ⅱ遺跡2・北原本郷遺跡2』
- (6) 奥出雲町教育委員会2006『橘原遺跡・水の手城土井平地区・小廻上遺跡』
- (7) 仁多町教育委員会2004『姫跡遺跡』
- (8) 仁多町教育委員会1981『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』及び仁多町教育委員会1990『下鴨倉遺跡』
- (9) 木次町教育委員会1997『平田遺跡』
- (10) 島根県教育委員会2007『北原本郷遺跡』第8章「総括」第xi図
- (11) 山田康弘2001『中国地方の土器埋設遺構』『島根考古学公論』18
- (12) 木次町教育委員会2003『家の前跡跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡』
- (13) 島根県教育委員会2004『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区』
- (14) 島根県教育委員会2003『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡』
- (15) 木次町教育委員会2000『平田遺跡 第III調査区』
- (16) 仁多町教育委員会1995『武者山遺跡・丸子山古墳群』

- (17) 奥出雲町教育委員会2006「円満寺遺跡Ⅰ・Ⅱ」
- (18) 本次町教育委員会1994『家の上遺跡・右室遺跡』
- (19) 仁多町教育委員会2001「駿ヶ迫横穴群・西堀社遺跡・亀ヶ谷遺跡・シベ石遺跡・時仏遺跡・時仏山横穴墓』
- (20) 本次町教育委員会2002『ト布施横穴群・案久寺遺跡』
- (21) 仁多町教育委員会2003『大トシ谷横穴墓・玄藏坊横穴・コフケ横穴・川子原横穴・上分中山横穴群』37頁
- (22) 仁多町教育委員会1986「比久尼原横穴群緊急発掘調査報告書」
- (23) 仁多町教育委員会2001「伊賀武社境内横穴墓」
- (24) 仁多町教育委員会1985『発掘調査報告書 潤業寺古墳』
- (25) 島根県教育委員会1985『島根県郷土文化財調査報告書』XII
- (26) 本次町1994『新修本次町誌』 170~172P
- (27) 『山本周風土記』出雲郡出雲大川条 「日本古典文学大系」192~193P
- (28) 註(24)前掲書、「出雲大川」の記事(192~193P)による。  
「起孟春至季春 校材木船 沿浜河中也 (孟春より起(はじ) めて季春に至るまで、材木(くれき)を校(あさな)へる船 河中を沿浜(のほりくだれり)」
- (29) 註(24)前掲書、仁多郡各郷の記事(228~229P)による。  
「以上諸郡所出鐵壓尤堪造雜具(以上の諸郡より出すところの鐵壓くして、尤も雜の具を造るに堪う)」
- (30) 島根県教育委員会2005『前田遺跡(2)・下布施氏館跡・原田遺跡I区(分析編)』
- (31) 仁多町教育委員会1994『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』
- (32) 島根県教育委員会2004『横ヶ岬遺跡』
- (33) 本次町教育委員会1999『上塙内たたら跡・北原I遺跡・茶屋の廻遺跡』
- (34) 本次町教育委員会2004『家ノ前鉛跡・谷口遺跡・官サコ遺跡 付編』
- (35) 角田徳幸2004『中国山地における中世の鉄製窯』(『中国山地の中世鉄製窯』。(第32回山陰考古学研究集会事務局))
- (36) 小字名については註(8)(28)前掲書を参照。また、下記の伝承は植田務氏(上布施在住。林原遺跡発掘調査参加)からの聞き取りによる。
- ・自宅の前に水の手城の敗残兵を葬った「塚さん」がある。竹串をさし、幣をゆわえて祀っている。竹串は滅多に交換しないが、幣は去年交換したばかりである。
  - ・水ノ手城主葬すぐ北の道を改良するために山を削ったとき、4体の人骨が出土した。「塚さん」の隣に移して安置し、碑を立てて祀っている。
  - ・水の手城の城兵が水くみに来たという2m四方の湧泉が畑の西の山際にあった。泉には水神さんが住み、小便をすると目を患う。湧泉の水も目の中の水もきれいであるという共通点から、この言い伝えが生まれたらしい。
  - この湧泉は平成8年、集落北上方水源地からの水路をコンクリート化する際に消滅した。
- 現在その場所には木が植えられている
- (37) 阿井街道沿いの年代が分かる最も古い(?)造物としては、元文4年(1739年)銘の六地蔵がある。島根県教育委員会、1996『尾原の民俗』資料編6「紀年銘石造物について」銘文集(27)
- (38) 仁多町、1999年『仁多町誌』205、476~479頁

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査区の層位・試掘調査の成果（第5、6図）

林原遺跡は斐伊川の屈曲部に舌状に張り出した標高198mの斐伊川河岸段丘上に位置し、調査区の西端は河岸段丘の裾部に当たる。堆積土層は以下の通りである。

#### 平成11年度調査で判明した土層（第5図）

**表土** 第5図T1・T2土層図の1層に当たる。段丘の裾にあたる調査区西端で最も厚く堆積する。調査区中央のT1付近では薄く、20cm程度である。

**黄色砂** 第5図T1・T2土層図の2層に当たる。砂鉄を層状に噛んでおり、鉄穴流しで堆積したと見られる。調査区南半分を中心に分布し、T1で90cm、T2で1mの厚さがある。調査区南半分を中心に堆積し、斐伊川上流から離れる北ほど薄くなって、土器溝まり2・B11グリッド以北では確認できなくなる。調査時には、標高200.5mから201.5mにかけての範囲で堆積していたが、炭窯（煙道上端標高203.6m）内にもこの黄色砂が流入、堆積しているので、炭窯よりも上の位置から流れてきたことが分かる。黄色砂の大部分は段丘の斜面を滑り落ちて平たい部分中心に堆積したが、たまたま炭窓が凹みとして残っていたため、滑り落ちずに残したものである。

表土も黄色砂も、水田化された調査区東半分では削り取られて残っていない。

**黒色土** 上記の表土と黄褐色砂は無遺物層で、その直下の黒色土層（T1の3・4・5層、T2の4・5層）が包含層であることがわかった。黒色土の間に、より明るい灰褐色の土が噛んでいる状況が、複数の試掘坑で認められた。地質学的立場からの指導を受けたところ、三瓶山から噴出、運ばれて降下した火山灰である可能性が指摘された<sup>(1)</sup>が、試掘坑間の土層の対応関係などは不明確で、解明を本調査に持ち越した。

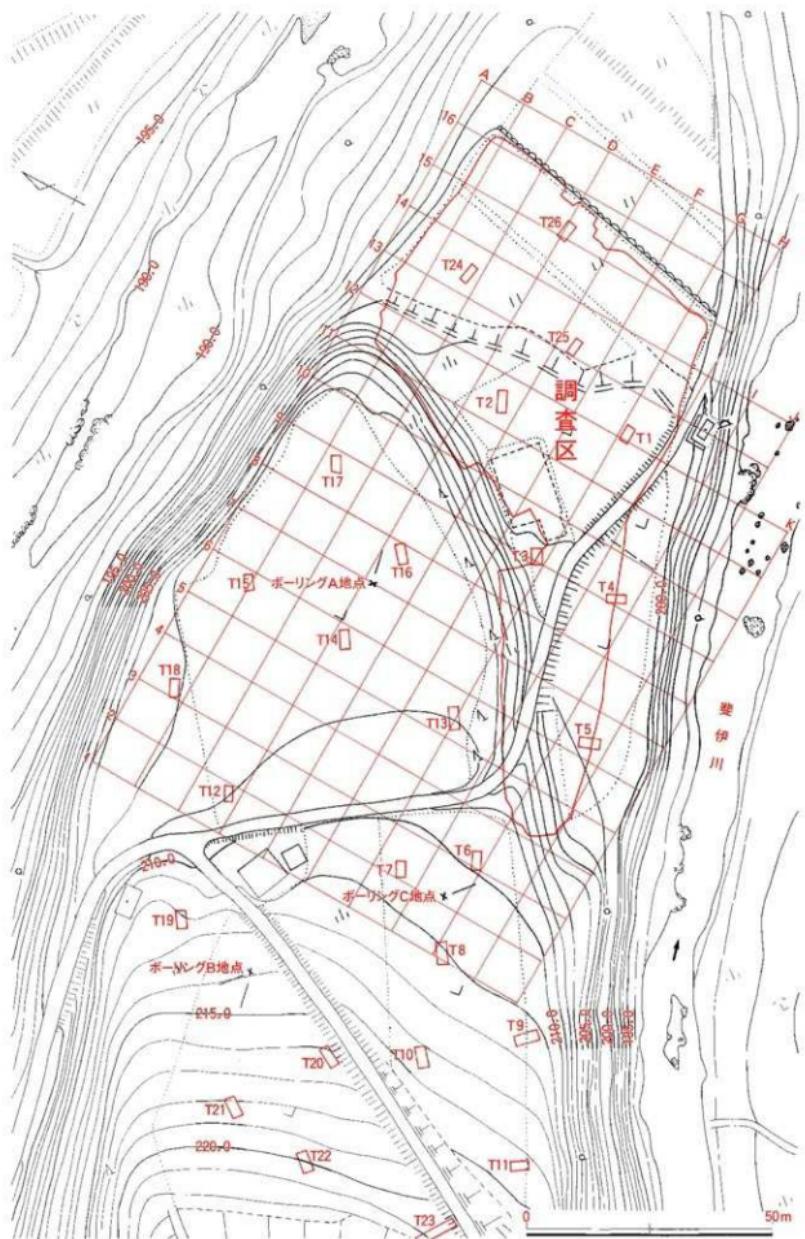
#### 本調査で判明した土層（第6図・写真図版2・3-1）

本調査で作成した調査区全体の土層図（第6図）は、無遺物層である表土と黄色砂を除去した状態の上層である。調査は、平成17年度=水田進入路以北（I区）、平成18年度=進入路以南（II区）に分けて行ない、I区の南壁セクションを上層観察に利用した。

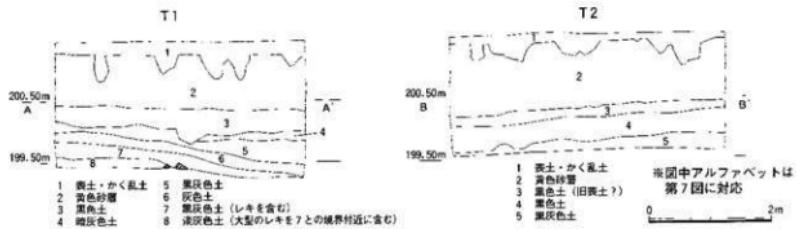
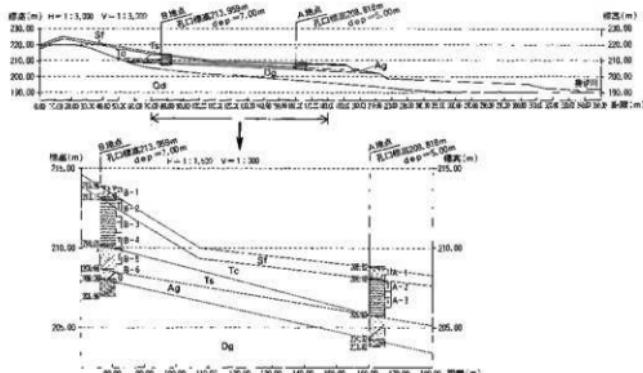
調査区の東側は掘り下げ開始後早い時点で川原石の層に達した（198.9m）のに反し、段丘の裾部に当たる調査区西側では198.3mまで掘り下げても川原石層に到達しなかった。旧斐伊川が洪水のとき、この段丘裾に沿うようにショートカットして流れたため、調査区の丘陵先端部に比べて低くなっている<sup>(2)</sup>（2）。旧斐伊川のショートカットの跡には黄色砂・黒色砂が交互に堆積していることから、洪水に遭いやすい不安定な環境であったと推定される。

縄文中期にいたってこのような洪水は起こらなくなり、安定した状態で黒色土が堆積し続けた。この黒色土層が遺物包含層で、基本土層図（第6図）の1層に当たる。

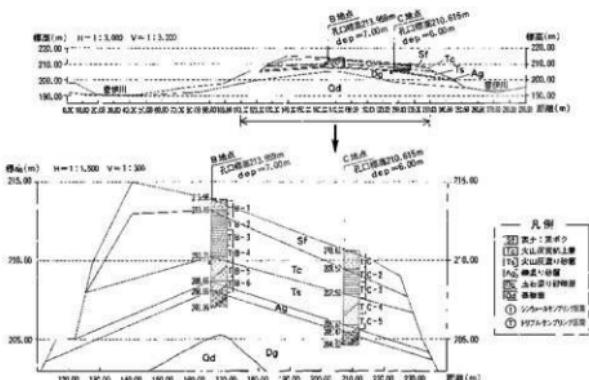
**0a～0d層** 調査区東半分は水田造成時に大規模な削平を受けた。上層には、灰色の粘土を主体とする0a・0b・0c層があり、これらは水田の床土と見られる。床土の下に、鉄分を含んで硬化した黒色土が広い範囲で認められた（0d層）。この黒色土層は、もとから堆積していた1層のごく一部が削平を免れて残存し、水田から沈下してきた鉄分を含んで硬化したものである。従って、土層図上では連続していないが調査区西半分に分布する黒色土層（1層）と同じ層と考えられるの



第4図 調査前地形、調査区・トレンチ配置及びグリッド設定図 ( $S=1/1,000$ )

トレンチ1・2 土層図(表土掘削前) ( $S=1/80$ )

A-B地点間のボーリング調査地質断面図



B-C地点間のボーリング調査地質断面図

第5図 調査区の土層及び調査区周辺の地質  
(トレンチ土層中の記号は第7図と対応。地質図中の記号は第4図と対応)



第6図 調査区全体の土層図 (S=1/120)

で、0 d層出土遺物と1層出土遺物を同じものとして扱った。

1a層 主として縄文時代後期（崎ヶ鼻式期）から中世までの遺物を含む層である。

上記のショートカット跡部分は調査区の他の部分に比較して低く、火山灰が流失することなく残っていた。この火山灰を境として、1層（遺物包含層。後述）は3層に細分が可能であり、このうち火山灰の上位にある層を1a層とした。

**1 b層** 主として縄文時代中期から後期（崎ヶ堺2式期）にかけての遺物を含む層である。

三瓶太平山火山灰の降下面直下に見られる10~20cm程度の灰褐色土の層を1 b層とした。上記の火山灰降下以前に堆積した黒色土が、火山灰を多量に含んで灰褐色化したものである。

**1 c層** 主として縄文時代中期から後期にかけての遺物を含む層である。

1 b層の下は火山灰降下以前に堆積した黒色土層で、これを1 c層とした。T 2は火山灰の分布範囲に入っており、T 2下層図の4層-1 a層、T 2上層図の5層-1 b層にそれぞれ対応する。

**1層** 1層は縄文時代早期（斐根式期）から中期までの遺物を含む黒色土層である。

主として、水田造成時の削平を免れた調査区西半分に分布する。調査区西端の段丘裾では、火山灰を境として細分が可能であった（1 a、1 b、1 c層）が、火山灰が分布しない部分では細分は不可能なため、黒色土包含層を單一の層として扱った。火山灰の分布範囲から外れているT 1では、T 1下層図（第5図）の3層~5層までが1層に当たる。しかし、T 1以外の場所ではこのような分層はできなかった。

#### 調査区東半の地形

調査区東半分を水平に掘り下げて行くにつれ、南北方向に数本の黒色土の筋が認められた。これらは、調査区内を斐伊川の支流が網の目状に流れていた痕跡で、もと流路であった低い部分には黒色土が残っていると考えられる。流路以外の部分では、1層を掘り下げるごとに黄色砂、または河原石の地山面が現れ、この地山面にも少数だが遺構が掘り込まれているのが確認された。しかし、砂や河原石の間に自然に黒土が入り込んだ部分と、本物の遺構との区別は困難で、検出時に遺構と判断したものを、最終的に遺構ではないと判断を変更した箇所も多数であった。

調査区北東隅には斐伊川の旧河床が東から北へかけて流れている。この部分には黄色砂と黒色砂が交互に堆積を繰り返していたが、弥生時代の遺物をも含んでいるため埋没時期は調査区の他の場所に比べて遅かったと見られる。実際、土器溜まり4（縄文後期）よりも低い位置から弥生土器が出土しているなど、堆積状況は複雑である。調査区の大部分を覆う1層が、この部分でどの黒色土に当たるのかが確定できず、セクション図を作成することができなかった。

第7図に、調査終了後の地形を示した。土器溜まりを掘った部分が凹みとなっているが、本来の地形ではない。

#### 平成11年度トレンチ出土遺物

調査区の内は斐伊川が作り出した河岸段丘となっている。段丘の上は、現状では平坦面となっているが、約20年前から苗木育成場として使用されるに際して削平された結果である<sup>(3)</sup>。削平は林原古墳のすぐ東から段丘上端まで及んでいる。それ以前は緩やかな丘陵が西の林原橋近くまで続き、丘陵頂部は畠地であった。

古墳に隣接するT23からは、古墳に関係すると見られる須恵器甕の口縁部、及び耳が付く肩部が出土している。丘陵の北側は斐伊川河岸まで崖となっており、この崖面のトレンチからも縄文土器が出土している。丘陵頂部で縄文人が活動していたことをうかがわせる。削平された部分の出土遺物は少ないが、T10からは弥生土器の可能性がある土器片が出土している。丘陵頂部からは分布調査時に鉄滓が採集されており、製鍊・精錬・鍛冶のいずれかが行なわれたことがわかる。丘陵の下では砂鉄の採取が行なわれ、調査区には鉄穴流しによって堆積した黄色砂層があり、下では砂鉄の採取が行なわれていたことがわかる。

## 註

- (1) 松下整司氏の御教示による
- (2) 中村唯史氏の御教示による。
- (3) 田中和大氏の御教示による。

**第2節 調査方法**

調査にあたっては、調査区全体に国土座標系（平面直角座標系XY座標は日本測地系）にのる基点（X=−86, 750, Y=74, 560）を設け、10m間隔で東に1・2・3…16、南にA、B、C…Jという基準点を設定した（第4図）。一辺10mのグリッドは、北西側の交点の名称（例えばC11）で呼称することとした。

平成11年度試掘調査で、包含層と無遺物層がおおよそ明らかになっていた。ただし、各トレーン間の上層の対応関係や、土層の拡がる範囲は十分に解明されていなかった。鉄穴流して堆積した黄色砂層が調査区北部（T 2より北方）では切れていた。火山灰の堆積する範囲は帯状にのびていた。

全ての遺構について、平面形を図化している。竪穴住居、土器埋設遺構、配石遺構に伴う土坑、その他の土坑、ピットなどの遺構はトータルステーションにより上場と下場を観測、図化した。焼上は、焼上を完全に取り除いた後の形状について上場、下場を図化している。焼上の一部、炭溜まり等底面がすり鉢状で下場を確定できない遺構は、無理に下場を作らず上場の図化のみにとどめた。半裁し、セクションを観察した時点で掘りすぎが判明した遺構については、完掘後、残り半分の下場の形状から推定して図化した。竪穴住居、焼上、土器埋設遺構、土坑、配石遺構、炭溜まり、炭窯についてはセクションを実測した。それ以外の小規模なピットについてはセクション図を作成していない。

石圓炉状遺構、石錘溜まり、配石遺構など石で構成される遺構は手実測により図化した。

遺物の取り上げは、500円玉以上の大きさの土器片を点取り上げした。それより小さな土器片についてはグリッド毎に一括して取り上げた。火山灰の分布範囲内のグリッドでは1a層、1b層、1c層各層からの出土遺物を区別し、分布範囲外のグリッドでは1層として一括して取り上げた。火山灰のある部分とない部分が交錯するグリッドでは、分布範囲の境界線を確定するのが困難であつたため、1層になるべき遺物と1a層、1b層、1c層に分けられるべき遺物が混在している。

調査の過程で、土器が集中的に出土する場所が複数認められた。土器が集中するのを確認した時点でこれを土器溜まりと認定し、トータルステーションで遺物を点取り上げする都合上出土場所を「DT！」のように記録した。従って、土器溜まりと認識する以前に、グリッド毎に取り上げた遺物については、土器溜まりから出土した事実を確認できないため、「包含層出土遺物」として保管している。ただし、点取り上げした遺物については、土器溜まりから出土した事実をパソコンの画面上で確認できるので、図面処理の段階で土器溜まり出土遺物に含めた。

**第3節 遺跡の概要、遺構配置**

これら、トータルステーションによって点取り上げした土器や石器の出土状況と、遺構配置、調査後地形の二者を重ねたのが第7図である。土器の出土位置は一様に分布するのではなく、複数の土器の集中部分がとらえられる。このような「土器溜まり」が、林原遺跡では8箇所確認された。

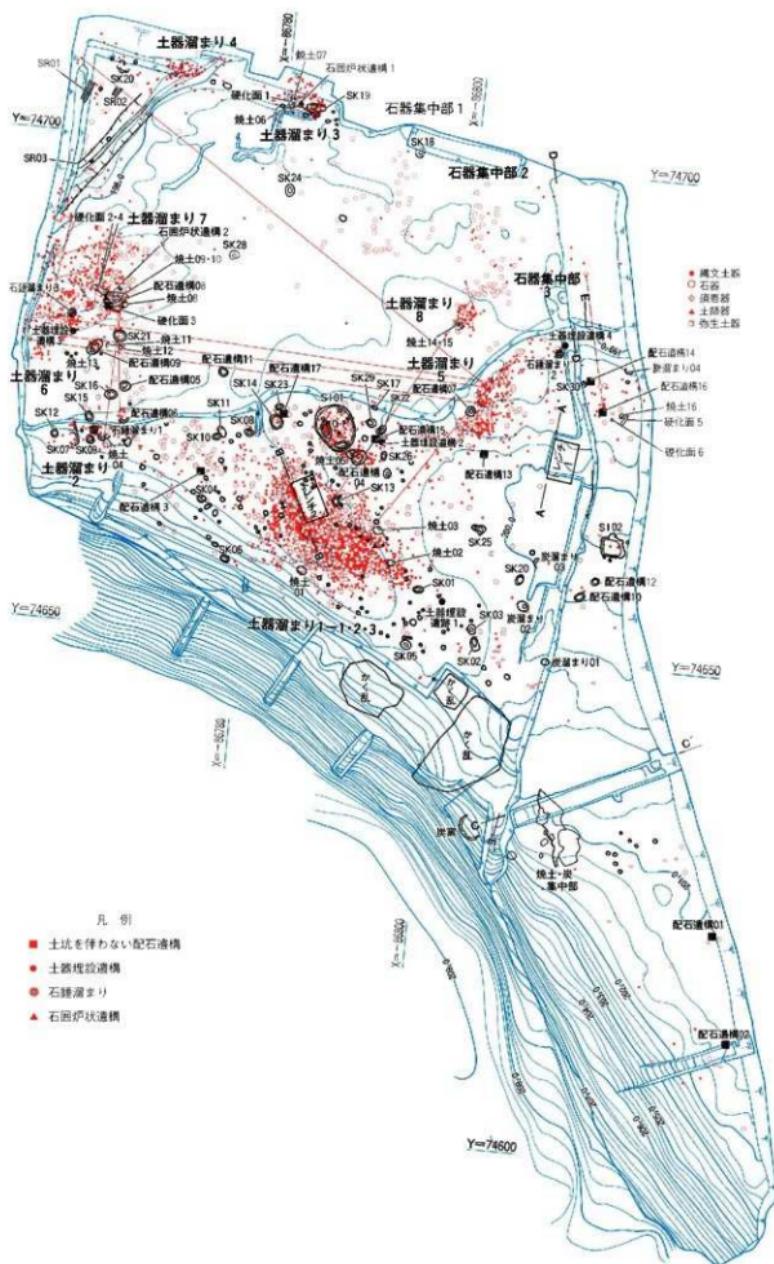
いずれも縄文時代後期前集～中集の限られた時期に属している。

土器溜まり3・4・6～8は調査区東半分の水田造成で削平された部分で検出されている。航空写真を見ると、調査区東端で川原石が南北に帯状に分布するのが認められた。この部分は、旧斐伊川が形成した自然堤防部分を水田造成時に削平した際に石が露出したものと思われる。土器溜まり3・4・8は、この川原石集中帶の縁辺部上面に位置している。

土器溜まり1・2・5が検出されたのは、削平を受けていない調査区西半分である。このうち土器溜まり1・2は旧斐伊川のショートカット部分の中に位置しているが、縄文時代後期には洪水がこない安定した環境となり、黒土が堆積して周囲と同程度のレベルになっていた。土器溜まり1の土器出土位置は、S I 01と同じかややS I 01より高いレベルであり、土器溜まり2も付近の焼土や石錘溜まり1とほぼ同レベルである。

これらの土器溜まりはいずれも調査区の縁辺部に位置し、ちょうど環を描くような分布を示す。このうち土器溜まり2・3・7・8はその直下の位置に焼土、硬化面、あるいは石囲炉状造構等の生活痕跡を伴うのに対し、土器溜まり1・4・5・6にはそれらが直下に見られず、周辺に焼土や配石造構等が分布している。土器溜まりと、これらの造構は、明らかに有機的関係にあり、環状の配置と合わせて興味深い。土器溜まりの内側は造構・造物の空白地帯となる。実際に造構が造られなかった可能性も、水田造成時に造構が削平された可能性もあるが、中央の空白地帯のみレベルが高かったという積極的根拠が見出だせなかったことから、本報告では前者の可能性が高いものと考えている。

土器溜まりのほかに、石器が集中的に出土する地点が複数ある。このうち、土器溜まり3と8の中間に位置する石器集中部については「石器集中部1」「石器集中部2」「石器集中部3」としてそれぞれ図化している。この他に、土器溜まり1と2の間、土器溜まり4と7の間にも、石器の集中が見られるが、今回は石器集中部と認定していない。石器集中部は、各土器溜まりに隣接して検出されることから、他の造構と同様に、土器溜まりと関連のある造構と考えられる。



第7図 調査後地形測量、遺構配置及び土器溜まり接合状況図 (S=1/500)

## 第4章 1a層の遺構と遺物

### 第1節 1a層の遺構（第8図・写真図版3-2）

1a層の遺構は1b層上面で検出され、1a層を埋土とする。焼土4箇所、土器埋設遺構1基、炭溜まり3箇所、土坑6基、配石遺構3基、炭窯1基、焼土・炭集中部1箇所、ピット66基、上器溜まり1箇所、を検出した。分層の基準となる三瓶太平山火山灰は段丘の裾に沿って帶状に確認されており、1a層の遺構はこの範囲内に分布する。遺構分布範囲のはば中央に上器溜まり1-1が広がり、その縁辺部には焼土01・02・03が検出されている。焼土03の北には、ピット4穴が円弧状に並んでいるが掘り込みが不安定であったため、建物と断定するには至らなかった。土器溜まり1の北に接するD10グリッドや、南のE9グリッドでは多数のピットを確認している。ただし、建物の柱列のような並びは確認できなかった。土器溜まりの東にはS101（第7章「1層の遺構」参照）があり、S101堆土に含まれる火山灰を切って掘り込まれているピット6基も1a層の遺構に含められる。調査区の南から南西部の炭溜まりや炭窯・配石遺構01・02は、いずれも縄文時代より新しい時代の遺構と考えられ、時期が下るにつれて遺跡の中心が南へ移ったことが窺われる。

#### 1. 縄文時代後期の遺構

##### 土器溜まり1-1

###### i) 土器溜まり1-1の遺物出土状況（第9図・写真図版4-1）

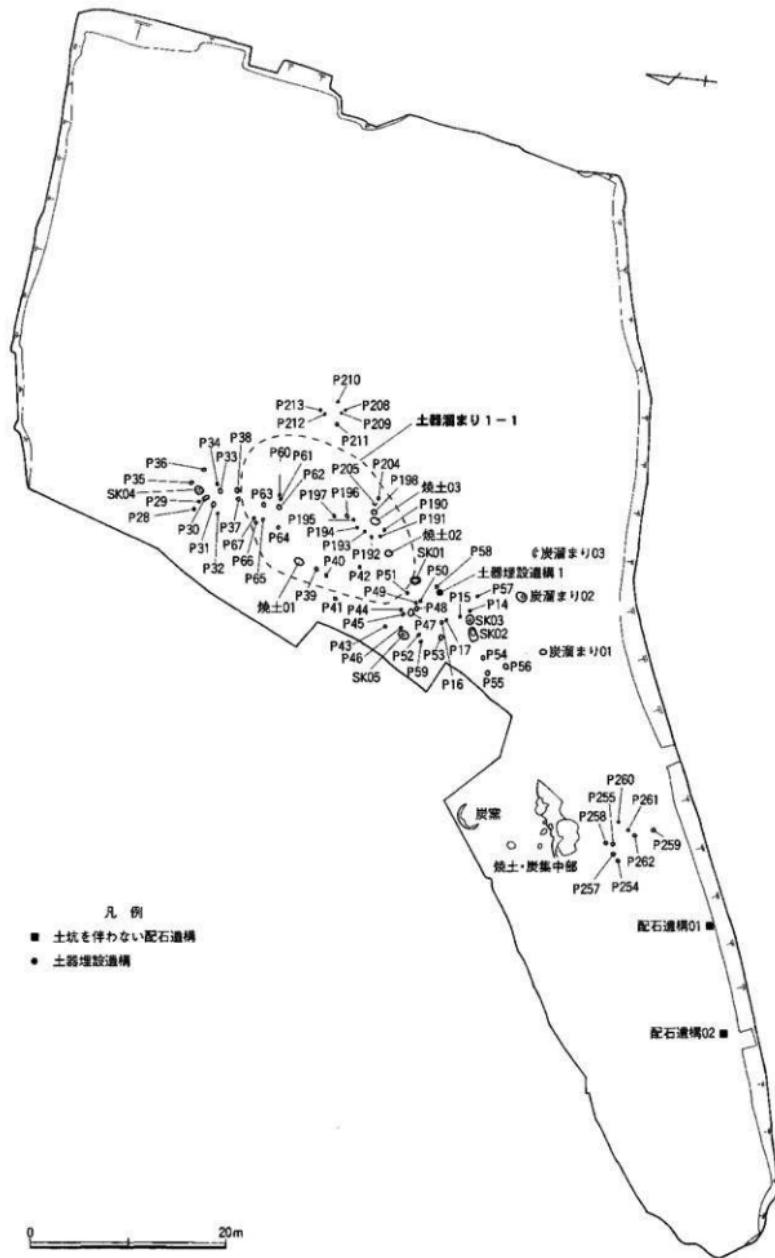
D10からD11グリッドにかけて、調査区西の河岸段丘崖面の樹付付近に広がる土器溜まりである。出土遺物の時期は墓地式から崎ヶ鼻式までと幅がある。遺物の出土範囲は199.3~200.5mと厚く、出土した層位により、上器溜まり1-1（1a層）・1-2（1b層）・1-3（1c層）に細分できる。しかし、分層の基準にしている火山灰が多量の土器に遮られていたため、確認できない部分が多かった。また、火山灰が残る部分（1b層）と残らない部分（1層）の境界が不明確であったため、上器溜まり1-1・1-2・1-3の区分は曖昧にならざるを得なかった。このように、土器溜まり1に關する分層が揺らいでいたので、取り上げた遺物の層位も不明確さを残している。そこで、点取り上げて出土位置が確定できる遺物を出土位置の高さで分けして、上から順に土器溜まり1-1、1-2、1-3とした。上器溜まり1-1と1-2や、土器溜まり1-2と1-3など、上層と下層の間で接合した個体は多数に上る。そのような場合、型式が比較的占いと見られるものを下層に、新しいと見られる土器は上層に含めた。このような接合状況も判明する限り全て図化している。

土器溜まり1-1の西の縁辺には焼土1が、南の縁辺には焼土2・3が確認されている。

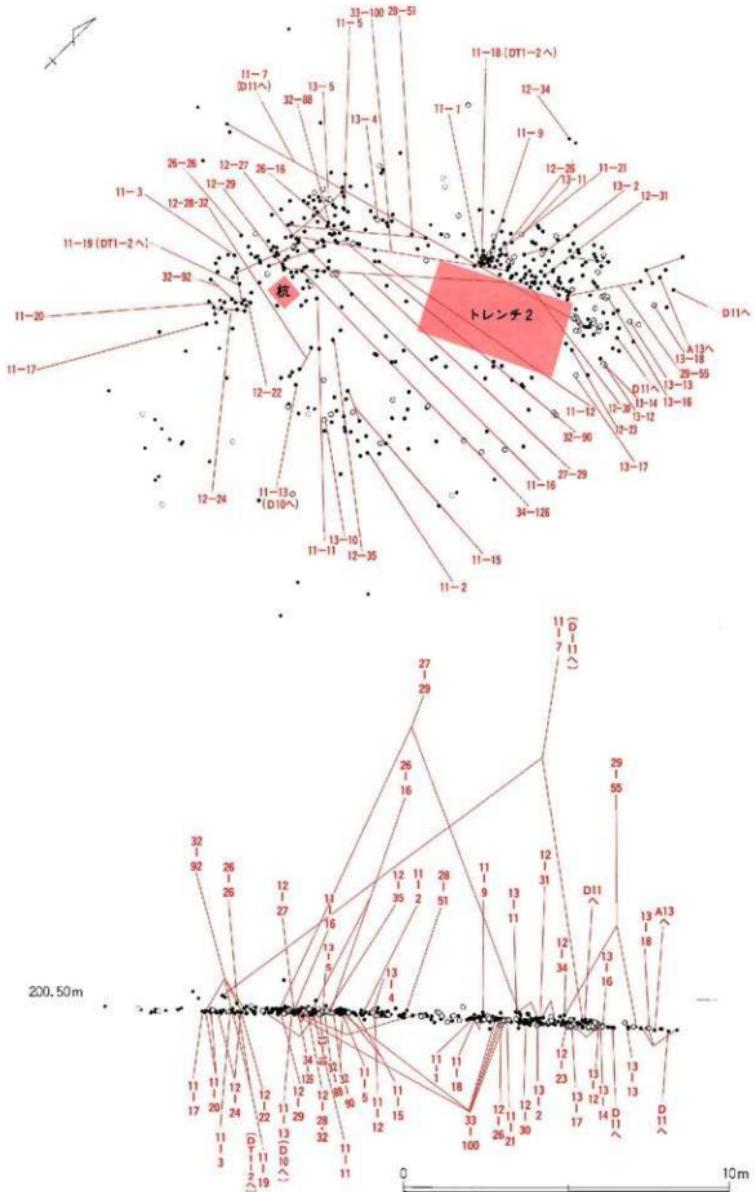
###### ii) 土器溜まり1-1周辺の遺構

###### ・焼土01（第10図・写真図版4-2・5-1（遺構）・33-2（遺物））

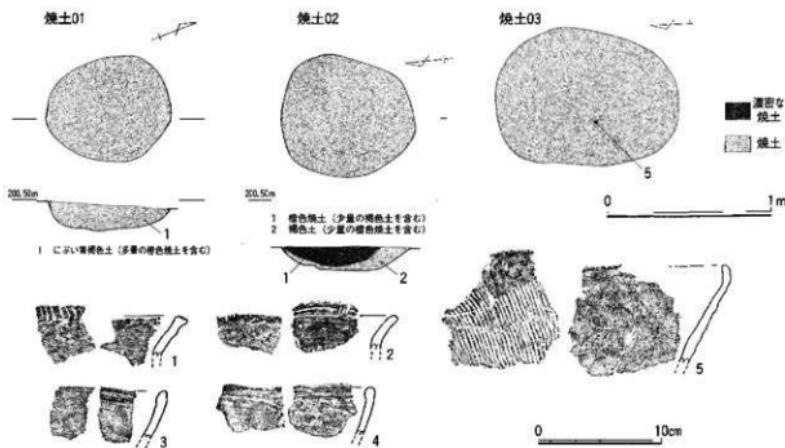
D10グリッドの東端、土器溜まり1-1の山側で検出された焼土で、平面円形である。焼土の中心部は被熱による変色が最も強い。検出面は被熱の強い部分よりもわずかに上であった（写真図版4-2・5-1）。焼土内から出土した石皿には被熱が見られることから、焼土に作うものと判断される。焼土内からは他にも被熱・赤変した礫が多数見つかっており、これらも焼土の使用に関わ



第8図 1a層検出構造配置図 ( $S = 1/500$ )



第9図 土器溜まり1-1遺物出土状況図 (S=1/150)



第10図 土器溜まり 1-1周辺の遺構（焼土01～03）及び出土遺物実測図  
(遺構 S=1/30、遺物 S=1/4)

る可能性がある。

有文深鉢（第10図1・2）やボール形の無文浅鉢（3・4）が出土している。1は上面に刻み目、2は内面に沈線が施される。これらの遺物から、焼上1は縄帯文成立期の遺構と見られる。

#### ・焼土02（第10図・写真図版5-2・3）

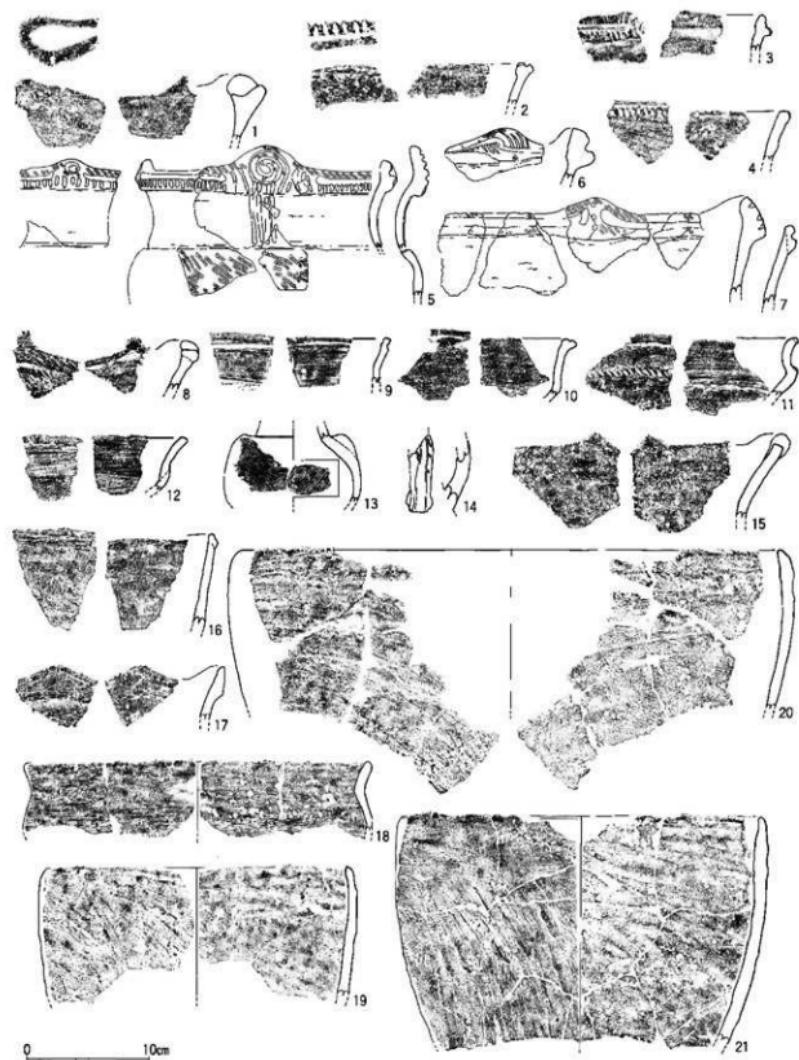
E10グリッドの東端、土器溜まり1-1の西の縁辺で検出された焼上で、平面は円形である。焼土の中央から北寄りにかけて最も被熱が強かった。焼上を検出したのは、この被熱が強い部分のわずかに上の面であった。焼上内では、円形で板状の焼けた石が多数検出された。出土遺物には、被熱によると推測される赤みを帯びた土器片がある。遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

#### ・焼土03（第10図・写真図版33-2（遺物））

E11グリッドの西端、土器溜まり1-1の西の縁辺で検出された焼土である。平面では、中央が最も強く焼け、外周ほど被熱が弱くなる傾向が看取された。ただし、断面の上層は不明確で、焼上の底面も確認できなかった。第10図5は外面に撚糸文をもつ縄文中期の里木II・III式の土器片である。底面を精査する過程で出土したものであり、下位の包含層に含まれていた遺物である可能性が高い。この他に、無文粗製土器が出土していることから遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

#### iii) 土器溜まり1-1出土土器（第11・12図・写真図版34・35-1）

有文深鉢は、上面に施される縄帯文成立期（第11図1・2）や、崎ヶ鼻式（3-7）が混在する。刻み目は上面につく場合（2・4）と外面につく場合（3・5）とがあるが、縄文主体のもの（6・7）はいずれも外面に施される。有文浅鉢（11）は屈曲部に刻目がつく。有文鉢（12）は口縁端部と胴部に縄文がつく。無文深鉢（15-21）は口縁を肥厚させるものが少數見られる（16・17）。他はいずれも直立する口縁である。両者とも外面はナデ調整されるが、後者の外側はナデが粗い（19・20・21）傾向がある。皿形の無文浅鉢（第12図22・23・24）は、口縁端部からやや下がった位置の内面（22）あるいは端部近く（23）に段が作られるものと、作られないもの（24）があり、

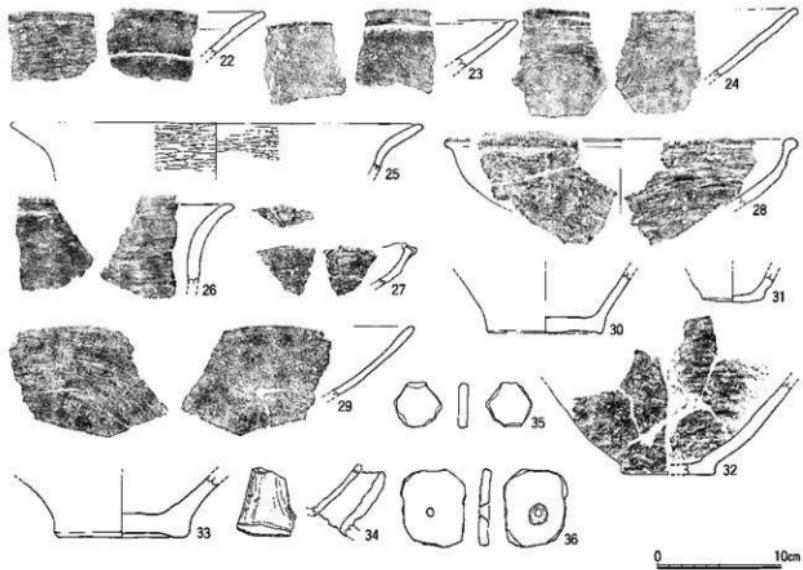


第11図 土器溝まり1-1出土土器実測図(1)(S=1/4)

多様である。

#### iv) 土器溝まり1-1出土石器 (第13図・写真図版35-2・36-1)

第13図1から11までが小型剥片石器である。1は黒曜石製、2～4はサヌカイト製の石鎌である。5は黒曜石製、6はサヌカイト製の石錐である。7・8は楔形石器で、7が黒曜石製、8がサヌカ



第12図 土器溜まり1-1出土土器実測図(2)(S=1/4)

イト製である。両者とも上面から加撃され、下端に潰れが生じている。11は大型のスクレイバーで、在地産と見られる斑晶を多く含む凝灰岩を利用している。12は磨製石斧、13~15は打製石斧である。打製石斧は剥片を素材とするものが多く、石材は在地産の流紋岩を用いる傾向がある。ただし13はサムカイトを利用しており、他と比べて異質である。

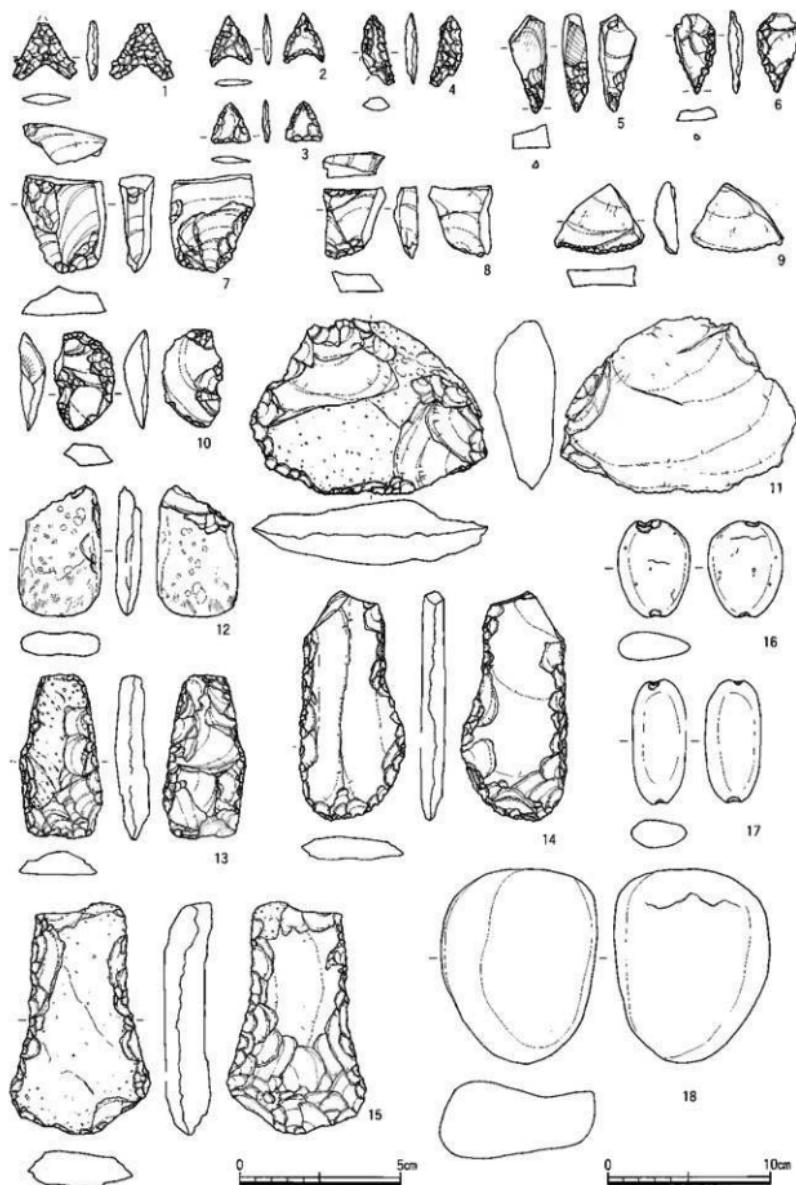
磨製石斧(第13図12)、打製石斧(13・14)、石錘(16・17)、凹み石(18)等の砾石器が、土器溜まりの南より(トレンチ2以南)から集中的に出土している。このうち16は他に3個の石錘(非掲載)と共に出土しており、小規模ながら石錘溜まりを形成していたと思われる。

## 2. 繩文時代晩期以降及び時期不明の遺構

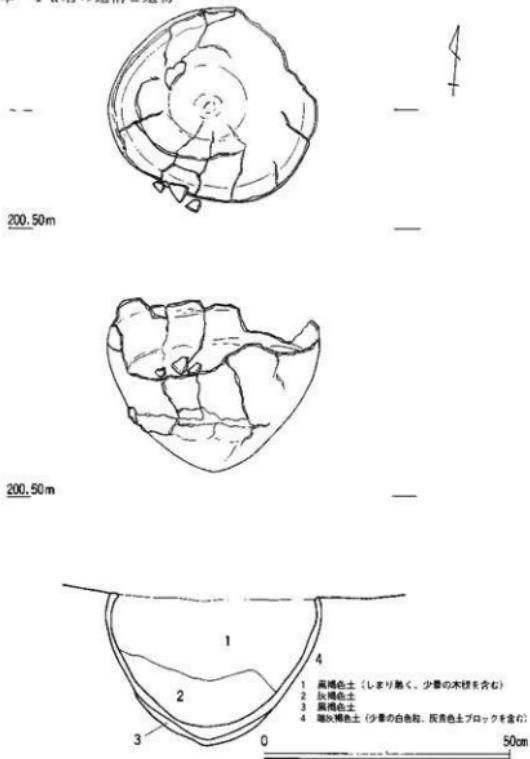
### 土器埋設遺構1(第14図・写真図版6(遺構)・36-2(遺物))

E10・F10グリッドの境目、調査区南寄りで単独で検出された土器埋設遺構である。無文粗製深鉢が正位で埋め置かれていた。口縁部は欠損しており、かく乱のため上部は残存しない。側面図によれば、破損した現状で200.35m以下の部分が残存していた。底部外面に張り付くようにしまりよい黒色土がわずかに残っていた(第14図)。これが埋設坑の土であったかもしれないが、確定はできなかった。また、平面では黒色土の部分が認められた。これが埋設坑の掘り形であった可能性もある。ただし著しく不整形で、輪郭が確定できず、埋設坑の掘り形であるか否かも不明である。

第15図1は埋設されていた無文粗製深鉢である。表面には継方向の条痕が見られ、底部は尖底である。残存部分の上端がわずかにくびれていることから、口縁部が彎曲する形状であったと推定される。時期は繩文晩期中葉と見られる。



第13図 土器溜まり1-1出土石器実測図 (1~10 : S=2/3, 11~18 : S=1/3)

第14図 土器埋設遺構1実測図 ( $S=1/10$ )**炭窯** (第16図・写真図版7-1)

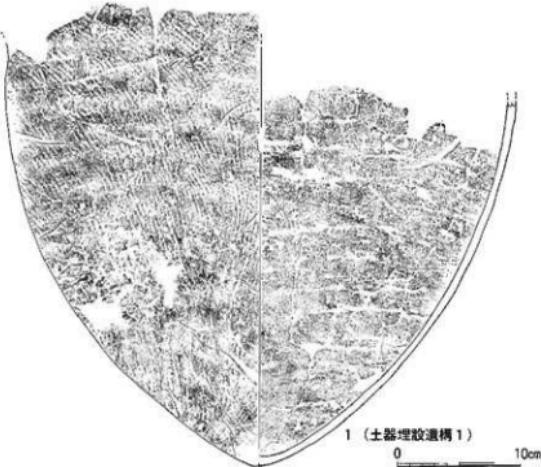
F8グリッドの西側、調査区西の段丘面の標部近くで検出した。黒色土におおわれた段丘の斜面を幅3.8mにわたって掘りぬき、かわりに明黄褐色土を充填して床や壁を構築している。現在は失われているが、天井部は山を掘り込みます土盛りで築かれたと思われる。

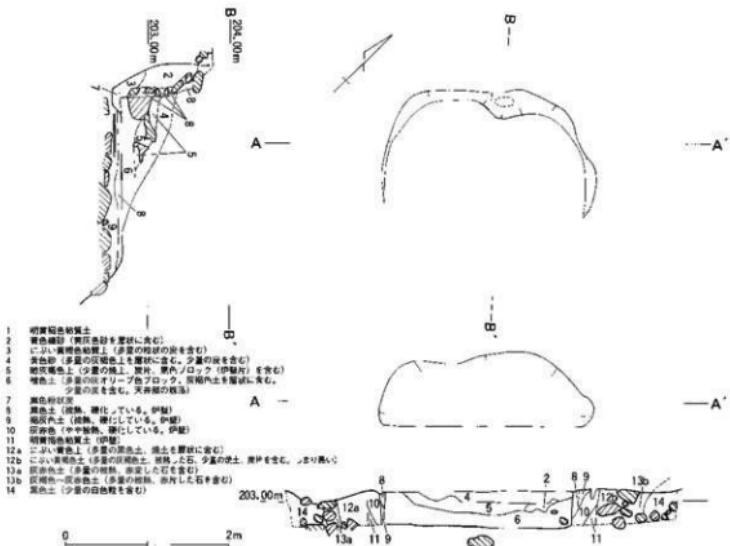
横断面セクションでは、内壁から外方へ80cmの厚さで黄褐色の土が充填されていた。炭窯の構築土はここまでで、これより外は周囲の地面と同じ黒色土となる。

床面は、石を敷き詰めた上に明黄褐色土を水平に貼って床面としている。強い被熱のため内面は硬化・黒変し、固まったタールのような外観を呈する。

床面の下には川原石を、上面がほぼ水平になるように敷き詰めている。炭窯の中央床下を縦断するように、推定径4cmの竹の管を奥壁側から前方へ向けて這わせている。竹管の奥壁側は、奥壁中央のくぼみまで達しているらしく、煙道入り口となつがっている。これは、煙道から侵入する雨水を、床下を通して前方へ排出するための排水施設と推定される。

奥壁は、間に土を挟みながら石を垂直に積み上げて構築されている。石の間にはさまる土は固くなつたタルのような外観であるが、セクションの他の部分の観察から、もとは明黄褐色の土であったと思われる。横断面の南端近くには、灰赤色の土を間に挟みながら石を積み上げたらしいう部分が見られる。

第15図 埋設土器1実測図 ( $S=1/4$ )



第16図 炭窯実測図 (S=1/60)

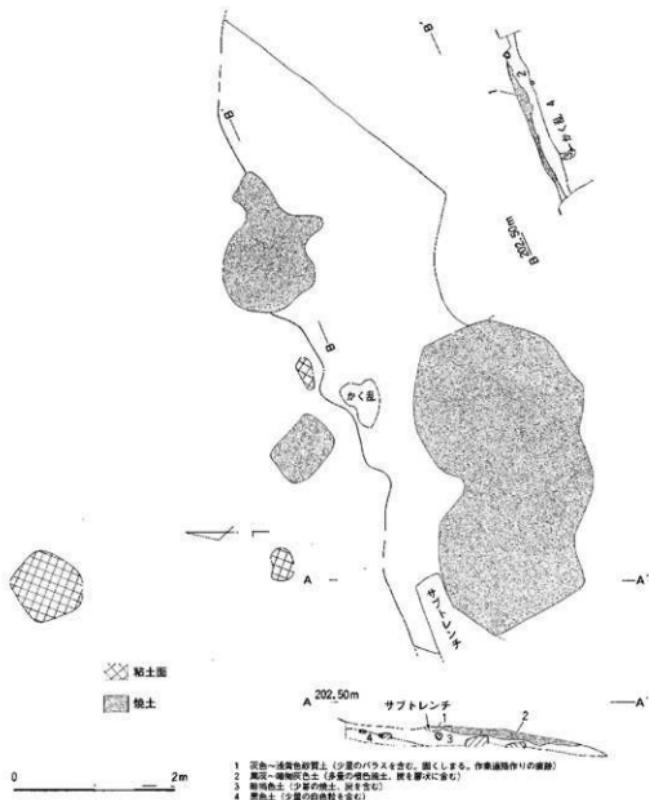
奥壁の、中央からやや右よりの位置の床面を掘り窪めて、煙道の入り口が作られている。煙道は奥壁の下をくぐって反対側へぬけ、1m垂直に立ち上がって地表面へ抜ける。煙道上端付近には、約30cmの扁平な石が置かれていた。煙道に蓋をするための石と考えられる。また、煙道上端の地山が掘り窪められており、これは蓋石を置く面を確保するためと推測される。

窯内部には、最下層に橙色に焼けた土が多量に堆積していた。奥壁付近の、煙道入り口の直上には30cm大の大きなブロックも見られた。これらは、被熱して橙色に変色した天井部が崩落して堆積したものと思われる。

橙色土の上には暗灰褐色土が堆積し、タル化した炉壁片が多く含んでいた。天井部が一気に崩落した後、徐々に崩壊が進んだ側壁の破片と推定される。その上に堆積していたのが黄砂であり、灰褐色土を層状に含んでいた。鉄穴流しによって斐伊川上流側から流入した砂であり、煙道内の上半分に進入し、さらに窯本体内部の最上層にも堆積していた。従って、炭窯が廃絶したのは鉄穴流しが行なわれるよりも以前であったと推定される。

#### 焼土・炭集中部 (第17図・写真図版7-2)

G 8グリッドの西側、炭窯の南西15mの場所に、焼土や炭が集中的に分布するのを確認した。炭を多く含む部分が東西に帯状にのび、その周辺に焼土の集中部が点在する。検出されたレベルは202.2mで、炭窯の床面(202.7m)より50cmだけ低い。平面的に追ききれなかったが、集中部の北にも焼土や炭が点々と見られ、炭窯直下まで広がっていたらしい。炭窯に作る作業場、または床面に溜まつた不要な炭や破損した磚・天井を搔き出した場所と推測される。

第17図 炭窯付近焼土・炭集中部実測図 ( $S=1/60$ )**炭溜まり01 (第18図)**

炭溜まり01は、G10グリッドの北西隅、調査区の南よりで、トレンチ掘り下げ時に確認した。平面は円形、断面はすり鉢状で、9cmの深さまで炭が溜まっている。炭溜まり01があるG10グリッドは火山灰層の東側の切れ目に当たっており、1b層上面のレベル200.50mに対し炭溜まり01の検出面が200.65mで、明らかに1b層上面よりも高いことから、火山灰降下後若干の土が堆積した後の遺構と見られる。

**炭溜まり02 (第18図・写真図版8-1)**

炭溜まり02はF10グリッドの南端、炭溜まり01の5m北東で検出された。炭溜まりの中で最も規模が大きく、径1mを超える。断面形は非常に緩やかで、底がわずかに窪むすり鉢状である。底面も側面も不明瞭で、下場の確定が困難であった。深さ12cmまで炭の堆積が確認された。

**炭溜まり03 (第18図)**

炭溜まり03はF11グリッドの南西隅、S102や配石遺構10・12から6m北で検出した。当初上坑

と認識し、平面形も現状より東へ延びると考えていた。しかし、半歳後の土層観察の結果、土坑ではなく炭溜まりであることが判明した。このため、南半分の平面形は不明であるが、残存部分からおむね円形であったと推定される。炭が集中するのは検出面から20cm下の2層の部分である。

#### S K01 (第18図)

S K01はE10グリッドの南端、土器溜まり1-1からやや南で確認された、不整精円形の土坑である。長軸は南北方向である。セクションの南端、北端とも緩く傾斜し、底面と側壁の境界は不明瞭である。

#### S K02 (第18図)

S K02はF10グリッドの西端、土器埋設遺構1から5m南西方向で検出された。平面は楕円形で、長軸はほぼ東西方向に向く。側壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面との境が明瞭である。長軸東端付近の底面からわずかに浮いた位置に、径15~16cmの石が残っていた。

#### S K03 (第18図)

S K03はF10グリッドの西端、S K02の東に接して検出された。平面形は円形である。断面形は完全なすり鉢状となっていて、S K02との前後関係はわからなかった。

#### S K04 (第18図)

S K04はC11グリッドの中央、土器溜まり1-1の北で、1a層上面のピット群の中で検出された。平面形はおむね円形である。北西の一部が浅くなってしまっており、段掘りされたような断面形を呈している。

#### S K05 (第18図)

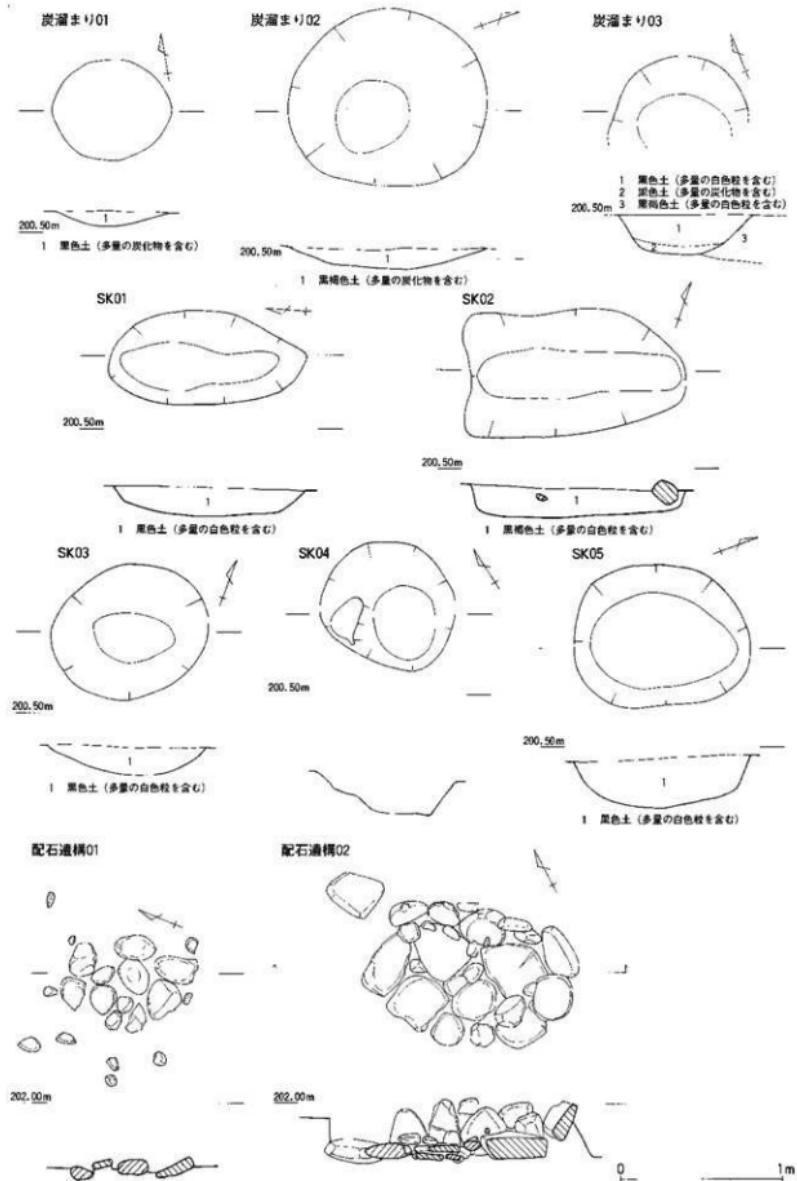
S K05はE10グリッドの西端、土器溜まり1-1よりわずかに西の地点で検出された、平面は円形を呈し、断面形はすり鉢状の土坑である。断面は底面も側壁も不明瞭で、下場の確定は困難であった。

#### 配石遺構01 (第18図・写真図版8-2)

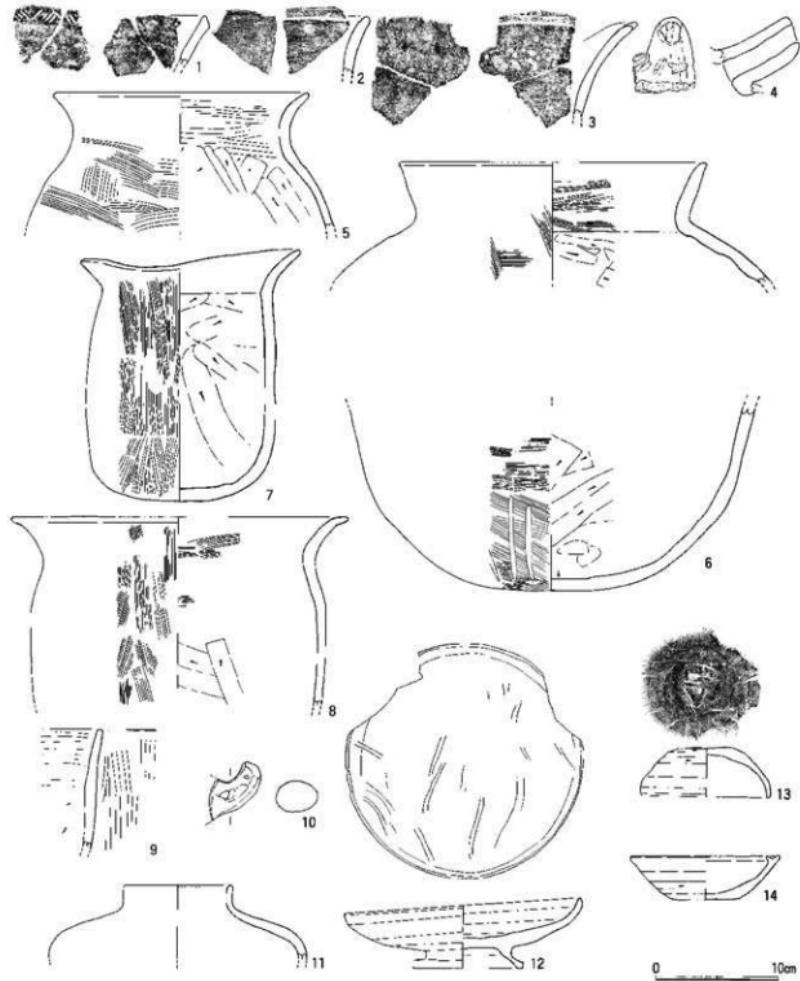
配石遺構01はI 7グリッドの北端、調査区の南西端で検出された。下に土坑は伴わない。配石の平面形は南北に長い楕円形であるが、西に散在している小型の石がこの配石遺構に伴う石であれば、平面形は現状よりも東西方向に長かった可能性もある。20cmを超える大型の石と20cm未満の小さめの石を不規則に配している。検出時には、石の下面は他の部分と土色・堅さが異なっていたが、境界が不明瞭で土坑と確定することはできなかった。

#### 配石遺構02 (第18図・写真図版8-3)

配石遺構02はI 6グリッド北西に位置し、配石遺構01よりもさらに南西で検出された。配石の平面形は楕円形で、長軸は南東方向から北西方向を向く。西半分の外周を埋む石が残っていないのは、試掘調査時に石を取り外してしまったためである。大きくて重たい石を楕円形に敷き詰め、これらの石をとり囲むように外周に石を立てている。外周部の立石は東半分のみ残存し、いずれも少しづつ外傾している。付近の1a層から土師質土器の皿が出土しているが、正確な出土位置は不明である。他の配石遺構と比べて特徴的なのは、底面にも石を敷き詰めていること、立石で囲むこと、使っている石が30cm~40cmの大型の石に限られることである。以上の特徴から見て、縄文時代以降の遺構の可能性もある。



第18図 炭溜まり01～03、SK01～05、配石遺構01・02実測図 (S=1/30)

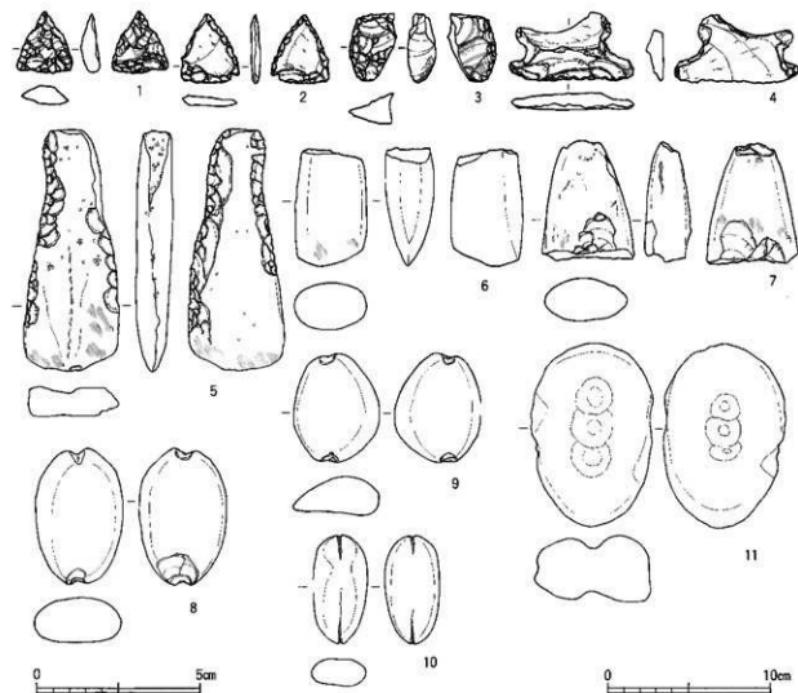


第19図 1a層出土土器実測図 (S=1/4)

## 第2節 1a層の遺物

### 1. 1a層出土土器 (第19図・写真図版36-3・37-1)

縄文時代後期から中世までの土器が出土している。土器溜まり1-1を除くとむしろ上級器・須恵器が多い。第19図1~4は縄文後期前半の土器である。1は口縁部外面に複合鉈街文が施され、崎ヶ鼻2式に比定される。3は外反する口縁内面に渦巻き状の沈線を施している。上級器の邊には



第20図 1a層出土石器実測図 (1~4 : S=2/3、5~11 : S=1/3)

口径が胴部径より小さい5・6と口径の方が大きく長胴の7・8の二者が見られる。前者の外面は横方向を主とするハケメ調整が、後者は縦方向のハケメ調整が施される。11~14は須恵器である。12は大型の壺蓋の可能性も考えられるが、高台の作りなどから壺身と判断した。

## 2. 1a層出土石器 (第20図・写真図版37-2)

第20図1・2は石鏸で、1は黒曜石製、2は安山岩製である。2は周縁のみを加工し、素材面を大きく残す。3は楔形石器で、側縁に二次加工が施され刃部が作出されている。4は挿入石器である。刃部はほとんど未加工のまま使用されており、微細剥離痕が確認される。5は磨製石斧で、扁平な頭をそのまま使用している。石鏸は打欠石鏸が多い(8、9)が、切目石鏸(10)も少数見られる。凹石では、3個単位(第20図11)や、2個単位の凹み(非掲載品・整理番号46)のものがある。

## 第5章 1b層の遺構と遺物

### 第1節 1b層の遺構（第21図・写真図版9-1）

1b層の遺構は1c層上面で検出され、1b層を埋土とする。段丘の裾に沿って帯状に確認された三瓶太平山火山灰の範囲内に分布する。検出した遺構は土坑1基、石錐溜まり1箇所、土器溜まり2箇所、ピット17基である。1b層上面の火山灰の堆積状況は一様ではなく、薄く水平に堆積する部分と厚く堆積してブロック状となる部分とがあった。調査時に認定した遺構の中には、火山灰の塊を遺構と誤認したと考えられるものがあったので、平面形やセクションの明瞭なものののみを遺構として残した。遺構分布範囲のほぼ中央に土器溜まり1-2が広がり、土器溜まり1-2の南西には9基のピットが確認される。また、調査区の北端にも上器溜まり2が広がっており、土器溜まり2の中心部では焼土04、SK07、石錐溜まり1などの遺構が伴う。2箇所の土器溜まりの間に、ピット7基、土坑1基が確認された。

#### 1. 縄文時代後期の遺構

##### S K06（第22図）

C10グリッドの南東隅、調査区西端の段丘の斜面裾で検出した、南北に細長い土坑である。本土坑は周囲の層との区別が不明瞭であったため、遺構の検出は困難を伴った。断面形は南北端とともに傾斜が緩く、底面と側壁の境界ははっきりしたものではない。遺物は出土していないが、火山灰層から下層へ向けて掘り込まれていたことから縄文後期の遺構と判断した。

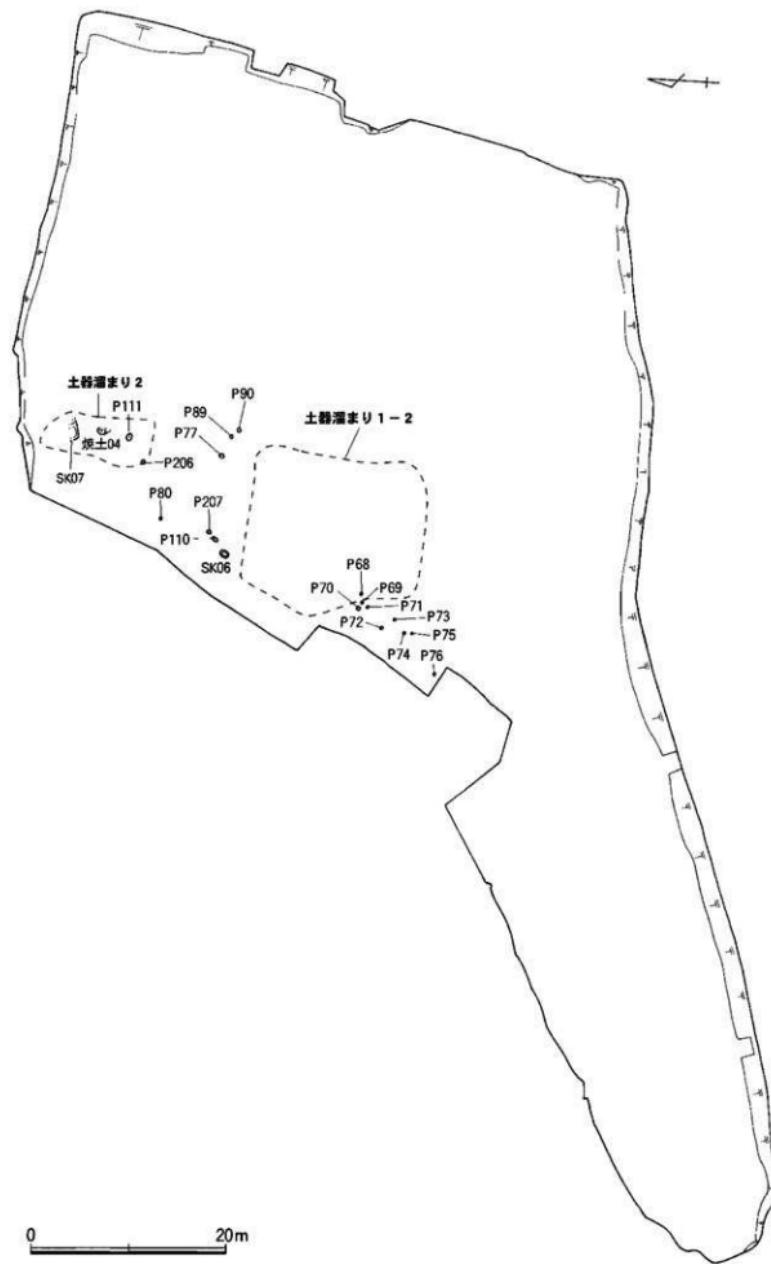
##### 土器溜まり1-2

###### i) 土器溜まり1-2の遺物出土状況（第23・24図）

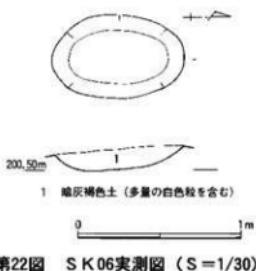
土器溜まり1-2はD11からE10グリッドにかけて広がる。土器溜まり1の土器の大部分は1b層から出土しており、これら1b層から出土したものを土器溜まり1-2とした。出土状況は、有文深鉢（第25図3・6・7・8）、バケツ形の鉢（第27図38・39・40・41）など墓地式に比定できる土器がトレンチ2内部とその周辺に集まっている。皿形浅鉢では第28図43・46など内面に明確な段をもつ個体がトレンチ2に近い位置から出土している。このほか深鉢（第25図4）、バケツ形の浅鉢（第27図37）もトレンチ2の周辺から出土している。一方、縁帶文成立期に位置づけられる屈曲形深鉢（第26図9・15・16・27・第29図57）や屈曲形浅鉢（第28図50・51）、ボール形浅鉢（第29図53・56）、屈曲形鉢（第29図58）、壺形鉢（第29図61）などは上器溜まりの北西に偏って分布している。さらに、器種ごとに出土場所がまとまる傾向も見られ、屈曲部外面に刻目をもつ文浅鉢（第28図47～51）はグリッド杭よりも南西から出土している。土器溜まり南西と北東から出土した土器が接合するケースが多く、土器が長距離を動いている様子がわかる。無文浅鉢は、端部に面をもつボール形の浅鉢1点（第33図110）のみトレンチ2から出土している。トレンチ2は墓地式の集中部であることから、個体も占く位置づけられる可能性がある。内面に稜をもつ皿形の浅鉢（第33図96・97・106）もトレンチ2の西側にまとまりを見せる。

###### ii) 土器溜まり1-2出土土器（第25～34図・写真図版38-2～48-1）

第25図は墓地式の有文深鉢である。口縁部を肥厚させ、上面に刻目（第25図5）や縄文をつける



第21図 1 b 層検出遺構配図 ( $S=1/500$ )



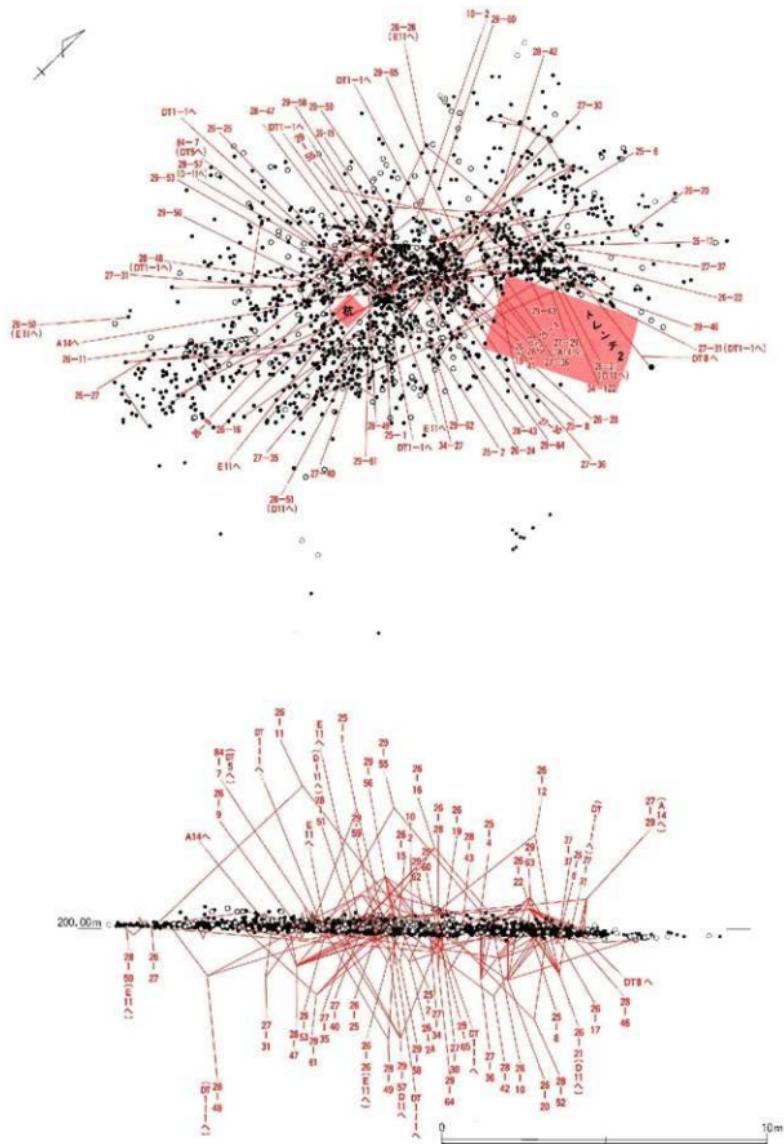
第22図 SK 06実測図 (S=1/30)

もの（7・8）などがある。頸部と胴部には区画文を基調とした文様が描かれる。8は、この土器群では少数派の単節L-R縞文が施されている。6は、口縁直下と胴部に横走する沈線2本が施され、頸部は無文のままである。第26図は、縁帶文成立期と見られる有文深鉢で、9・12~15・17~24には、大きく外反した口縁部上面に刻目が施される。頸胴部は無文のものが多く、わずかに沈線や刺突を施すもののが存在する。11は口縁部上面に2条の沈線が走り、間に連弧文が配される。全体がミガキで調整されており、これらの特徴は西部瀬戸内橋詰式に類似する。26・27は、外傾する口縁部外面を肥厚して文様を施している。27は、頸部に細密条痕が見られ、胴部には矩形文が描かれるなど、山陰東部の布勢式の特徴を持つ。胎上や色調が他の土器と明らかに異なることから、搬入品の可能性がある。第27図37~40はバケツ形有文鉢としたもので、いずれも幕地式に属する。口縁端部を肥厚させ、胴部には磨消縞文が施される。第28図41も傾きからバケツ形有文鉢と考えており、口縁下内面に段を有する。43~46は皿形を呈する浅鉢で、41と同様内面に段をもつ。47~51は有文浅鉢で、口縁部と胴部の境目が屈曲する。このうち、47・48は口縁端部から屈曲部までが長く直線的である。47は頭部に磨消縞文をもち、屈曲部外面には横走沈線に抉まれた刻目が施される。49~51は口縁端部から屈曲部までが短く、内側にくびれる。50は刻目の上に沈線が施され、口縁部が大きく外反するが、49や51のように、口縁端部が屈曲部よりも内側にくくするものも存在する。これらは、刻目の上下の横走沈線は見られない。第29図57はボール形有文浅鉢である。58~60は鉢形を呈し、口縁部外面に胴部と口縁部外面に縞文が施される。58は口縁が大きく外反し、一方で60は口縁部がすばまり壺に近い器形となる。

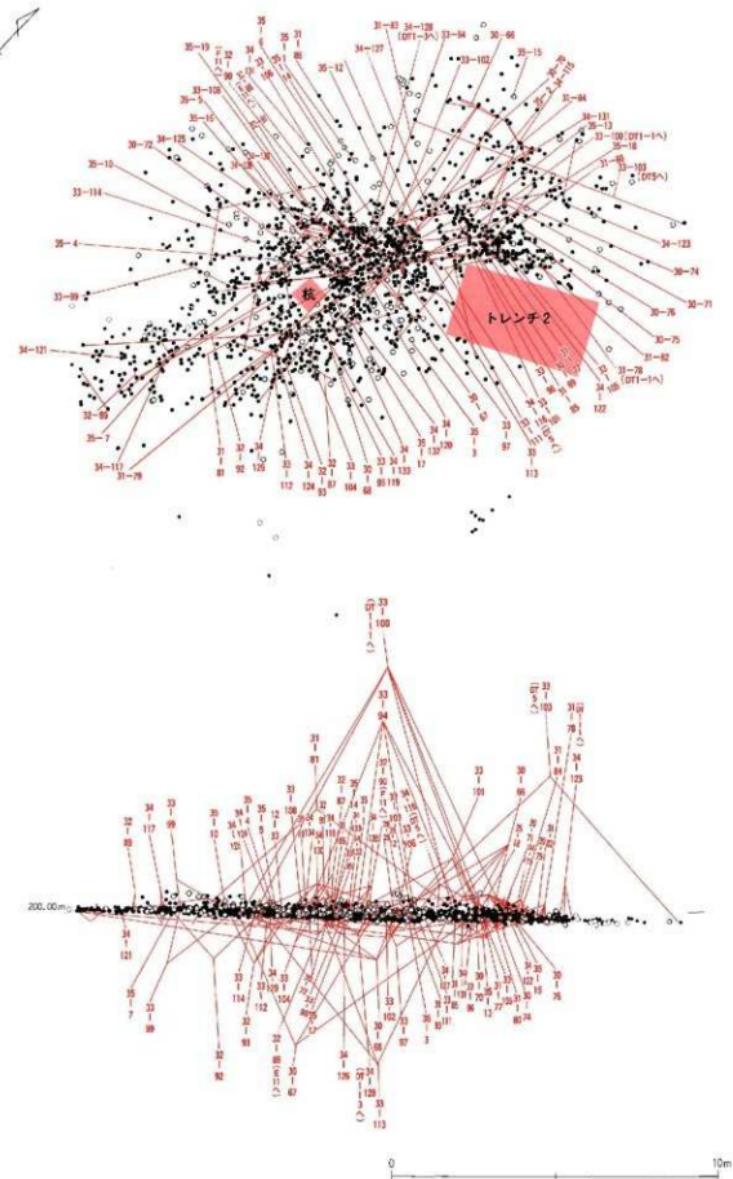
無文深鉢は口縁端部が面取りされるもの（第30図66~75）と面取りされないもの（76~第32図92）に大別できる。器形は頸部が外反するもの（66~71）、短くくびれるもの（72）、外傾する角度でまっすぐ伸びるもの（73~75）がある。この他に胴部が外傾し、頸部から口縁部は直立するもの（第31図82~第32図87）や内彎するもの（88~92）もある。前者の口縁形態は端部を面取りする物と結びつく傾向があり、後者は面取りしないものと親縁性をもつ。第33図94は胴部が浅く、内面に稜をもつ。刻目をもたない屈曲形の浅鉢（102~104）は屈曲部から口縁までが外傾する。ボール形浅鉢（110・111）や屈曲形鉢（112~114）は、胴部に対しても口縁部を狭く作るものが多い。土製品は、耳栓（第34図137）、土偶（138）等「第2の道具」と呼ばれる遺物が含まれていた。138は平成11年度試掘調査でT2から出土した。不明瞭ながら頭部・乳房の表現があり、胴部中央に正中線が見られる。側面形は起伏に乏しく、平板である。

### iii) 土器つまり1~2出土石器（第35図・写真図版48~2~49~1）

第35図1~5は石錐で、3・4は側縁を鋸歯状に加工する、鋸歯縁錐と呼ばれるものである。掲載したのはいずれも円基式であるが、少しがら平基式の非掲載品がある。6は安山岩製の石錐で、上端部を折断している。7~10は楔形石器である。9は実測図上端の半圓面より加筆している。14は釣針型石器である。急斜度な押圧剥離によって全面を加工しており、基部は双股状を呈する。15・16は磨製石斧で、刃部のみに研削が施され、基部付近には敲打痕が残る。19は磨石で、片面に顕著な摩耗が観察される。20は石皿で、縁辺に人為的な剥離が見られる。



第23図 土器溜まり 1-2 有文土器出土状況図 (S=1/150)



第24図 土器溜まり 1-2 無文土器・石器出土状況図 (S=1/150)

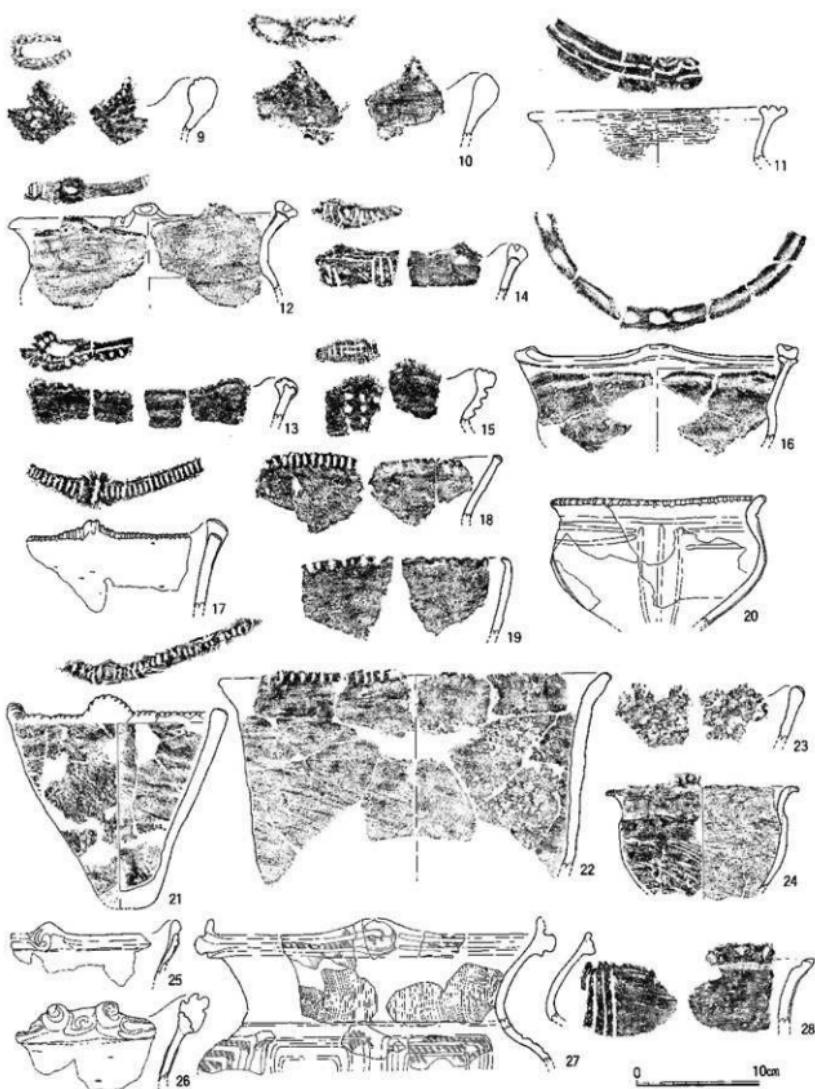


第25図 土器溜まり 1-2 出土土器実測図 (1) (S=1/4)

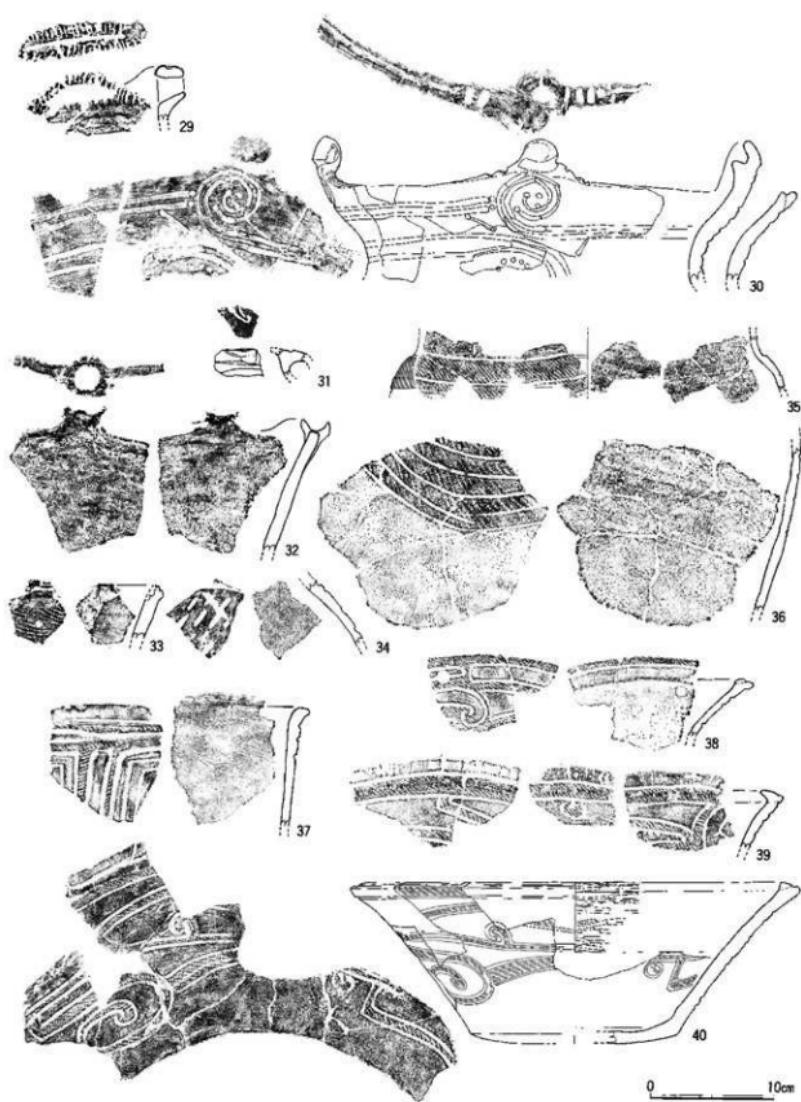
**土器溜まり 2****i) 土器溜まり 2 の遺物出土状況 (第36図)**

B11グリッドの東端、調査区北西隅で検出した土器溜まりである。検出時の土器の分布範囲は、南北に細長かった。しかし、水田造成の際に東の部分を削り取られているので、土器溜まり本来の分布範囲は現状よりも東にのびる。主として崎ヶ鼻式の土器が出土している。

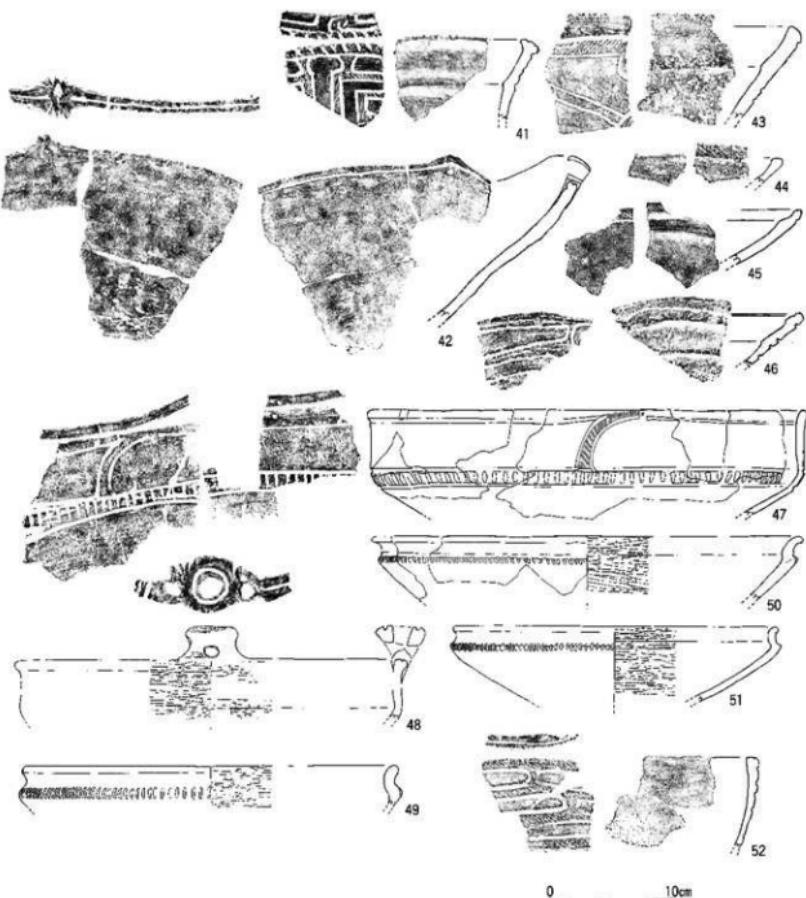
土器の出土位置の高さは199.5m～199.0mの間に集中し、焼土04の検出面もほぼ同じ高さである。当初は1a、1b、1cの各層毎に分けて取り上げ、それぞれ「土器溜まり 2-1」、「土器溜まり 2-2」、「土器溜まり 2-3」と呼称し別々に扱っていた。しかし、火山灰は途切れがちで、点でしか確認できない状態であったため、火山灰を見失って掘り下げすぎる事態が頻発し、上下層の遺物を正確に取り上げることができなかった。このため当土器溜まりを層位ごとに分けることを断念し、上層から下層まで一層の土器溜まりとして扱っている。



第26図 土器満まり 1 - 2 出土土器実測図 (2) (S = 1/4)

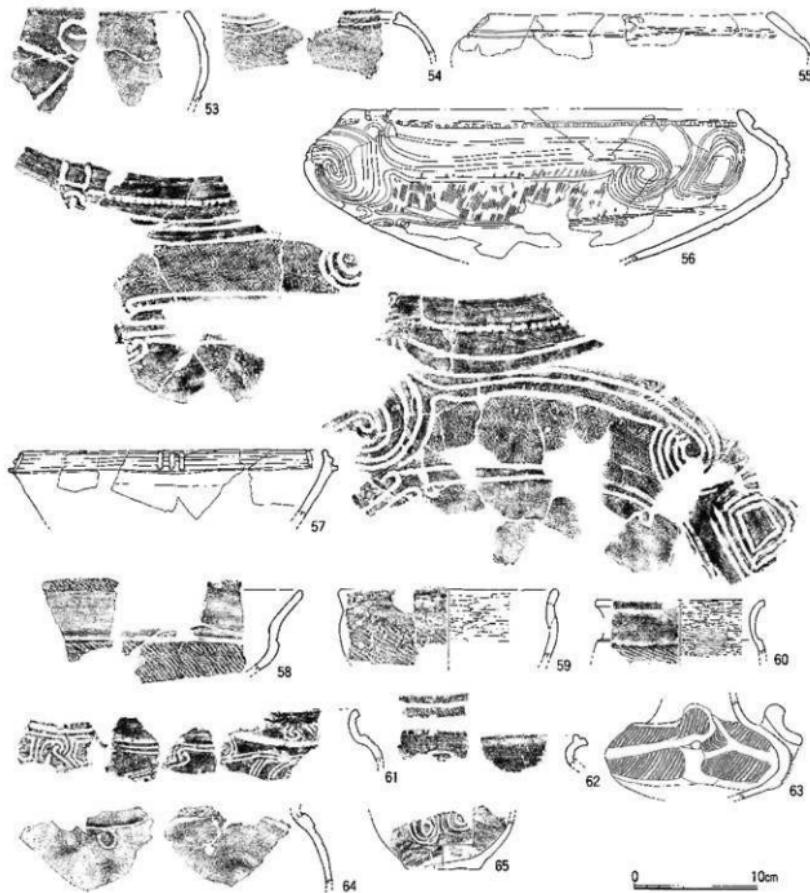


第27図 土器溜まり 1-2 出土土器実測図 (3) ( $S=1/4$ )



第28図 土器溜まり1-2出土土器実測図(4)(S=1/4)

上器溜まり直下では焼土04、SK07・09・12、石錐溜まり1が検出されている。また、土器溜まりを囲むようにピットが3穴見られる点が注意される。出土上器はほとんど接合しなかった。遺物の出土状況は、第39図11・17・19・25がまとまりを示す。出土位置から見てSK07に伴う可能性が高いが、SK07検出前に出土したので土器溜まり2に含めている。6・10・13・18・20・27や、22・26・第98図35（土器溜まり6との接合事例）等の小さなまとまりが見られる。それぞれ深鉢・浅鉢をバランス良く含んでいることから、これらを投棄の一小単位と見ることも可能かもしれない。石器は石錐が大半を占め、第40図1は土器集中部からやや離れてSK07付近から出土している。2は石錐溜まり1に伴う可能性がある。土偶（第39図30）の出土位置は土器の集中部からやや北へ離れており、他の遺物に比べて若干高いレベルで出土した。これは、土偶と同様に火山灰の検出レベルも他の場所に比べて高かったことから、当地の地形が高かったためと思われる。

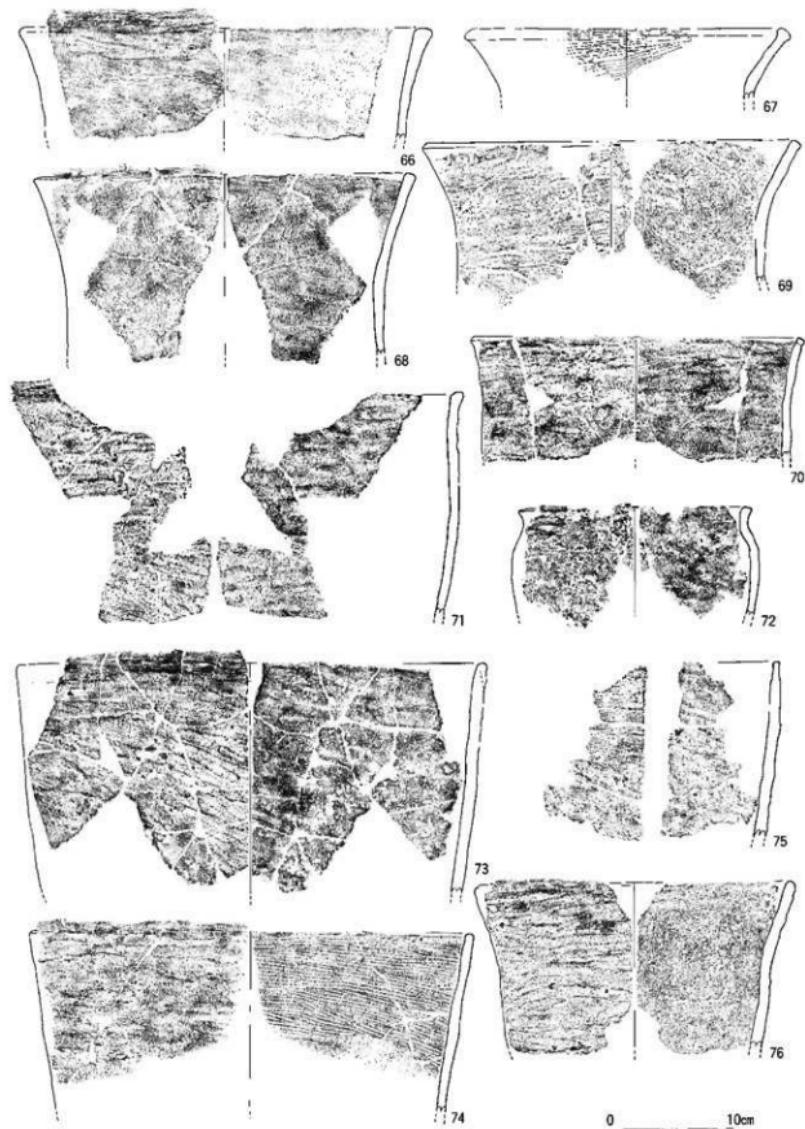


第29図 土器溜まり 1-2 出土土器実測図 (5) (S=1/4)

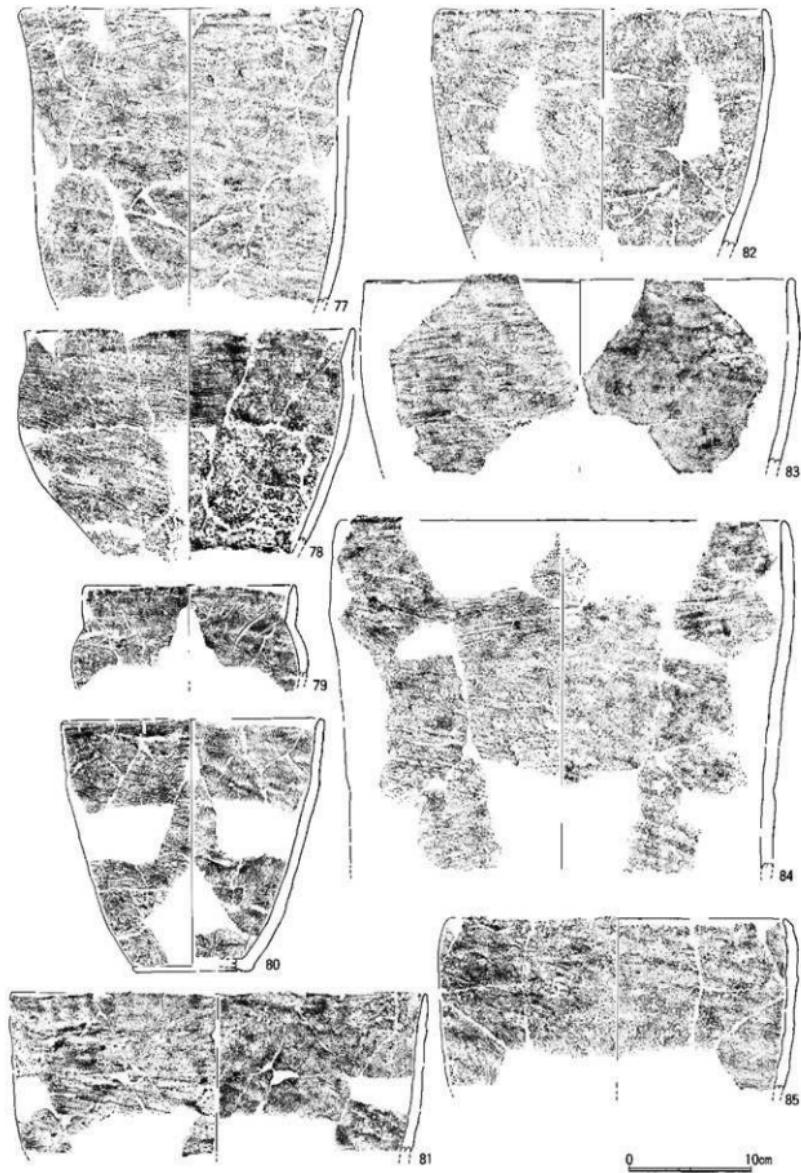
## ii) 土器溜まり 2周辺の遺構

## ・焼土04 (第37図・写真図版9-2)

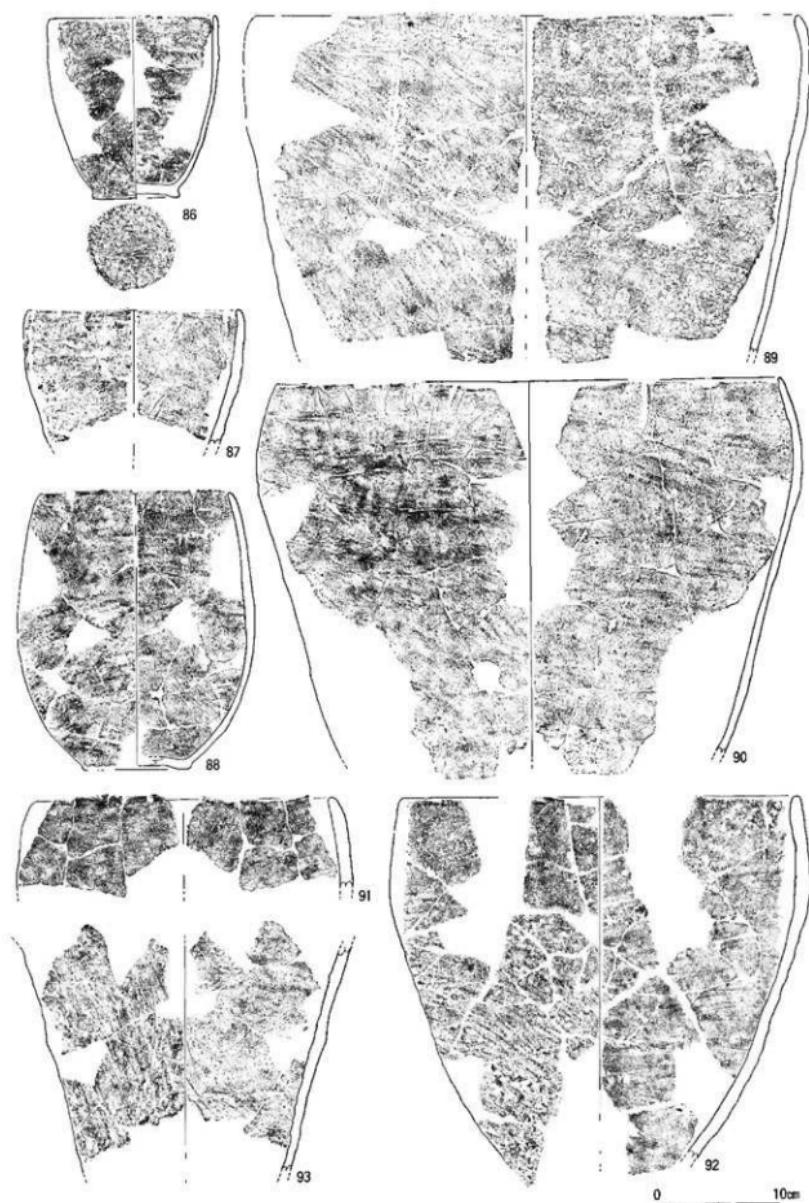
上器溜まりの中央に焼土04がある。東半分は水山造成時に削り取られ、かろうじて西半分が残っていた。調査時は、不規則な状態に土が焼けているように見えたが、セクション写真(写真図版9-2)では南のくらが最も被熱が強く、炉の中心と見られる。南端は木根によるくらが乱を受けて残っておらず、くらが受けなかった焼土の北半分のみの検出となった。火を使用した中心部からは外れるため、被熱・変色は北へ行くほど弱くなっている。北端には大きめの被熱した川原石が残る。

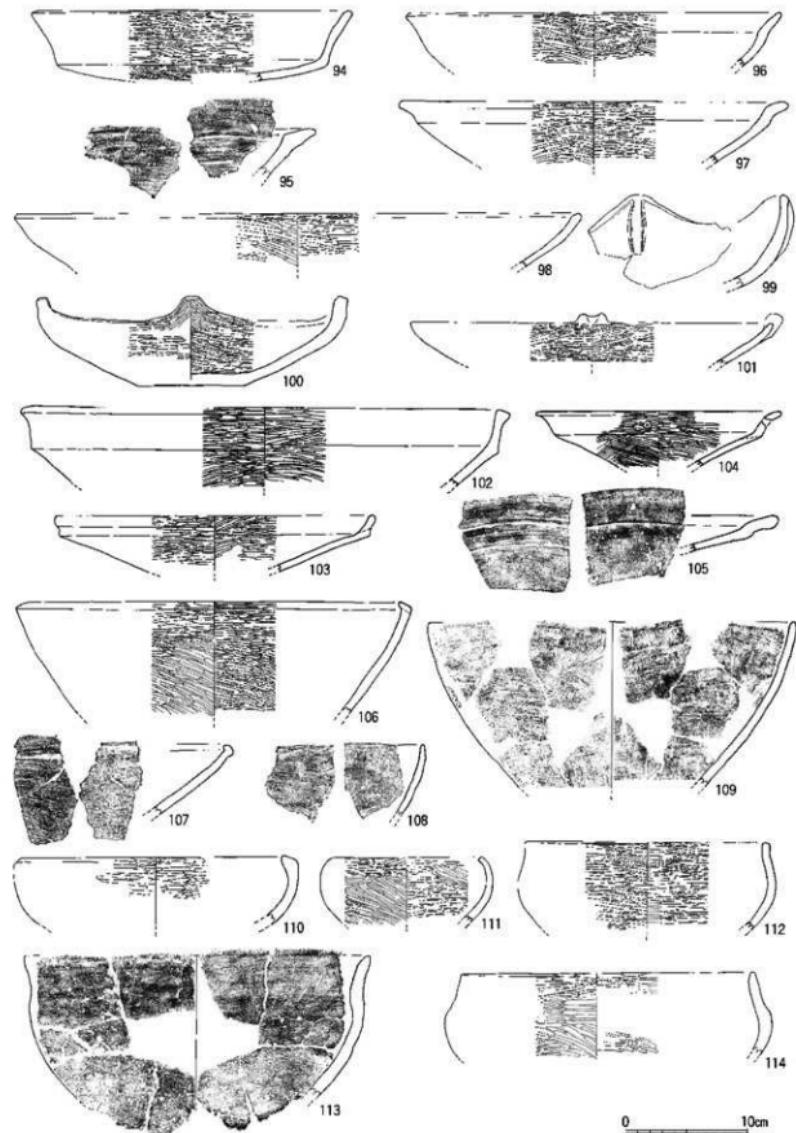


第30図 土器溜まり1-2出土土器実測図(6) (S=1/4)

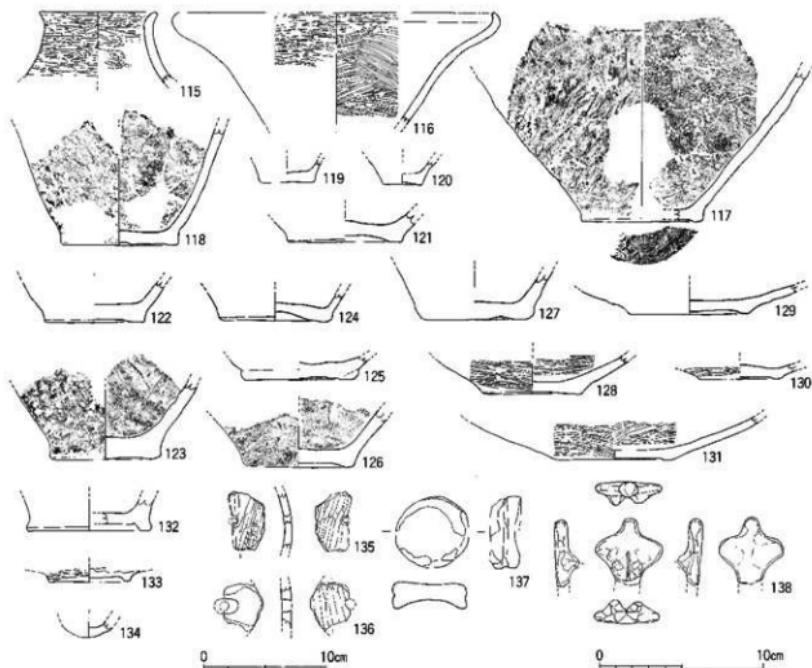


第31図 土器溜まり 1 - 2 出土土器実測図 (7) ( $S = 1/4$ )

第32図 土器溜まり 1-2 出土土器実測図 (8) ( $S = 1/4$ )



第33図 土器溜まり 1 - 2 出土土器実測図 (9) (S = 1/4)



第34図 土器溜まり1-2出土土器実測図(10) (115~136: S=1/4, 137~138: S=1/3)

・SK07(写真図版49-2(遺物))

土器溜まり2の北側で検出された。固化したセクションは上半分を削ってしまった後に作成したもので、土坑の本来の上場は残存している上場よりも上方にあったと推測される。東西方向が著しく長いこと、底面は東の方が一段低くなっていることから、本来二つの土坑であった可能性が高いが、セクションで埋土を明確に区別できなかったため一個の土坑として報告する。

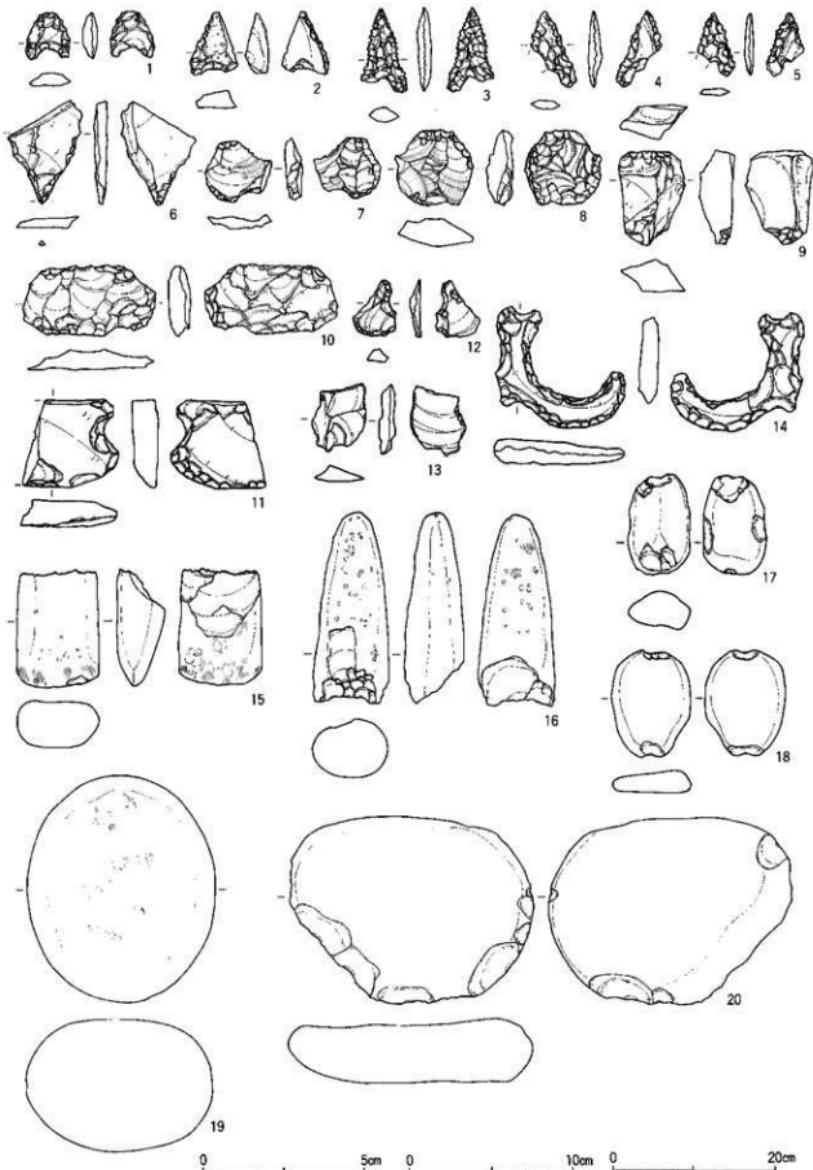
有文深鉢と無文浅鉢が1点ずつ、石の直下から出土しており、縄文時代後期の遺構と考えられる。

・石錐溜まり1(第38図・写真図版9-3(遺構)・49-3(遺物))

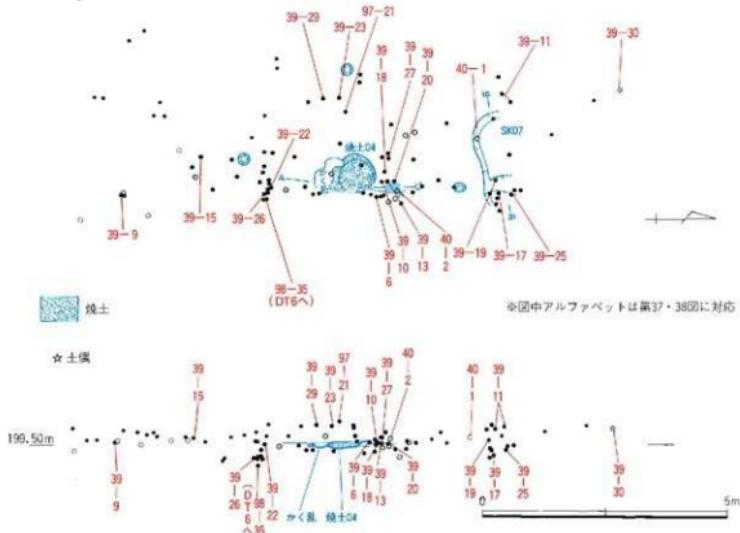
焼土04の南側から、13点の打欠石錐が集中して出土している。ほとんどが同じレベルから水平に並んで出土した。レベルは199.5mで、北に隣接する焼土04とはほぼ同じ高さである。ただし、東側の一部の資料は一段低いレベルから出土しており、斜めに傾いたもの、垂直に立つものなど、出土状態が不規則であった。これは、石錐溜まり及び焼土04のすぐ東が水山造成時に削り取られていることに起因するものと思われる。

iii) 土器溜まり2出土土器(第39図・写真図版50)

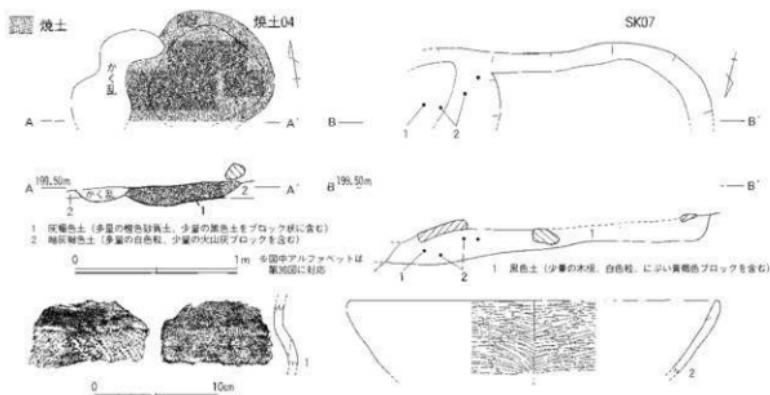
縄文中期の上器片が3点含まれている(第39図1~3)。1は撚糸文、3は縄文が施されており、前者は里木II・III式、後者は船元式と考えられる。4以下は縄文後期の土器である。有文深鉢のうち、5・6は肥厚した口縁部外側に縄文や横走沈線が施され、崎ヶ鼻1または2式に比定される。



第35図 土器溝まり 1-2 出土石器実測図  
(1~14: S=2/3, 15~19: S=1/3, 20: S=1/6)

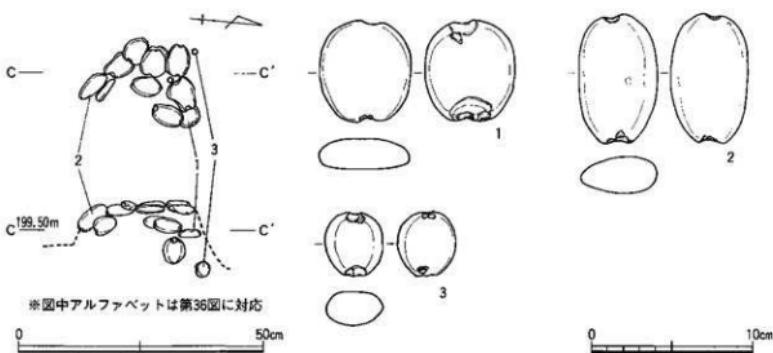


第36図 土器溜まり2遺物出土状況図 (S=1/100)

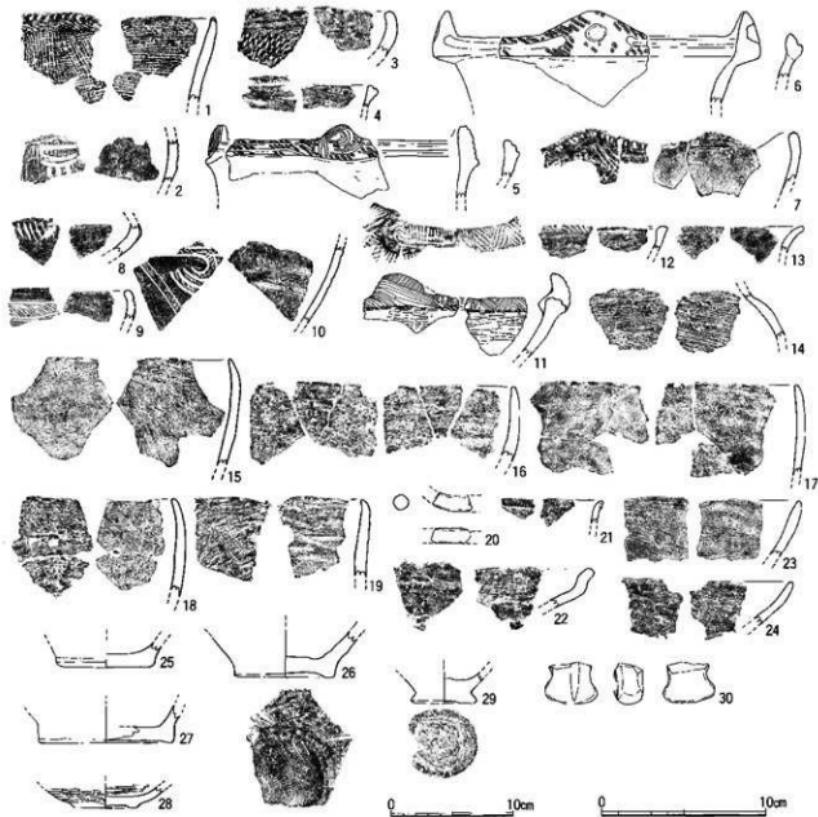


第37図 土器溜まり 2周辺の遺構（焼土04、SK 07）及び出土遺物実測図  
 （遺構：S=1/30、遺物：S=1/4）

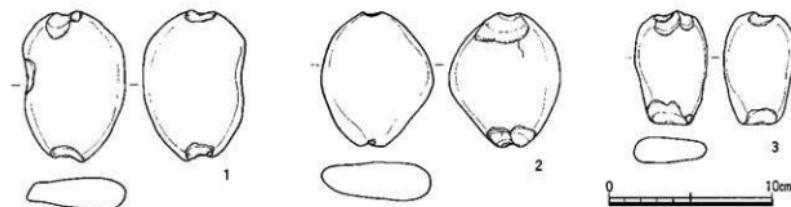
有文浅鉢は、胴部に刻目を持つもの（8）やボール形（9～11）が多い。11は口縁部上面に複合鋸歯文が施され、崎ヶ鼻2式に比定される。無文深鉢（15～19）は、口縁端部を先細りさせる物が多い。30は小型の分銅形十隅の下半身で、底みのある作りである。中央に正中線がつけられる。



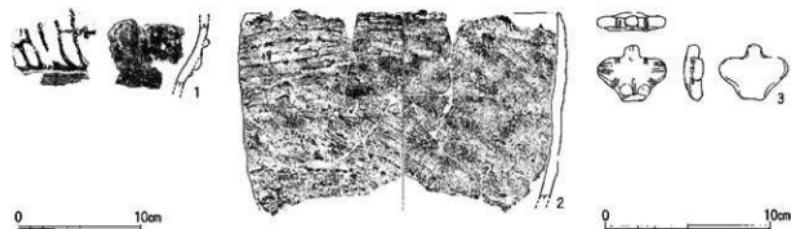
第38図 土器溜まり 2周辺の遺構（石錐溜まり 1）及び出土遺物実測図  
(遺構 : S = 1/10、遺物 : S = 1/3)



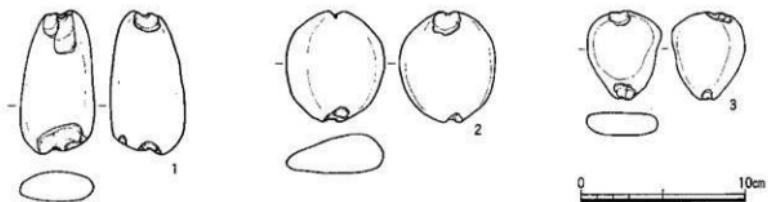
第39図 土器溜まり 2出土土器実測図 (1~29 : S = 1/4、30 : S = 1/3)



第40図 土器溜まり2出土石器実測図 (S=1/3)



第41図 1b層出土土器実測図 (1・2: S=1/4, 3: S=1/3)



第42図 1b層出土石器実測図 (S=1/3)

## iv) 土器溜まり2出土石器 (第40図・写真図版51-1)

閃緑岩製の打欠石錺が3点出土している。近隣より採取した円錺を素材として、長軸方向に加撃し整形している。第40図1は短軸方向にも調整が加えられている。

## 第2節 1b層の遺物

## 1. 1b層出土土器 (第41図・写真図版51-2)

縄文中期の土器が少量含まれる。第41図1はC11グリッドから出土した。突帯をもつ船元Ⅲ式の深鉢の口縁部から頭部である。同グリッドの1c層から縄文中期の土器がまとまって出土しているので、その一部が混入したと見られる。土偶(3)はE10グリッドから出土した。同グリッドは土器溜まり1の縁辺部に当たり、この土偶も土器溜まりに伴う遺物の可能性が高い。頭部が明瞭に表現され、欠損しているが乳房の跡も認められる。乳房以下の下半身は失われている。頭部、腕部、脇部、頸部に2条1単位の文様が施されている。中央には正中線も見られる。

## 2. 1b層出土石器 (第42図・写真図版51-3)

第42図1~3は打欠石錺である。いずれも円錺の長軸上に加撃されている。ただし2の両端は、片面を打欠、片面に切目を入れて製作する。

## 第6章 1c層の遺構と遺物

### 第1節 1c層の遺構（第43図）

1c層の遺構は、1層上面で検出され、1c層を埋土とする。土坑6基、配石遺構1基、ピット23基、土器溜まり1箇所を検出した。三瓶太平山火山灰は段丘の裾に沿って帶状に確認されており、1c層の遺構もこの範囲内に分布する。遺構分布範囲の南よりのD11グリッドに土器溜まり1-3が広がり、直下にはピット群が検出されている。ただし、建物の柱列のような並びは確認できなかつた。土器溜まり1-3の北東（C11グリッド南東部）にはSK08・10・11など土坑がまとまっている。さらに北には配石遺構03が確認される。上記の遺構分布と対応するようにD11・C11の両グリッドの包含層からは縄文中期の土器が出土しており、この場所が縄文中期における集落の中心であったと推定される。ただし土器溜まりは後期が中心である。これより北にも土坑2基やピット5基が点在している。

#### 1. 縄文時代前期～後期の遺構

##### SK08（第44図・写真図版10-1（遺構）・51-4（遺物））

C12グリッドの南西隅、土器溜まり1-3から5m北東へ離れた位置で確認された。平面形は円形で、断面形は、東側の側壁がわずかに外傾しながら急角度で立ち上がる、円筒形の深い上坑である。西半分は側壁の立ち上がりが緩く、上面近くでは埋土と周囲の土との区別が不明瞭であった。このため、検出時には西側の輪郭を確定するのが困難であった。土坑内には5個の石が残っており、中央の石が最も大きく扁平である。この大石の直下に2個の石があって、これら3個の扁平な石が縦一列に重なる状態であった。

遺物は、縄文中期の深鉢の口縁部と底部（第44図1・2）が、大石の下から出土している。1は外面に撚糸文が施され、里木II・III式古～中段階に比定される。掲載遺物以外では石錐があり、大石のわずかにドのレベルから出土している（計測番号676）。

##### SK09（第45図）

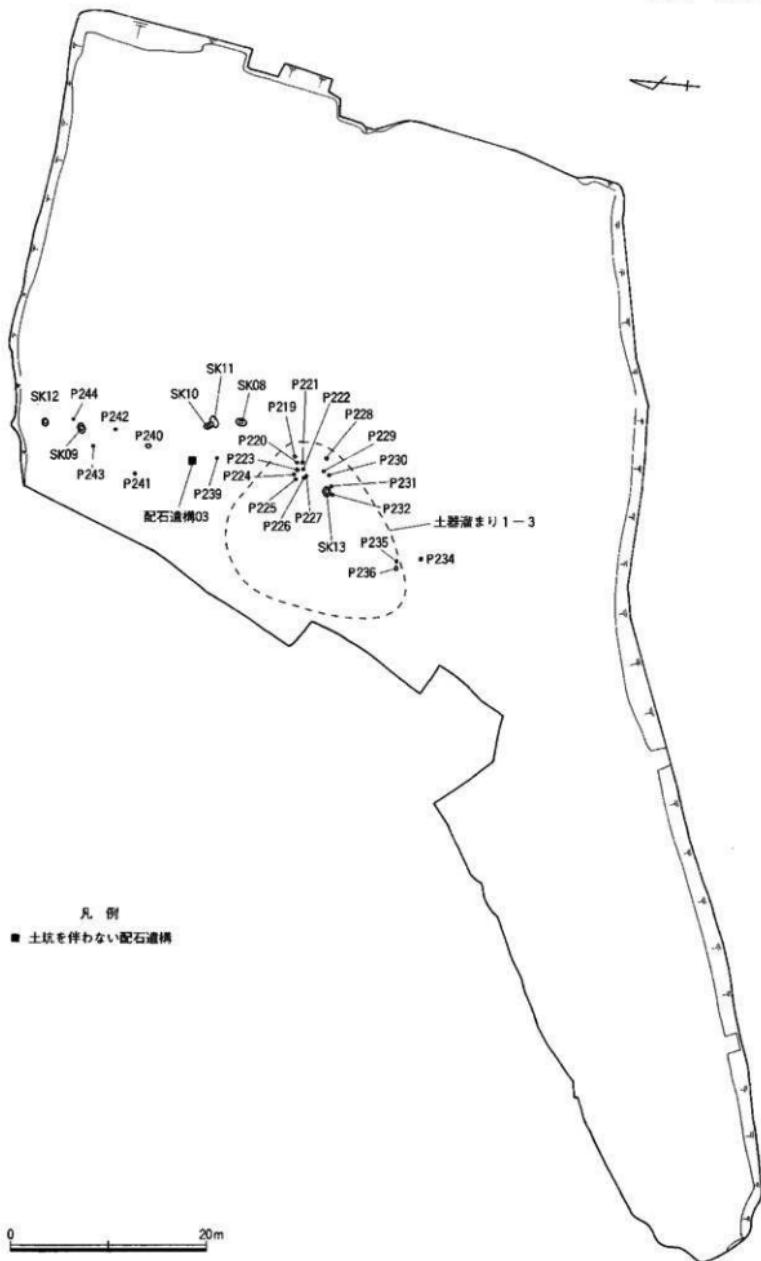
SK09はB11グリッド東端から検出された。土器溜まり2（1b層）の直下に当たる。平面形・断面形ともに不明瞭であった。浅すぎて断面形も不明瞭であることから、木根等を誤認している可能性もある。遺物は出土していないが、検出された層位から縄文時代後期以前に比定される。

##### SK10・11（第46図・写真図版10-2（遺構）・51-4（遺物））

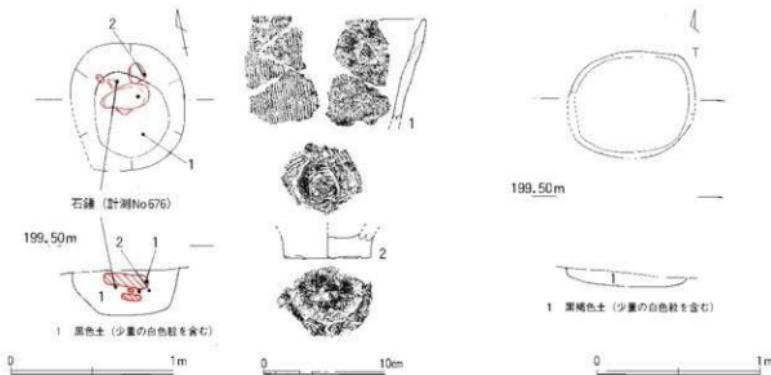
S K10はC11グリッド西端、SK08から2m北で検出された。平面形は南端が間延びして不整楕円形を呈し、断面形は北側の側壁が垂直に立ち上がり、中程で部分的に袋状を呈する。

遺物は、縄文中期の土器の口縁部（第46図1）が埋土中から、胴部（2）が検出面と中位から出土している。1はキャリバー形の深鉢口縁部で、沈線内に連続的に刺突を施す。口縁はわずかに波打つ。里木II・III式中段階に位置づけられる。2の外面には撚糸文がつけられており、里木II・III式古～中段階に比定される。

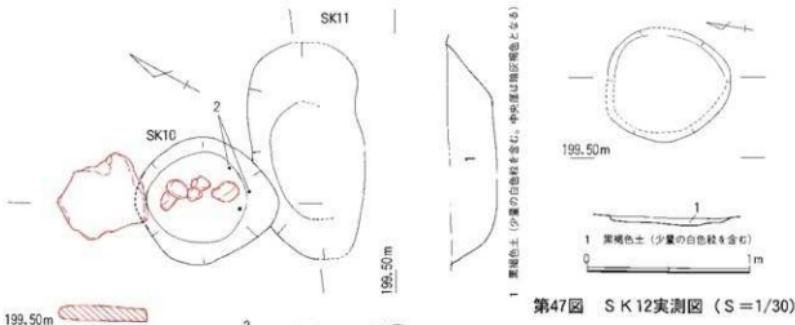
S K11はSK10の南にあってSK10に切られている、長楕円形の土坑である。断面形は側壁の立ち上がりが緩やかで、すり鉢状を呈する。長軸はおむね東西方向に向く。SK11の内部には火山



第43図 1c層検出構造配置図 ( $S = 1/500$ )

第44図 SK08及び出土物実測図  
(遺構: S=1/30、遺物: S=1/4)

第45図 SK09実測図 (S=1/30)



第45図 SK09実測図 (S=1/30)

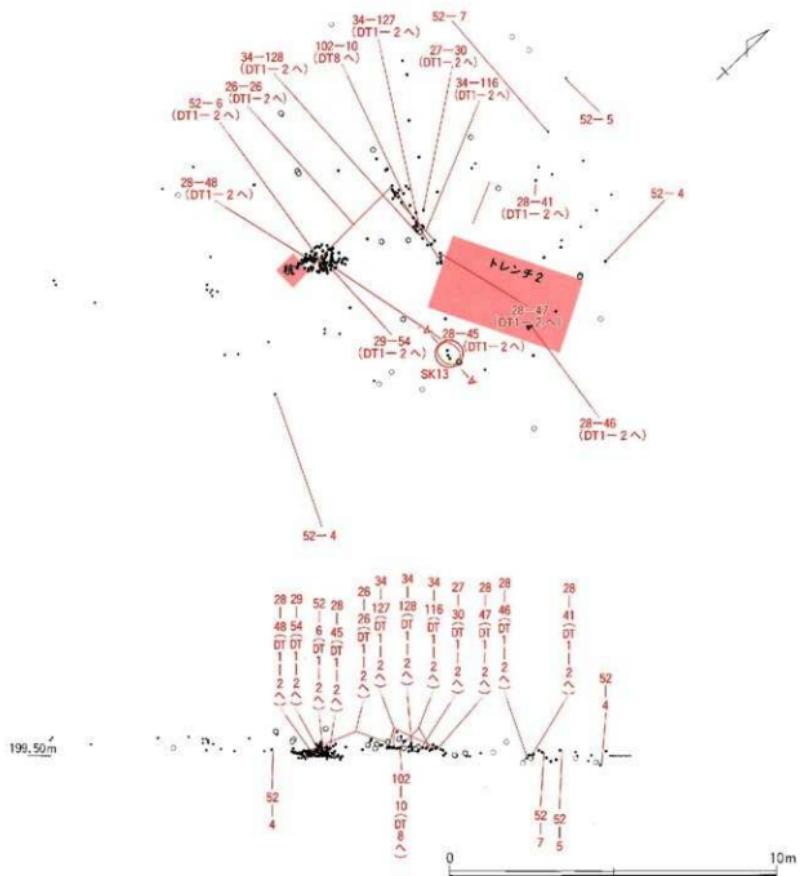
第46図 SK10・11及びSK10出土物実測図  
(遺構: S=1/30、遺物: S=1/4)

第47図 SK12実測図 (S=1/30)

第49図 P226出土物実測図 (S=1/4)

第48図 配石造構03実測図 (S=1/30)

灰が濃厚に認められ、黒色土を間に挟んで25cm上方でも火山灰の層が広範囲で確認されている。後者が三瓶太平山火山灰と見られることから、下層に当たるSK11内の火山灰は三瓶角井降下火山灰と推定される。よって、SK11は角井火山灰に先行するので縄文前期以前にさかのほる可能性がある。なお、SK10の埋土内には火山灰はほとんど含まれていない。



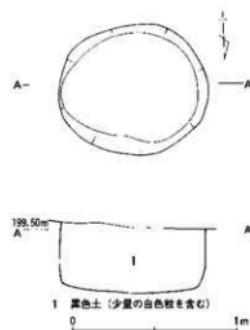
第50図 土器溜まり1-3 遺物出土状況図 (S=1/150)

**SK12 (第47図)**

SK12はA11グリッド南東隅から検出された。土器溜まり2（1b層）の直下に当たる。平面形・断面形ともに不明瞭であったため、写真撮影時と調査後とで輪郭が変わっている。非常に浅く、断面形も不明瞭なため、木根等を誤認している恐れもある。遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代後期以前と考えられる。

**配石遺構03 (第48図・写真図版10-3)**

S K10の北西で検出した配石遺構である。石の下に土坑が伴っていた可能性は残るが、石の下と周囲との土質の違いは認められず、上坑は確認できなかった。配石の平面形は東にふくらむ弧状である。使われているのは20cm以上の大きめの石と、15cm以下の小さい石であった。遺物は出土して



第51図 土器溜まり 1-3  
周辺の遺構 (SK13)  
実測図 ( $S=1/30$ )

いないが、検出された層位から縄文時代後期以前に比定される。  
**土器溜まり 1-3**

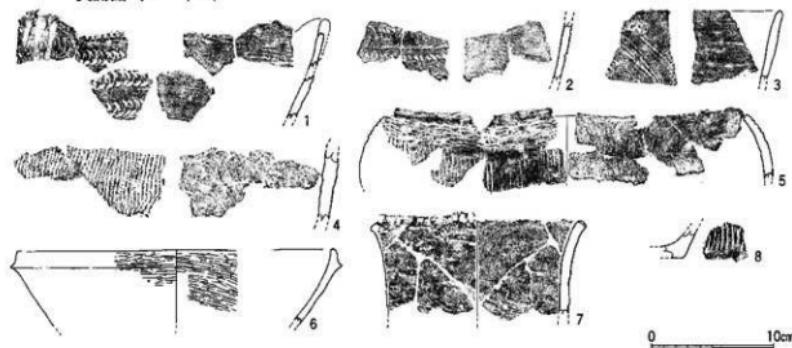
i) 土器溜まり 1-3 の遺物出土状況 (第50図)

D11からE10グリッドにかけて、上器溜まり1-1・1-2の直下に広がる土器溜まりで、時期は縄文前期から後期にわたっている。上層の土器溜まり 1-2 と接合する遺物が多い。グリッド杭を除去する際にグリッド杭に埋まっている遺物のほとんどを点取り上げたため、杭の部分だけドットの密度が高く見えている。

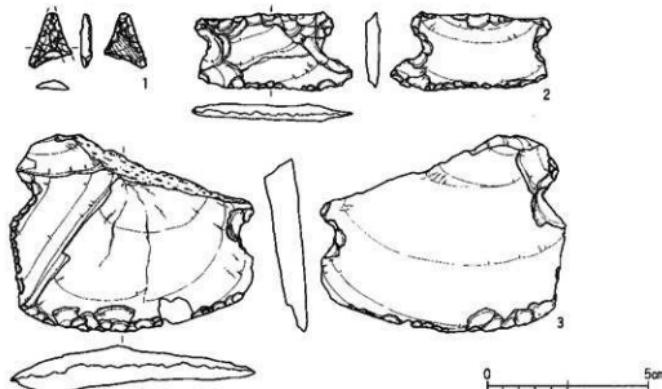
ii) 土器溜まり 1-3 周辺の遺構

・ SK13 (第51図)

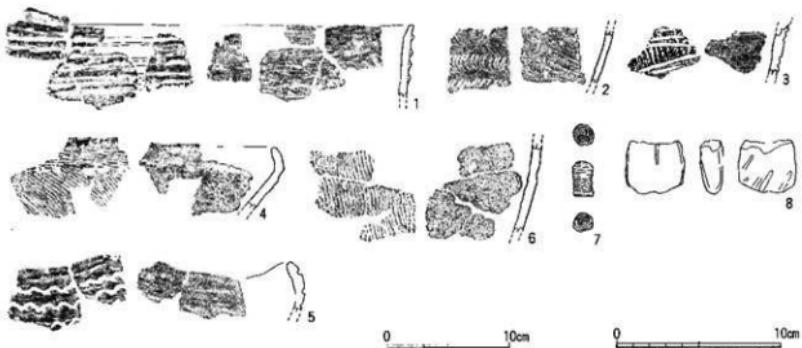
D11グリッドの南端、土器溜まり 1-3 の上器分布範囲の南



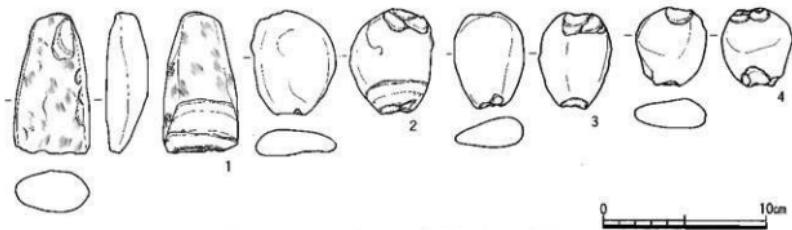
第52図 土器溜まり 1-3 出土土器実測図 ( $S=1/4$ )



第53図 土器溜まり 1-3 出土石器実測図 ( $S=2/3$ )



第54図 1c層出土土器実測図 (1~6 : S=1/4, 7・8 : S=1/3)



第55図 1c層出土石器実測図 (S=1/3)

端近くで検出された。平面形は円形で、断面形は垂直に立ち上がる側壁と平らな底面をもつ、円筒形の深い土坑である。

無文粗製深鉢の口縁部と胸部が突出していること、三瓶太平山火山灰の下位にあることから、縄文時代後期の土坑と推定される。

#### ・ビット群（第43・49図）

D11グリッドの南東より、土器溜まり1~3の直下では、14基のビットが群集して確認された。ただし、配置は不規則で、建物の柱列を復原することはできなかった。ビットはいずれも平面凹形であった。その中の1基（ビット226）からは墓地式（第49図1・写真図版51-4）の土器片が出土していることから、これらのビット群は縄文後期前葉の所産と考えられる。

#### iii) 土器溜まり1~3出土土器（第52図・写真図版52-1）

縄文前期の土器（第52図1~3）や中期の土器（4・5）が少量出土した。前期、中期の縄文土器を含む点は1c層出土遺物（主として北隣のC11グリッドから出土）の傾向と同じである。

第52図1・2は縄文前期の土器である。1が波状口縁であること、ロッキングによる爪形文が施されていることから北白川下層1b式に位置づけられる。3は無文深鉢であるが、外側が念入りに条痕調整されて器壁が平滑になっており、後期の無文粗製深鉢とは異質である。4・5は縄文時代中期の上器である。4は撚糸文が施されていることから卑木II・III式古～中段階、5は器面が条痕調整され、形骸化した波状文を施しているので、里木II・III式新段階に位置づけられる。6は縄

文後期のポール形浅鉢、7は口縁端部上面に刻目をもつ後期前葉の有文深鉢である。第52・53図では前期・中期の土器を優先的に図化したが、土器溜まりから実際に出土した量は後期の土器が多い。

#### iv) 土器溜まり1-3出土石器（第53図・写真図版52-2）

第53図1は黒曜石製の石鏃で、先端と基部を欠損している。2・3はサヌカイト製挿入石器である。両者とも、大型の横長剥片を素材としており、2は打点部にも加工を施している。上層の土器溜まり1-1・1-2の資料と比べて大型であり、時期的な変化が認められる。

## 第2節 1c層の遺物

### 1. 1c層出土土器（第54図・写真図版53-1）

ほとんどが上器溜まり1-3の北に隣接するC11グリッドからの出土遺物で、前期、中期から後期までの縄文土器を含む。第54図1は口縁部に4条の微隆帯が貼り付けられており、轟式の深鉢口縁部と推測される。2は爪形文が施される前期の上器で、北白川下層I b式に位置づけられる。3は縄文地に竹管状工具による文様が描かれ、船元III式に比定される。4・6は外間に撚糸文がつけられており、里木II・III式古～中段階に位置づけられる。5は地文が見られないが、キャリバー形口縁であることと、竹管状工具による波状文が描かれていることから、里木II・III式に比定される。7は耳栓か。上面と下面に渦巻文が施される。土偶（8）は土器溜まり1-3に近接するE10グリッドからの出土であり、土器溜まり1-3に伴う可能性もある。上器溜まり1-3は縄文前期から後期までの遺物が出土しているため、土偶の時期は限定し難いが、後期の土器は、前葉にはほぼ限られるため、後期前葉に帰属する可能性が高い。背面脛部に、妊娠線の表現とみられる斜行沈線が認められる。

### 2. 1c層出土石器（第55図・写真図版53-2）

第55図1は玄武岩製の磨製石斧で刃部を欠損している。全面が研磨されている。2～4は打欠石錘で、在地の石を利用して、長軸上に剥離整形を施す。

## 第7章 1層の遺構と遺物

### 第1節 1層の遺構（第56図）

三瓶太平山火山灰との上下関係が判明しない遺構・遺物を本章で報告する。調査区東半は水田造成時の削平のため、地表付近の浅い遺構や遺物の多くが失われている。竪穴住居2棟、粘土床1箇所、硬化面6箇所、土器埋設造構3基、石錐溜まり2箇所、石圓か状造構2箇所、炭溜まり1箇所、配石造構14箇所、焼土12箇所、上坑17基、流路跡3箇所、ピット38基、上器溜まり6箇所が確認された。

土器溜まりはすべて縄文後期前半に属している。土器溜まり3の直下には硬化面1や焼土06・07、石圓か状造構1が伴う。上器溜まり6・7の直下には粘土床や硬化面2~4、配石造構08、焼土08・09・10、石圓か状造構2、粘土ピットが確認され、周辺には配石造構5・6・9・11、SK15・16・21が集中的に検出されている。SK01の床面には焼土があり、周辺に配石造構04・15・17やSK17・22・23・26が確認されている。上器溜まり8の直下には焼土14・15が上に重層する形で検出された。土器溜まり4の北にも土坑が1基確認されている。このように、縄文後期の土器溜まりに伴う遺構が多いのが特徴で、ピットの分布も同様の傾向を示す。遺構の種別では、土器溜まり直下には焼上・硬化面・石圓か状造構が、上器溜まり周辺には配石造構や土坑が分布する傾向が認められる。

調査区南端では、SK02の周辺に配石造構10・12が、焼土14と硬化面5・6の周辺に炭溜まり4、配石造構14・16、SK30が伴って検出されている。配石造構の下部上坑は、縄文後期の楕円形のタイプではなく、平面円形に限られる。配石造構10からは縄文晚期の土器が、SK02や硬化面5・6付近からは古墳時代後期の土師器や須恵器が比較的多く出土しており、この場所が縄文晚期の埋葬場所や、古墳後期の生活場所として利用されたことをうかがわせる。また、1a層で検出されたものと含めると、炭溜まりがこの区域に集中する点が注意される。

#### 1. 縄文時代中期の遺構

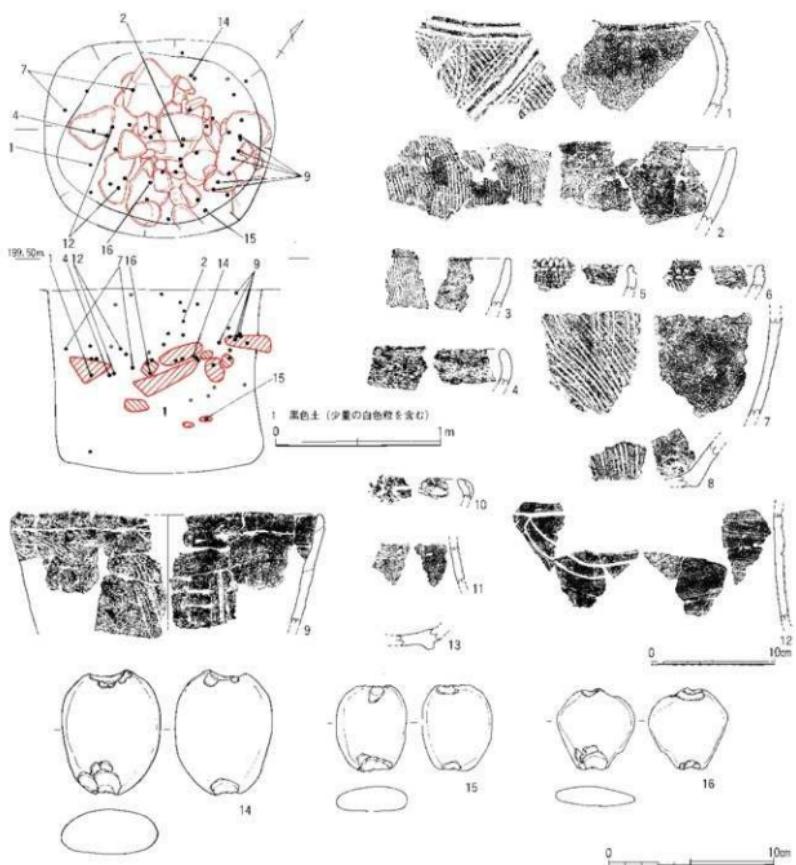
##### SK14（第57図・写真図版11（遺構）・53-3・54-1（遺物））

D12グリッドの北西隅、SK01の4m北で検出された、円筒形の深い土坑である。SK08・10など、1c層を埋土とする縄文中期の上坑（第6章参照）のすぐ南に位置しており、これらが一連の土坑群であった可能性がある。平面形は不整円形で、断面形は側壁が一部袋状になりながらほぼ垂直に切り立つ。当初は石が集中する部分を上坑の底面と認識していたが、半裁の過程で、埋土の黒色土がより深くまで入り込んでいることが判明した。石は不規則に積み重なった状態で、土坑の中位から集中的に出土した。大きめの平たい石はいずれも土坑中央へ傾いた状態であり、上方から落ち込んできた状態と推定される。いずれの石も土坑底面から40cm浮いた位置から出土しているので、土が流入した後に石が落ち込んできたことがわかる。出土遺物は、いずれも石集中部の直上から出土しており、石が落ち込んだと同時に、あるいはその後に土坑内に流入したと推定できる。固化した遺物を見る限りでも、複数個体分の口縁部破片を含んでいる。

出土した上器のうち、時期が判明するもののはほとんどが里木Ⅱ・Ⅲ式で（第57図2~8・11）、やや古い船元Ⅲ式（1）を少量含む。これ以外の土器もおおむね中期と見られる。1は縄文地に突



第56図 1層検出遺構配置図 (S=1/500)



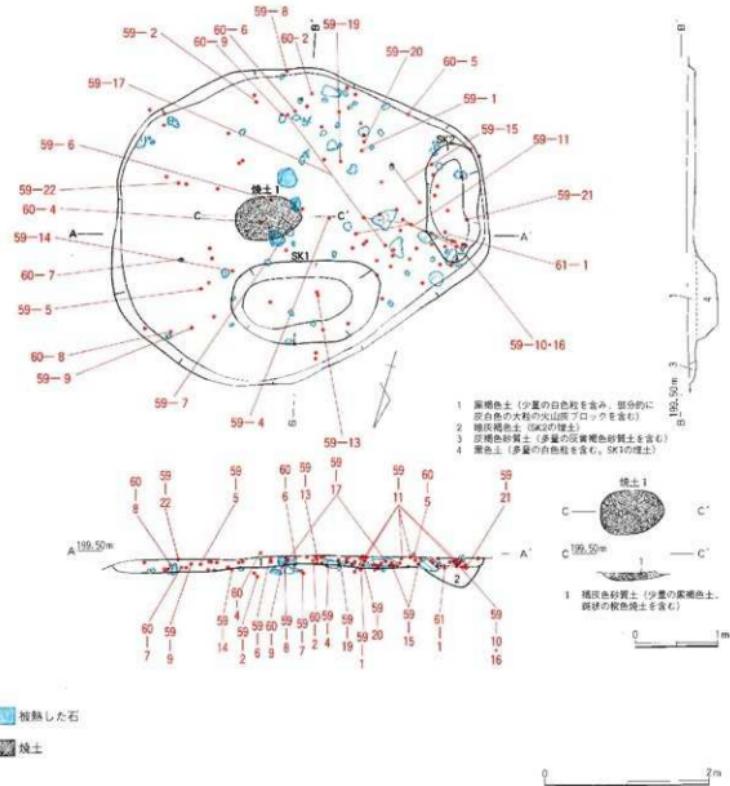
第57図 SK 14及び出土遺物実測図  
(遺構 : S = 1/30、遺物 1~13 : S = 1/4、14~16 : S = 1/3)

帶が貼り付けられ、ヘラ描き沈線による直線文・弧状文を描く。2~4の外面には撲糸文が、5~8外表面には条痕文が施される。口縁部は内彎するもの（1・4・5・6・10）、まっすぐ外傾するもの（2・3・9）の両者がある。外表面の底部近くまで条痕が及ぶ（8）。9は粘土の接合痕が顕著に残る。石器では、石錘3点が、石とほぼ同じ高さか（14・16）、下方（15）から出土している。

## 2. 繪文時代後期の遺構

### S I 01 (第58図・写真図版12~14)

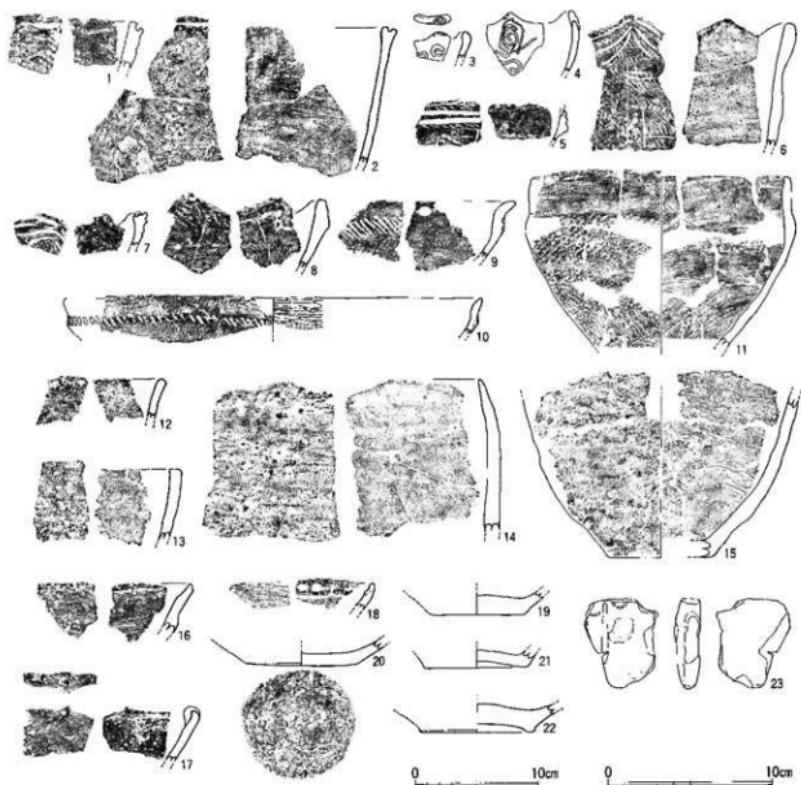
D12グリッドの南東隅、土器溜まり1の東で検出した竪穴住居跡である。平面形は東西方向がやや長い不整円形で、東西方向4.7m、南北方向4.0mを測る。断面形は東端、南端、西端、北端とも



第58図 S I 01実測図 (S=1/60)

立ち上がり角度が緩い。火山灰の分布範囲からは離れているが、火山灰を多量に含む暗灰褐色土（1b層）が住居内に堆積していたので、火山灰降下前にS I 01が廃絶されていることがわかる。S I 01埋土の上にはピット6基が掘り込まれていた。これらはS I 01廃絶と火山灰降下の後に掘り込まれており、埋土の黒色土は1a層である。床面精査時、柱穴は検出されなかったが、床面中央で焼上が確認されたことから、堅穴住居跡と判断した。ただし硬化面は確認できなかった。

住居床面の北側、西側に細長い上坑が掘り込まれている。それぞれS I 01-S K 1及びS I 01-S K 2として、セクションでS I 01との関係を観察したが、埋土は同質で前後関係を確定できなかつた。出土遺物は崎ヶ鼻2式に属しており、縄文後期の住居である。床面から採取された炭化物は放射性炭素年代測定で3770±40B.P.の数値を示しており、同様にS K 1出土土器から採取された炭化物の年代は、3750±40B.P.の数値を示している。これらの測定年代は、出土土器や、S I 01が三瓶太平山火山（3600B.P.～3700B.P.ころ）にバッカされていてこととも矛盾しない。

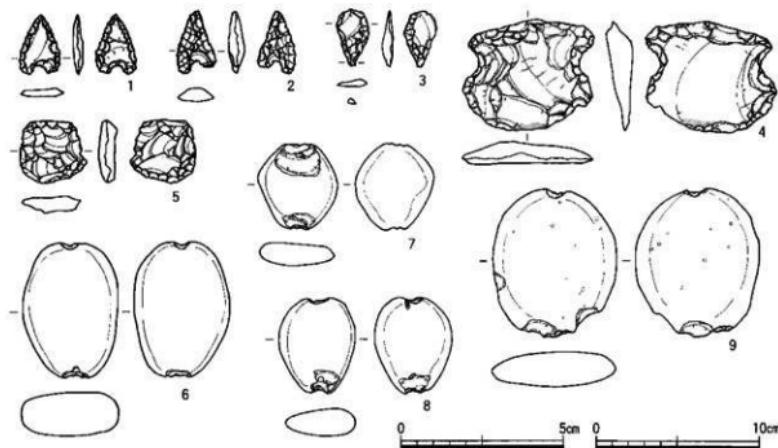


第59図 S I 01出土土器実測図 (1~22: S=1/4, 23: S=1/3)

S I 01を検出できたのが床面上方10cmの高さであった。S I 01出土とした遺物は、ほとんどが床面からわずかに浮いて出土した。床面を下向るレベルで出土した遺物も若干あり、遺物の沈下が生じているようである。S I 01の西より、SK 1とSK 2の間から集中的に土器が出土している。

#### 1) S I 01出土土器 (第59図・写真図版54-2)

第59図1~8は有文深鉢である。1・2の口縁部は、上面に沈線が1条施される。口縁部を肥厚させて文様带とするもの(5)は少なく、口縁を屈曲させて装饰性を高めているものが多い(3・4・6・7・8)。9・10は屈山形の浅鉢で、2点とも、胴部側から口縁側へ向けての刺突により刻目をついている。同じ器種で無文の16も、有文の2点と同様に胴部のくびれ方が弱く、直線に近い断面形である。11は屈曲形の鉢で、頸部から口縫端部にかけてまっすぐ立ち上がる。口縫端部には繩文が見られない。無文深鉢は、口縫端部が丸いもの(12)、面取りされるもの(13)、先細るもの(14)とバリエーションが見られるが、量的には丸いタイプと先細るタイプが多い。深鉢の底部(15)は被熱が著しく、器壁の外側から約4mmの範囲が赤変している。底面付近では、外側の荒



第60図 S I 01出土石器実測図 (1~5 : S=2/3, 6~9 : S=1/3)

れが顯著で、これも著しい被熱によるものと見られる。断面には黒いタール状の物質が付着する。18は口縁端部内面を肥厚させた上に、指頭圧痕を連続的に付している。土偶(23)は頭部、右半身、乳房が欠落しているが、正中線は明瞭に残る。

#### ii) S I 01出土石器 (第60図・写真図版55-1)

第60図1・2は石鏃で、抉りの浅い凹基式である。1はサヌカイト、2は黒曜石を素材としている。3はサヌカイト製の石鏃で、押圧剥離を全周させて整形している。4は抉入石器でサヌカイトを素材とする。刃部に使用痕が認められる。5は楔形石器で、上下左右ともに潰れが見られる。6~9は打欠石錘である。円礫の長軸上に打撲を加えている。同図に掲載した石器のほか、磨製石斧1点、磨石・叩石類が1点出土している。

#### iii) S I 01床面の遺構

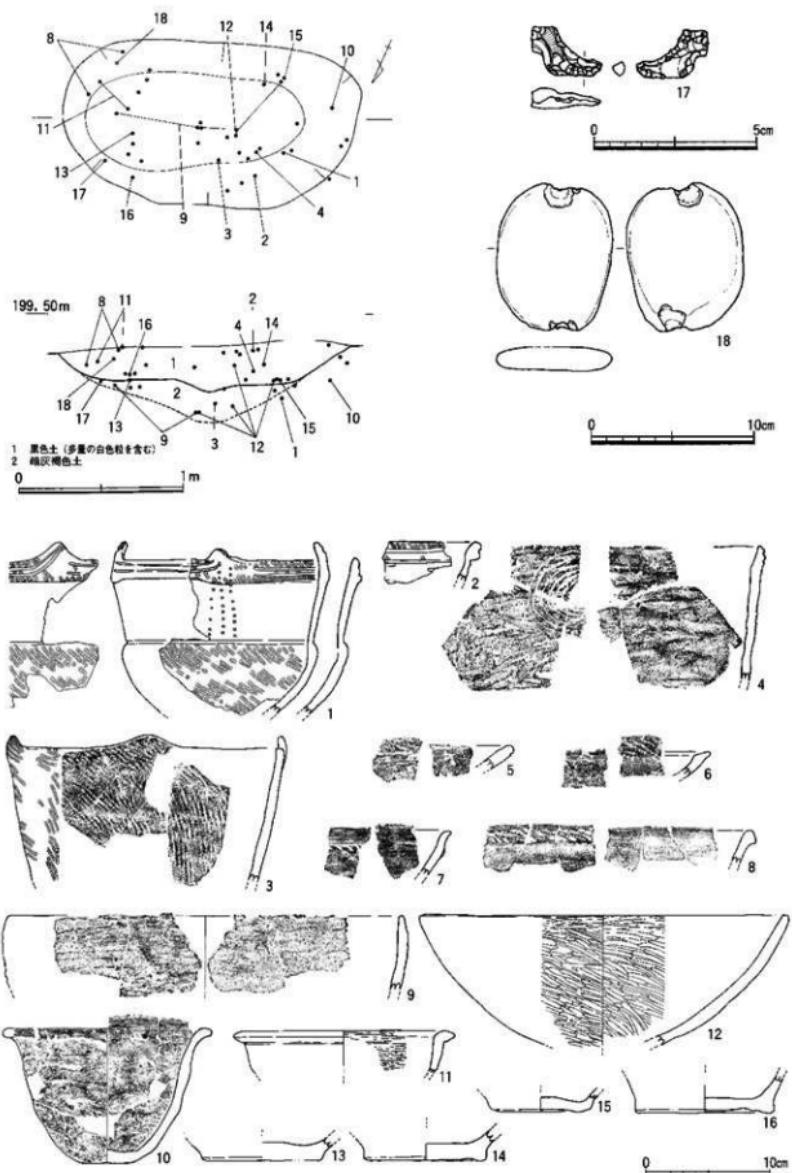
##### ・S I 01-焼土1 (第58図・写真図版14-3・4)

S I 01の床面中央で検出された地床炉である。被熱による変色は中央部で弱く周辺部で強いため、平面的な外観はドーナツ状となる。周囲には薄く被熱赤変した川原石が散在する。

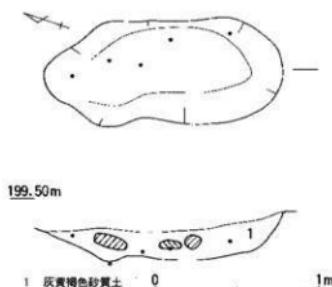
##### ・S I 01-S K 1 (第61図・写真図版15-1・2 (遺構) - 55-2・56-1 (遺物))

S I 01床面北寄りで検出された。平面形はほぼ整った長楕円形であるが、西端の一部だけが不整形になっている。断面形は東西両端の傾斜が緩く、底面と側壁の境が不明瞭である。長軸は東西方に向く。埋土と周囲の土の区別が難しかったことから、遺構の底面がセクション観察時に認識したよりも実際には深かった可能性がある。図中の破線は遺物の出土位置等から推測される土坑の底面である。

遺物は峰ヶ鼻2式がまとめて出土している。第61図1はほぼ完形に近い状況で出土した。口縁部外面に繩文を地文として施した後、2条の沈線を走らす。波頂部下の頸部には3列の刺突文が垂下する。1・2は口縁部文様帯をもつが、肥厚は顯著でない。3は波状口縁をもつ砲弾形の深鉢である。4は砲弾形の深鉢で、粗いナデ調整の上に同心円文が施される。6は端部上面に繩文がつく。



第61図 S 101-SK 1 及び出土遺物実測図  
(遺構: S=1/30、遺物 1~16: S=1/4、17: S=2/3、18: S=1/3)



第62図 S I 01 - SK 2 実測図  
(S = 1/30)

7は、屈曲部から口縁部にかけて短く外反し、脇部側から口縁部側へ向かって刺突による刻目がつけられる。無文土器(9~12)は、深鉢(9)のほか、器高が低い鉢形(10・11)がある。後者は器形が浅く、深鉢に含めるのが躊躇されたので、鉢とした。12はポール形の浅鉢である。17は黒曜石製の釣針型石器で、周縁を折断した後に、急斜度な押圧剥離で整形している。先端には桶状剥離が見られる。18は流紋岩製の打欠石錘で、長軸上の両端を打ち欠いている。

・ S I 01 - SK 2 (第62図・写真図版15-3・4)

S I 01西端で検出された南北に細長い長楕円形の土坑である。断面形はS I 01 - SK 1と同様すり鉢状で、底面と側壁の境は明瞭でない。S I 01の堆土とこの土坑の堆土は

同質で、S I 01との切り合い関係、または同時性を土崩から明確にできなかった。時期はS I 01 - SK 1と同じく崎ヶ鼻2式期と思われる。

iv) S I 01周辺の遺構

・ 焼土05 (第63図・写真図版16-1)

D12グリッドの南西隅、S I 01の南西に隣接して検出された焼土である。焼土05の南西端を配石遺構04の下部土坑が切っており、焼土の後に配石遺構が構築されたことがわかる。南西端を切られているため本来の平面形が不明である。中央部の被熱が最も強く、S I 01に近い北東側は焼土が散らばる程度で、輪郭が不明瞭であった。

・ 配石遺構04 (第63図・写真図版16-2・3 (遺構) - 56-2・57-1 (遺物))

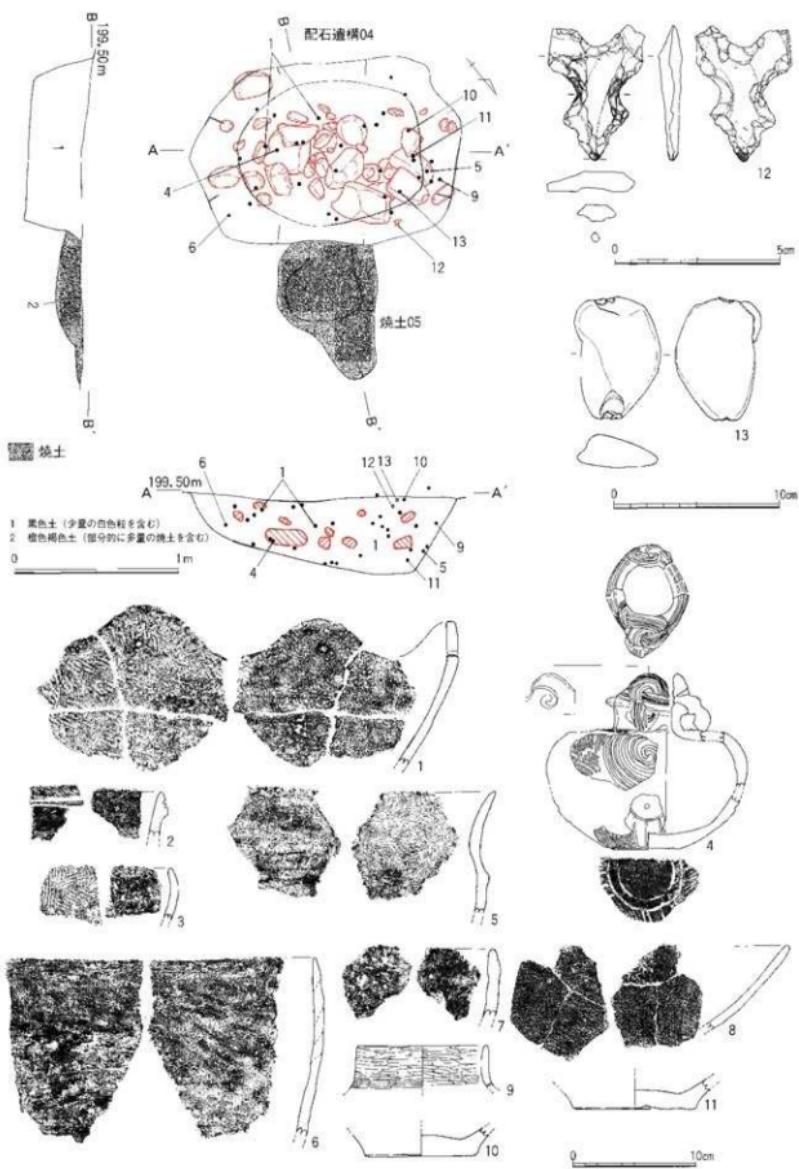
E12グリッド杭の直下に位置し、焼土05の南西端を切って掘られた下部土坑をもつ配石遺構である。土坑の平面形は北東側と南西側の長辺が直線的であり、細長い多角形あるいは楕円形と見られる。断面形は、北西の壁は緩く側壁が立ち上がる。南東側は北西以上に傾斜が緩く、側壁の立ち上がりも不明瞭になっている。短辺側のセクションでは、側壁が垂直に近い角度で立ち上がり、底面との間に明瞭な境目がある。長軸は北西と南東を結ぶ方向である。

土坑内からは、形状も大きさも多様な石が底面から5~15cm浮いた位置で検出された。土坑上面にあった配石が落ち込んだものと見られる。

第63図1・3はポール形の浅鉢で、外面全体に繩文が施される。4は有文壺で、肥厚させた口縁部に入組文や橋状取手をもつほか、内面に渦巻文を施す。脇部は地文として繩文を施した後、渦巻文を配する。時期はおおむね崎ヶ鼻2式に比定される。6は内外面ともナデが無い。口縁部付近は、幅の小さい粘土紐を積み上げた状況が観察できるが、脇部は積み上げ痕跡が観察されない。石器は石錐(12)、石錘(13)ともに石とほぼ同じ高さから出土している。12は先端が摩滅する錐状の石器であり、側縁の抉部にも摩滅痕が確認される。13はやや不整形な打欠石錘である。

SK15 (第64図・写真図版17-1 (遺構) - 57-2 (遺物))

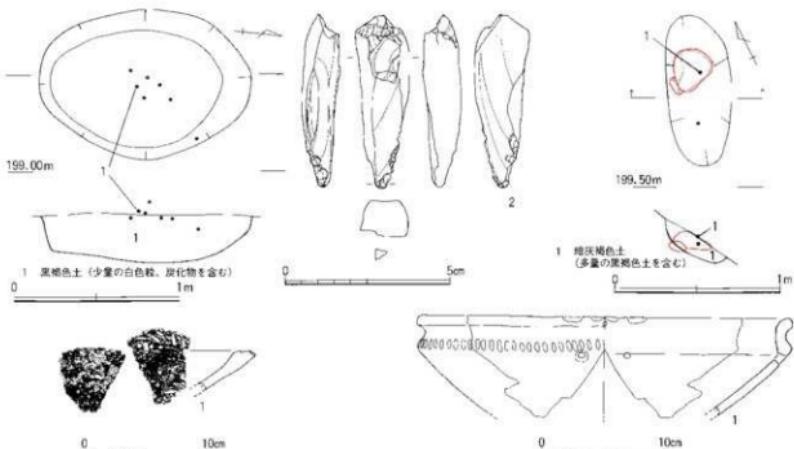
B12グリッドの西端、土器溜まり6の西側から検出された土坑である。付近一帯は土坑や配石遺構の集中する場所で、本土坑はその中でも最も西側に位置する。平面形は梢円形である。断面形は壁の立ち上がりが緩く不明瞭である。水田造成時の削平レベル(198.8m~198.9m)とほとんど同じ



第63図 S 01周辺の遺構（焼土05、配石遺構04）及び出土遺物実測図  
(遺構: S=1/30、遺物 1~11: S=1/4、12: S=2/3、13: S=1/3)



第64図 SK 15及び出土遺物実測図  
(造構: S = 1/30、遺物: S = 1/4)



第65図 SK 16及び出土遺物実測図  
(造構: S = 1/30、遺物 1: S = 1/4、2: S = 2/3)

第66図 SK 17及び出土遺物実測図  
(造構: S = 1/30、遺物: S = 1/4)

高さであり、SK 15もこのとき上部を削られていると思われる。土坑の上面や内部に複数個の石が検出されたが（写真図版17-1）、これは付近に散在する川原石の紛れ込みと見られる。

遺物は無文深鉢（1）、有文鉢（2・3）が出土しており、縄文後期中葉に属するものである。これらは検出面よりも10cm上方から、一点に集中して出土した。実際の掘り込み面は検出面よりも高かったことを考慮すると、SK 15に伴う遺物と判断される。このほか、検出面から固化できなかつた土器片が2点出土している。

#### SK 16（第65図・写真図版17-2（造構）・57-2・3（遺物））

B12グリッドの中央、SK 15から2.5m南東へ離れた位置で検出された。平面形は楕円形で、長軸が南北方向を向く。断面は、南端の壁の立ち上がりが明瞭で垂直に近いのに対し、北側では立ち上がりが緩くはっきりしない。なお、SK 16の北に接する位置で焼土が見られたが、遺存状況が悪く、平面形を確定することができず、固化できなかった。

出土した浅鉢の口縁部（第65図1）から、縄文後期中葉の遺構と推定される。2は、黒曜石製の石錐である。ほかに石錐、磨石・叩石類等の石器（非掲載）が出土している。

#### S K17 (第66図・写真図版57-2 (遺物))

E12グリッドの北端、S I 01の2.5m南東側で検出された土坑である。水田造成時に削平を受けているため、平面形を確認できなかった。短軸側の断面形は完全なすり鉢状である。東側のはとんどが失われているが、底面がわずかに上がっていくのが確認できる。土坑内からは浅鉢、大小各1個の石が出土しているが、削平されていることを考慮に入れればほとんど底面付近からの出土といえる。石は小石の上に大石が乗った状態で出土した。

浅鉢（第66図1）は1／4程度が遺存して、口縁を下に向け、大石の上に置かれた状態で出土した。屈曲部の外面に施された刻目は竹管状工具によるものと思われ、先端を切るように刺穴される。

#### S K18 (第67図・写真図版17-4 (遺構)・57-4 (遺物))

E15グリッドの西端、石器集中部1の南東側で確認された。平面形は、トレンチで東半分を削られているため不明であるが、おおむね円形を呈していたと思われる。断面形は底面が細り、すり鉢状あるいは尖底状となる。土坑内からは黒曜石の石核が2点出土しており（第68図1・2）、黒曜石の貯蔵穴と考えられる。2は検出面よりも10cm上方から出土しているので、土坑の掘り込み面も検出面より高かったと推定される。また、扁平な川原石が3個重なった状態で出土した。

1・2は大型剥片を素材とした石核で、1は交互剥離し、2は求心状に剥離している。両者は接合し、大型の角礫に近い形状になる。土坑の時期は、無文粗製深鉢が出上していることからおおむね縄文後期と推定される。

#### 配石遺構05 (第69図・写真図版18-1 (遺構)・58-2 (遺物))

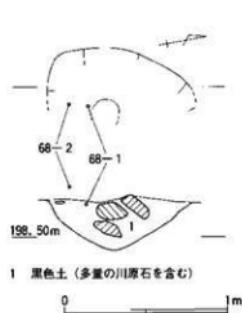
B12グリッド中央で、S K16と並んで検出された配石遺構である。配石は土坑内に落ち込んだもの以外は削平によって失われている。下部土坑は平面円形であり、断面形は壁の立ち上がりが明瞭である。40cm大から人頭大の、大小合わせて8個の石が土坑内で確認された。多くは扁平な下で、広い面を下に向いた状態であった。

遺物は、黒曜石製の釣針型石器1点が出土している。急斜度な押圧剥離で整形され、基部は双股状を呈する。尖頭部付近に逆彎が作り出されている。腹面、背面の剥離線上に擦痕が認められる。上器は出土していないが、釣針型石器は後期中葉に限定できる石器であるため、後期中葉ころの遺構と推定される。

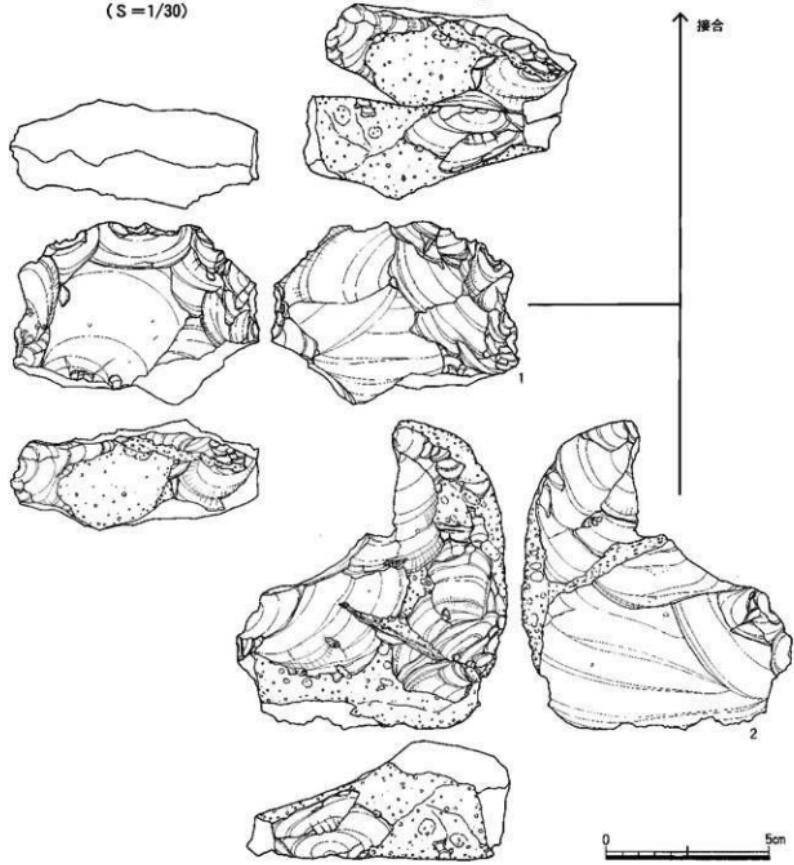
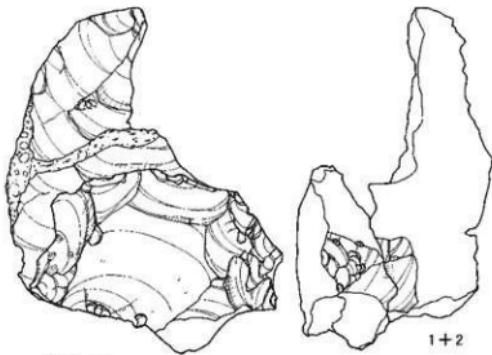
#### 配石遺構06 (第70図・写真図版58-1 (遺物))

配石遺構05の2.5m北から検出された。30cm大の底の平たい石が5個、20cm以下の小さめの石が8個検出された。土坑南端付近に半円形の平たい石が他の石から離れて1個残っていた。これ以外の石は土坑の北寄りに集中している。石が出土始めた時点で配石遺構であることは確認できたが、土坑の掘り形が確定できたのは半蔵後であった。土坑の平面形は残存する状態でおおむね梢円形と推定される。断面形は確認できた部分がわずかであり、底面と側壁の境界もはっきりしない。セクションの観察でも上層は周辺の埋土との区別ができなかった。上器の出土位置は底面から10cmまでの範囲内に集中している。

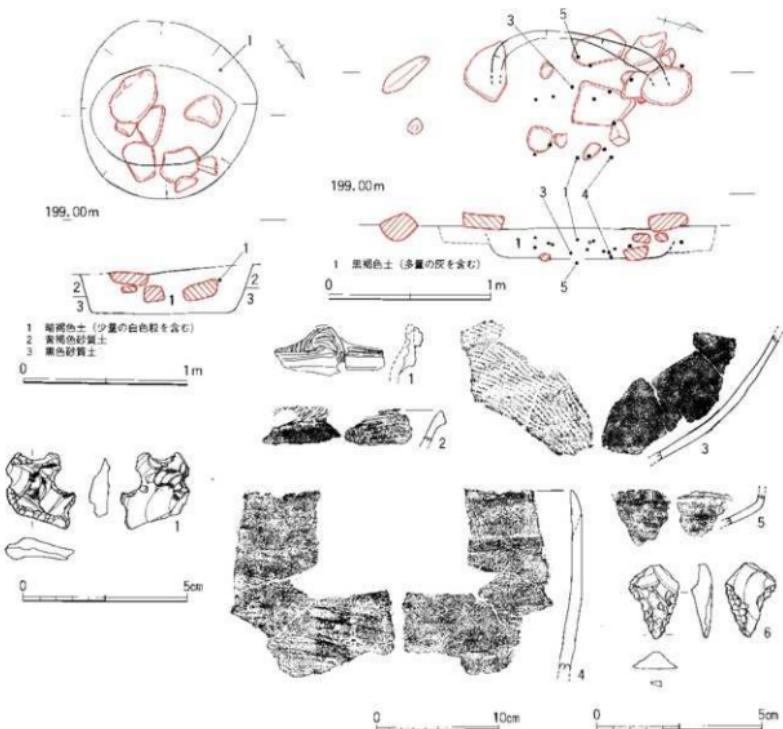
出土した上器のうち、第70図1は縄文の施された肥厚型入組文をもち、崎ヶ鼻1式に比定される。3は単節R L繩文を全面に施す浅鉢胴部で、内面にミガキが施される。4は無文粗製深鉢で、口縁



第67図 SK 18実測図  
(S = 1/30)



第68図 SK 18出土遺物実測図 (S = 2/3)



第69図 配石遺構05及び出土遺物実測図

(遺構: S = 1/30、遺物: S = 2/3)

第70図 配石遺構06及び出土遺物実測図

(遺構: S = 1/30、遺物 1~5: S = 1/4、6: S = 2/3)

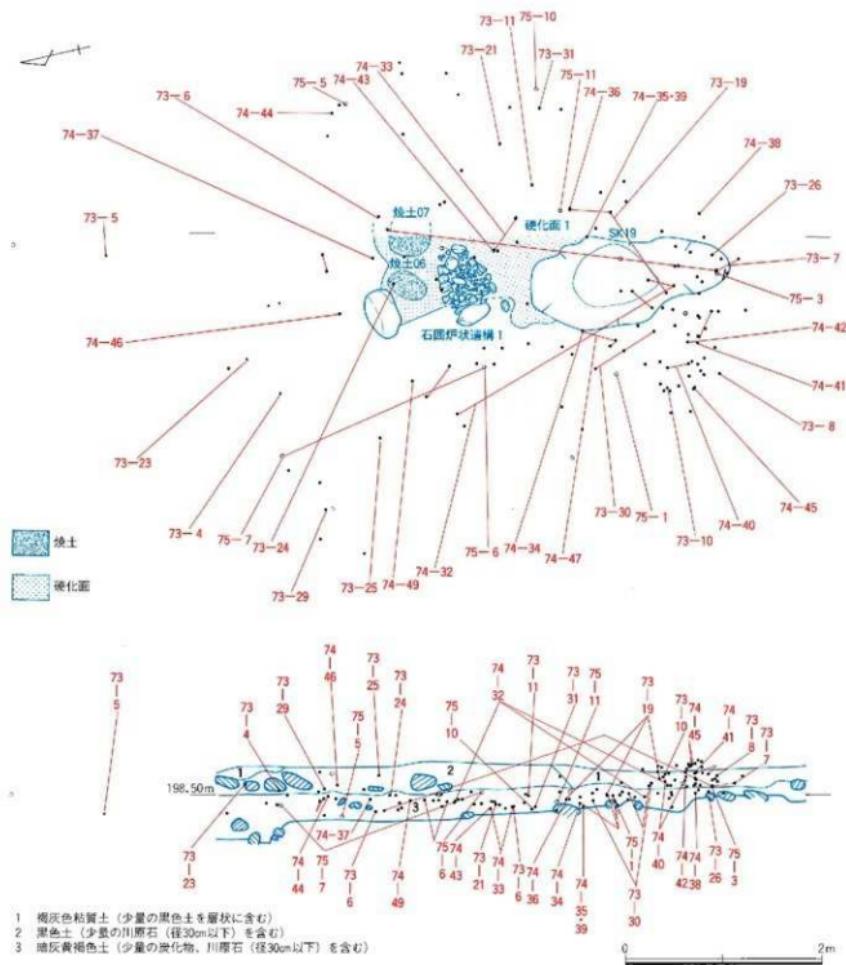
部は先細り状となる。6は黒曜石製の石錐で、押圧剥離によって整形されている。ほかに玉髓・瑪瑙製のもの1点(非掲載)が出土している。

### 土器溜まり3

#### i) 土器溜まり3遺物出土状況 (第71図・写真図版18-3)

D15グリッドの北半で検出した土器溜まりである。出土土器から、崎ヶ鼻1式の古段階に相当する時期と思われる。土器溜まり3の中央に残したセクションベルトによれば、1層が水田の床土と見られる褐灰色粘土で、この下に黒色土層(2層)、暗灰黄褐色土層(3層)が読く。2層と3層の色の違いは土壤化の進行度の違いによるものと思われる。

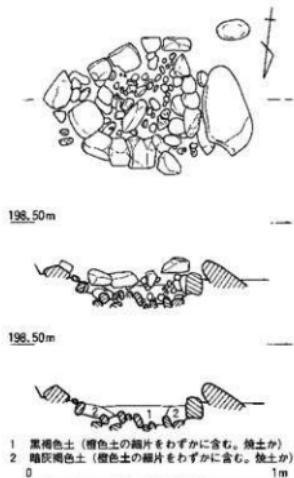
注意したいのは、側面図に見られるように遺物が皿状に堆積している点である。これは、セクションでは確認できないものの、土器溜まりが何らかの崖地に廃棄された状況を表していると思われ、下部に堅穴住居等の遺構が存在していた可能性を示唆する。土器溜まり3自体は明確な掘り込みが確認されず、住居跡と確定するに至らなかったが、右圓炉状遺構や焼土06・07の存在から、住居跡であった可能性は高い。ただし、隣接する右圓炉状遺構と地床炉がどのように機能分担されていたのかという問題が残る。土器溜まり3の南側は土器が出土する密度が高く、この集中部の中で複数



第71図 土器溜まり3遺物出土状況及び南北セクション実測図 (S=1/50)

の土器片が接合している。このほか、第74図32はやや南北に離れた土器片同士で接合している。

上器溜まりの直下からは、石窯炉状遺構1基、土坑1基、焼土2箇所、硬化面1箇所が検出されている。周囲に7~8穴のピットが見られたが、いずれも深さ10cm未満と浅く平面断面がはっきりしなかった。上層の黒色土が川原石の間に入り込んだにすぎない可能性もある。これらの遺構は、地山のうち川原石が露出している部分を避け、砂地を選んで作られている。



第72図 土器溜まり3直下の遺構  
(石圓炉状遺構1) 実測図  
(S=1/20)

台形状である。石が規則的に配置され、石の表面が熱を受けていたことから、石圓炉と判断した。南辺、北辺、東辺ともわずかに外方へふくらむ曲線状に配されている。

10cm以下の円礫多数を径50cmほどの範囲に散き詰めて底面を造り、外周部に10~15cmとやや大きめの角礫を配置して中央を囲む。北東隅と北西隅は角礫が失われ、小さな円礫が露出している。底面の円礫は被熱により赤変していたが、割れたものは無かった。これに対し、外周部の角礫は被熱により劣化し、崩壊しかけていたもののが多かった。

### iii) 土器溜まり3出土土器 (第73~74図・写真図版58~3~59)

第73図1は縄文中期末の深鉢のキャリバー形口縁部と見られる。竹管状工具による沈線間に、同じ工具で連続して円形の刺突を施している。2~7は口縁部を肥厚させて文様を施した、崎ヶ鼻式の古段階の有文深鉢である。5点とも外面施文で、端部に粘土帯を貼り付けた上から、主として刻目・沈線を施文する。頭部と胴部はいずれも無文である。5の内面には赤色顔料が付着しており、分析の結果水銀朱と判明している(本報告書付録第3節)。6は双頭の波状口縁を呈し、多重沈線による入組文が施される。8~11は上面施文で、8・9は刻目、10~11は繩文が施されている。18~21は凸曲形の有文浅鉢である。19~21は肩部が鋭く外方へ飛び出し、その先端を切るように刺突して短い刻目をつける。これに対して18~20は、凸曲がゆるく曲線的な器形を呈している。肩部先端に、胴部側から口縁部側へ向かって斜行沈線を引き、施文具の先端の形がそのまま残っていることが多い。20は、外面に残された施文具痕跡から、末端が管状の工具を用いていたことがわかる。22~25は凸曲形有文鉢で、口縁端部外面と胴部に縄文が施される。22~25は端部に粘土帯を貼り付け、その上面に繩文を施している。これは、有文深鉢の口縁部文様帶を作り出す手法と共に通している。23~24は口縁部を外方へ強く折り曲げ、外反した口唇部に繩文を施している。

### ii) 土器溜まり3直下の遺構 (第71図)

#### ・硬化面1 (第71図)

D15グリッドの北より、土器溜まり3の中心で、南北1.5m、東西1mの範囲で硬化面が確認された。東へ続いていると考えられるが、確認できなかった。

#### ・焼土06・焼土07 (第71図)

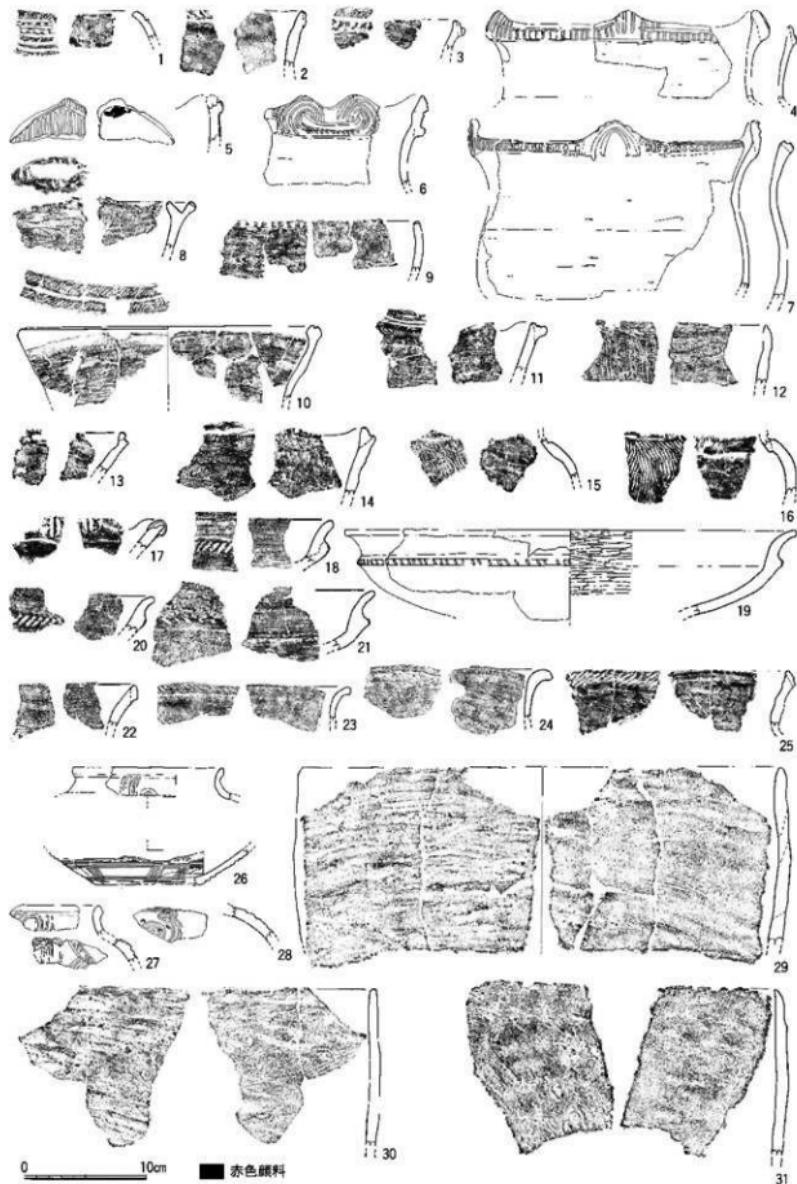
径40cmの焼しが2箇所、D15グリッドの北端、硬化面1の中央で確認された。焼土06は平面形が長楕円形である。焼土07は東へ続いている可能性もあるが確認できなかった。断面形は確認していない。

#### ・SK19 (第71図)

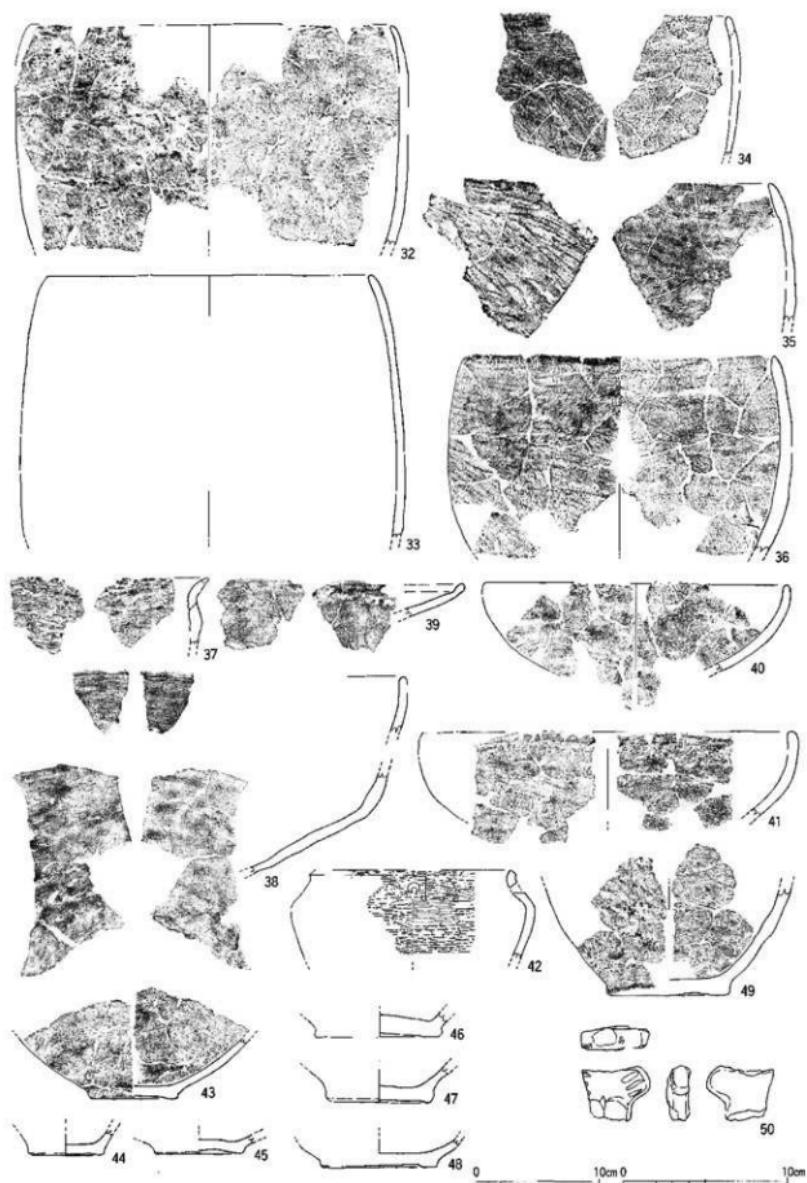
D15グリッドの中央、硬化面1の南側で検出した、南北に細長い土坑である。地山である川原石の層に掘り込まれ、埋上の黒色土が川原石の間を縫って下まで浸入していたため、底面の確認は困難であった。

#### ・石圓炉状遺構1 (第72図・写真図版18~2)

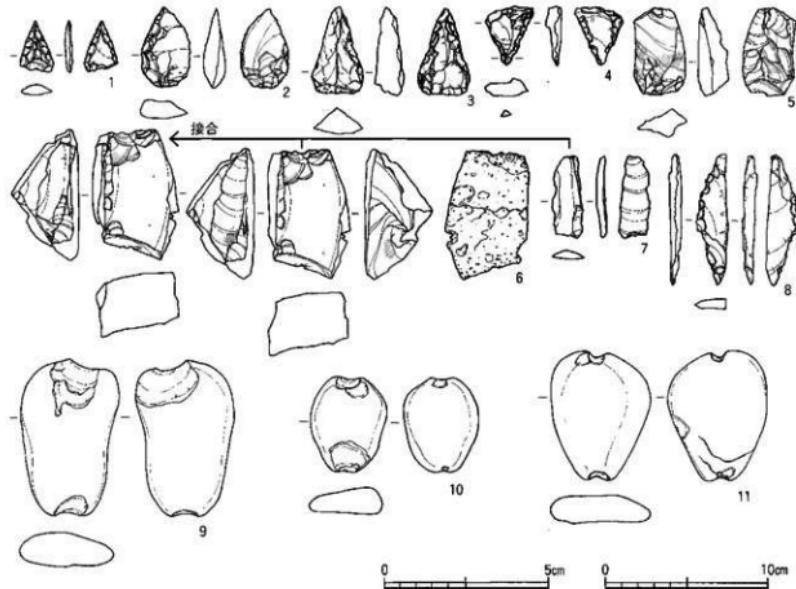
上器溜まり3直下のD15グリッド北端で検出された、石組遺構である。平面形は、西辺が広く東辺が狭くなる



第73図 土器溝まり3出土土器実測図(1) (S=1/4)



第74図 土器溝まり3出土土器実測図(2) (32~49: S=1/4, 50: S=1/3)



第75図 土器窯まり3出土石器実測図 (1~8: S=2/3, 9~11: S=1/3)

無文深鉢は口縁部が内彎するもの（第74図32~36）が円立つ。無文浅鉢には、皿形のもの（39）やボーラル形（38・40・41）等が見られる。42は壺形の土器で、全面を丁寧なミガキで調整している。50は上偶で、頭部を含む大半が欠損している。胸部には剥落痕が見られ、乳房の存在をうかがわせる。胸部に3本の沈線が施されており、胴部中央には正中線が見られる。また、実測図上面の肩部付近にもわずかに文様が見られる。

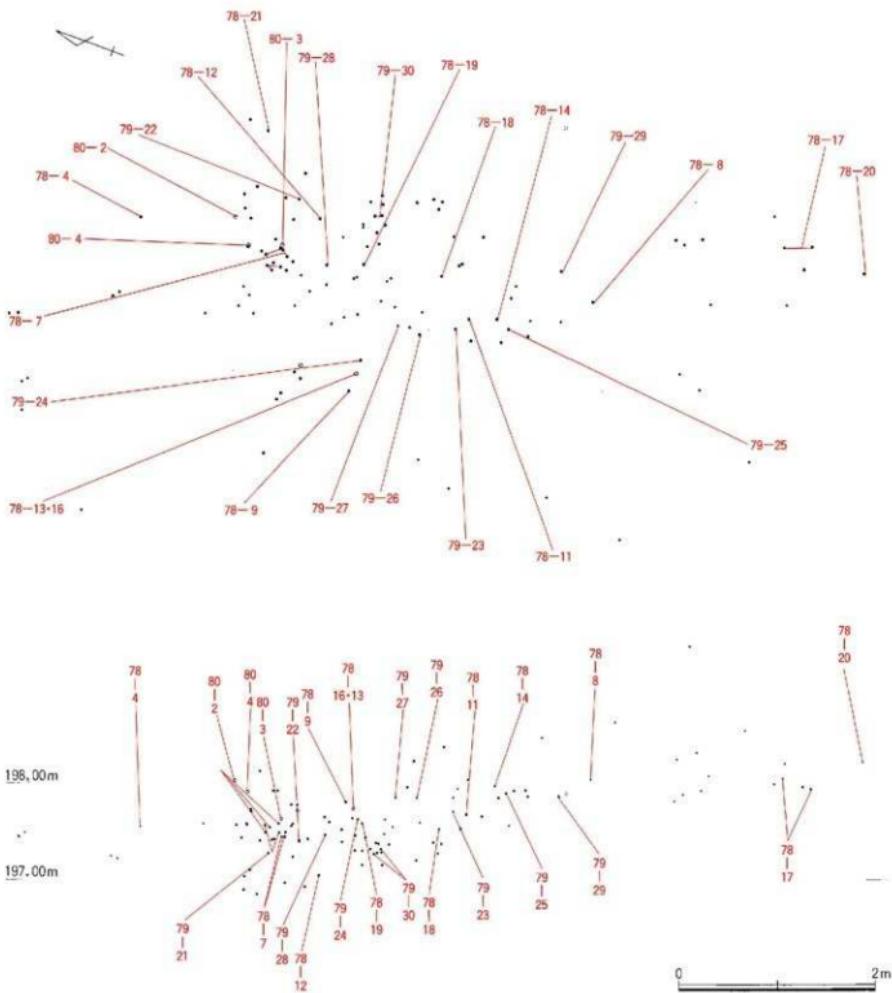
#### iv) 土器窯まり3出土石器 (第75図・写真図版60-1)

第75図1~3は石錐である。1はサヌカイト製で、実測図右面中央には素材時の主要剥離面が残る。2は側縁にプランティング状の加工が施され、主要剥離面側には打点の除去を意図したと見られる剥離が確認されることから、ナイフ形石器の可能性がある。4はサヌカイト製の石錐で、両面に素材面を多く残す。5・6は黒曜石製の楔形石器で、6・7は楔形石器と剥片の接合例である。背面に礫面を持つ大型剥片（6）を素材とし、実測図左面側に垂直打撃を加えて、縦長剥片（7）を剥離している。剥片は作業面側の反作用によって、打点と端部の一部を欠損している。8はサヌカイト製の縦長剥片を用いたサイドスクレイパーである。9~11は打欠石錐である。

#### 土器窯まり4

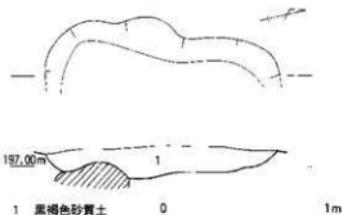
##### i) 土器窯まり4の遺物出土状況 (第76図)

B15グリッドの南端で検出した土器窯まりである。出土土器から、時期はおおむね縄文成立期と推定される。調査区中央では起伏がゆるかった地山が、調査区の北東隅では斐伊川方向に向かって急激に落ち込む。土器窯まり4はその落ち際に検出された（第76図）。第76図の側面図で、中央



第76図 土器溜まり4遺物出土状況図 (S=1/50)

から左(北)半分にかけて急激に出土位置が低くなっている部分が上記の落ち込みに該当し、遺物の分布の中心である。この落ち込みは、東から西へ流れていた斐伊川の旧河道の跡と思われ、土器溜まり4はこの旧河道に切られている。旧河道は、黒色土と黄色砂層が互層になっており、陸化と洪水の過程を繰り返していたと思われる。この旧河道によって、土器溜まり4の大半や付近の遺構が削りとられたと推測されるが、残った資料に関しては、近距離間での接合例が目立つことから、ある程度原位置を保っていると判断される。土器溜まりから5m北ではSK20が検出された。



第77図 土器溜まり4周辺の遺構（S K20）  
実測図（S=1/30）

高197.5m付近から晩期の土器片が出土しているため、晩期より古い時期の遺構と推定される。

#### iii) 土器溜まり4出土土器（第78図・写真図版60-2・61-1）

有文深鉢は、上面を肥厚させ、沈線や刻目を施すものが多い（第78図1・2・4・5・18）。これらはおむね縁帯文成立期に位置づけられる。5は他の土器より若干古い様相をもつが、B15グリッド出土と離れて出土しているため、土器溜まり4には含まれない可能性がある。4は、断面に粘土紐の跡が観察された。やや不明瞭であるが、紐目は外傾していると見られる。18は当初無文土器と認識していたが、口縁部の直下にわずかに刻目が認められる。6～9は屈曲形有文浅鉢で、屈曲部から口縁部にかけてのくびれが明瞭なものが多い。7の断面には、胴部と口縁部の接合部が観察できる。6・8は屈曲部外面の稜を切るように刺突する。8は胴部側から口縁部側へ向かって刺突した際に、口縁部よりの器壁に施文具が当たってしまった痕跡が、消されずに残っていた。7はまず稜の直上に横走沈線を一周させた後、胴部側から口縁部側へ向けて刺突して刻目をついている。器壁に残された工具痕から、6はヘラ状の施文具、7・8は竹管状の施文具が用いられていたと推測される。9は、磨消繩文による区画文が描かれ、南四国のある宿毛式に類似する。17は底部の直上まで繩文が施される。19～21は無文粗製深鉢である。直立もしくは外傾する器形が多い。調整はナデのみである。無文深鉢19の外面には、吹きこぼれの痕跡が認められた。無文浅鉢は皿形のもの（第79図24）、ボール形のもの（25・26）、屈曲形のもの（28・29）などがある。

#### iv) 土器溜まり4出土石器（第80図・写真図版61-2）

第80図1はサヌカイト製の楔形石器で、上端の半坦面より加撃を行なっている。側面には自然面が残る。2は磨製石斧で、敲打痕や研磨痕が明瞭に残る。3・4は打欠石錐である。

#### 土器溜まり5

##### i) 土器溜まり5遺物出土状況（第81図・写真図版19-1）

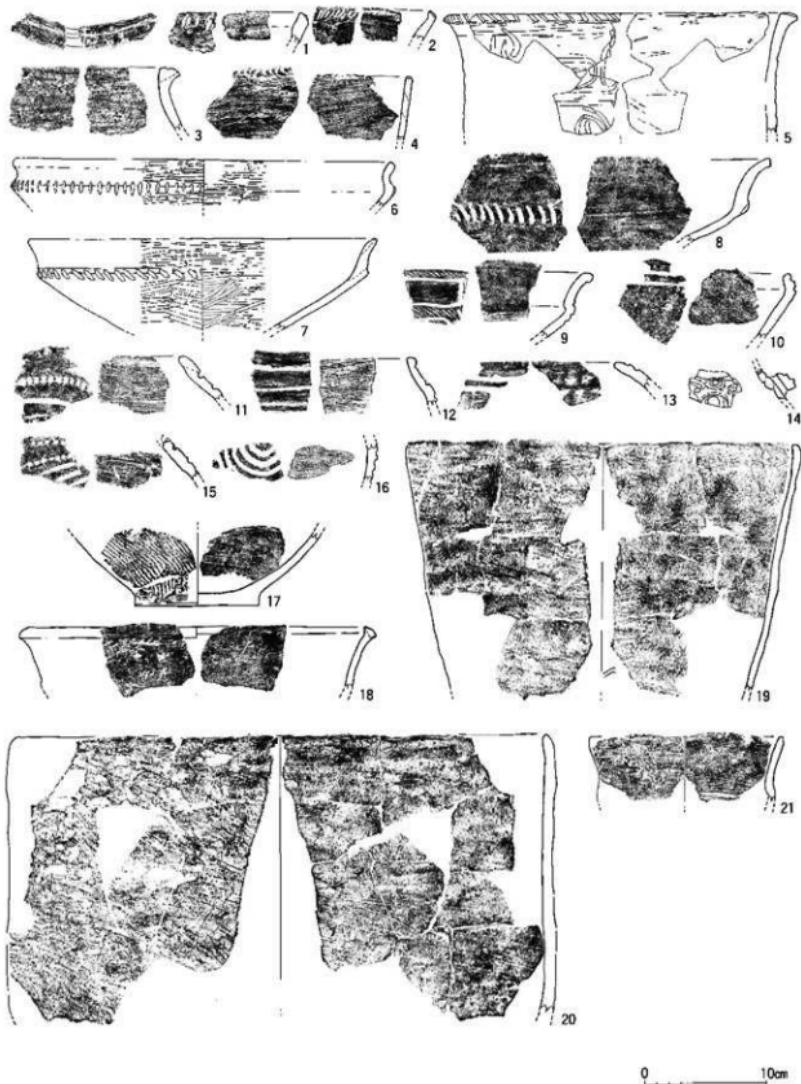
F12グリッド東半分からE12グリッド南半分にかけて、検出した土器溜まりである。時期は、崎ヶ鼻1式に位置づけられる。南東から北西にかけて細長い範囲に遺物が分布するが、東部を水田造成時に削り取られているので、もとの分布範囲は現状よりも東に広かつたと推定される。

配石遺構07の南西側から、砲弾形無文深鉢7点（第85図35・37～40・42・43）がまとめて出土している。その北に接して、第87図4・7・11・13・15等の石器（特に礫石器）が集中的に出土する一例がある。9・10の出土位置も配石遺構より西であり、やはり石核石器は土器溜まりの西半分に集中している。このように、同じ器種が一箇所に集中する出土傾向から、同じ器種をまとめて廃棄するという廃棄行動が推定される。遺物の一部、とりわけ削平部分近くの土器が集中的に土器溜

##### ii) 土器溜まり4周辺の遺構

###### ・ S K20 (第77図)

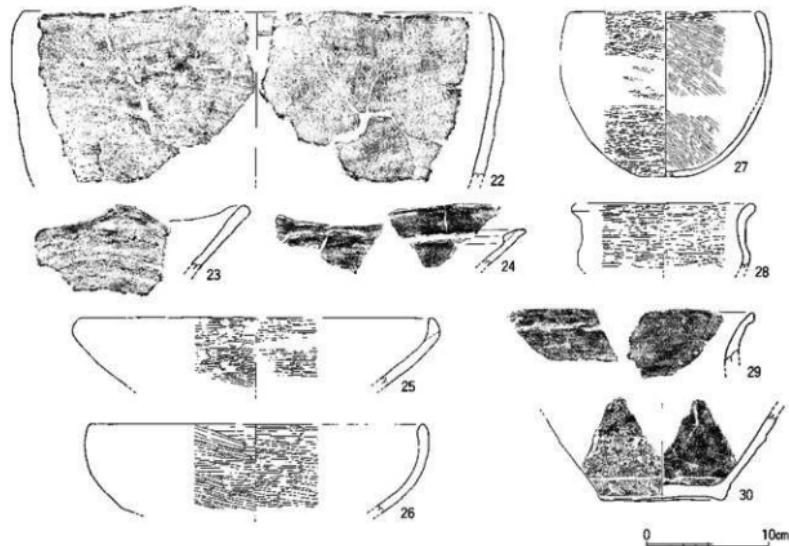
B15グリッドの北東より、土器溜まり4から北へ5m離れた位置で検出された。平面形は、東半分が不明であるが、南北方向に長軸をもつ楕円形であったと思われる。現状では深さ10cm程度の土坑であるが、土坑が掘られた後洪水で上の方が削り取られ、もとの掘り込み面よりも低くなっている可能性が高い。すぐ東の地点で、土坑の検出面より40cm高い標



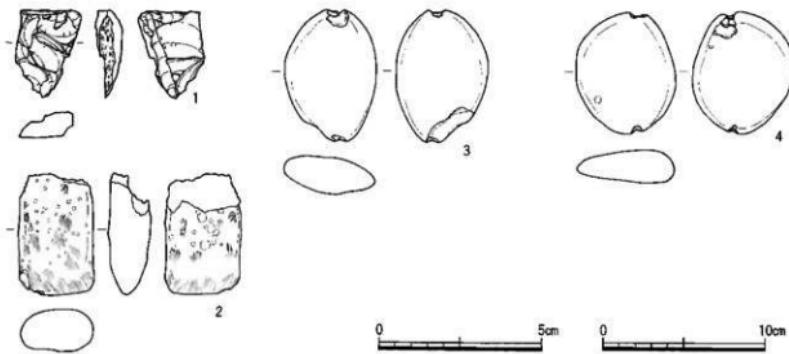
第78図 土器溜まり4出土土器実測図(1) (S=1/4)

まり6の土器と接合している。他に、調査区北東隅の斐伊川旧河道の土器と接合した例もある。

遺構は、土器溜まり5の中心部に配石遺構07が、やや南へ離れて石錐溜まり2が検出されている。また、1層の遺構に含めているが、西側に配石遺構13も検出されている。



第79図 土器溜まり4出土土器実測図(2) (S=1/4)

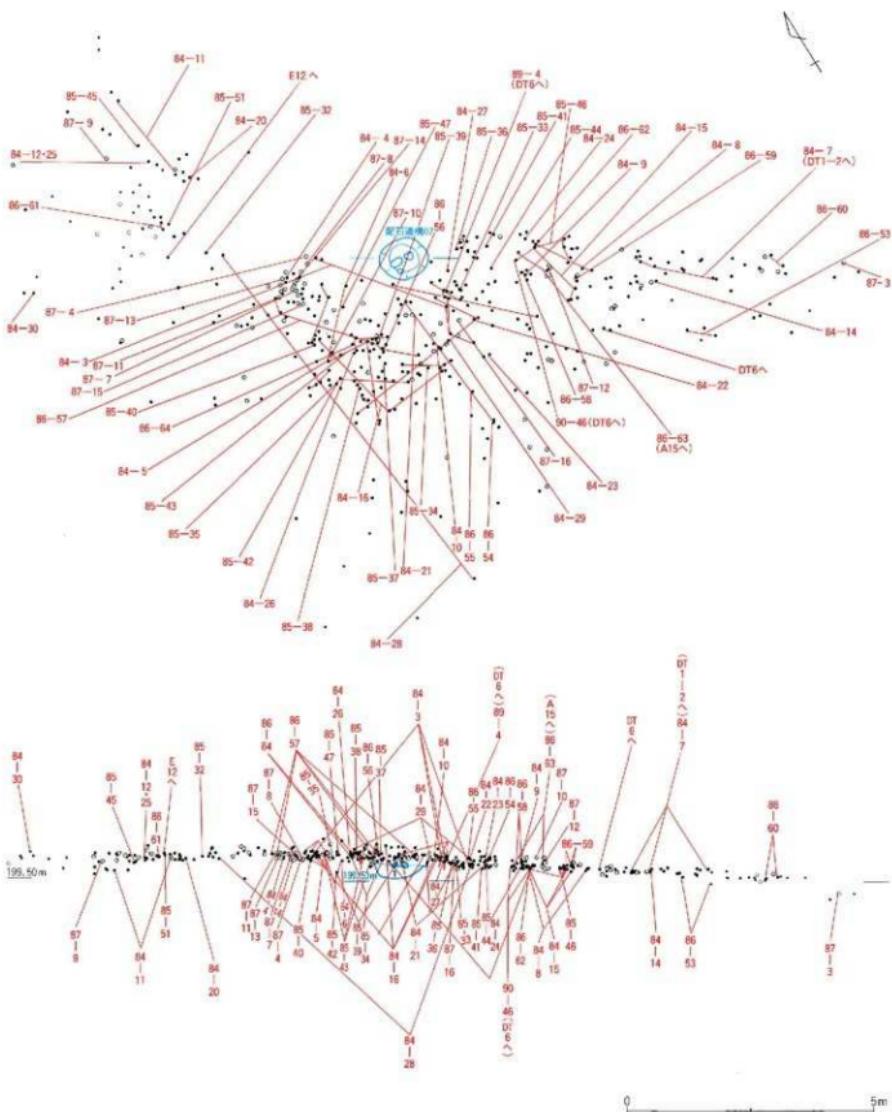


第80図 土器溜まり4出土石器実測図(1: S=2/3, 2~4: S=1/3)

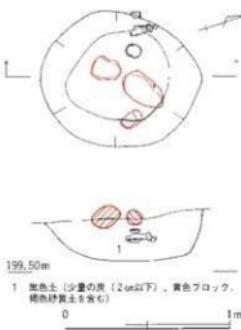
## ii) 土器溜まり5直下の遺構

## 配石遺構07 (第82図・写真図版19-2)

F12グリッドの北端、上器溜まり5の中央に位置する。この配石遺構の直上は土器溜まり5の遺物分布の空白となっており、土器溜まり5を壊して配石遺構07が作られている。従って、土坑の掘り込み面は、土器溜まり5の遺物分布の上端(200.30m)よりも上と推定される。配石は、20cm大の石が2個、小さな石が1個、コの字に並ぶように検出された。ただし、掘り込み面はこれよりも上と推定されるので、石がこの配置で地上に露出していたわけではない。下部土坑は平面形が不整円形、断面形はすり鉢状で、底面と側壁の境が不明瞭になっている。南端付近の傾斜は緩い。



第81図 土器溝まり 5遺物出土状況図 (S=1/100)



第82図 土器溜まり 5 直下の  
遺構 (配石消構07) 実測図  
(S = 1/30)

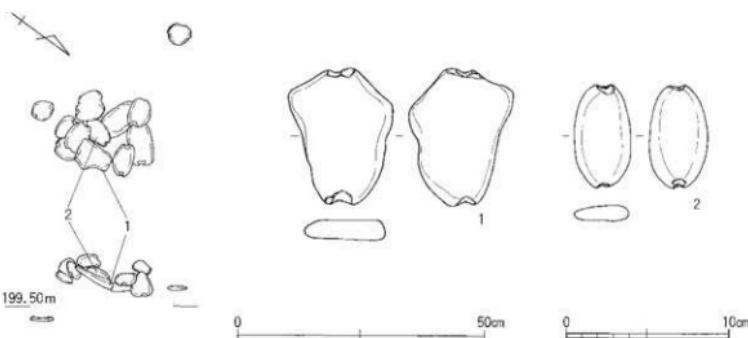
縄文後期の無文粗製土器が出土しているので、縄文後期の遺構と考えられる。

### iii) 土器溜まり 5周辺の遺構

- ・石錘溜まり 2 (第83図・写真図版19-3 (遺構)・61-3 (遺物))

F13とG13グリッドの境目で、土器溜まり 5 の南方約 5m の位置で検出した石錘溜まりである。位置関係から、土器溜まり 5 と関係が深いと考えられる。石錘が出土したレベルはいずれも 199.55m 付近とおおむねそろっている。

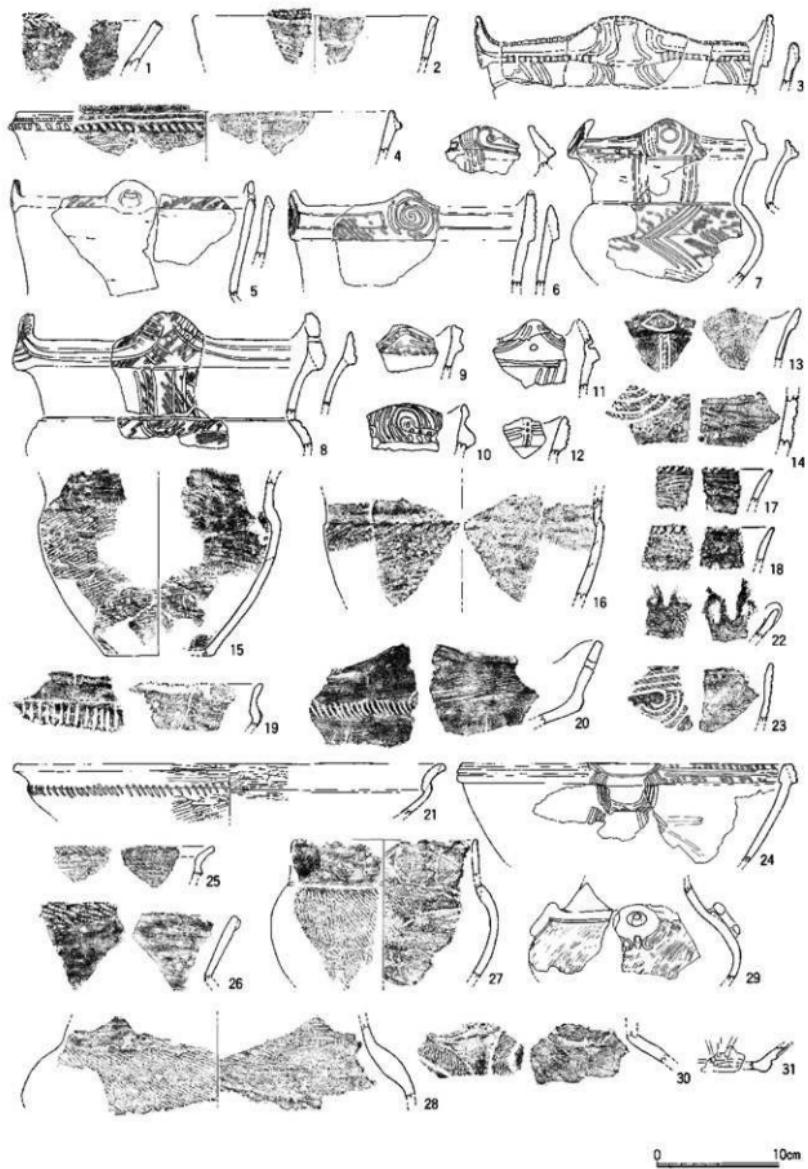
石錘は合計 13 点である。重量 100g をこえるものが 5 点あり、それ以外は 50g 程度である。多くは楕円窓の長軸上に打ち欠きをもつが、中には短軸上に打ち欠きをもつもの (計測表 No.167) もある。



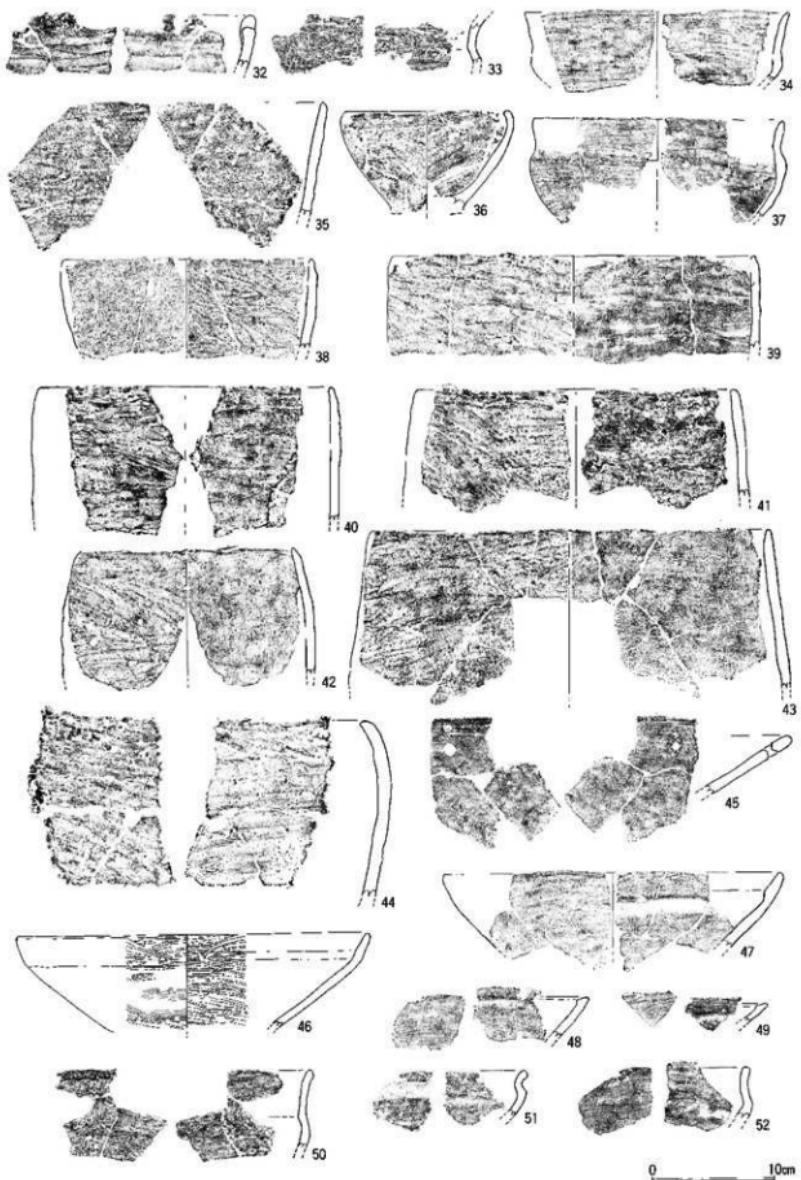
第83図 土器溜まり 5 周辺の遺構 (石錘溜まり 2) 実測図 (遺構: S = 1/10、遺物: S = 1/3)

### iv) 土器溜まり 5 出土土器 (第84~86図・写真図版61-4~64-1)

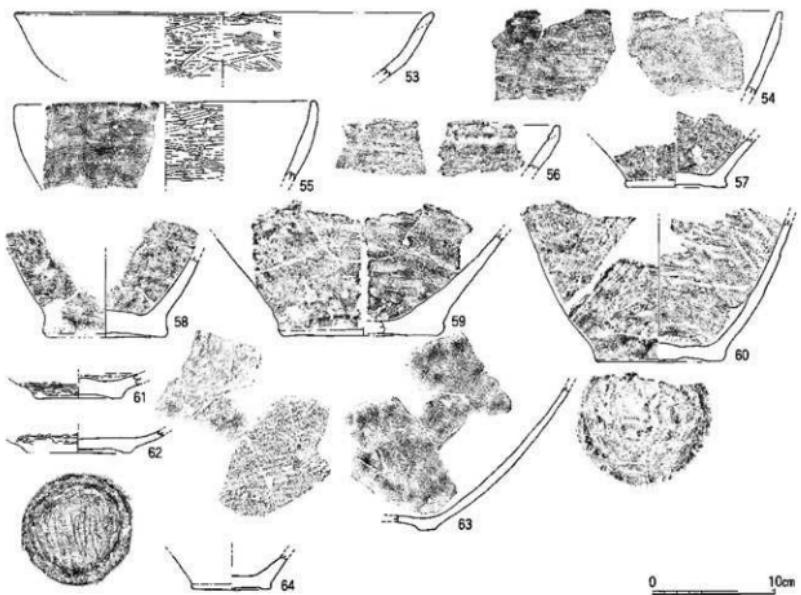
第84図 1・2 は砲弾形の有文深鉢の口縁上端に刻目や刺突を施す。2は円形の刺突が連続的に施される。3~13は有文深鉢の口縁部で、文様帶に縄文を施すものが多い。15・16は屈曲形の深鉢で、胴部に縄文が施される。16は断面に粘土紐の接合痕が多数観察できる。胸部と頭部のつなぎ目は、指を押しつけるようにして内面側を強くなっている。19~21は屈曲形浅鉢で、肩曲部に刻目をもつ。19は肩曲部から口縁部にかけて内側にくびれ、肩曲部外端に先端を切るように刺突し、刻目をつけている。20・21は口縁部が外反する器形である。胴部側から口縁部側へ刺突後、肩曲部の直上で施文具の動きを止めている。23・24はボール形の浅鉢で、23は多重沈線の齊消縄文をもつ。24は口縁部を肥厚させて地文に縄文をしいた後、沈線による吊り輪状の文様を描く。25~28は屈曲形の鉢である。25・26は口縁端部外面に、27・28は胴部に縄文を施す。29~31は有文壺で、粘土帯貼り付けによる文様表現を行なう。29は胴部に単節 L R 縄文が施される。第86図 56 は口縁端部の内面側を肥



第84図 土器溜まり5出土土器実測図（1）（S=1/4）



第85図 土器満まり5出土土器実測図(2) (S=1/4)



第86図 土器溜まり5出土土器実測図(3)(S=1/4)

厚させたボル形浅鉢である。縄文は單節R Lのほかに、単節L Rが数点含まれる(第84図5・8・15・16・29)。第85図35・38~44は無文粗製深鉢である。形状は直立もしくは内湾するものが多い。口縁端部は丸く仕上げるものが多い。

#### v) 土器溜まり5出土石器(第87図・写真図版64-2~65)

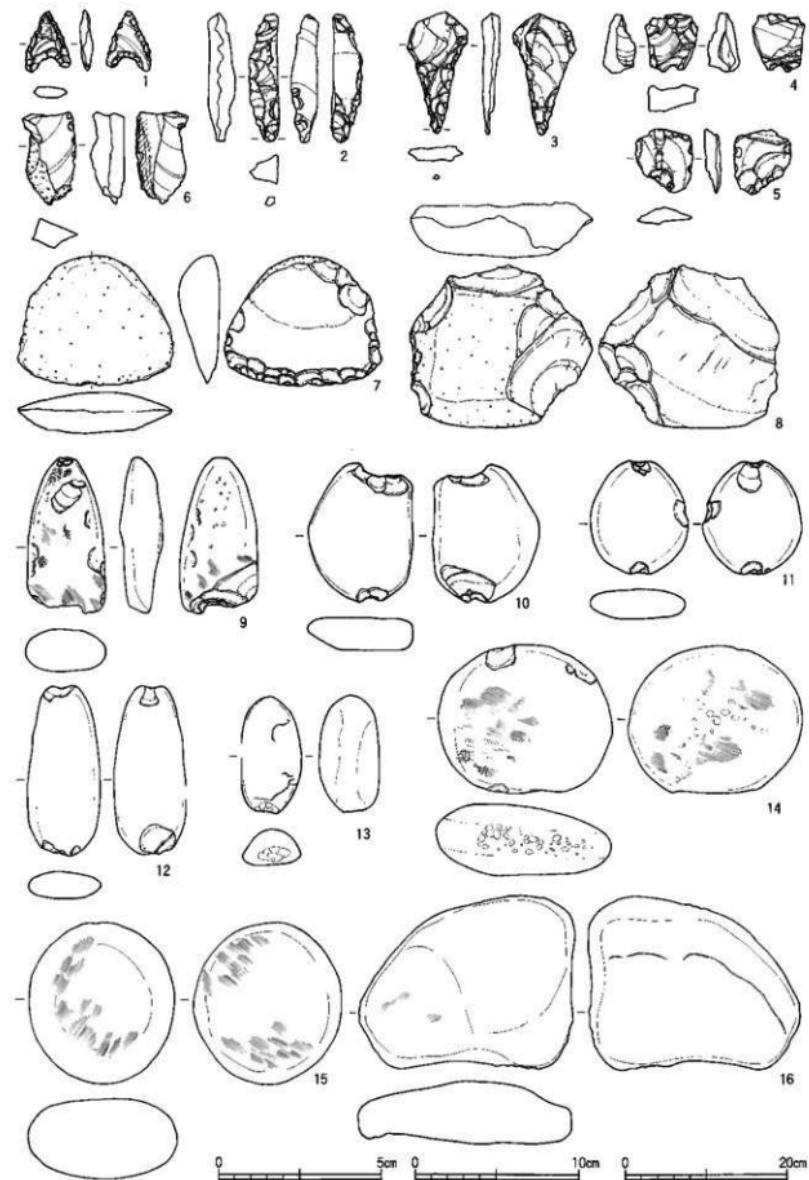
第87図1は黒曜石の石鎌で素材面を多く残す。2・3は石錐である。2は黒曜石製の縦長剥片を素材とし、急斜度な押圧剥離によって立体的な断面形を作出している。4・5は楔形石器である。6は使用痕のある剥片で、側縁に微細な剥離痕が残る。7・8は在地産の安山岩を利用しておらず、7はサイドスクリイバー、8は交差剥離によって大型の剥片を剥離した石核である。9は磨製石斧で、敲打痕と剥離痕、研磨痕が観察される。13は敲石で、下面に敲打痕が残る。14・15は磨石・叩石類である。14は磨面の他に敲打痕が明瞭に残る。16は石皿で、わずかに磨面が確認される。

#### 土器溜まり6

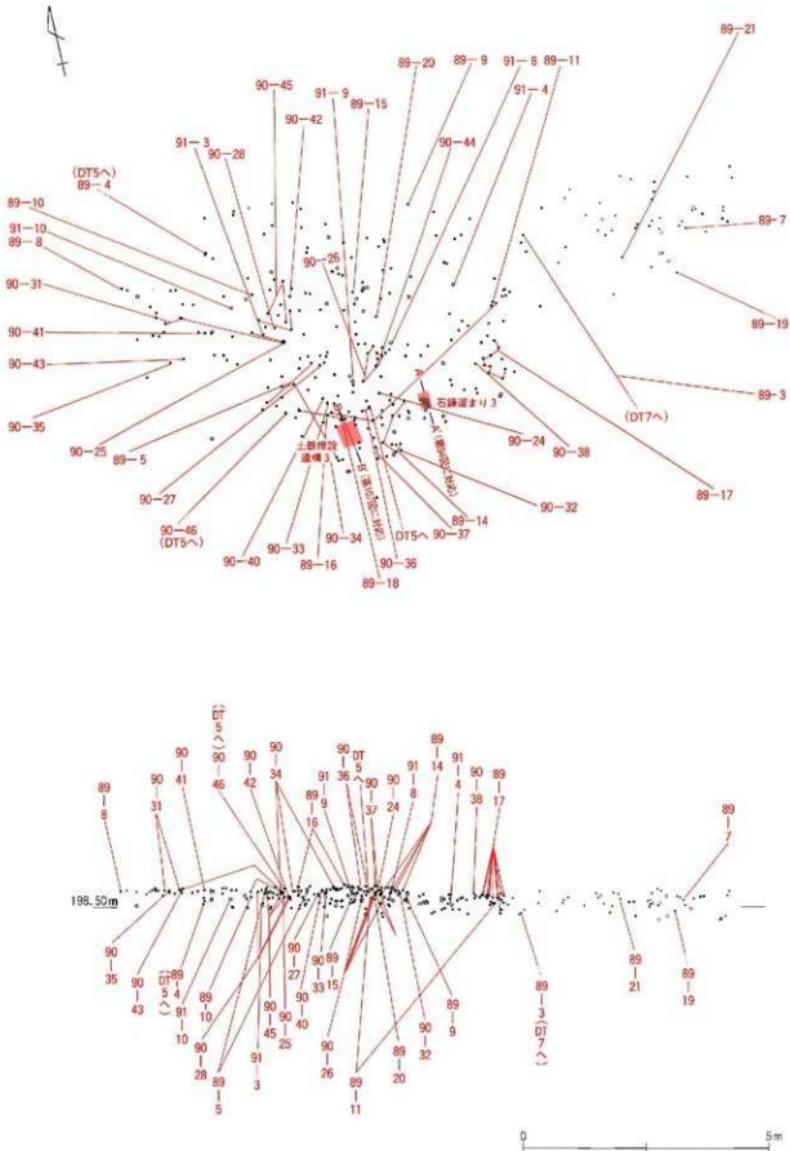
##### i) 土器溜まり6の遺物出土状況(第88図・写真図版20-1)

調査区北西部のA12・A13・B12・B13グリッドにわたって検出された土器溜まりである。南に隣接する土器溜まり7との境界は不明確で、一続きの土器溜まりと見ることも可能である。時期は崎ヶ鼻1式の古段階と判断される。ドットの集中度をみると、出土遺物の分布の中心は土器溜まりの南西寄りにある。土器溜まりの南端に浅鉢(第90図32~34・36・37)が、その少し北には深鉢(24~27)がまとまる傾向が看取できる。

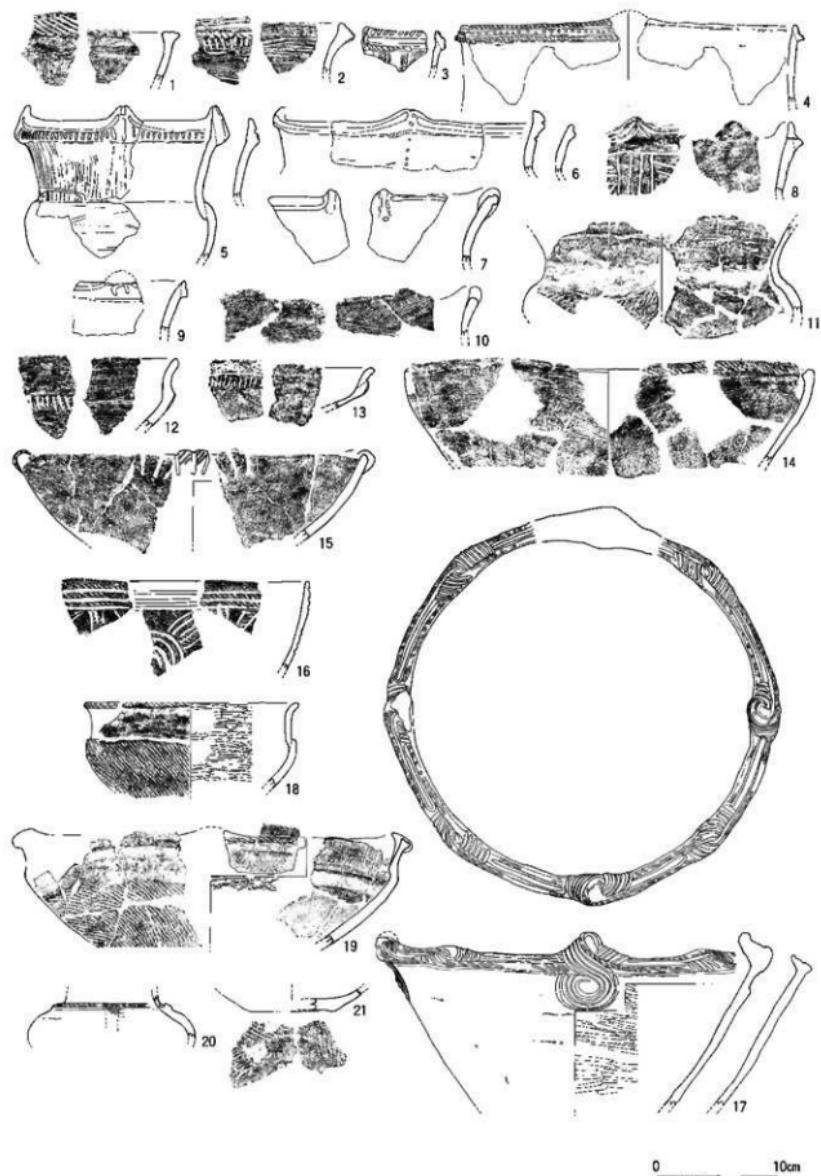
土器溜まり6の南西よりで、石錐溜まり3が検出されている。



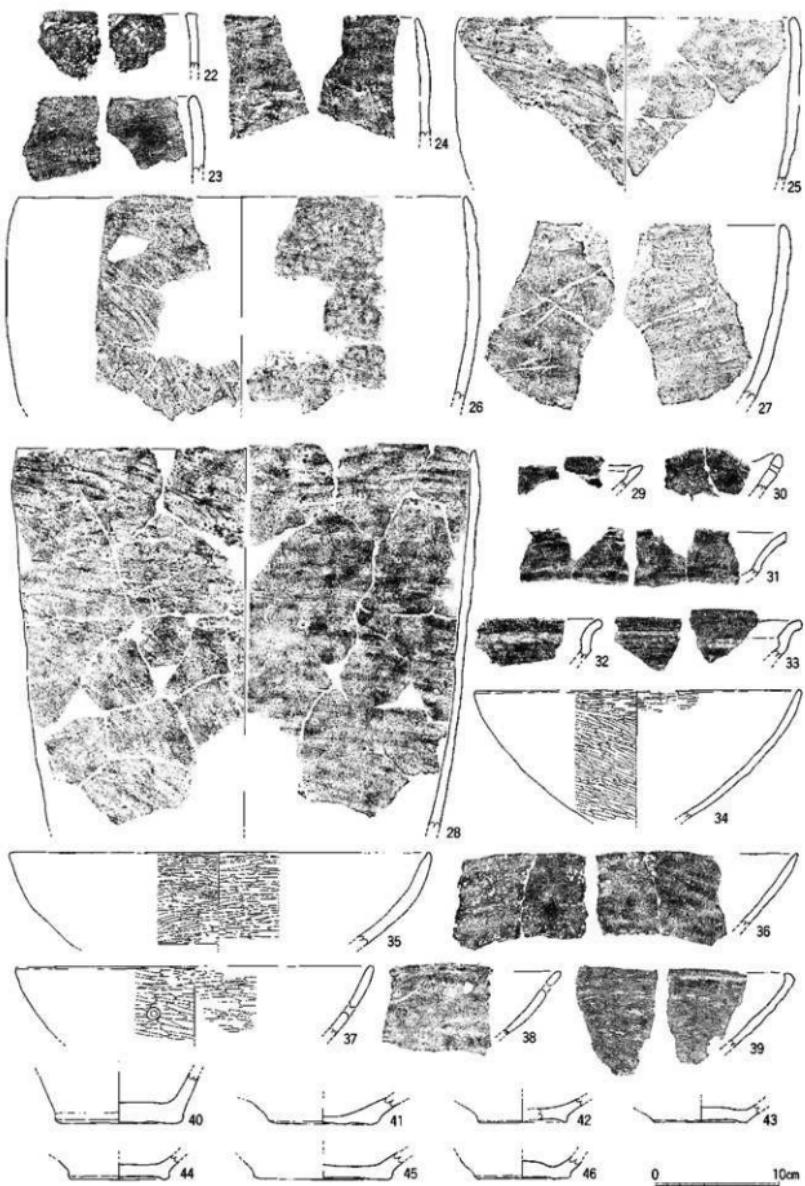
第87図 土器窯より5出土石器実測図  
(1~6: S=2/3, 7~15: S=1/3, 16: S=1/6)

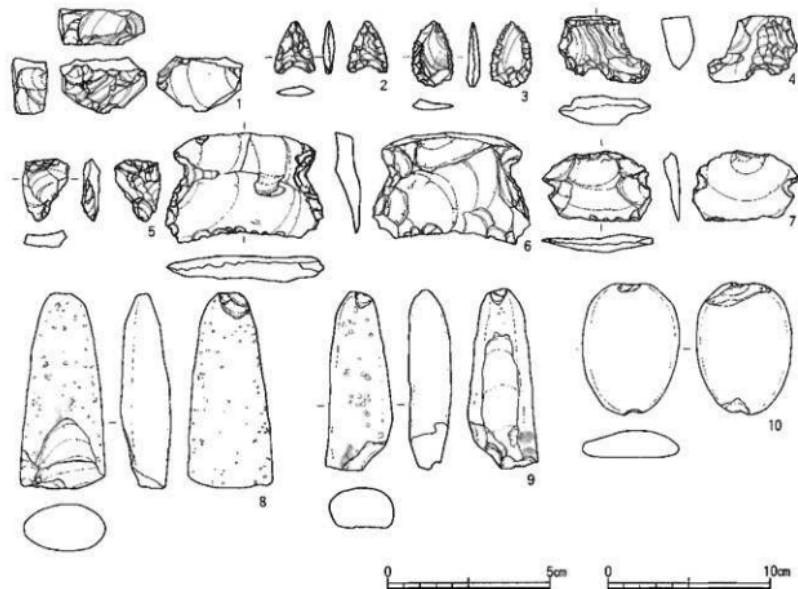


第88図 土器溜まり 6 遺物出土状況図 (S=1/100)



第89図 土器溜まり 6出土土器実測図（1）（S=1/4）

第90図 土器溝まり 6 出土土器実測図 (2) ( $S=1/4$ )



第91図 土器溜まり6出土石器実測図（1～7：S=2/3、8～10：S=1/3）

## ii) 土器溜まり6出土土器（第89・90図・写真図版66～68-1）

第89図1・2は上面施文の有文深鉢で、刻目が施される。3～5は口縁部文様帶に刻目が施される。6・8・9は外面を肥厚させ沈線文を施している。12・13は屈曲形有文浅鉢である。12はヘラ状工具で脇部側から口縁部へ向けて刺突し、後に達した時点で施文具を器壁から離している。14～17はボーラル形の浅鉢で、縄文を施すものが多い。17は口縁部上面に単節R L縄文を敷いた後に大きく肥厚させた渦巻文と入組文を交互に配している。完形に近い個体で、同一地点より一括して出土した。第90図22～28は無文深鉢で、口縁を面取りするもの（22）や丸いもの（23～28）がある。40～46は底部で、40・41は平底、42以降は凹底である。

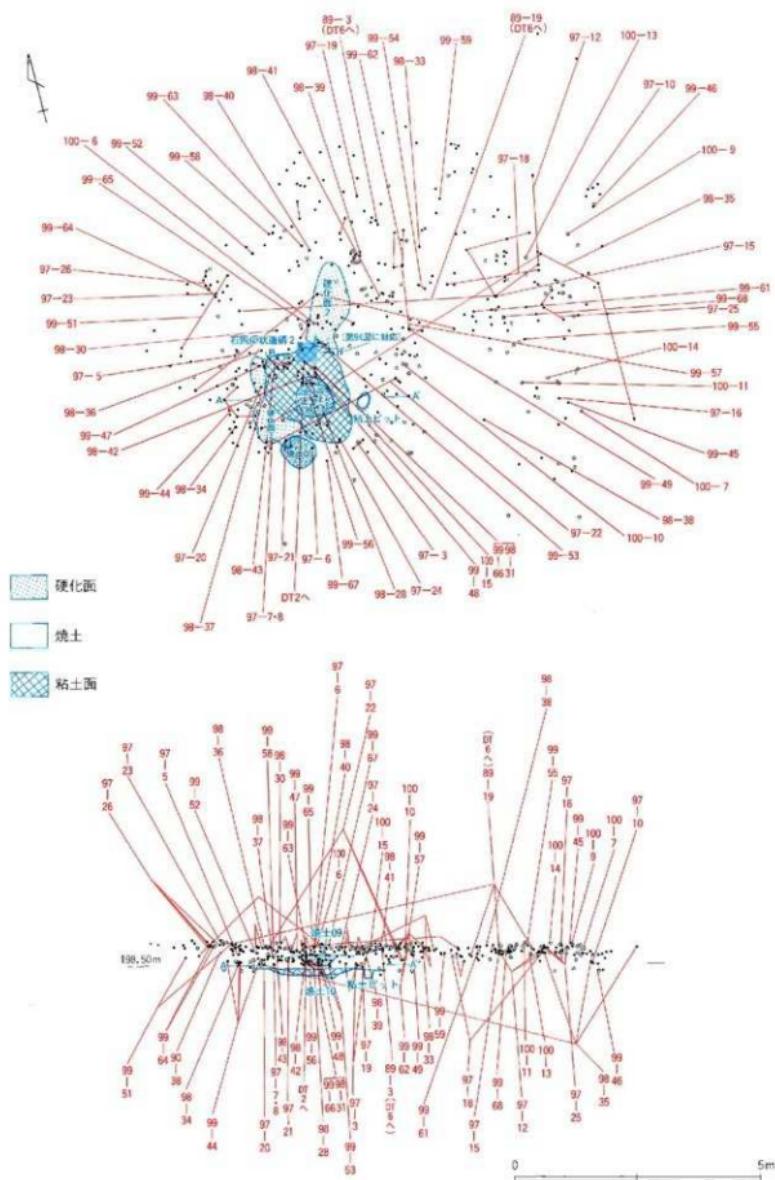
## iii) 土器溜まり6出土石器（第91図・写真図版69-1・2）

第91図1は黒曜石製の石核で、剥片を素材として、打面を転移しながら小型剥片を剥離している。4は黒曜石製の釣針型石器で、上面は折断されている。両極抜法によって整形された可能性がある。6・7はサスカイト製の抉入石器で、刃部は未加工である。8・9は磨製石斧で、いずれも刃部を欠損している。10は打欠石錘である。

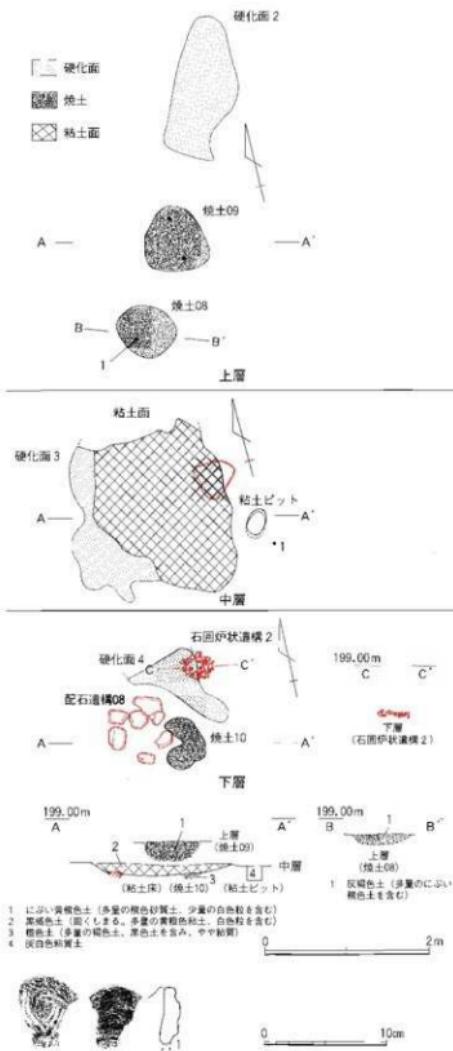
## 土器溜まり7

## i) 土器溜まり7遺物出土状況（第92図・写真図版20-2）

上器溜まり6の東のB13グリッドで検出された土器溜まりである。上器溜まり6と一続きの土器溜まりである可能性もある。崎ヶ鼻1式の占段階を主体とする土器溜まりである。有文無文を問わず、浅鉢の多くが土器溜まりの南西よりの部分から出土している。特にボーラル形の浅鉢（第97図20・



第92図 土器溜まり7遺物出土状況図 (S=1/100)



第93図 土器溜まり7直下の遺構（粘土面、硬化面2～4、  
焼土08～10、配石造構08）及び出土遺物実測図  
(遺構: S=1/60、遺物: S=1/4)

一部は被熱せず、黒色のまま残っており、これは焼土01の被熱の状況と共通する。

#### ・硬化面2（第93図）

B13グリッドの中央、焼土09の北で確認された、南北に細長い硬化面である。

21・第98図28・第99図53・56)は粘土床の範囲内に集中する。同じ位置から屈曲形の鉢も出土している(31)。一方、屈曲形浅鉢の分布は2箇所に分かれる。ポール形浅鉢の集中部の南に隣接する位置から22・24が出土している。粘土床の北西方向の一帯にも、屈曲鉢(23・26・51・52)が集中する。上記のような出土状況から、ポール形浅鉢や、屈曲形鉢を、器種ごとにまとめて廃棄したと推定される。

土器溜まり7の直下から、遺構が重層して検出された。最上層では北よりに硬化面2、南に隣接して径70cm前後の焼土2箇所（焼土08・09）が検出されている。中層では粘土床や粘土ピット、硬化面3が、下層では硬化面4、配石造構08、石窯炉状遺構2が検出されている。また、焼土09と重なる位置の下層には焼土10が確認された。

#### ii) 土器溜まり7直下の遺構

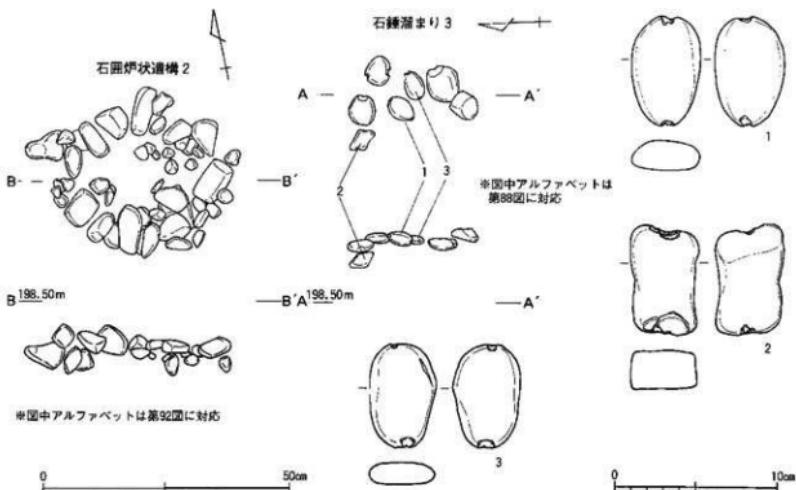
- ・焼土08（第93図、写真図版21-1  
(遺構)・69-5(遺物)）

B13グリッドの中央、土器溜まり8の南で検出された焼土である。平面形はおむね楕円形である。被熱の中心は西側で、東側は被熱が弱く、黒色土が残る。

時期は、出土した屈曲形深鉢(1)から、晴ヶ鼻1式に位置づけられる。

- ・焼土09（第93図、写真図版21-2）

B13グリッドの中央、焼土08の北で検出された。焼土09は中央部で最も被熱が強く、周縁部ほど被熱が弱くなる。焼土08・焼土09ともに、焼土の東端の



第94図 土器溜まり6・7直下の遺構（石圓炉状遺構2、石錐溜まり3）及び出土遺物実測図  
(遺構: S=1/10、遺物: S=1/3)

#### ・粘土面（第93図・写真図版21-3）

B13グリッドの中央、上記の2箇所の焼土面から25cm下位で確認された。南北1.8m、東西1.6mの範囲に数cm単位の淡黄色の粒が斑状に広がっていた。隣接する粘土ピットから、粘土の粒と判断したが、意図的に散かれたものか、何らかの作業の結果かは不明である。

#### ・粘土ピット（第93図・写真図版21-3）

B13グリッドの中央、粘土面の東方約20cmの位置で、粘土を充填した径約20cmの小ピットが検出された。南側の一部で断面袋状を呈していた。

#### ・硬化面3（第93図・写真図版21-3）

B13グリッドの中央、粘土面の西に連続するように広がっていた硬化面である。両者を合わせた範囲は一辺1.8m程度となる。粘土面と同じ高さ(198.45m)であることから、ひとつながりの床面として作られたことが推測される。

#### ・焼土10（第93図・写真図版22-2）

B13グリッドの中央、粘土面部分の粘土を取り除いた下位から、焼土09の直下に当たる位置で検出された。全体の平面形は径約60cmの円形と見られるが、西側の一部は焼土化せず、黒色のままの部分が扇形状に残る。被熱部分の厚さは検出面以下5cm程度しか認められず、焼土08や09に比べて被熱部分は薄い。すぐ南側からは、土器片が床面に貼り付くような状態で出土している（写真図版23-1）。焼土10（を含む生活面）が廃絶した際に床面に放置されたものと考えられる。

#### ・硬化面4（第93図・写真図版23-1）

B13グリッドの中央、焼土10の北側で確認された、不整形な硬化面である。北へも続いている可能性があるが、掘削してしまって不明である。この硬化面に対し、南側の焼土10や配石遺構08の検出レベルはわずかに下であった。

・石圓炉状遺構2（第94図・写真図版23-1・2）

石圓炉状遺構2はB13グリッドの中央、硬化面4の北端で検出された。硬化面の一部に穴を掘り、周囲の土と異なる黄色の土をつめこみ、5~10cm程度の細長い石を放射状に配置したものである。石圓炉と認識しているが、石が被熱していない点をはじめ、かど確定するには問題も残る。その下からは5cm以下の小砾が多数出土した。小さな円礫をドに、比較的大きな石を上に置く構造であったと見られる。

・石錐溜まり3（第94図・写真図版23-3・69-6）

B13グリッドの北西隅、土器溜まり6の東端近くから、7個の石錐が水平の状態でまとめて出土した。出土したレベルは、土器溜まり6よりはわずかに低く、焼土08・09や硬化面2の高さとはほぼ同じである。

・配石遺構08（第95図・写真図版24-3）

B13グリッド中央、焼土10の西に隣接する位置で、焼土10と同じレベル（198.3~198.4m）から検出された配石遺構である。いずれも底が平たく広い石を用いて、平面五角形ないしは円形を意識して並べているようである。石の底面のレベルは198.25m~198.30mの範囲内で、ほぼ水平にそろっている。下部土坑は確認されなかった。

iii) 土器溜まり6・7周辺の遺構（第95・96図）

・焼土11（第95図・写真図版24-1）

B12グリッドの東端、SK21と配石遺構09の中間位置で2箇所の焼土が検出された。焼土11は南北半分と西端の一部を掘削後に検出した。調査時には明確な線引きができるなかったが、最も被熱の強い中心部が淡橙色に変色し、中心から離れるに従い色調が暗くなる。変色していない部分も斑状に焼けの強い箇所が認められる。

・焼土12（第95図・写真図版24-2）

B12グリッドの東端、焼土11の南隣に位置し、焼土11よりも低いレベルで検出されている。最も強く被熱して鮮やかな橙色に変わっているのは焼土の中心ではなく、焼土の南西に偏った位置であった（写真図版24）。

・焼土13（第95図・写真図版25-1）

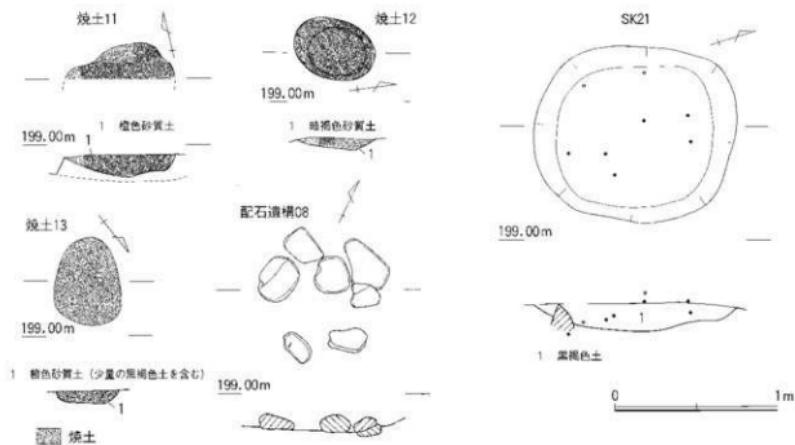
配石遺構09の上面で検出された。被熱の強かった中心部が鮮やかな橙色に変わり、周縁部は黒いままで残っている状況が読み取れる。配石遺構09と同じ面で検出された。

・SK21（第95図・写真図版24-4）

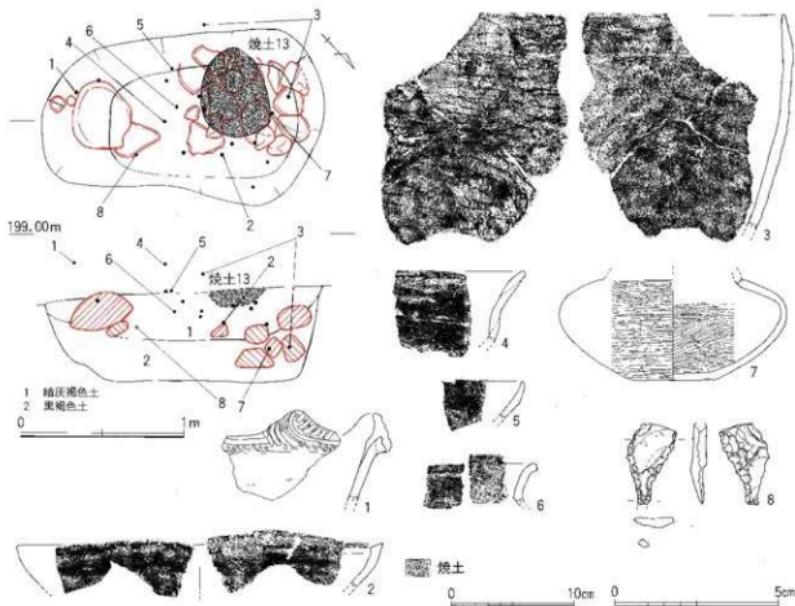
B12グリッドの東端、硬化面3から西へ2mの位置で検出された土坑である。平面形はやや南北に長い円形から隅丸方形である。現存部分の深さがわずか18cmの浅い土坑である。掘り下げ過程で埋土と周辺の土と区別できなかったため、本来の深さより浅くなったと推定される。北端、南端の断面形は緩やかである。

・配石遺構09及び出土遺物（第96図・写真図版25-1~3（遺構）、68-2・69-3・4（遺物））

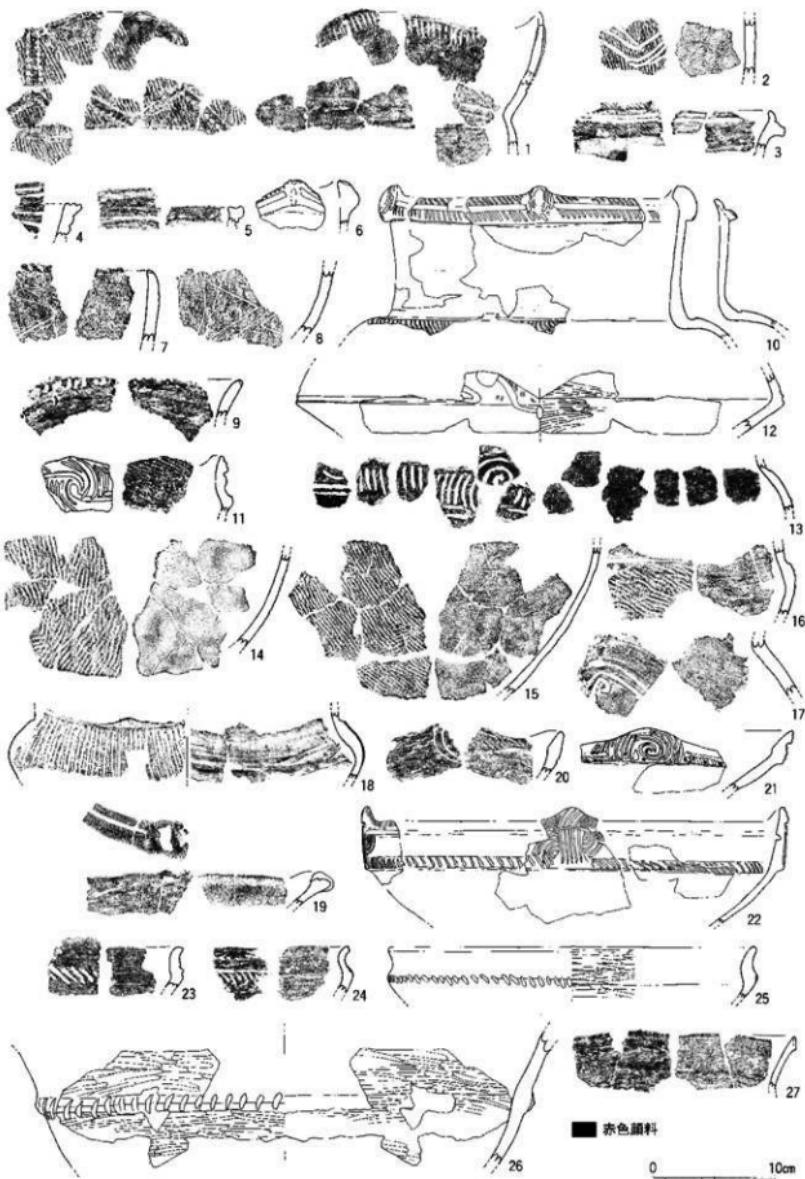
B12グリッドの北東隅、SK21から北西へ1.5mの位置で検出された配石遺構である。検出時は石がすべて下部土坑内に落ち込んだ状態であった。土坑の平面形は椿円形で、北東側と南西側の長辺は直線的である。埋土は2層に区分が可能であった。石が2層まで落ち込んでいる。配石は人頭大、拳大の石が多数、土坑の北西に偏った位置で確認された。一方、反対側の短辺近くには径40cm



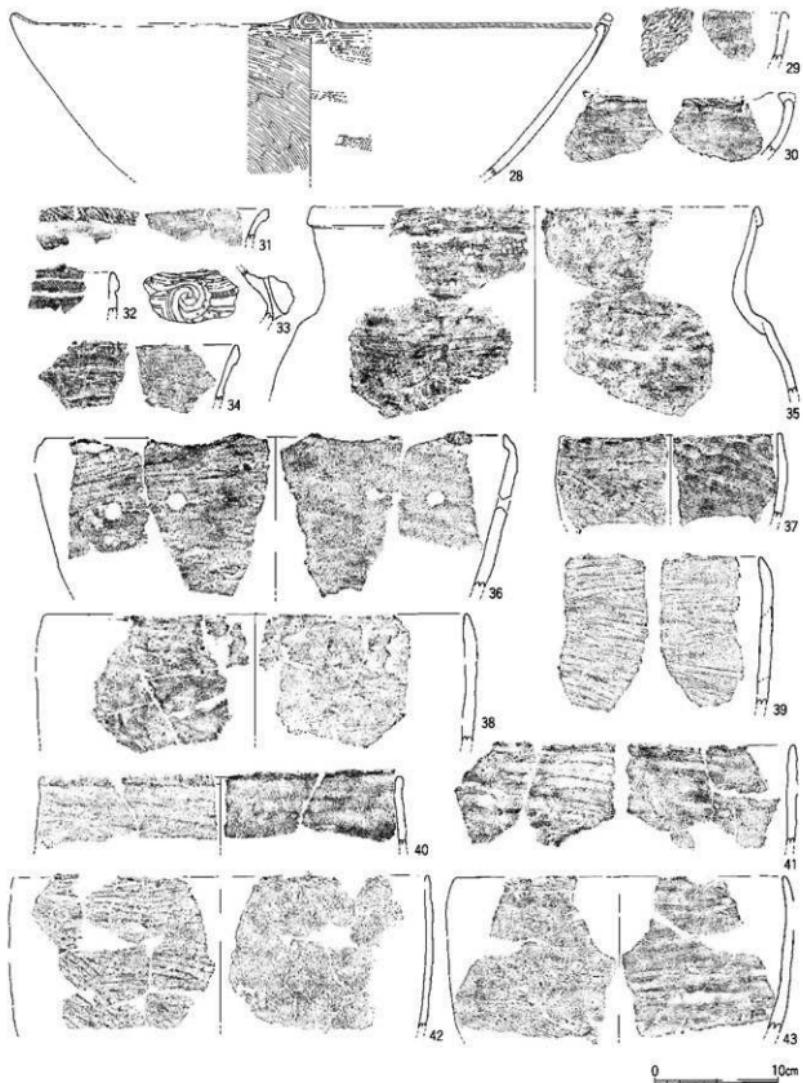
第95図 土器溜まり6・7直下～周辺の遺構（焼土11～13、SK21、配石造構08）実測図  
(S=1/30)



第96図 土器溜まり6・7周辺の遺構（配石造構09）及び出土遺物実測図  
(遺構: S=1/30、遺物1～7: S=1/4、8: S=2/3)



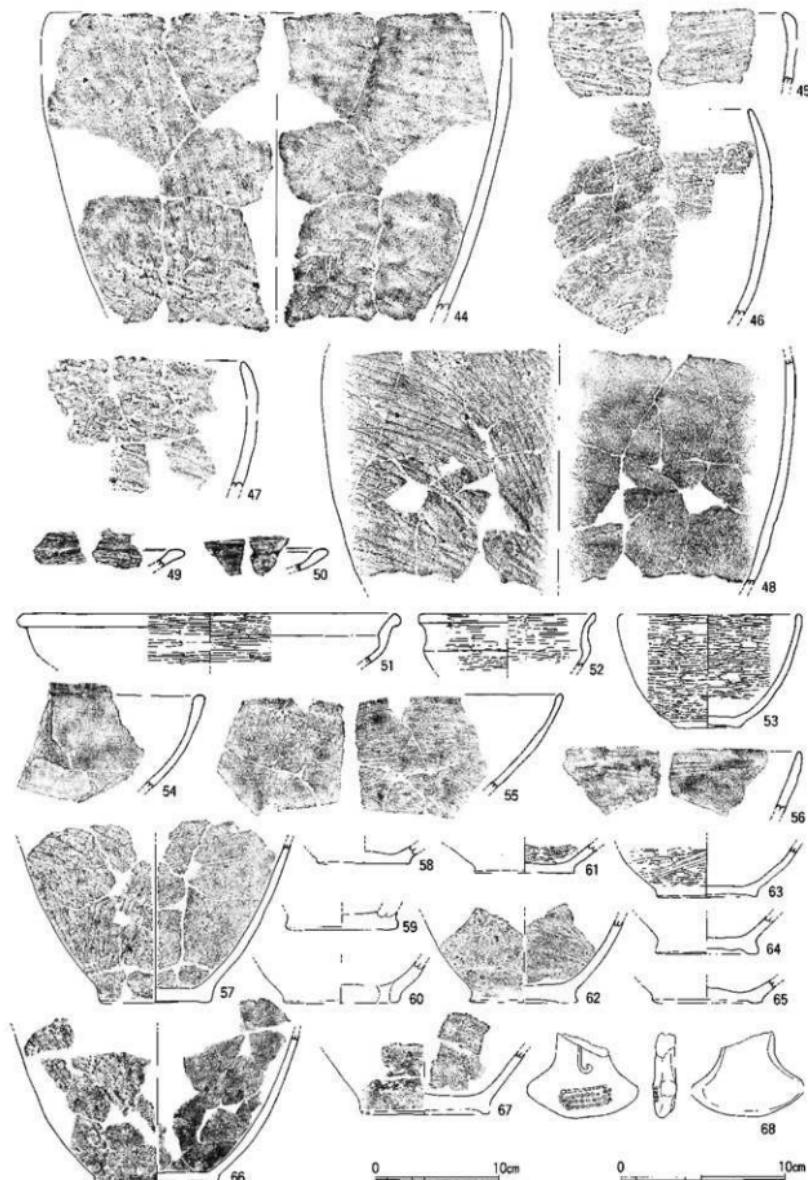
第97図 土器溜まり7出土土器実測図(1) (S=1/4)



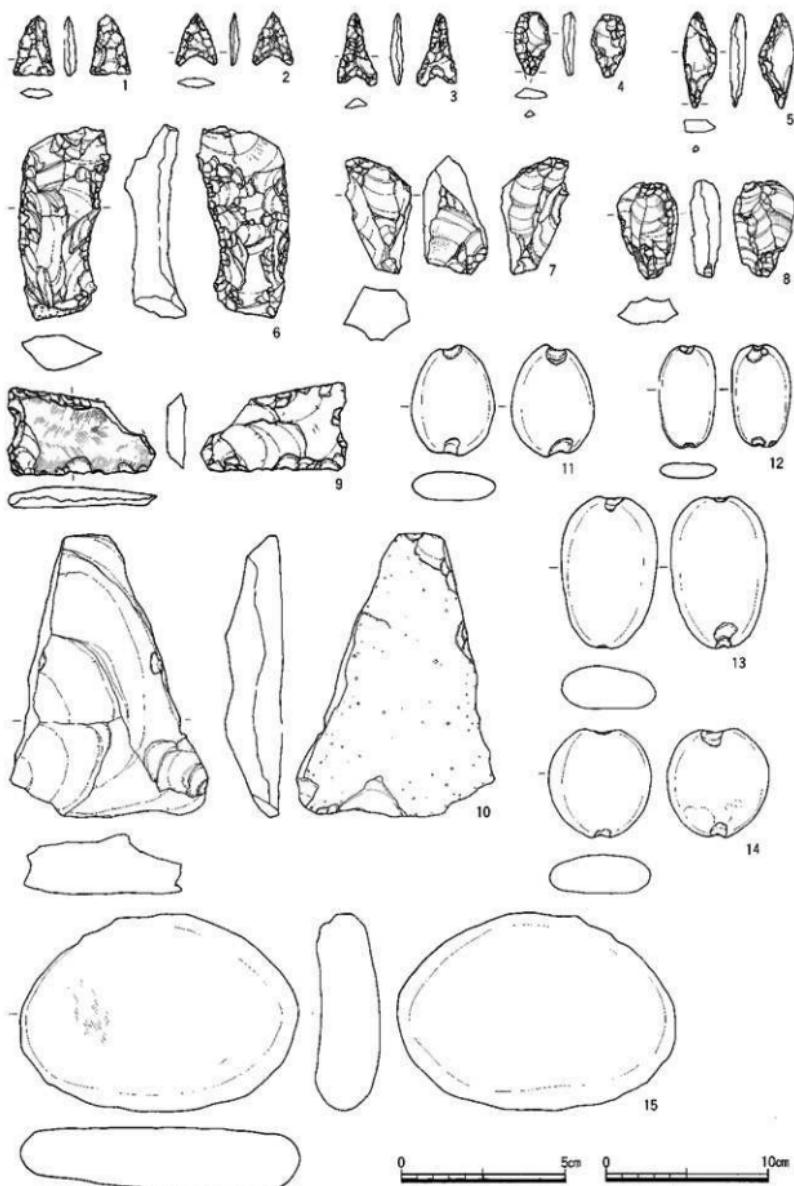
第98図 土器溜まり7出土土器実測図(2) (S=1/4)

の大型の石が出土した。川原石と見られる円碟がほとんどである。南京側の石に比べて、北西側の石はより深くまで落ち込んでいる。

配石遺構09の上面で焼土13が検出されている。配石が落ち込んだ後、土坑のくぼみに土が流入、堆積したことがセクションから判明する(第96図)。堆積土で土坑が完全に埋まった後、同じこの



第99図 土器溜まり7出土土器実測図(3) (44~67: S=1/4, 68: S=1/3)



第100図 土器溜まり7出土石器実測図 (1~9 : S = 2/3, 10~15 : S = 1/3)

場所で火が使用され、焼土化した部分が焼土13であると推定される。

F部土坑内からは土器・石器が一定量出土しているが、第96図1～6・8は1層から出土しており、石が土坑内に落ち込んだ後に、土坑内に流入してきた遺物である。下の2層から出土しているのは菅形土器1点のみ（7）であり、これが唯一配石遺構09に作る遺物と考えられる。出土遺物の中で時期が明瞭に判明するのは有文深鉢の口縁部（1）であり、土坑の廃絶時期は崎ヶ堀1式以前と考えられる。出土遺物は、有文深鉢（1）のほか、上面に縄文がつくポール形浅鉢（2）、内縛する無文深鉢（3）等がある。屈曲形鉢（4）は屈曲部及び口縁付近に粘土の接合痕が明瞭に残る。菅形土器（7）は全面ミガキ調整される。石器ではサヌカイト製の石錐（8）がある。

#### iv) 土器溜まり7出土土器（第97～99図・写真図版70～74-1）

外面に撫糸文の施された縄文時代中期（里木II・III式古～中段階）の深鉢が含まれる（第97図1・2）。3以降は縄文時代後期の土器である。6・10は口縁部を立体的に肥厚させ、刻目を施す。11は口縁外周に単節R L縄文を施した入組文を描き、内面にも縄文が認められる。12・13は林原遺跡の上器としては異質であり、特に12は算盤状に鋸く屈曲する胴部をもつ。これらの上器は四国の平城式に関連したものかもしれない（千葉豊氏の御教示による）。ポール形有文浅鉢（21）は有文深鉢と同様な口縁部文様帶をもち、口縁部に渦巻文が施される。22～27は屈曲形有文浅鉢であり、様々な方法で屈曲部外周に刻目をついている。24は屈曲部外周の先端を切るように刺突する。22・23・25は胴部側から口縁部側へ向けて竹管状の施文具により刺突し、屈曲部直上で施文具を止めて器壁から離している。22の口縁部主文様直下の刻目は、刺突した後に連続して渦巻き文を描いている。21や22は外面に赤色顔料を塗布している。大型のポール形浅鉢（第98図28）は、口縁部内面に円文とR L縄文を施している。34・35は屈曲形の無文深鉢である。残りのよい35は胴部と頸部、頸部と口縁部の粘土の継ぎ目が明瞭に残る。36～48は砲弾形の無文深鉢である。36は口縁端部を内側に折り曲げ、内面側に面を作る。口縁部が内縛するもの（44～第99図47）が比較的多く、いずれも器壁が厚い。無文浅鉢は皿形（49・50）、屈曲形（51・52）、ポール形（54～56）がある。底部は平底（58～61）、凹底（62・63）、高台底（64～67）が見られる。土偶（68）は正中線の下方に竹管状工具による多数の刺突が施される。中央部ほど厚く、下端は薄くなる。

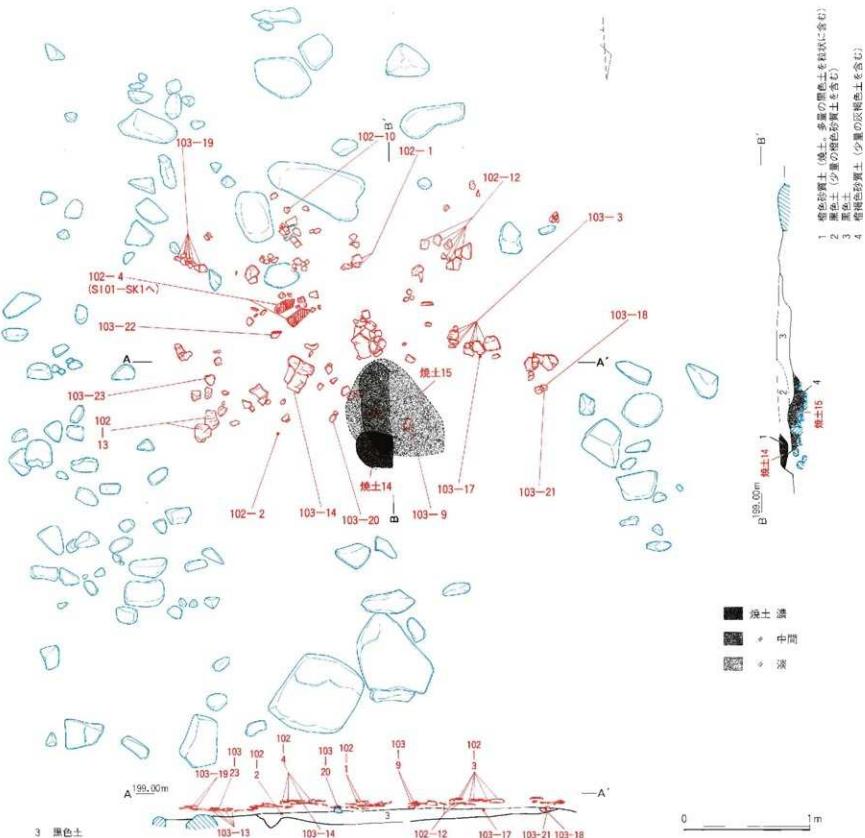
#### v) 土器溜まり7出土石器（第100図・写真図版74-2）

第100図1～3は石錐である。4・5は石錐で、4は先端部を欠損している。6～8は楔形石器で、このうち6は黒曜石製の縱長剥片を素材とし、長軸上に顯著な潰れが見られる。9はサヌカイト製の抉入石器で、一部欠損している。実測図左面に研磨痕が確認される。10は打製石斧の未製品と考えられる。両側縁を折断し、直接打撃によって整形している。11～14は打欠石錐である。15は右皿と思われ、実測図左面側がゆるく凹み、磨り痕が見られる。

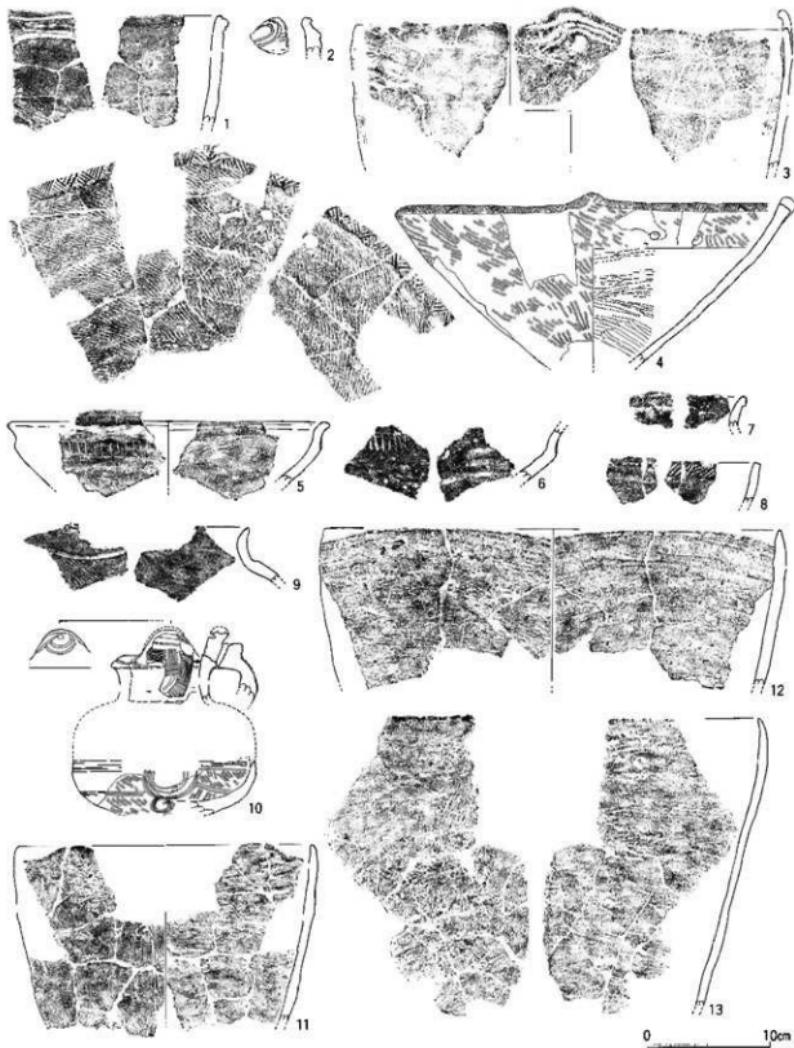
### 土器溜まり8

#### i) 土器溜まり8の遺物出土状況（第101図・写真図版26）

調査区南西寄りのE13・F13グリッドにかけて検出した土器溜まりである。調査区南東から北東にかけて帶状に川原石が露出しており、この川原石地帯から地山が砂地へ移る変換点に位置する。南北2m、東西3mの梢円形の範囲には川原石が無く、かわりに地山面上に厚さ約10cmの黒色土が堆積していた。黒色土上面はやや硬化していた。土器溜まり8の土器はすべて破碎され、黒色土の上に貼り付いた状態で出土している。本来は、もっと北へ伸びていたと思われるが、掘削してしまっ



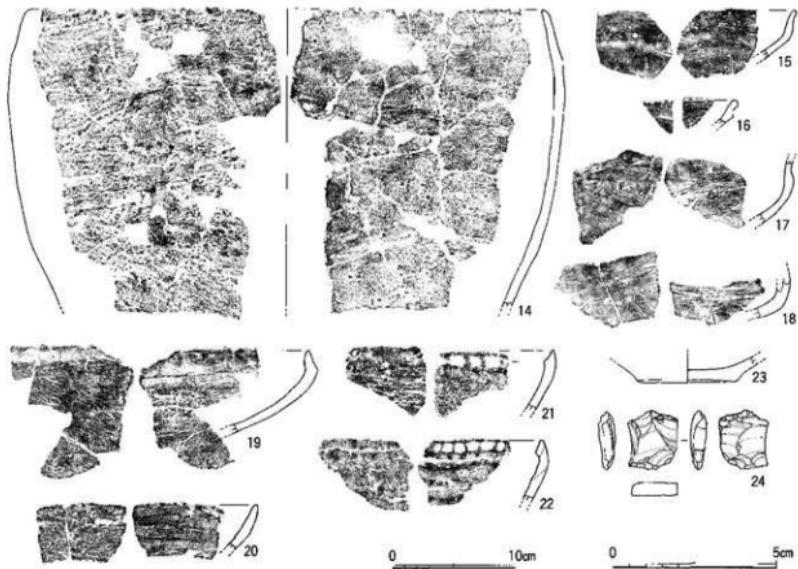
第101図 土器埋まり8遺物出土状況図 (S=1/30)



第102図 土器溜まり8出土遺物実測図（1）（S=1/4）

ため不明である。時期は崎ヶ鼻2式に属する。上器溜まりの北端では、黒色土の上に焼土14が検出された。焼土14や黒色土を除去した砂地上面では、焼土14の直下からは焼土15が検出された。

黄色～暗灰褐色の砂地上面で火が燃やされ、焼土化したのが焼土15であり、この高さが最初の生活面と推測される。焼土15が使用されなくなった後、この部分に黒色土が堆積したが、その直上で再び炉として使われて焼土化したのが焼土14である。そして、最終的にこの周辺に土器が廃棄され、



第103図 土器溜まり8出土遺物実測図(2) (1~23: S=1/4、24: S=2/3)

上器溜まり8を形成した。

#### ii) 土器溜まり8直下の遺構

##### ・焼土14(第101図、写真図版27-4・5)

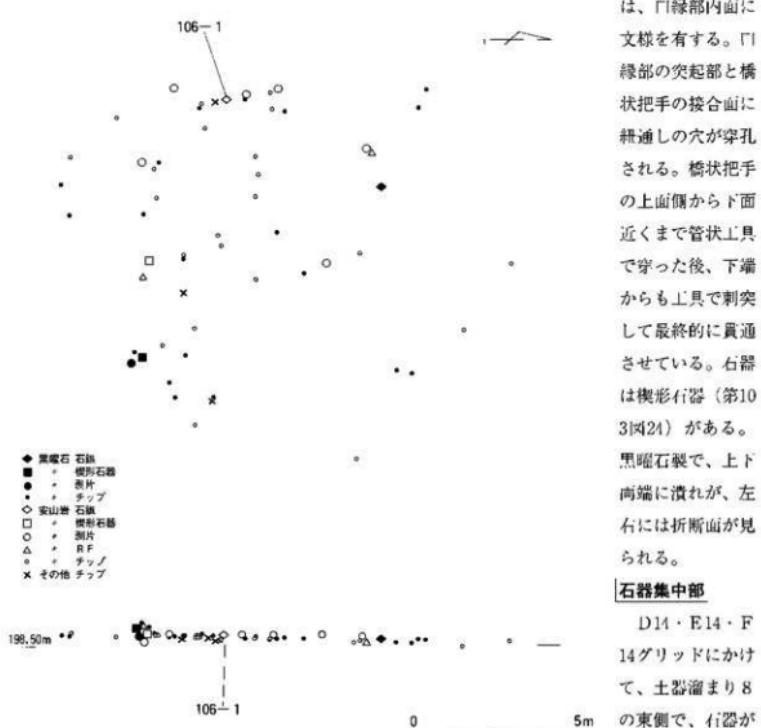
E13グリッドの南端で検出された焼上である。残存部分で径30cm程度であるが、調査過程で確認できず北端の一部を削ってしまった。焼土14・15とともに、西半分はサブトレンチ掘削時に破壊しており、上場の一部は炭化できなかった。焼上14の外側にも焼上がり薄く分布しており、焼上がり散乱したことをうかがわせる。

##### ・焼土15(第101図、写真図版27-4・5)

E13グリッドの南端、焼上14の直下で検出された焼上である。南北長65cm、東西長20cmの範囲が橙色を帯びていた。砂の下にある多数の小さな川原石も被熱し、赤変していた(写真図版15-4)。

#### iii) 土器溜まり8出土遺物(第102図・写真図版75・76-1)

第102図1と3は砲弾形の粗製深鉢に文様が施されたもので、1は口縁部上面に横走沈線、3は波頂部内面に山形文を描く。2は屈曲形有文深鉢の口縁部主文様と思われる。屈曲形有文鉢(5)は、刻日の原体が細いヘラ状施文具となる。ボル形浅鉢(8、第103図19~22)では、口縁部内面に加工されるものが目立つ。8の口縁端部内面には繩文、21・22の口縁端部内面には指オサエの痕跡が見られる。22は端部に粘土を貼り足して肥厚帶を作り出している。内外面とも、粘土の継ぎ目が調整で消されないまま器面に残っている。口縁端部外面に内容物の吹きこぼれが付着しており、何らかの形で調理に使用されている。19は口縁部・胴部間に粘土の接合痕が観察できる。胴部内面は、口縁部に近い方が粗いナデ、底部側は丁寧なミガキと調整が区別されている。竪形有文鉢(10)



第104図 石器集中部1遺物出土状況図 (S=1/150)

時期は他の土器溜まりとの位置関係から縄文後期前半ころと思われる。水田削平部分の下にわずかに残る黒色土層（第6図の0d層及び1層）から出土している。黒色土層を掘り下げるときに地山に到達し、川原石多数が顔を見せる。これらを石器集中部1・2・3として報告する。

このほか、整理作業の過程で、土器溜まり2の東側や、土器溜まり2と土器溜まり6の中間でも石器が集中的に出土していることが注意された。

#### i) 石器集中部1（第104図）

D14グリッドからE14グリッド北半分に広がる。出土石器類は黒曜石が27点で18.8g、サヌカイトが34点で27.7g、安山岩が4点で1.7g、水晶が1点で1.6gであった。器種の内訳は、黒曜石が石鉋1、横形石器1、R.F.1、剥片・チップ24、サヌカイトが石鉋1、横形石器1、R.F.2、剥片・チップ28、安山岩と水晶は全て剥片・チップである。

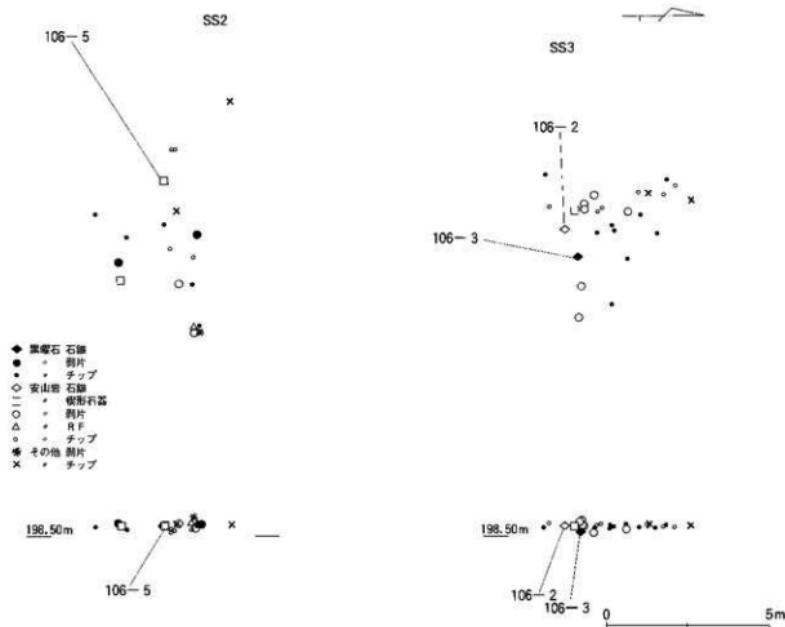
石鉋や横形石器など安山岩製品の付近には剥片あるいはR.F.が伴う。製品・剥片とも石器集中部の西（土器溜まり8寄り）にまとまる傾向が見られる。石器集中部の南東隅には黒曜石の横形石器と剥片、およびチップも近接して出土している。この方向の約2m先にSK18（黒曜石貯蔵穴）が

は、口縁部内面に文様を有する。口縁部の突起部と橋状把手の接合面に縦通しの穴が穿孔される。橋状把手の上面側から下面近くまで管状工具で穿った後、下端からも工具で刺突して最終的に貫通させている。石器は楔形石器（第103図24）がある。

黒曜石製で、上下両端に潰れが、左右には折断面が見られる。

#### 石器集中部

D14・E14・F  
14グリッドにかけて、土器溜まり8の東側で、石器が集中的に出土する一角が見られた。

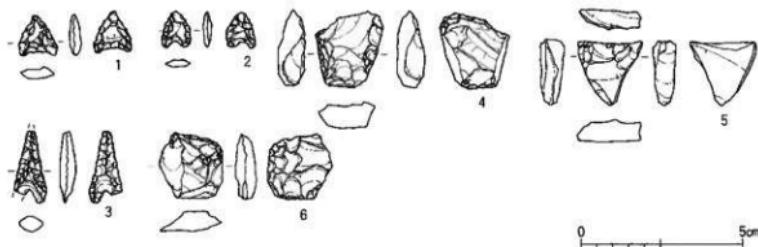


第105図 石器集中部2・3遺物出土状況図 (S=1/150)

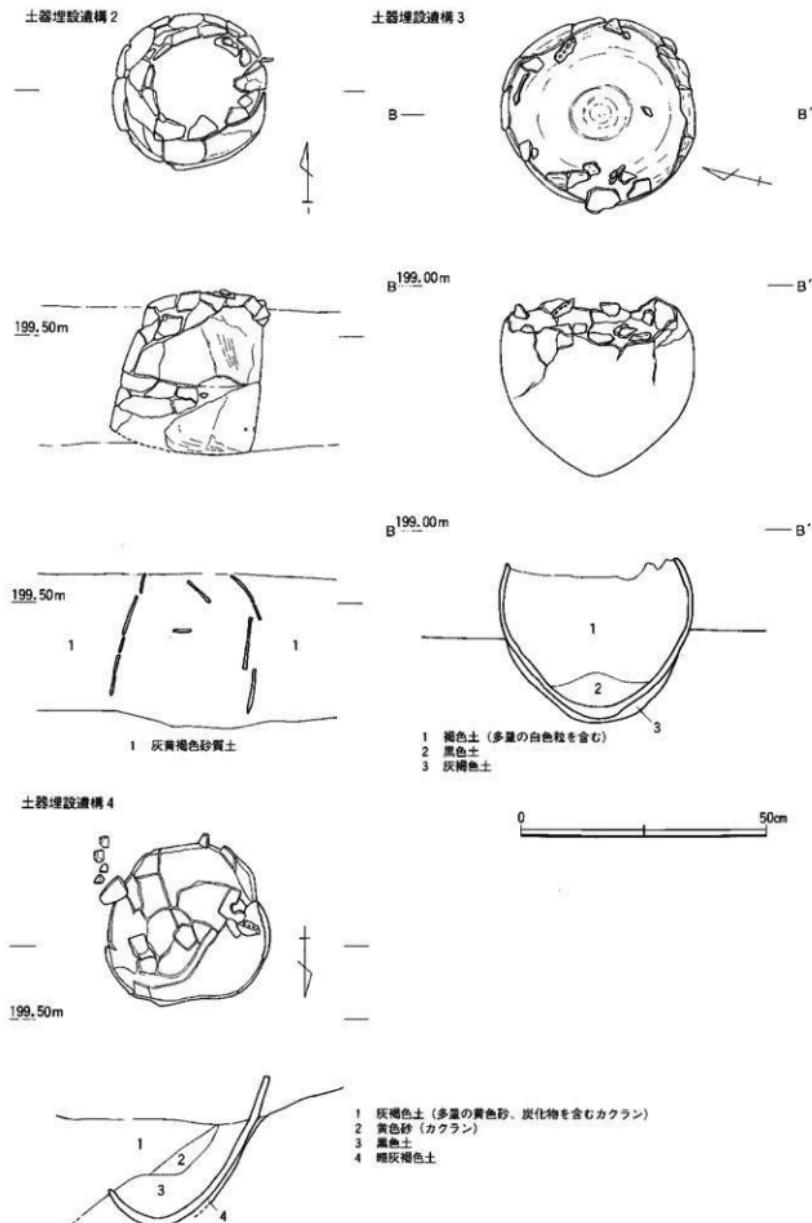
確認されており、石材の貯蔵穴に近い場所で黒曜石の加工を行なったと推定される。

#### ii) 石器集中部2 (第105図)

E14・F14グリッドの東半分に分布する。石器集中部1の南側のグループである。出土石器類は黒曜石が8点で2.9g、サスカイトが16点で15.4g、安山岩が3点で5.3g、その他の石材が1点で4.7gであった。器種の内訳は、黒曜石が全て剥片・チップ、サスカイトが楔形石器4、R F 1、剥片・チップ10、安山岩とその他の石材は全て剥片・チップである。



第106図 石器集中部1~3出土石器実測図 (S=2/3)



第107図 土器埋設遺構 2～4 実測図 (S=1/10)

## iii) 石器集中部3(第105図)

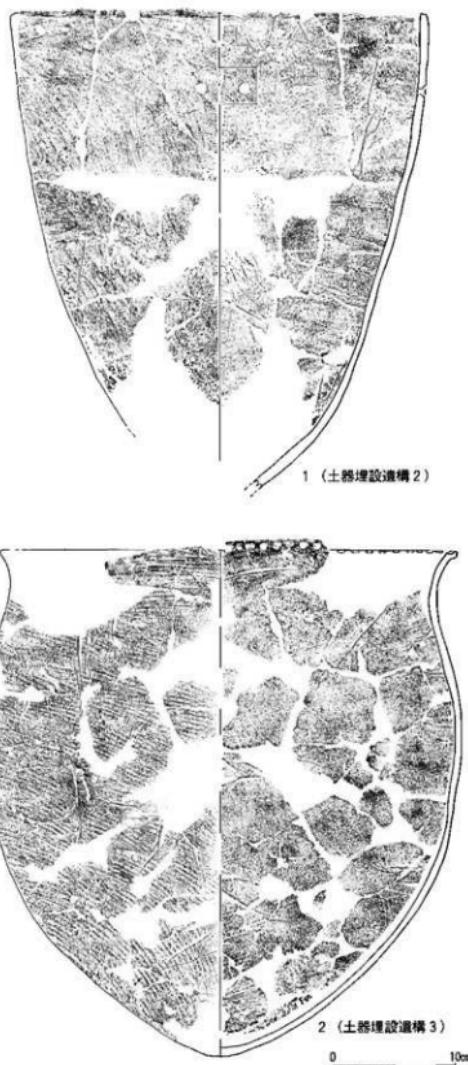
E14・F14グリッドの西半分に分布する。石器集中部1の南西に位置するグループである。出土石器類は黒曜石が10点で2.2g、サヌカイトが18点で20.6g、安山岩が1点で0.5g、であった。器種の内訳は、黒曜石が右歯1、剥片・チップ9、サヌカイトが右歯1、楔形石器3、剥片・チップ14、安山岩はチップのみである。安山岩の製品・剥片・チップがよくまとまっている。黒曜石も製品とチップが一箇所に集中しており、この場で安山岩製や黒曜石製の石器が製作されたことが顯著に読み取れる。土器渦まり8の東に隣接するという位置関係から、土器渦まり8との関係が推定される。

## iv) 石器集中部1~3出土石器(第106図・写真図版76-2(遺物))

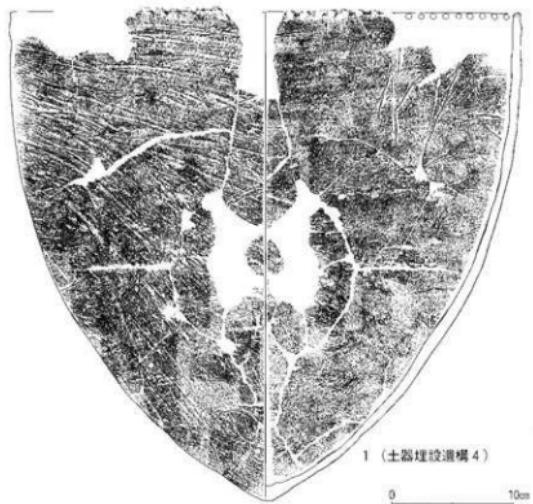
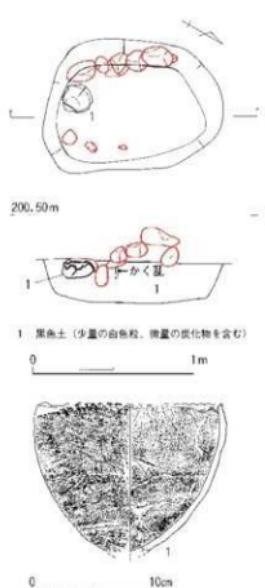
第106図1~3は右歯である。1・2はサヌカイト製で、中央に素材面を残す。3は黒曜石製で、先端部と基部を欠損している。4~6はサヌカイト製の楔形石器で、5は上面の半坦面より加撃を行なっている。側縁に裁断面が見られる。

## 土器埋設遺構2(第107図・第108図-1・写真図版28-1(遺構)・76-3(遺物))

S I 01の南方3mで検出された、縄文後期と見られる土器埋設遺構である。上端が検出されたレベルは199.60mである。口縁をまっすぐドへ向けた逆位の状態で埋設されている。底部は、検出面より上の部分がほぼ水平に欠損しており、底部を打ち欠いた状態で埋設されたと思われる。土器埋



第108図 埋設土器2・3実測図(S=1/4)

第109図 埋設土器4実測図 ( $S=1/4$ )第110図 配石遺構10及び出土遺物  
実測図  
(遺構:  $S=1/30$ 、遺物:  $S=1/4$ )

設遺構の掘り形は、識別できなかった。

埋設されていた土器は、口縁部が直立から外傾する砲弾形の無文深鉢である。口縁端部は面取りされており、外面は粗くナデ調整が施される。口縁部下方の補修孔は、外面と内面の両方から、先の細い工具で穿たれている。

### 3. 繩文時代晩期の遺構

**土器埋設遺構3** (第107図・

第108図-2・写真図版77-1

3(遺物))

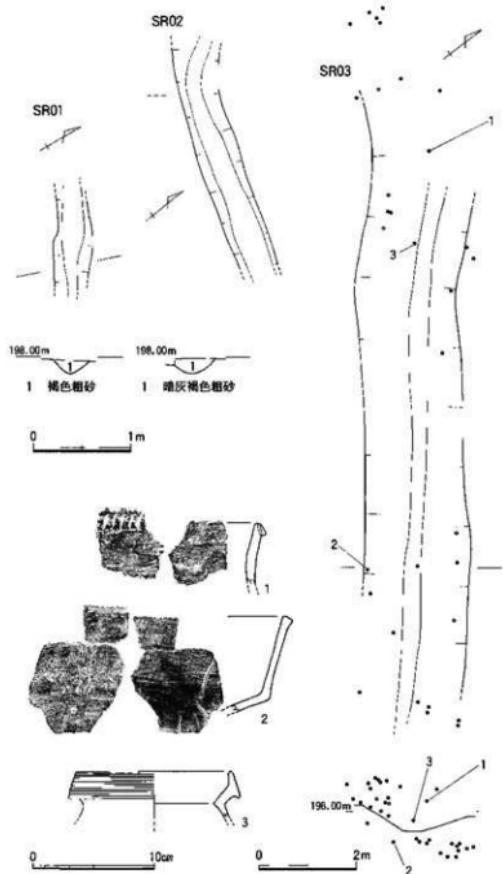
B13グリッド杭の南に接する位置で検出された。繩文後

期に属する土器溝まり5のはば中央を切って埋められている。掘り形は断面でのみ確認された。暗灰褐色土～黒色土の地山に、土器とほとんど変わらない大きさの穴を掘り込んで、埋められていた。土器の外面に沿うように、厚さ1cmばかりの灰褐色土層が確認され、これが土器埋設遺構の掘り形の埋土であった可能性がある。

埋設されていた土器は、頸部から口縁部がゆるく外反する無文深鉢である。端部の内面側から連続的に刺突されることにより、外表面に粘土が飛び出して瘤状突起の列ができている。底部は尖底である。外面は全面条痕調整され、内面の下半部にも一部条痕が残る。外面の底部付近と、底面から13～18cmの高さにリング状にススが残る。内面には底部から上1.7～12cmの位置にリング状にコゲが残る。繩文晩期中葉の深鉢である。

**土器埋設遺構4** (第107図・第109図-1・写真図版28-2(遺構)・77-4(遺物))

G13グリッド北端で、トレンチ掘削時に調査区南端付近で検出した。この土器埋設遺構を境に東側は削平され、水山化されていた。この土器埋設遺構も、削平時に東半分が欠損している。周囲は川原石の多い場所だが、土器を埋置する際にはこの川原石の一部が取り除かれていた。明瞭な



第111図 S R01~03及び出土物実測図  
(遺構SR01・02: S = 1/50、SR03: S = 1/100、遺物: S = 1/4)

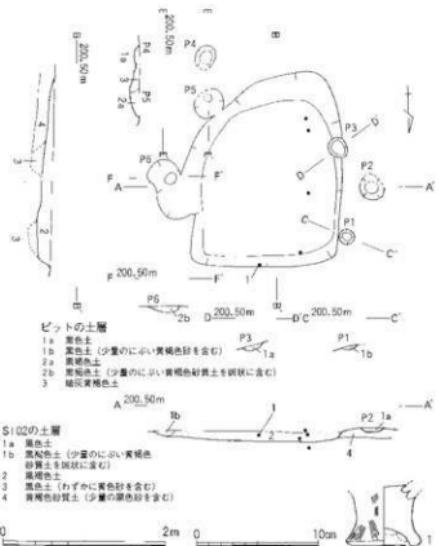
引く。断面形は南端・北端とも側壁の立ち上がりが明瞭であるが、北端はやや傾斜が緩くなっている。7個の配石のうち最も南よりの石の内側に接して、土器が北東側へ横転した状態で出土した。土器の上部が半分程度欠損しているのは、土坑上部を削平されたときに一緒に削られたためである。出土した土器は、浅く半球形に近い砲弾形の無文深鉢である(第110図1)。底部は尖底と推定される。口縁部は直立し、端部には内面側上方から連続刺突により刻目がつけられる。外面の一部に条痕が見られる。器形・文様・調整がいずれも埋設土器4(第109図1)と酷似しており、埋設土器4を小型にしたような器形である。

掘り形は検出できなかったが、土器の外面に沿って締まりの悪い暗灰褐色土が一部確認された。これが掘り形の土の可能性がある。

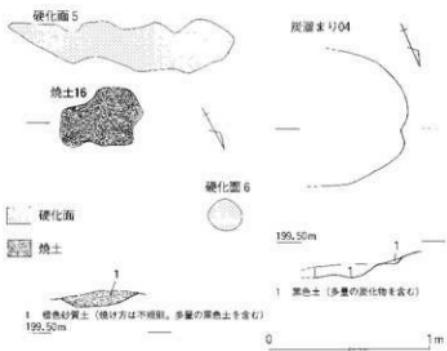
埋設されていた土器は砲弾形の深鉢で、明瞭な尖底をもつ。口縁部は直立し、端部には内面側上方からの連続刺突による刻目がつけられる。外面はナデ後ハケメ状の条痕調整がなされている。これらのことから、縄文晩期中葉に帰属すると思われる。

**配石遺構10** (第110図・写真図版28-3(遺構)・77-1(遺物))

G10グリッドの東より、S I 02の西側で、配石遺構12と隣り合って検出された。配石は、下部土坑の検出面上方12~22cmから、20cm以下の小さい石が7個確認された。石は南北方向に直線的に並んでおり、北から南へ向かって石の出十レベルが階段状に低くなっている。検出面上よりも上で出土していることから、本来の土坑の掘り込み面はこの石の高さであった可能性が高い。土坑の平面形はおむね楕円形である。長軸に並行する東辺と西辺が直線的である点が注意を



第112図 S I 02及び出土遺物実測図  
(構造: S = 1/60、遺物: S = 1/4)



第113図 硬化面 5・6、焼土 16及び炭溜まり 04実測図  
(S = 1/30)

南東隅及び西辺は検出時から輪郭が不明瞭であった。P 2・4・5はS I 02の上場の外側に位置し、S I 02に伴うピットか否か不明である。ただし、調査時に残っていた掘り形部分が浅かったことから、住居の規模は現状より深く、平面的にもピットの検出位置まで広がっていた可能性がある。南北セクションによれば、平面図に明示した以外にもピットが存在した可能性が高い。畦を除去後、落ち込み付近の精査を行なったが、明確なピットの平面形は確認できなかった。

出土した土器の高窓（第112図1）は脚部が中実で低く、古墳時代後期のものに似る。外間に

#### 4. 弥生時代の遺構

S R 01~03 (第111図・写真図版77-1)

##### 5 (遺物))

調査区北東隅のA 14・A 15・B 14・B 15グリッドで3条の溝状遺構を検出した。砂地のため崩壊が進行し、輪郭の検出も困難であった。南東から北西へ、斐伊川旧河道の川岸にはほぼ沿った方向にのびる。西端近くは平面形が不明瞭となる。斐伊川の旧河道にはほぼ沿った方向であることから、斐伊川が幾筋かに分流していたうちの一一本であった可能性が高い。3本とも同じ面、レベルで検出されているので、同時期の流路と推測される。

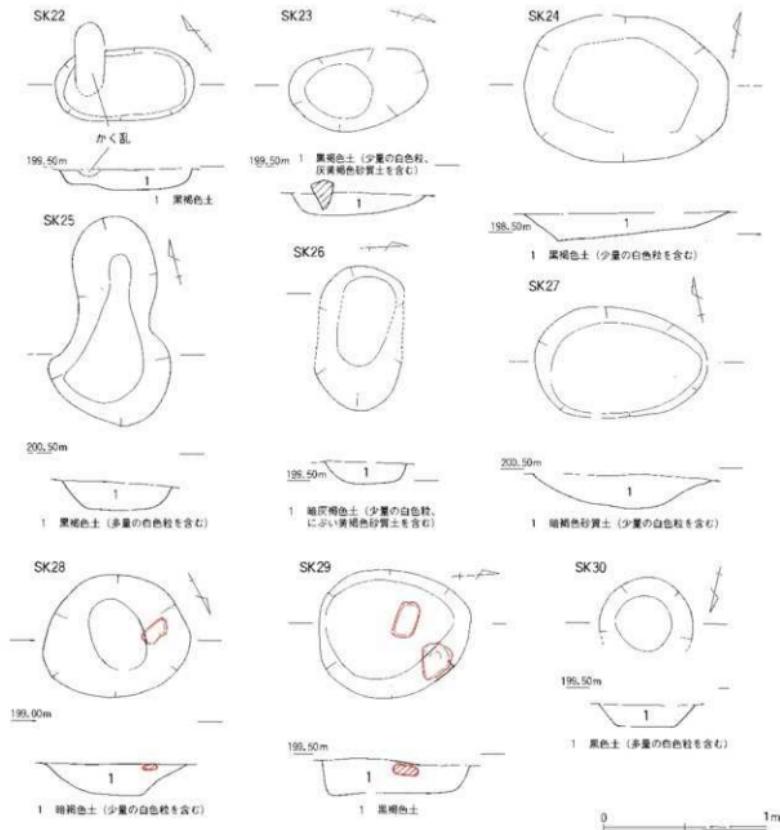
S R 03の上方からは純文晩期の突帯文土器（第111図1）が、遺構面下の砂地からは縄文後期のバケツ形浅鉢（2）が出土した。また、底面近くから弥生後期の土器片（3）が出土しており、出土遺物の中で最も時期が新しいものである。この遺物から、S R 03は弥生後期の遺構と考えられる。

#### 5. 古墳時代以降の遺構

S I 02 (第112図・写真図版29・30-1)

##### 1 (構造)、77-2 (遺物))

調査区南端のG 11グリッド南端で検出した。ごく浅い掘り込みの竪穴住居である。平面形は、東西1.8m、南北2.3mの方形を志向しているように見えるが、南京隅のみ方形にならない。



第114図 SK 22~30実測図 (S=1/30)

はわずかにハケメが残る。このほか、周辺から古墳時代後期の上師器の瓶や須恵器が出土していることから、古墳時代後期の建物である可能性が高い。

#### 焼土16・硬化面5・硬化面6 (第113図・写真図版30-2・3)

調査区南端のG12グリッド中央で検出した硬化面2箇所と焼土1箇所である。これらはほぼ同じレベルから検出されており、焼土は硬化面に伴うものであろう。2箇所の硬化面は一続きで、その上で火が使用されて焼土化したと推定される。

焼上の被熱変色は、火が使用された中心部分から外へ離れるに従って薄くなっていくはずである。焼土15はこれに反して、片隅の被熱が最も強い。おそらくこの部分が被熱の中心で、それより硬化面に近い部分は失われているのであろう。これら硬化面や焼土の直上ではないが、古墳時代後期の上師器壺の口縁部 (第119図81・82) や須恵器の壺の底部 (89) がまとまって出土している。従つ

て、これらの硬化面や焼け土も古墳時代後期に属する可能性が高い。

#### 炭溜まり04 (第113図)

G13グリッドの西端に位置する炭溜まりである。平面形は円形であったと見られるが、東半分は水田造成時の削平のため現存せず、現状は半円形であった。炭が堆積していた厚さは2cm~8cmと薄い。硬化面5、6、焼土15と位置的に近いこと、また、土築器や須恵器の出土位置と炭溜まりの分布域がおおむね重なることから、同時期の古墳時代後期の遺構と思われる。

#### 6. 時期不明の遺構

##### S K22 (第114図)

E12グリッドの北西よりで検出された。平面形は長楕円形で、断面形は側壁の立ち上がりがはっきりしている。中軸線は真北から約45度西へ振れている。北西端はかく乱を受けている。上方で配石遺構15が検出されているが、S K22が配石遺構15に伴うか否か確定できなかった。

##### S K23 (第114図)

D12グリッドの北より、配石遺構17の東に隣接する位置で検出された。平面形は長楕円形で、断面形はすり鉢状である。長軸はおおむね南北方向である。長軸の南端に径12cm以上の礫が1個残る。隣接する配石遺構17との関係では、配石に対してS K23が西へずれている。

##### S K24 (第114図)

D14グリッドの北端の、川原石が広がる地帯で検出された。平面形は楕円形で、断面形は東に対して西側の底面がわずかに低くなる。長軸はほぼ東西方向である。

##### S K25 (第114図)

F11グリッドの北西よりで検出された。平面形は不整形で、断面形は側壁の傾斜が緩い。2つのピットが切り合っている可能性もあるが、長軸方向のセクションを測っていないため確認ができない。

##### S K26 (第114図)

E12グリッドの西端で検出された。サブトレンチで短軸側の断面形が確認されたのを契機に検出した。長楕円形に復原しているが、サブトレンチで中央部を損なっていることもあり、正確な平面形は不明である。

##### S K27 (第114図)

F10グリッドの南西隅で検出された。平面形が長楕円形で、断面形はすり鉢状で下場の確認が困難であった。

##### S K28 (第114図)

C13グリッドの東端で検出された。平面形は東西方向がやや長い不整形で、断面形はすり鉢状である。周辺の遺構が削平されて消滅している中で、S K28のみ残存していたのは、他の遺構に比べて深く掘り込まれていたことによると思われる。

##### S K29 (第114図)

E12グリッドの北西隅、S I01のすぐ南で検出された。平面形は南北にやや長い不整形である。断面形は底面が平らであり、かつ側壁の立ち上がりも急角度でしつかりしている。検出面で、上場近くに大小各1個の石が確認された。さらに上坑を掘り下げていくと、中央付近の埋土中から

も半たく薄い直方体状の石が出土した。

#### 【SK30】(第114図)

G12グリッドの北東隅、配石遺構11のわずかに北から検出された。断面形は底面から側壁にかけて曲線的に緩く立ち上がっている。立ち上がりから推定すると、平面規模は検出時よりも大きかった可能性が高い。上方の隣接する位置に配石遺構14があり、同配石遺構の下部土坑であった可能性がある。配石遺構14検出面から灰黄褐色沙質土上面（SK30検出面）まで埋土と同質の黒色土（1層）が30cmの厚さで堆積していたため、検出できなかったと考えられる。

#### 【配石遺構11】(第115図・写真図版31-1)

C12グリッドの南東よりで検出された。扁平な板石1個と細長い角柱状の石2個が南北方向に一列に配される。石の位置は土坑の中軸からやや西側へ偏る。下部土坑は平面形が円形で、断面形がすり鉢状であった。ただし、この付近は遺物も遺構もほとんど確認されない空白地帯であり、水田造成時の削半の影響を最も強く受けた範囲である。本遺構も、検出された配石の位置が土坑の掘り込み面でなかった可能性が残る。

#### 【配石遺構12】(第115図・写真図版31-2)

G10グリッドの東端、S102と配石遺構10にはさまれる位置から検出された。配石はいずれも土坑外周部に貼り付き、立った状態で検出された。しかし、隣接する配石遺構10の検討によれば、土坑の掘り込み面は石の検出面と同程度の高さで、土坑検出面よりも12cm～22cm上であったと推定される。配石遺構12についても、土坑の掘り込み面は配石遺構10と同じ程度のレベルであったと考えられる。従って、検出面から突き出て立っているように見えた配石は、本来は掘り込み面の下に隠れており、土坑の壁に貼り付けられた状態であったと推定される。

#### 【配石遺構13】(第115図・写真図版31-3)

F12グリッドの北西隅、土器溝まり3より少し西に外れた位置で検出された。30cm～40cmの大型の石を主に用いて、ほぼ同一の高さに並べている。南の1個が丸みを帯びた川原石であるのに対し、他の3個は角張った扁半円石である。石が残っていたレベルは200.20m付近で、土器溝まり3の土器が集中的に出土するレベルより50cm高い。下部土坑は確認できなかった。

#### 【配石遺構14】(第115図・写真図版31-4)

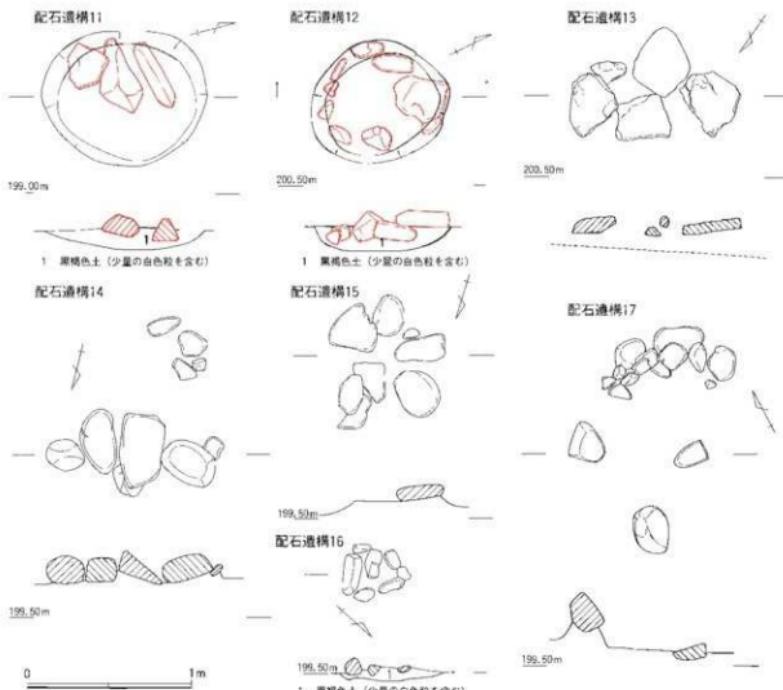
G12グリッドの北東隅、SK30のわずかに南から検出された。石の配置が東西にはば直線的に並ぶ状態であった。断面図上でも、並べられた大石の底面が199.70mのレベルでほぼ一直線にそろっている。隣接するSK30がこの配石遺構の下部土坑であるか否かは確定できなかった。南に接して4個の30cm未満の石が円形に並んでいる状態が確認されたが、これが配石遺構14に伴うか否かは確認できなかった。

#### 【配石遺構15】(第115図・写真図版32-1)

E12グリッドの北西隅、SK22の北西に接する位置から検出された。20cm～30cmの大形の扁平な石が円形に並ぶ。下部土坑は検出されなかった。配石遺構15の東に隣接する位置からSK22が検出された。SK22検出時は配石遺構15に伴う土坑であると考えたが（写真図版32）、配石遺構とSKの中心の位置がずれており、両者の関係を断定するには至らなかった。

#### 【配石遺構16】(第115図・写真図版32-2)

G12グリッドの中央、硬化面5・6や焼土16の北に接する位置から検出された。配石の配置は台

第115図 配石造構11～17実測図 ( $S=1/30$ )

形もしくは五角形である。細長い柱状の石が多く用いられている。ごく浅いながら周囲の地山よりも明らかに黒い土の分布が確認された。黒色土の範囲は円形である。調査時には、浅すぎるため土坑の掘り形であるか否かを判断できず、平面形は観測しなかった。

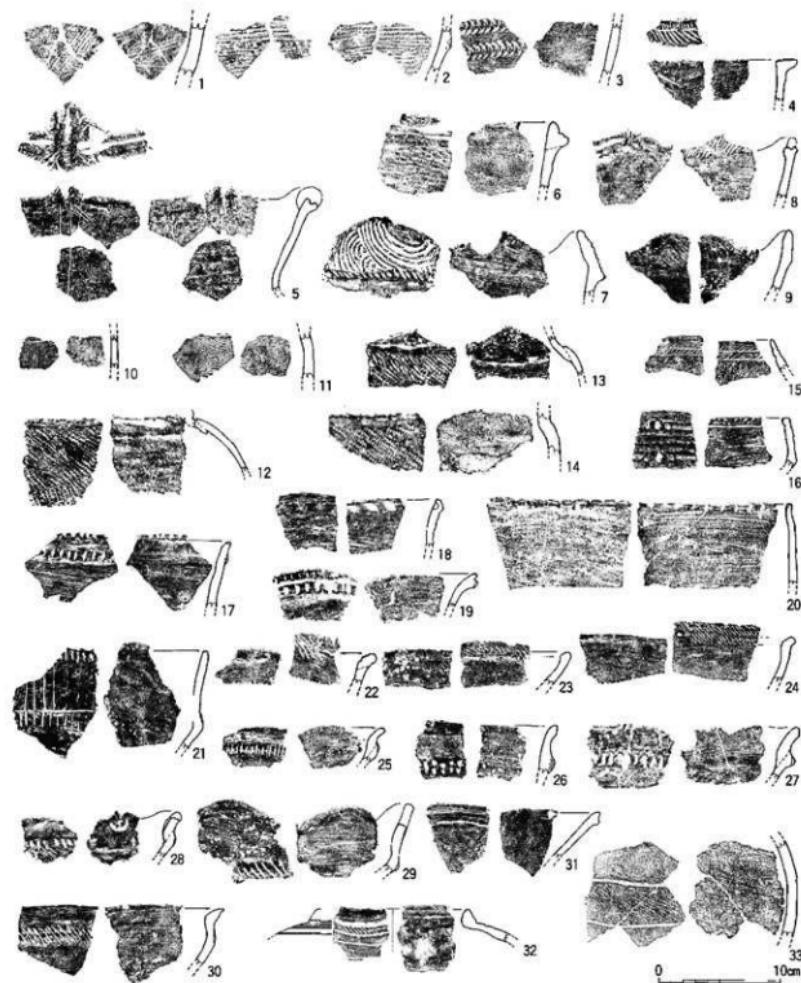
#### 配石造構17 (第115図・写真図版32-3)

D12グリッドの北より、SK14・23にはさまれる位置で検出された。北へふくらむ弧を描くよう石が配置される。弧の外側に大きめの石が、中心側に小さめの石が配置される傾向がある。石が弧状に集中する部分からやや南へ離れて大型の石が3個検出されており、これらも配石造構を構成していた可能性がある。下部土坑は検出されなかった。

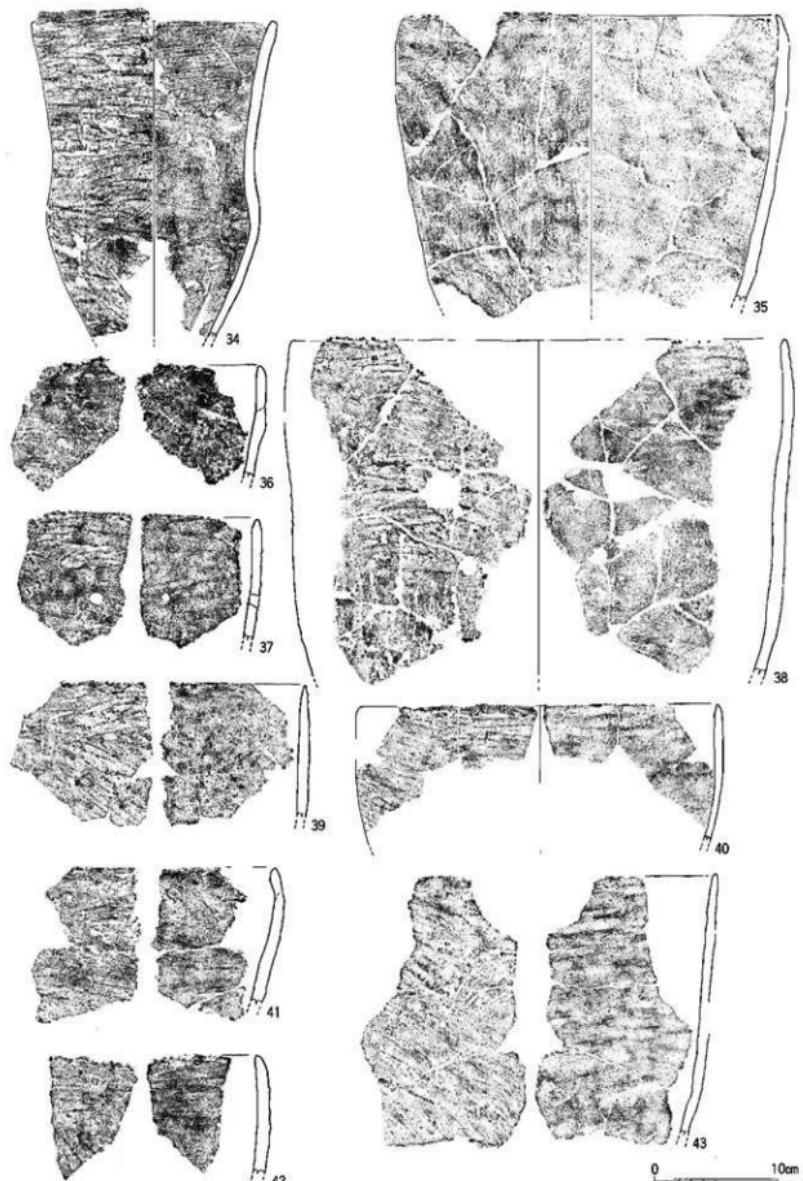
## 第2節 1層の遺物

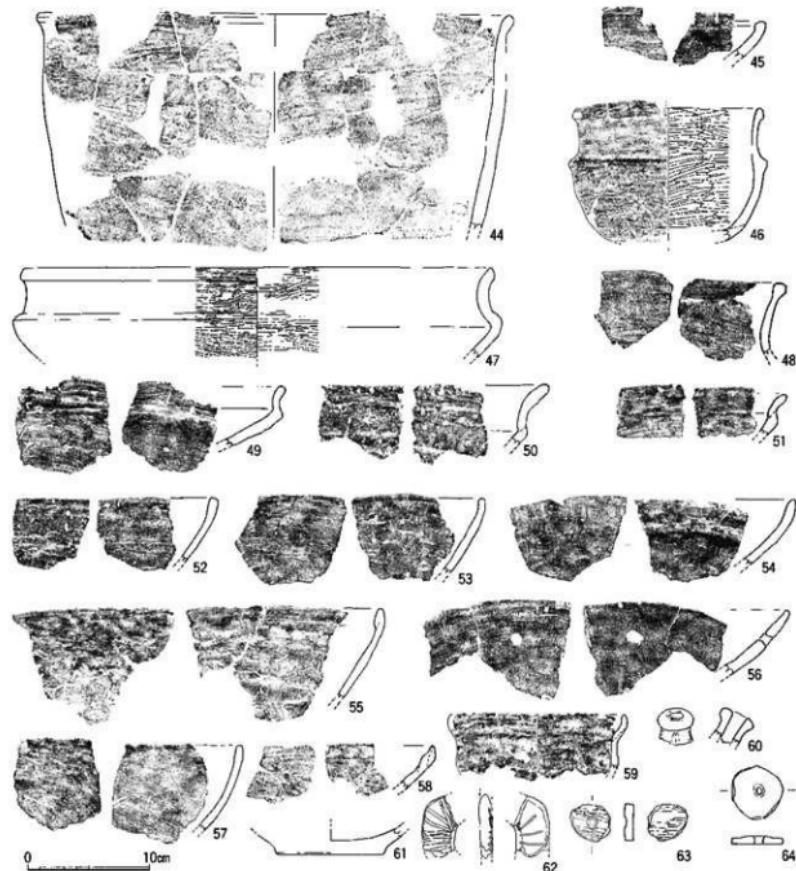
### 1層出土土器 (第116～119図・写真図版78～82-1)

縄文早期から古墳後期までの遺物を含む。第116図1は縄文早期の菱模様で、林原遺跡で最も古い時期の遺物である。外面に無筋L縄文を施し、胎土内に纖維を含む。3はロッキングにより連続爪形文を2列施している。北白川下層I b式に属する。5は縁帶文成立期と思われ、口縁部を肥厚させ、双頭の突起と1条の横走沈線を施す。頭部には細い縦位の沈線が描かれている。7は縁帶文

第116図 1層出土土器実測図 (1) ( $S=1/4$ )

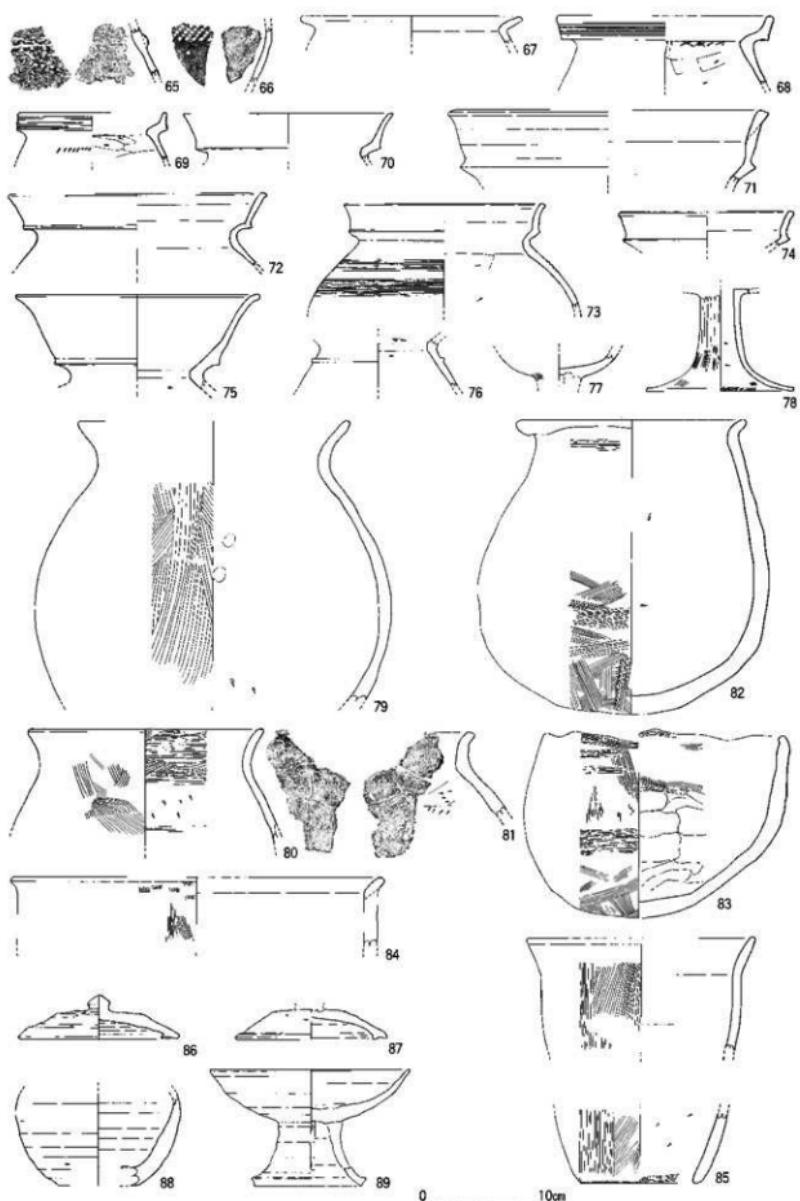
土器の口縁部主文様で、多重沈線による連弧文と刻日を施している。口縁形態が連弧文にそった月日状を呈するが、これも当地に多い双頭の波状口縁に類するものだろうか。10は器種不明の土器の胴部で、擬繩文が施される。12~14は有文深鉢の胴部で、12・13は粘土の接合痕が明瞭である。14は屈曲部分の外面を指でナデて一周させて凹線状とし、胴部と頸部の区別をつけている。15は椎現山式新段階と思われ、口縁部内外面に2条の横走沈線を施し、間に刻日を配する。18は繩文晩期中葉と見られる土器で、口縁内面側から連続的に刺突している。これにより口縁部外面には瘤状の

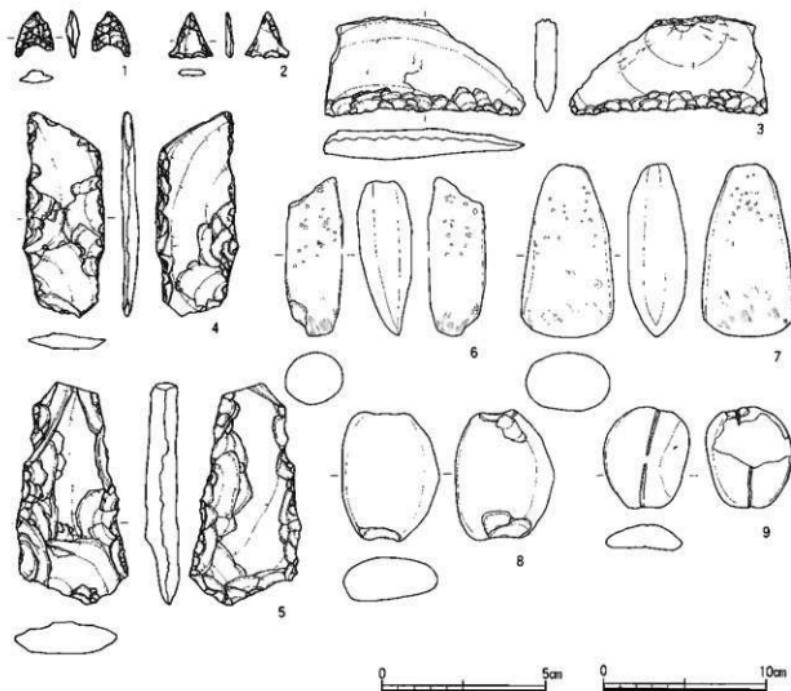
第117図 1層出土土器実測図（2）（ $S=1/4$ ）



第118図 1層出土土器実測図(3)(S=1/4)

突起列が生じている。20は内面側斜め上方からの刺突を、口縁端部に連続的に施す。縄文晩期中葉の遺物と見られる。25~30は屈曲形有文浅鉢である。26は、屈曲部外面向に二段階の刺突による刻目をつける。28の刻目内には施工具の痕跡を残している。口縁部内面に弧文が施され、竪ヶ鼻2式に同様の内文が認められることから、機期に属すると推定される。32は壺形土器である。口縁部から胴部にかけて、刻目と擗縄文が施されており、椎現川式新段階に比定される。33は深鉢の胴部で、2条の横走沈線の間に広く半節R L縄文が施される。第117図34~第118図44までは砲弾形無文深鉢である。34は径が小さく細長い。胴部上半が厚く底部付近が薄作りである。底部内面にはコゲが残る。46~51は屈曲形無文鉢である。46は底部外面に接合痕があり、底部と胴部が別途製作されたことがわかる。48~51は外向の調整が粗雑なミガキやナデとなっており、浅鉢であっても完全な精製

第119図 1層出土土器実測図 (4) ( $S = 1/4$ )



第120図 1層出土石器実測図 (1~3 : S=2/3、4~9 : S=1/3)

上器の作りではない。55、58は内面を肥厚させるボール形の浅鉢で、こうした特徴を持つものは崎ヶ界2式期に多い。62は輪状あるいはコの字状になる土製品の一部か。両面に放射状の沈線を引く。表面の沈線は裏面よりも密である。63・64は土製円盤で、63は中央の孔が貫通していない。未製品であろうか。

第119図65は、弥生前期（I-3～4様式か）の壺の肩部または頸部と判断した。小片で全体の形状が判然としない。縄文土器の可能性を残す。67は頸部がくの字に屈曲する壺である。端部に凹線は見られず、Ⅲ様式にさかのぼる可能性がある。68、69は複合口縁の壺で、擬凹線が施される。V-2様式に比定される。68は頸部内面にヘラ状工具跡が多数残る。70は外面に擬凹線が見られず、端部は先細る。V-4様式に比定される。71～74は端部に面が作り出されており、小谷1～2式に属する土師器の壺と見られる。78は高壺の脚部である。壺部との境界には円盤が充填されていたと思われるが、残存していない。須恵器など、弥生から古墳時代後期の各時期の遺物を含む。ただし古墳中期の遺物は見られない。79～81は外反して長くのびる口縁部をもつ古墳後期の土師器の壺である。3点とも口径は胴部最大径を下回る。82は口縁部が短く、時期が下る可能性がある。胴下部=横方向のハケメ（外）とヘラケズリ後ナデテ（内）、底部=多方向のハケメ（外）と指オサエ（内）と、調整は部位ごとに大きく異なる。底部と胴下部を別途製作して接続したと見られる。

83は同柄台を使用せず手捏ねで製作されたかと思われる不規則な形状の壺である。外面にはスグが厚く付着する。85は壺の口縁部・及び底部である。須恵器は、擬宝珠つまみの壺蓋(86)、透かしが退化して線状になった高壺(89)等が見られる。いずれも大谷櫛年の6期に位置づけられる。

#### 1層出土石器（第120図・写真図版82-2）

第120図1・2はサヌカイト製の石鎌である。2は素材面を多く残し、周辺をわずかに加工して整形している。3はサヌカイト製の横長剥片を素材としたサイドスクレイパーで、平坦な押圧剥離による両面調整で丁寧に刃部を作出している。4・5は打製石斧である。4はサヌカイト製で、大型の横長剥片を素材としている。素材剥片は、背面の剥離痕より、比較的大型の石核から求心的に剥離する剥離技術によって得られたものと考えられる。側縁には両極技術と思われるつぶれが確認されるため楔形石器の可能性があるが、これを調整と考え、打製石斧とした。5は流紋岩製の打製石斧で、横長剥片を素材とする。刃部に使用の痕跡が認められないことから、刃部リダクションが行なわれたか、もしくは木製品の可能性がある。6・7はともに塩基性片岩製の磨製石斧である。刃部は丁寧に研磨が施されているが、基部付近は敲打の痕が明瞭に残る。8は凝灰岩製の打欠石錘、9は流紋岩製の切目石錘である。

## 第8章 総括

### 第1節 林原遺跡出土縁帶文土器群の編年的位置付け

#### 1. はじめに

山陰地方の土器編年は、これまで良好な資料に恵まれなかつたこともあり、大枠を瀬戸内や近畿の編年に依存することが多かつた。しかし、近年の志津見・尾原ダムといった巨大公共事業のもとで得られた資料は、層位や一括性に恵まれた一級資料と言え、地域性を考慮した山陰独自の編年網の構築を可能にしている。

林原遺跡でも、後期前葉から中葉にかけての土器群が「土器溜まり（以下DTと呼称）」という特殊な状態で検出され、その資料は、山陰地方の後期編年を築く上で基準となりうるものである。そこで、林原遺跡出土の後期土器群の編年位置付けについて検討してみたい。

#### 2. 器種分類

まず、器形と器高および文様の有無の二要素を用いて器種分類を行なつた。

**屈曲形深鉢**：頭部がくびれ、胴部がゆるく膨らむ深鉢。有文と無文がある。

**屈曲形鉢**：頭部がくびれ、胴部がゆるく膨らむ鉢。有文と無文がある。

**屈曲形浅鉢**：頭部がくびれ、胴部が強く屈曲する浅鉢。有文と無文がある。

**バケツ形浅鉢**：口縁が底部より外反気味に直立したバケツ形の浅鉢。有文と無文がある。

**ポール形浅鉢**：胴部がゆるく膨らむポール形の浅鉢。有文と無文がある。

**皿形浅鉢**：口縁から底部まで浅く外傾した皿形の浅鉢。有文と無文がある。

**砲弾形有文深鉢**：砲弾形を呈する深鉢。口縁部に刻口を持つaとそれ以外の文様を持つbがある。

**砲弾形無文深鉢**：砲弾形を呈し、文様を持たない粗製の深鉢。

**砲弾形鉢**：砲弾形を呈し、文様を持たない鉢。

**壺形鉢**：壺形を呈する鉢。有文と無文がある。

#### 3. 屈曲形有文深鉢の分類と序列

##### 1) 屈曲型有文深鉢の分類（第121図）

統いて、上記の器種のうち最も型式変化に富む屈曲形有文深鉢について分類を行なう。その際、口縁部から頭部にかけての器形と文様に注目して分類した。

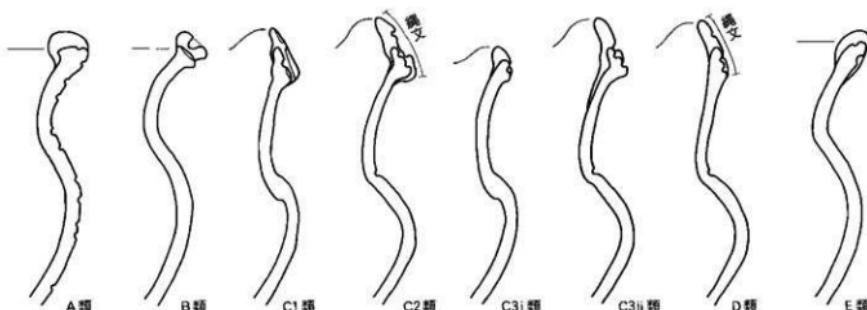
**A類**：上面を肥厚させた口縁部を持ち、頭部をゆるく外反させ口縁直下に横走沈線を施すもの。

**B類**：上面を肥厚させた口縁部を持ち、頭部を強く外反させ口縁直下の横走沈線が消失するもの。

**C類**：外面を肥厚させた口縁部を持ち、頭部を直立もしくはゆるく外反させるもの。口縁部外面に横走沈線と刻目が施されるもの（C1類）、横走沈線と繩文が施されるもの（C2類）、横走沈線のみのもの（C3類）に細分される。

**D類**：外面を僅かに肥厚もしくは内湾させた口縁部を持ち、頭部はゆるく外反させ、口縁部外面に横走沈線と繩文が施されるもの。

**E類**：口縁部外面と内面に施文されるもの。



第121図 屈曲形有文深鉢の分類

### ii) 変化の流れの理論整理

以上の分類に序列を与える前に、縁帶文土器成立への変化の流れを、先学を参考にしながら整理しておこう。

既存の縄手と照らし合わせて見たとき、型式学的に最も古いのは、DT 1-2より出土した磨縄文土器群である。本段階の特徴は、口縁部上面を肥厚させることで口唇部文様帯を獲得している点と、口唇部文様帯と胴部文様帯が頭部文様帯を通して連結されている点である。このうち、次段階への変化要素として注目されるのは頭部文様帯の動向で、次段階では、縁帶文形成に向けて口唇部文様帯と胴部文様帯を分離する動きが現れる。(今村1983) そしてそれは、頭部の横走沈線を消失させることによって達成されるという(千葉1989)。頭部文様帯を簡素化または無文化することで、口縁部への文様の集約化が達成されるわけだが、こうした動きに対して筆者は、その根底に口唇部文様帯の外志向が働いていると考える。すなわち、前段階で得た口唇部文様帯を外方向へと見せたいという意識が働き、そのために頭部を外側へ強く屈曲させ、結果、頭部への施文が困難または不要になったと推測するのである。この段階に突如出現する橋状把手も、加飾効果に加えて、強くくびれた頭部を支える役割を担っていたと考えると、その発生を理解し易いのではないか<sup>(1)</sup>。

さらに次の段階へ進むと、頭部外反によって口唇部文様帯を見せるのではなく、外側へ折り曲げた口唇部に直接施文することで文様を公開する。すると、頭部を強く外反させる必要はなくなるため、ゆるく外傾もしくは直立した頭部へと変化する。もちろん、これと連動して橋状把手も不用となる。つまり、本段階に至って初めて自力での外面施文を達成していると言え、この段階をもって縁帶文土器の完成を考えたい。このようにして完成された縁帶文土器は、その後、口縁部肥厚帯が退化し、内湾させることで口縁部文様帯を表現するようになる(柳浦2000)。

### iii) 林原遺跡出土土器の検討

上記の変遷過程を、屈曲形有文深鉢の分類に適応させると、口唇部文様帯と胴部文様带が連結する段階(A類)→口唇部文様帯を外へ見せるために頭部を強く屈曲させ、胴部文様帯と分離させる段階(B類)→口唇部を折り曲げることで自力での外面施文を完成させる段階(C類)→口縁部肥厚帯が退化し、内湾させることで口縁部文様帯を表現する段階(D類)となる。さらに、B類とD類を比べて見たとき、口唇部從文様に刻日が多く用されるB類に対し、D類では縄文施文に限られる。従って縄文施文の方が型式学的に新しいことが想定され、C類はC1類→C2類と細分することが

可能である。またC 3類については、C 1類に施される横走沈線が1本のものが多いのに対して、C 2類では2本以上のものが多いという傾向が見て取れるので、沈線が1本のC 3類（以下C 3 i類）→沈線が2本以上のC 3類（以下C 3 ii類）という変遷が想定できよう。内面施文型のE類は、口縁部を大きく外反させるという特徴から、B類に並行すると考えられる。

以上をまとめると、A類→B類・E類→C 1類・C 3 i類→C 2類・C 3 ii類→D類という序列が想定できる。これを基準として、各分類のその他の要素について、もう少し詳しく見てみよう。

#### 【A類段階】

A類の口縁は平縁で、2単位と思われる大型の環状突起が付く。口唇部文様は、数条の横走沈線+繩文または横走沈線のみのものが主体である。頸部文様帯と胴部文様帯は独立した文様を描き、2本沈線による区画文を基調とした様位展開の磨消繩文が施される。

このようにA類は、福山K 2式と宿毛式の両方の要素を共有しており、近年ではこれらの土器に對して「幕地式」の名前が与えられている（千葉2005）。

#### 【B類段階】

B類では、ゆるい波状の口縁部に小型環状突起、耳状突起、渦巻状の双頭突起などが付く。このうち小型環状突起は、A類の大環状突起の退化的様相と捉えられるが、耳状突起はA類からの系譜では追えず新出の要素である。双頭突起は、他地域には見られず山陰地方独自の要素と言える<sup>(2)</sup>。口唇部文様は小ぶりの刻目を持つものが多い。

また、この段階には内面に施するもの（E類）が一定量存在しており、口縁部内面直下に1条の横走沈線を施す。内面施文型は上面施文型の退化形態として解釈されているようだが（千葉1990）、筆者は、むしろ大きく開かれた口縁部と強く相關するものと見ており、口縁部の強い外反によって内面が露出し、それに伴い内面への加飾の必要性が生じたと解釈している<sup>(3)</sup>。頭部と胴部は、共に無文化が著しい。A類で盛行した磨消繩文による文様意匠は突如見られなくなり、多くの場合は無文か、もしくは沈線文や刺突文が施される程度である。

このような特徴を持つ土器は、山陰地方では布勢式とされることが多いが、口唇部刻目や耳状突起の存在、細密条痕や橋状把手の不在、胴部の無文化傾向など相違点が目立ち、また器種構成も、布勢式には通常組成されない口縁部が内湾するボル形浅鉢、砲弾形有文深鉢aが存在するなど、布勢式とは異なる特徴を持つ。こうした要素は、布勢式より四国の松ノ木式に近い様相を示すが、この点に関しては後述するとして、ここでは大きく縦帶文成立期と呼んでおきたい。

#### 【C 1類・C 3 i類段階】

統くC 1類・C 3 i類では、前段階で顕著だった各種突起類が口縁部に飲み込まれ、波状口縁を呈するようになる（山崎2003）。口縁部主文様は縦位の短沈線文、連弧文、双頭の鉤状人組文、渦巻文、山形文などがあり各々が前段階からの系譜をたどれる。従文様は横走沈線を1条配するものが多く、その上下に刻目を施す。

ここで注意したいのは、口縁部文様で多用される縦位短沈線文と刻目文である。これらは、そもそも前段の屈曲形有文鉢や砲弾形有文深鉢aで用いられた文様で、屈曲形有文深鉢の口縁部文様帯は、前段階の他器種に先行して表れていることが確認できる。頭部、胴部文様帯は無文の場合が多いが、新しく胴部全体に縄文を施文するものが加わる。これらは、従来の縞年観では崎ヶ鼻1式に該当するだろう。

	口 線 分 類							
	A	B	C1	C3 i	C2	C3 ii	D	E
DT1-2	11	50	2		3	4	5	
DT4	1	1						
DT1-1	3	6	3	1	2		1	
DT3	3	5	2					
DT6	3	6	2		1		1	
DT5	3	6	2	4	6			
DT7	5	5	6	4	3			
DT2				3	2	3		
DT8						1		
S101						6		
SK1-SK1						2		

第122図 DT別出土傾向(1)

	口縁部形態		
	直垂り	丸い	先垂り
DT1-2	264	745	36
DT4	8	39	2
DT1-1	55	7	22
DT3	4	85	39
DT6	6	59	39
DT5	16	224	26
DT7	8	139	34
DT2	3	32	17
DT8		17	3
S101	1	16	21
SK1-SK1		5	

第123図 DT別出土傾向(2)

	底 部 形 態		
	平底	凹底	高台底
DT1-2	333	13	20
DT4	24	4	
DT1-1	136	14	5
DT3	33	8	1
DT6	39	8	
DT5	77	14	3
DT7	85	12	2
DT2	15	4	2
DT8	1	2	
S101	12	2	
SK1-SK1	5	1	

第124図 DT別出土傾向(3)

### [C 2類・C 3 ii類段階]

C 2類・C 3 ii類は、地文に縦文が施された波状口縁を基本とする。口縁部主文様には山形文や渦巻文に加えて、口縁部を立体的に肥厚させた入組文や円文が登場し、縦位の短沈線文や連弧文、双頭の鉤状入組文は消滅するようだ。人組文や円文は、前段階の鉢や浅鉢の口縁部主文様に採用されていた文様で、前段階と同様に浅鉢や鉢に文様の先行現象(畠井2005)が認められる。從文様は横走沈線が2条に増え、また区画文を描くものが現れるなど多条化傾向がある。頸部と胴部は、地縦文上に沈線文や刺突文を施すものが出現し、全体的に縦文施文をベースとした有文化傾向がうかがえる。これらの上器群も、型式名で言うと崎ヶ鼻1式として把握される。

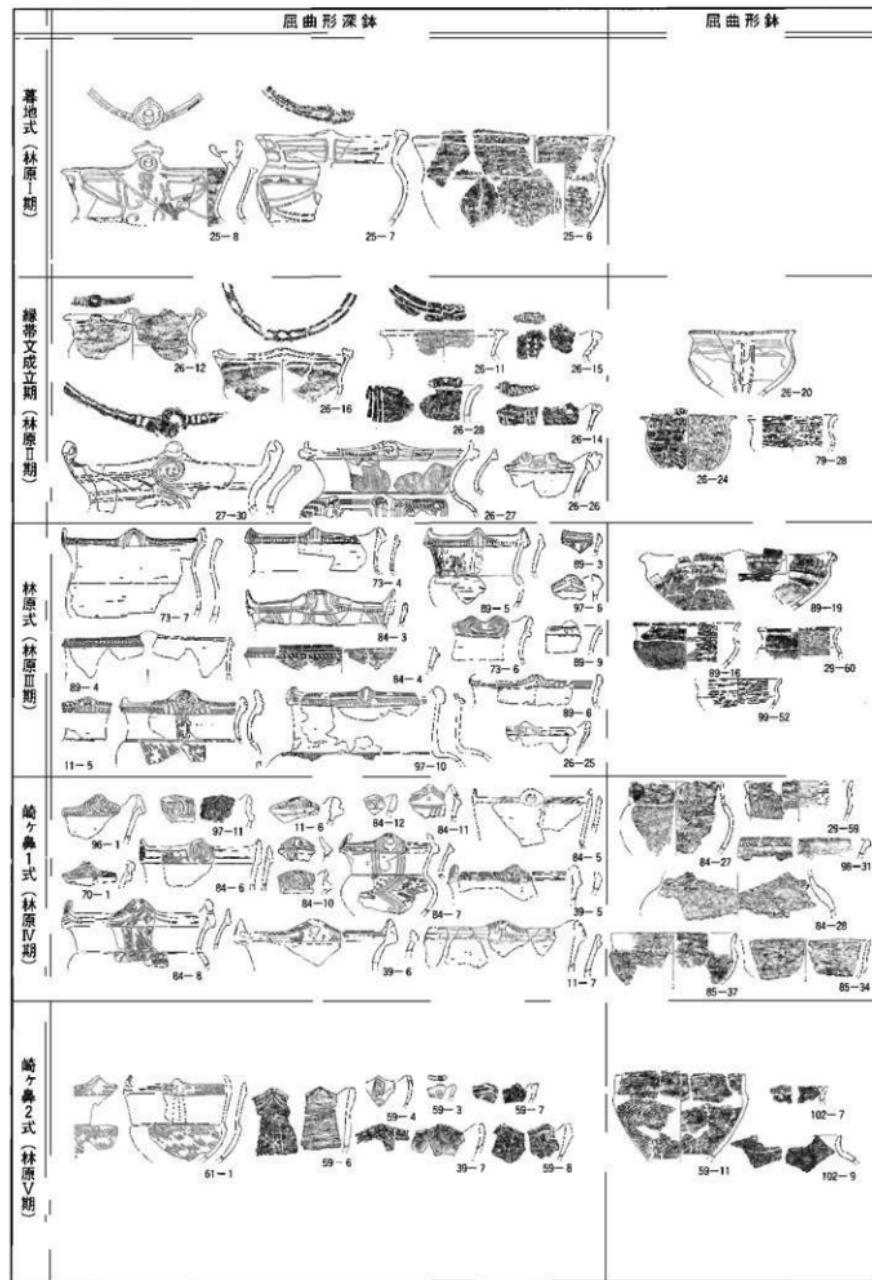
### [D類段階]

最後にD類は縦文施文の波状口縁が若干きつくなり、口縁部主文様には細い沈線で変形渦巻文や山形文が描かれる。山形文は2条から3条の沈線で構成され、さらなる多条化が看取されると共に、山形文の沈線どうしが波頂部で繋がる連結山形文を持つものが登場する。頸部と胴部文様帶は小破片が多く判然としないが、地縦文の上から縦位の沈線文を引き、頸部と胴部と連結するものが見られる。全縦文化傾向がより強まっていると言えよう。從来の縦年観では崎ヶ鼻2式に相当する。

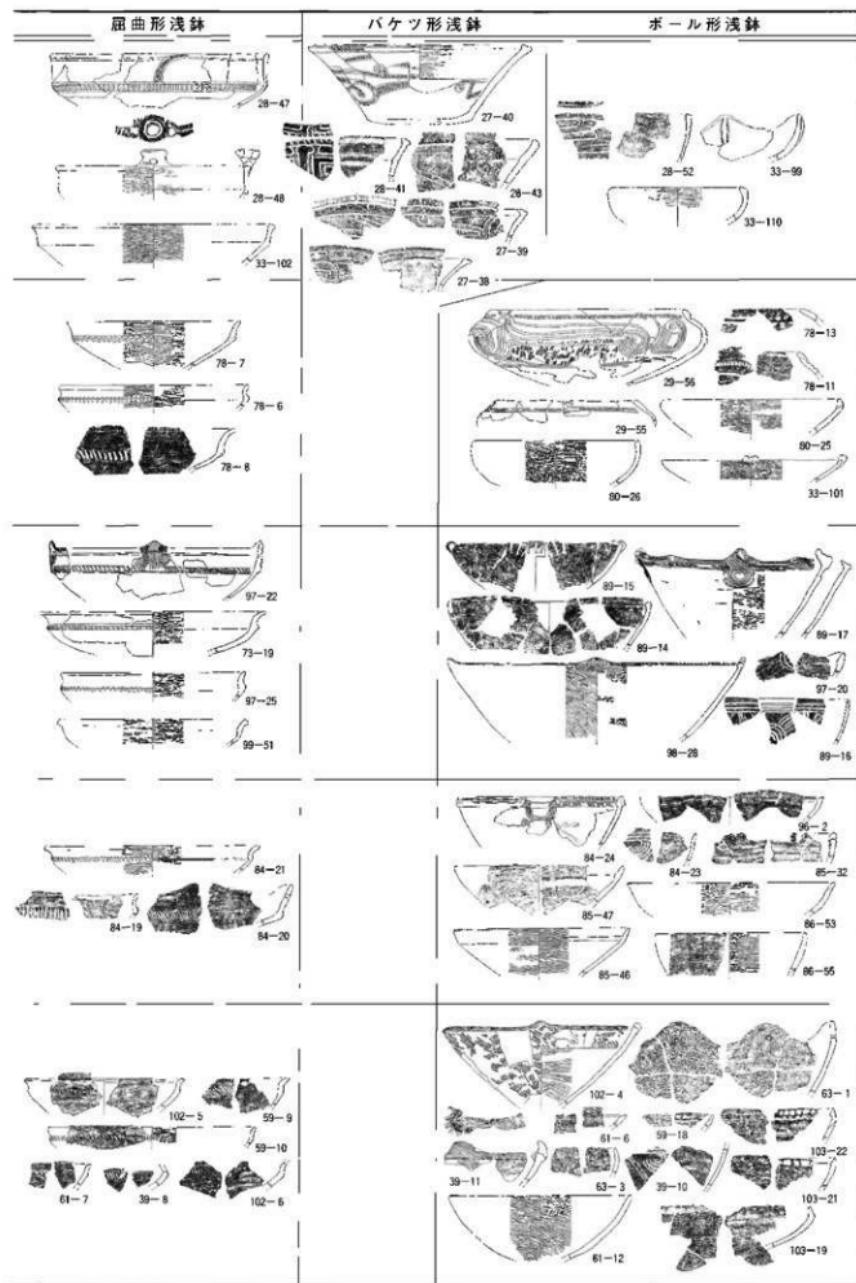
さて以上の分類をDT別に適応させると、第122図のようになる。これを見ると、混在はあるものの各DTには時期差を想定することができる。そこで、屈曲形冴文深鉢を年代の指標としてA類を林原Ⅰ期、B類・E類を林原Ⅱ期、C 1類・C 3 i類を林原Ⅲ期、C 2類・C 3 ii類を林原Ⅳ期、D類を林原V期として、各DTについて見てみよう。

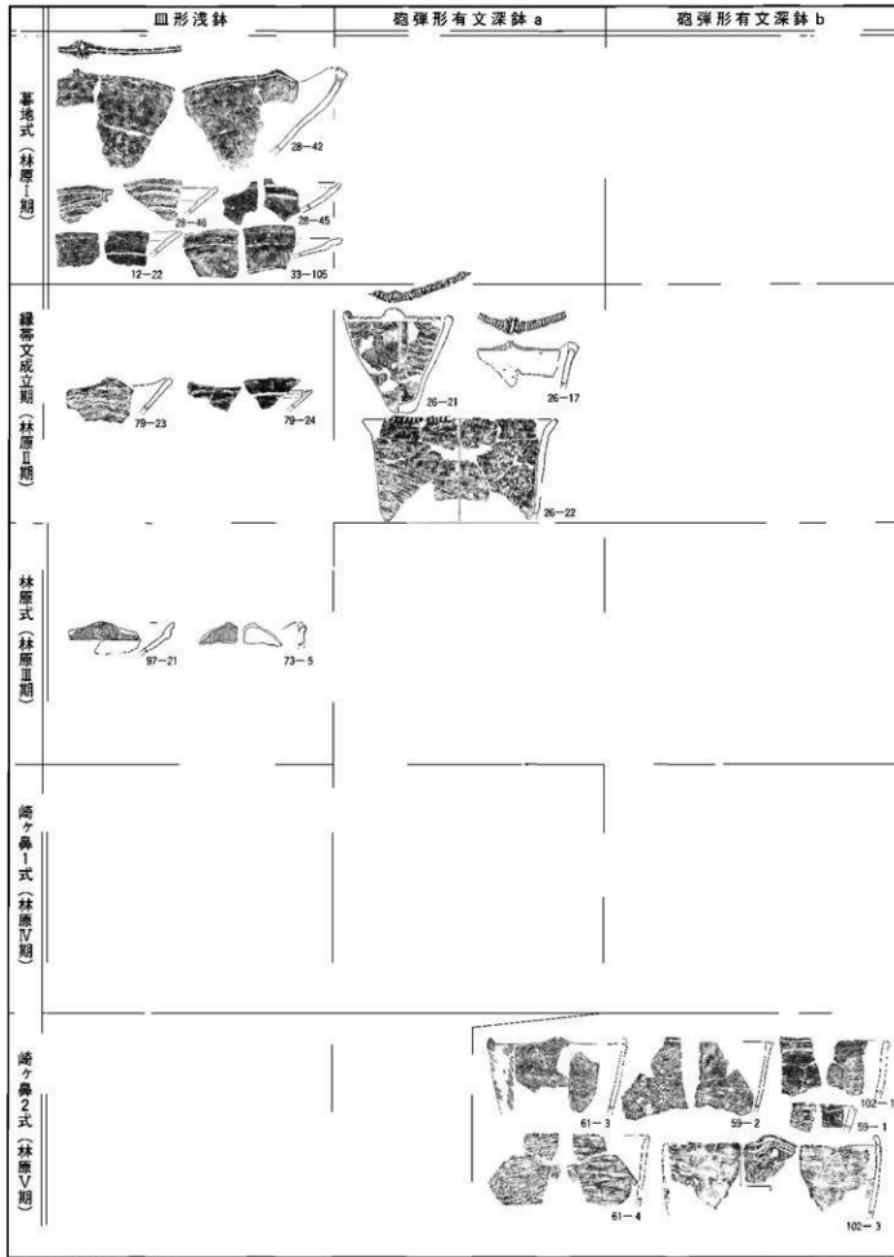
もっとも大きなDTであるDT1-1・DT1-2は、A類からE類までの幅広い時期が混在するが、主体となるのは林原Ⅱ期のようである。DT4は点数が少なく、A類とB類がそれぞれ1点ずつ出土している。しかし、A類に相当する第78図5は、出土地点がかなり離れておりDTに伴わない可能性が高い。従ってDT4は、林原Ⅱ期に属すると捉えておこう。DT3・DT6はC 1類を主体とし、これにC 3 i類が伴う。前段のB類も多少認められるが、これを次段階でも若干残存するものと捉え、林原Ⅲ期の一括した時期として考えたい。DT5・DT7は林原Ⅲ期から林原Ⅳ期に、DT2は林原Ⅳ期から林原Ⅴ期に帰属すると思われる。DT8、S101、S101 SK1ではD類が単独で出土しており、林原Ⅴ期の一括資料と捉えられる。

このように、DTによっては時期を想定できるため、これを用いて時期ごとのセット関係や他器種の型式変化を追うことができる。そこで次に、他器種の時期的変遷を検討してみる。

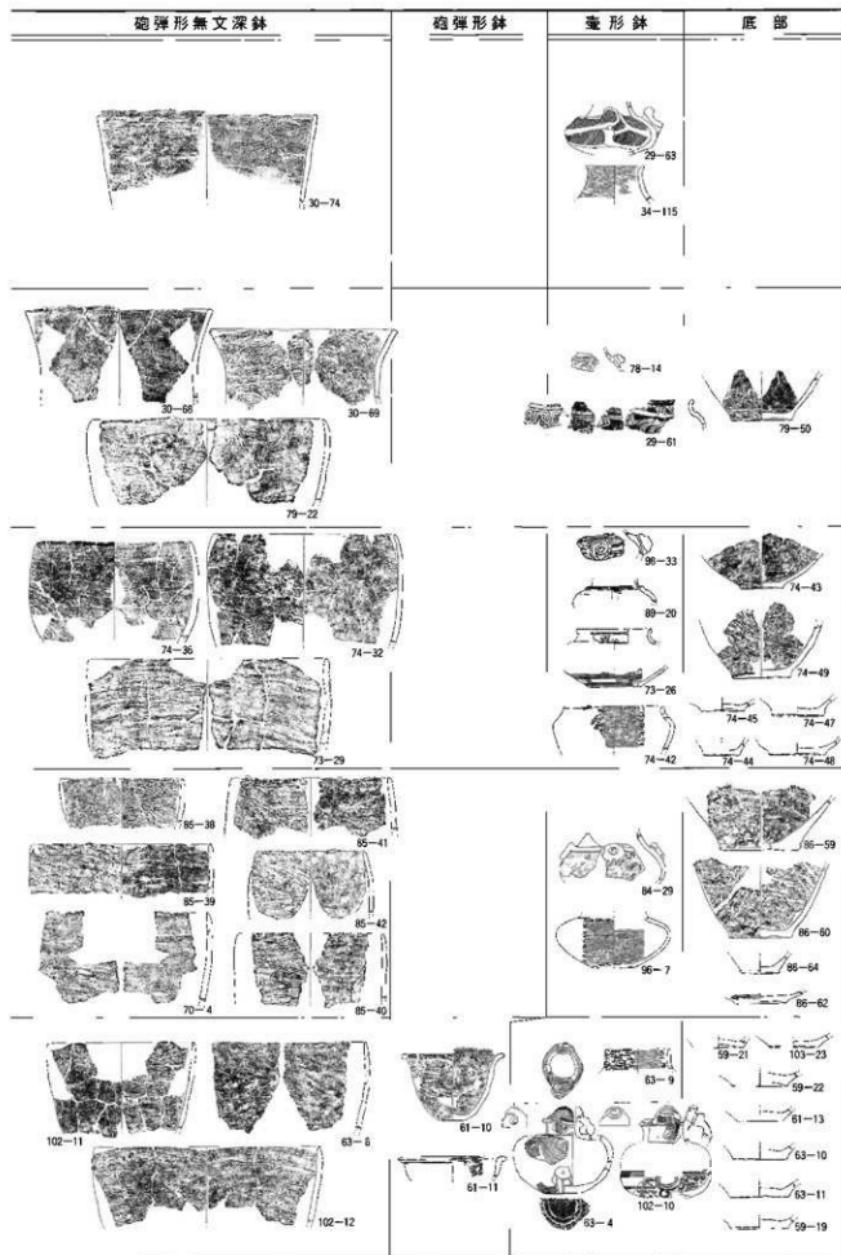


第125図 林原遺跡出土縄文後期土器群の編年図（1）（S=1/8）





第126図 林原遺跡出土縄文後期土器群の編年図（2）(S=1/8)



#### 4. 個別器種の検討

##### i) 屈曲形鉢

林原Ⅱ期より登場する器種で、屈曲形有文深鉢と器形や文様について密接な関係を持つ。第26図20は、口唇部に刻目を施し無文の頸部を強く外反させる。胴部には一本一単位の横走沈線と、そこから垂下する縦走沈線が描かれるなど、縁帶文成立期の特徴を持つ。24も、類似した器形に刻目が施されることから林原Ⅱ期として問題なかろう。この刻日は、次段階の屈山形有文深鉢の口縁部文様として採用されている。林原Ⅲ期では口縁部、胴部とともに縁文施文へと大きく変化し、第89図19のように波状口縁を呈するものも登場する。器形は、屈曲形有文深鉢の変化と同調するように頸部を垂直に立ち上げている。次段階の林原Ⅳ期では、口縁部に縁文を施さずに直立させるもの（第84図27）が現れ、さらに林原Ⅴ期になると、口縁部を指でつまんで尖鋭に仕上げるようになるなど（第59図11、第102図9）、後述する砲弾形無文深鉢と同様の変化がうかがえる。

##### ii) 屈曲形浅鉢

屈山形有文浅鉢は、山陰地方に特有の器種として古くから認識されており（小林1937）、その特徴は強く屈曲する胴部に連續的に施される刻目にある。林原Ⅰ期の資料は第28図47や48が該当すると思われ、47は胴部屈曲部の刻日と口縁部直下の横走沈線が、口縁部より垂下する弧状の磨消縄文帯によって連結されている。48も同様の器種として捉えられ、大型環状突起を持つことから林原Ⅰ期の所産であることが分かる。これらを祖形として、林原Ⅱ期では頸部を外側へ屈曲、無文化することで胴部文様帯を分離させている。林原Ⅲ期になると、頸部の幅が狭くなり、屈曲も若干弱くなる。また新たに口縁部主文様を持つ上器（第97図22）が出現する。林原Ⅳ期では、前段とほとんど変化はないが、口縁部上文様を持つものは見られなくなるようだ。林原Ⅴ期には、刻目に著しい退化的様相が見て取れ、細く浅い刻目が施されるようになる。またミガキ調整も少なくなり、粗製化傾向が看取される。

##### iii) パケツ形浅鉢

パケツ形浅鉢は、林原Ⅰ期に限定される器種である。有文土器は、区画文や鉤状文で構成された磨消縄文で飾られ（第27図40、第28図38～41、43）、宿毛式的な様相がうかがえる。

##### iv) ポール形浅鉢

ポール形浅鉢は、各時期を通して量的にまとまっており、型式変化にも富むことから、時期決定の指標として重要である。林原Ⅰ期には、第28図52のように磨消縄文による横位の区画文が施されるものが存在する。無文土器では、第33図99など波状口縁の波頂部より垂下隆帯を貼り付ける土器があり、五明田式以来の古い特徴と思われる。林原Ⅱ期になると、口縁部が大きく内湾するもの（第29図53～56、第78図11～16）が現われ、文様も円形渦巻文や方形渦巻文、沈線内刺突など、松ノ木式の特徴が色濃く反映されている。しかし林原Ⅲ期には、口縁部が内湾する器形が消え、再び緩やかに開く器形が採用される。文様も、口縁部に入組文や円文を持つもの（第89図15、17、第98図28）が多く、口縁部が外側へ大きく開いたことによって内面施文のものも現れる。これらの口縁部文様が、次段階の屈曲形有文深鉢に採用される点は注意しておきたい。林原Ⅳ期には、屈曲形有文深鉢と同じ口縁部文様帯を持つもの（第84図24）や内面施文のもの（第96図2）、磨消縄文を施すものが見られ（第84図23）、無文土器では口縁部内向を肥厚または屈曲させるもの（第85図46、47）がある。続く林原Ⅴ期では、口縁部上面に複合鋸歯文を有するものが新出する（第39図11、第

102図4)。また、胴部に全縄文を有するもの(第63図1、3、第102図4)が目立ち、全体的に全縄文化傾向が看取される。

この他に、口縁部内面を肥厚させて指頭圧痕を施すもの(第59図18、第103図21、22)が特徴的に組成され、口縁部をつまんで屈曲させるもの(第103図19)もある。この口縁部をつまんで仕上げる調整は、この時期に特有の調整技法として注目される。

#### v) 盔形浅鉢

林原Ⅰ期の資料としては、第28図46のように磨消縄文による区画文を描くものがある。また、無文土器とも共通して、内面に段を有するものが多く存在し(第12図22、第28図46、第33図105)、これも宿毛式的な要素として指摘されている(千葉1997)。林原Ⅱ期では、引き続き内面に段を有するものが見られ、続く林原Ⅲ期の資料としては、第73図5や第97図21などの口縁部主文様を持つものが該当すると思われる。本器種は、林原Ⅳ期以降には見られなくなるようだ。

#### vi) 瓶彈形有文深鉢・無文深鉢・鉢

まず瓶彈形有文深鉢aを見てみよう。林原遺跡では、明確に林原Ⅰ期の資料は抽出出来なかつたが、近年報告された面白谷遺跡S I 07資料(柳浦編2006)や、中柵遺跡の一括資料(角田2007)の中に僅かながら含まれることから、該期に登場すると判断される。林原Ⅱ期には刻目が大型化し、四単位の波状口縁を有するものが出現する。第26図17のように波頂部に継位の短沈線を持つものがあり、これは林原Ⅲ期の屈曲形有文深鉢の主文様に採用される。本器種は、DT 1~2やDT 4で量的に卓越することから林原Ⅱ期が盛行期であったと思われ、以降は急速に姿を消している。

瓶彈形有文深鉢bは、林原Ⅴ期に限定される器種で、口縁部に渦巻文や連絡山形文などの文様を持つ。大別すると外面施文型(第61図4)、上面施文型(第59図1、2、第102図1)、内面施文型(第102図3)があり、全縄文(第59図1、第61図3)が施されるものもある。

続いて瓶彈形無文深鉢を検討する。第123図は、瓶彈形無文深鉢の口縁部形態をDT別に見たものであるが、これによると、時期が下るにつれて、口縁部を面取りするものから、口縁部を丸もししくは尖鋭に仕上げるものが多くなることが分かる。特に林原Ⅰ期の資料は口縁の面取りがしっかりしているため、帰属時期の推定に役立つ<sup>(4)</sup>。器形は、林原Ⅰ期からⅡ期には、頸部が外反するものが多いが、Ⅲ期以降には直立か内湾する器形に統一されるなど、時期的な変化が看取できる。

瓶彈形鉢は、林原Ⅴ期にのみ見られ、口縁部を外側に大きく屈曲させている(第61図10、11)。

#### vii) 壺形鉢

林原Ⅰ期の有文壺は、第29図63の双耳壺があげられる。ミガキの施された肥厚帯の合間に縄文が充填されており、磨消縄文的な雰囲気を醸し出している。林原Ⅱ期には、第29図61が該当すると思われ、三本沈線による鉤状入組文という布勢式的な文様を描く。林原Ⅲ期は、数条の沈線で区画文を描くもの(第73図26)などがあり、林原Ⅳ期では、第84図29のような胴部全周に縄文が施された双耳壺が見られる。林原Ⅴ期になると様相が一変し、多彩な文様が施される(第63図4、第102図10)。口縁部に入組文や橋状把手を備え、内面にも渦巻文や連弧文を持つ。胴部は、地文に縄文を敷いた後に渦巻文等を配しており、底部付近にまで丁寧に文様が描かれている。

#### viii) 底部

第124図は、底部形態をDTごとにまとめたものだが、各時期とも平底を主体としながら、凹底を一定量伴うという組成を示す。高台底や丸底は、時期的に古い形態なのかもしれない。

## 5. 山陰地方における縁帯文土器群の成立と展開

縁帯文土器は、三森定男によって命名された口縁部に文様を集約させた土器群の総称である（三森1936）。これらは、頸部を外反させることで口縁部主文様を強調する「縁帯文成立期」、口縁部を肥厚させることで主文様を強調する「肥厚型縁帯文土器期」、口縁部を内湾させることで主文様を強調する「屈曲型縁帯文土器期」に大別でき、山陰地方の土器型式で言うと布勢式、崎ヶ鼻式、「沖丈式」から現山式にそれぞれ対応する。ここでは、林原遺跡でまとまって出土した縁帯文成立期と肥厚型縁帯文土器期の土器について、他遺跡の資料も交えて概観してみたい。

### i) 縁帯文成立期（林原Ⅱ期）

#### 【松ノ木式と北原本郷D T05段階】

従来、山陰地方の縁帯文成立期は布勢式として括されてきた（柳浦2000など）。しかし、林原Ⅱ期の土器群は、布勢式というより南四国の松ノ木式に近い様相が多数看取される。この点に関して重要なのは、仁多町墓地遺跡（野津編2004）や家の後Ⅰ遺跡（増田編2003）で見られる松ノ木式類似土器の存在である（第127図11～17）。これらの土器は、口縁部におおぶりの刻目や人型耳状突起を有し、胴部には磨消繩文による継位の藤手文が施される。また、口縁が内湾するボール形浅鉢には、円形渦巻文や方形渦巻文が施されるなど、松ノ木式の特徴を忠実に備えている。

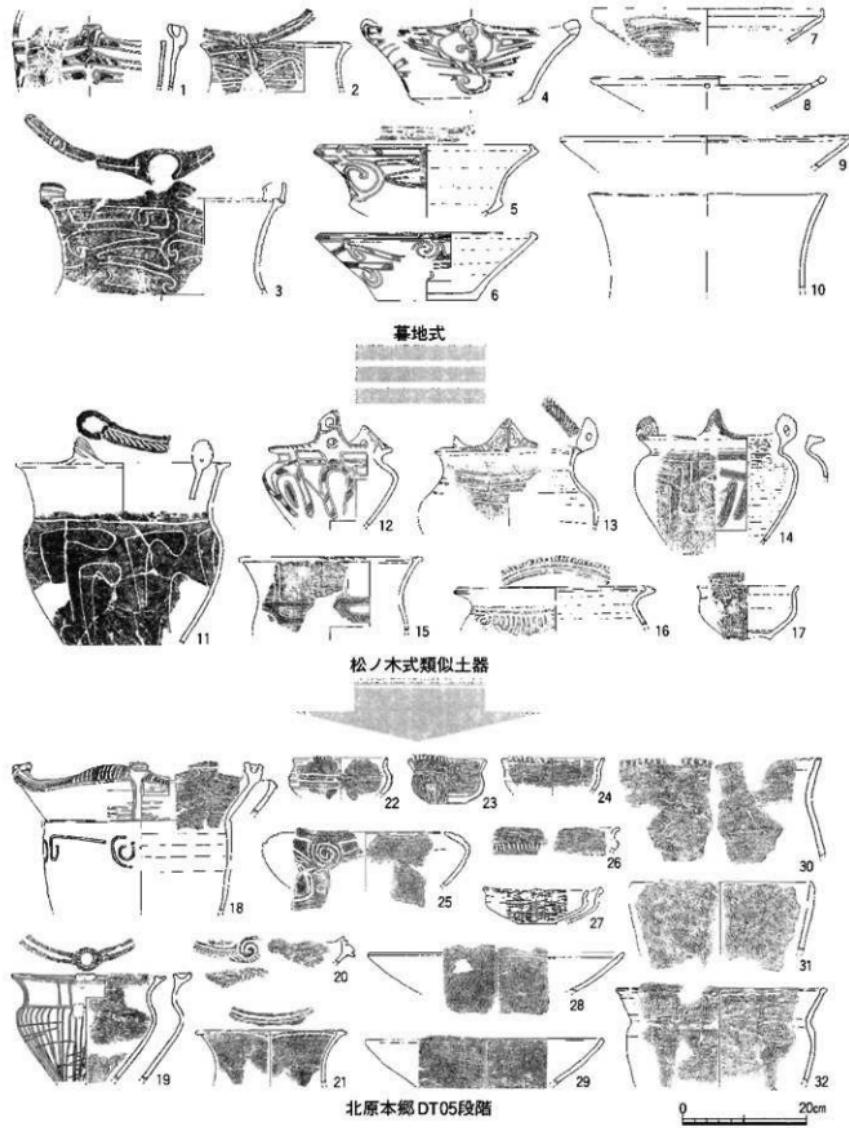
これに対して林原Ⅱ期の土器群は、口唇部の刻目や耳状突起、橋状把手の不在、口縁が内湾するボール形浅鉢などの点で松ノ木式と類似する一方、刻目や耳状突起がやや小ぶりな点、双頭突起の存在、胴部の著しい無文化などは、全て松ノ木式類似土器からの退化的様相として理解でき、両者は連続した時間的前後関係にあることが分かる。林原Ⅱ期の資料はDT4で出土しているものの、小片が多く量も少ないため全容を把握することができない。そこで、周辺の遺跡に林原Ⅱ期の資料を求めてみると、北原本郷遺跡のDT05資料（熱田他編2007）があげられる（18～32）。

北原本郷DT05では、前後の時期にも多少含まれるが、B類の口縁を有する有文深鉢が完形に近い状態で出土しており、量的にもまとまっている。口縁部には小型の環状突起を有し、胴部は無文か継位の沈線文、もしくは退化した鉤状文が描かれる。本資料中には、典型的な松ノ木式類似土器は含まれないため、出土状況からも両者の時間的前後関係は背首でき、当地域の縁帯文成立期を松ノ木式類似土器→北原本郷DT05段階と細分することが可能と考える。

ただし、松ノ木式類似土器と前段の墓地式（1～10）の間には大きなヒアタスが存在し、両者は連続した時間的関係はない。このような不連続を勘案した上で、ここに該期の歴史的展開を読み取るならば、墓地式段階に、瀬戸内地方から松ノ木式を製作する集団が当地域へ進出し、在地集団との接触、併存、融合を経て北原本郷DT05段階へとローカライズされたと解釈できるだろう。ただし、これを証明する層位的事例が未確認であるため、この点に関して今後の動向を見守りたい。

#### 【布勢式の動向】

これとは別に、布勢式新段階と思われる土器もわずかに出土している。第26図27は、繩文を地文とする外面施文型の口縁を持ち、頸部に細密条痕、胴部に地文繩文の矩形文が描かれる。こうした特徴は、林原遺跡の他の土器とは大きく異なり、胎土や色調に関しても異質な印象を受ける。周辺の遺跡では、家の後Ⅰ遺跡（増田他編2003）でも出土している。布勢式は、大阪府芥川遺跡（橋本編1995）や高知県松ノ木遺跡（前山編2000）など広域に撒出されており、林原例も搬入品の可能性が高いと思われる。出土状況から、布勢式新段階は北原本郷DT05段階に並行すると推定される。



第127図 山陰中部の磨消繩文土器期から縁帯文成立期の土器 (S = 1/8)

## ii) 肥厚型縁帶文土器期（林原Ⅲ～V期）

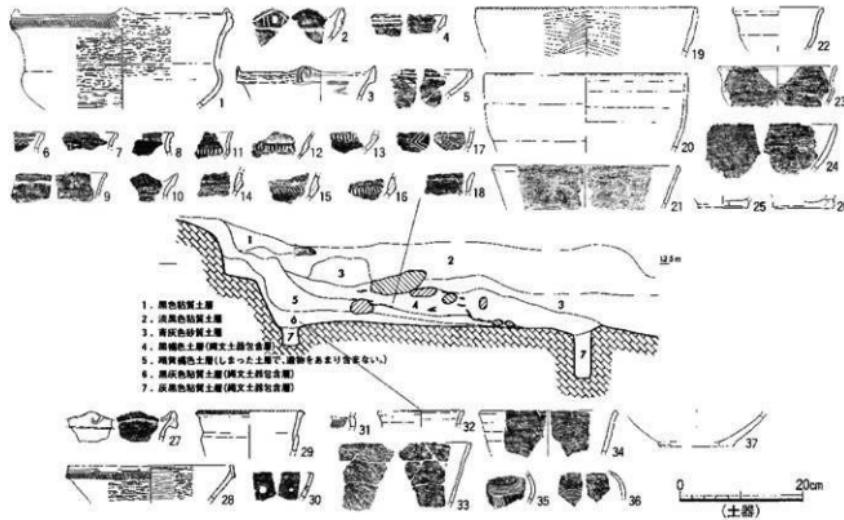
肥厚型縁帶文土器は、佐々木謙と小林行雄らによって崎ヶ鼻式が設定されて以来（佐々木・小林1937）、宍道正年の概説（宍道1974、1980）、千葉豊による崎ヶ鼻1式、同2式の細分（千葉1989）、柳浦俊一の細分案（柳浦2000）などが存在するが、資料的な制約もあってその後目立った進展は見られなかった。しかし今回、該期に属する資料がまとまって出土したため、崎ヶ鼻式を3細分し、その内容について検討してきた。以下、各段階について若干の考察を行なう。

## 【林原式の提唱】

まず、縁帶文土器成立直後の段階を検討する。本段階は、縁帶文成立期の屈曲形有文深鉢や屈曲形文鉢、砲弾形有文深鉢aから採用された口縁部の刻印を最大の特徴としている。また、DT3やDT6では、ほとんど他時期を交えずに出土していることから、一期期を画することは間違いないだろう。しかし、標識となる崎ヶ鼻遺跡では本段階の土器は出土しておらず、新たな型式名を付す必要がある。その点では、林原遺跡のDT出土資料は、出土量や一括性、遺存状態などで一級の出土状況を呈しており、標識資料として足りうる内容を持っている。

よって山陰中部の縁帶文土器成立直後の型式名として、新たに「林原式」を提唱したい。林原式は、瀬戸内より到來した松ノ木式類似土器と、土着化した北原本郷DT05段階を母体とし、その延長線上に成立した地域的な型式であると考えられる。

林原式に後続する崎ヶ鼻1式との層位的出土例としては、出雲市御領田遺跡（角山編1994）の事が挙げられる（第128図）。御領田遺跡では堅穴住居址の一次堆積土と、無灌漑層をはさんだ上層との上下2層の包含層が確認されており、下層からは林原式が、上層からは崎ヶ鼻1式に比定され



第128図 御領田遺跡出土土器 (S=1/8)

る土器が出土している。一括事例としては、林原遺跡DT3、DT6に加え、飯南町貝谷遺跡S I 4出土土器（神柱2002）、松江市勝負遺跡堅穴住居出土土器（川原編2007）などで良好な資料が見つかっている。林原式期は、器種が多様化し、口縁部主文様が全器種に採用されるなど器種間の文様共有が強化される。その一方で屈曲形有文深鉢の無文化が進行し、胴部文様帶はほとんどの土器で無文となる。こうした傾向は他地域とは大きく異なっており、特に併行型式である津雲A式や平城II式と比べればその差は歴然である。

このように林原式は、前段階からの連続的な変遷が追え、強い地域性を持った土器として把握することができるだろう。

### 【崎ヶ鼻1式と津雲A式】

次段階では、口縁部文様帶を縄文施文に統一した崎ヶ鼻1式が成立する。個々の土器では地文に縄文が多用されるようになり、また頸部や胴部にも文様を持つものが増加するなど、若干の有文化傾向がうかがえる。器種数は、林原式と比べて少なくなるようだ。林原遺跡以外の一括資料は、出雲市御領田遺跡堅穴住居黒灰色粘質土層資料（角山編1994）、飯南町五明山遺跡S I 01資料？（山崎編1999、2001）、米子市百坂第7遺跡S I 01資料（仲田編1995）、岡市大下畠遺跡S I 27資料（鳥取県教育文化財団編1991）などがある。

さて崎ヶ鼻1式は、これまで千葉豊や柳浦俊一らによって詳しく論じられてきたが、瀬戸内の津雲A式との類似点が多く、ほとんど同一型式であるという認識を持つ研究者も少なくない（宍道1980、山崎2003）。山陰地方でも、報告書ごとに使われる型式名称が異なるなどの混乱をきたしており、看過できない問題となっている。そこで、從来から問題視されていた崎ヶ鼻1式と津雲A式の識別方法について検討してみよう。

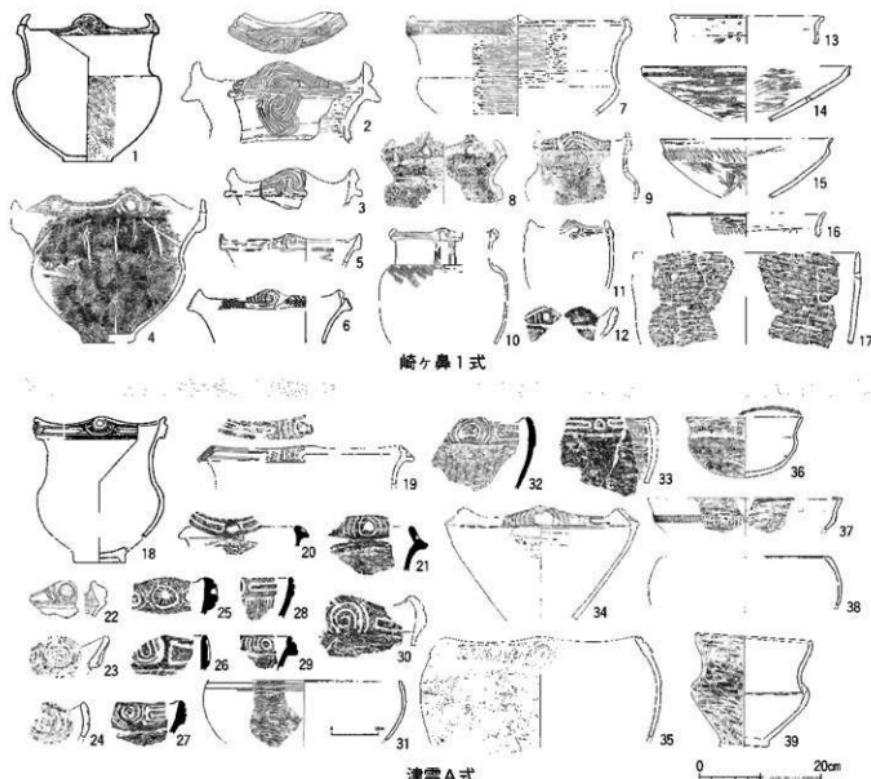
両者の区別を困難にしたのは、標識となる津雲貝塚（鳥田他編1920）の資料自体が、基準資料としての内容を備えていなかったためと考えられるが、近年、岡山県津島岡大遺跡（阿部編1994）、香川県水井遺跡（渡部編1990）、愛媛県文京遺跡（宮本編1990）、高知県西分増井遺跡（川原編2004）などで良好な資料が見つかっており、これらとの比較を通して、崎ヶ鼻1式との相違点を検討することができる（第129図）。

まず、屈曲形有文深鉢の口縁部主文様について見てみよう（1～10、12、18～30）。崎ヶ鼻式の標識土器として著名な完形土器（1）は、口縁部を立体的に肥厚させて入組文を描いており、この文様表現は山陰地方独自のものとして指摘できる（千葉1990）。対して、津雲A式は口縁部を平板状に肥厚させ、主文様には中央の円文の周辺に多重連弧文を施す意匠が多く用いられる。

従文様は、崎ヶ鼻式では1、2本の横走沈線がそのまま波頂部で山形文を描くか、もしくは人組文に繋がるなど、主文様と連結させる場合が多い。一方津雲A式では、同じく1から2本の横走沈線を走らせるが、波頂部付近で主文様に遮られてしまい、そのまま収束するか区画文になるなど、主文様と従文様を独立させる傾向にある。つまり両者は、口縁部文様帶を描くに際して、明らかに異なる表現方法を採用しており、大きな相違点として指摘しておきたい。

頸部は、崎ヶ鼻式では文様を持つものが一定量あるが、津雲A式にはほとんど見られない。胴部文様は、全体が分かるものが少ないが、両者とも無文か縄文地をベースとしているようだ。

統いて、その他の器種を見てみる。崎ヶ鼻式で多く目に付く屈曲形有文深鉢（14～16、37）は、津雲A式でも存在するものの量的に卓越しない。ボル形浅鉢（11、31～35）は両者共に認められ

第129図 崎ヶ鼻1式と津雲A式 ( $S=1/8, 31 : S=3/32$ )

るが、口縁が内湾する器形については、山陰地方では縁帶文成立期に消滅するのに対して、瀬戸内地方では縁帶文土器期でも残る。同様の傾向は砲弾形無文深鉢（17、39）にも言え、山陰地方では林原式期には直行もしくは内湾するもののみになるが、瀬戸内地方では口縁が屈曲、外反するものが残存するようだ。

以上から崎ヶ鼻1式と津雲A式は、共通点も多いものの確実に分離することが可能性であり、特に屈曲形有文深鉢の口縁部文様帶は、その基準と成り得る。また両者は、互いに影響を与えながらも、それぞれが異なる土器型式を母体として成立しているため、独立した型式として設定することに何ら問題はないと思われる。

崎ヶ鼻1式は、該期に拡大する黒曜石利用圏とも分布を同じくしており、山陰地方の地域性を検討する上でも、必要不可欠な土器型式である。よって、山陰地方を代表する縁帶文土器として、改めて崎ヶ鼻式の呼称を提案しておきたい。

### 【崎ヶ鼻2式と三瓶火山灰】

肥厚型縁帯文土器期の最後には、崎ヶ鼻2式が成立する。これまで資料的なまとまりに乏しく、その内容についてはあまり知られていなかったが、今回D T 8やS I 01資料などの良好な一括資料を得ることができた。この他の一括資料としては、崎ヶ鼻遺跡1937年報告資料（佐々木・小林1937）、貝谷遺跡S I 3資料（神柱編2002）などがある。

崎ヶ鼻2式は、瀬戸内の彦崎K 1式との併行関係が想定されているが、崎ヶ鼻1式同様その統別について問題になっている。確かに、口縁部の複合鋸歯文や細い沈線を用いた施文、全体の粗製化などの共通点は認められるものの、彦崎K 1式の特徴である内面施文はほとんど振るわず、くびれ部の明瞭でない屈曲形有文深鉢、全縁文のボール形有文浅鉢、肥厚した内面に指痕圧痕を残すボール形無文浅鉢などその差は歴然である。従って、崎ヶ鼻2式の呼称についても使用可能と言える。

この他に崎ヶ鼻2式は、三瓶大平山火山灰の降下時期との関係が注目されている（千葉2001）。林原遺跡S I 01資料は三瓶大平山火山灰にバックされており、その一方貝谷遺跡では、大平山火山灰降下以降の第1黒色土より崎ヶ鼻2式が出土している。

これらのことから、千葉の指摘どおり崎ヶ鼻2式段階に三瓶大平山火山灰が降下したことは間違いないと思われる。林原遺跡では、該期以降はほぼ断続的に近い状態で、三瓶山の噴火が林原遺跡に与えた影響の大きさを物語っている。

## 6. 他地域との並行関係と地域性

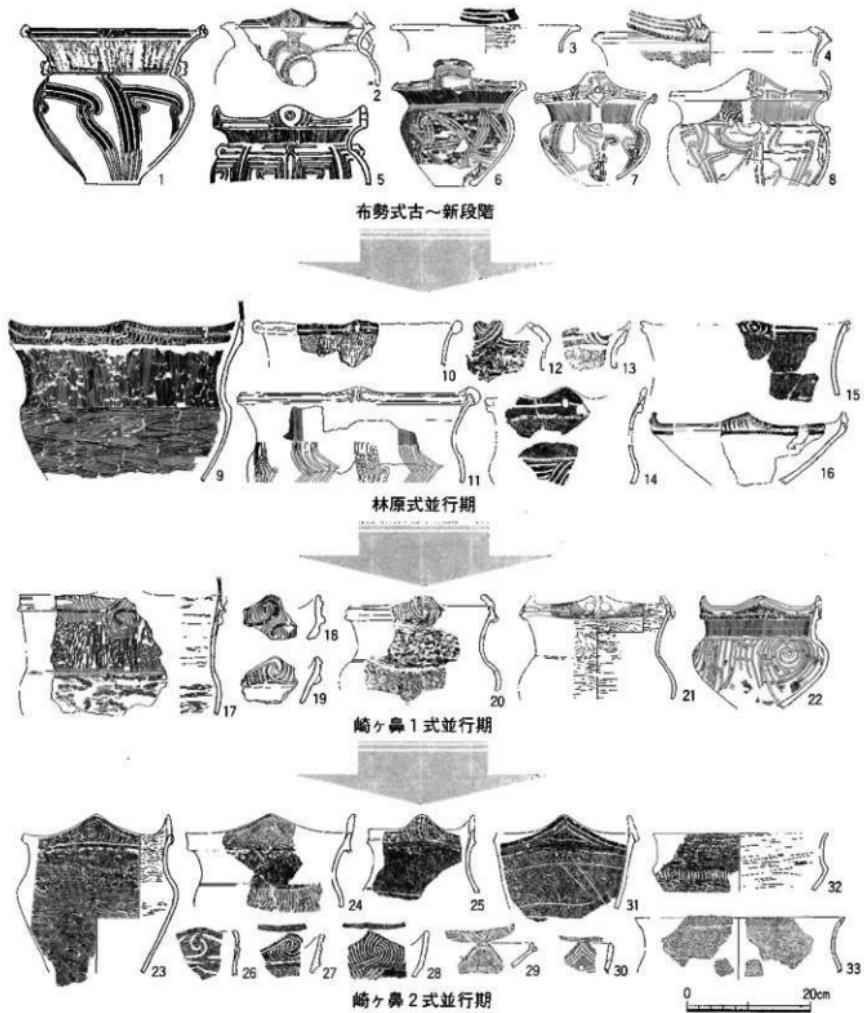
以上、林原遺跡出土十器の年代的位置づけを中心に、山陰地方の縁帯文土器群について若干の考察を行なってきた。最後に、林原遺跡と周辺地域の十器群の様相から山陰地方の地域的展開について検討し、まとめにかえたい。

林原I期の前段階である島式は、2本沈線による意匠を基本とし、山陰地方全域に分布することが指摘されている（柳浦2000）。続く幕地式は、まだ未解明の部分が多く、分布域については今後の検討をするが、おおむね島式と同様の分布域を示すと思われる。

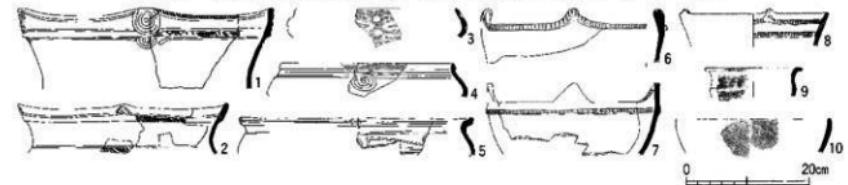
縁帯文成立期になると各地域で地域差が顕著になり、大きく山陰東部、中部、西部に区分される。山陰中部では、先述したように瀬戸内地方の影響を受けた北原本郷D T 05段階が成立する。これに対して山陰東部では布勢式が分布しており、古段階が松ノ木式類似土器に、新段階が北原本郷D T 05段階に並行すると思われる。山陰西部については長らく様相が不明であったが、近年広戸B遺跡で刻目縁帯文土器群が大量に出土しており、その中には口縁部上面に文様を集約させるものも含まれていることから、その一部は縁帯文成立期に相当すると考えられる。詳しく分析したわけではないので誤認もあるかもしれないが、正式な報告を待って検討を行ないたい。

その後の肥厚型縁帯文土器期には、それぞれの地域性を継承した土器群が展開する。先述したように、山陰中部では松ノ木式類似土器や北原本郷D T 05段階を母体とした林原式、崎ヶ鼻1式、崎ヶ鼻2式が展開するが、山陰東部では中部とは異なる上器群が分布するようだ。

従来、山陰東部の肥厚型縁帯文土器は、崎ヶ鼻式の範疇で捉えられることが多かった（柳浦2000）。しかし、崎ヶ鼻式の特徴である口縁を立体的に肥厚させる表現は低調で、平板状の肥厚部を有する点、口縁部主文様は多条沈線による入組文や連弧文が目立つ点、従文様に区画文を配し主文様と分離させるものが一定量見られる点、頸部が長大で繊密条痕を持つものが多い点、屈曲形有文浅鉢が



第130図 山陰東部の縁帯文成立期から肥厚型縁帯文土器期の土器 (S=1/8)



第131図 山陰西部の縁帯文成立期から肥厚型縁帯文土器期の土器 (S=1/8)